

---

# 三葉リゾートパークホテル

餓龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三葉リゾートパークホテル

### 【Nコード】

N6717I

### 【作者名】

餓龍

### 【あらすじ】

あるホテル・・・

実際に起こった怪現象や怪事件の数々を完全小説化！！

時はバブル絶頂期・・・

ホテルに研修に来た学生達を襲う恐怖とは・・・？！

文句を言いつつ、楽しさ溢れる寮生活！！

恐いモノ知らずの光太たちに、次々巻き起こる怪事件！！

そして、恐怖体験の数々！！

怖いけど、どこか楽しい『三葉リゾートパークホテル』！！

第1話 光太と愉快的な仲間たち 〔1〕

つ……ついに……

……この日がやってきてしまったああああ!!

『三葉リゾートパークホテル』

これから34日間、ここがオレたちの戦場と……なる!!

オレたちがその話を聞いたのは、専門学校に入学してから、1ヶ月ほどたった時だった。

「夏休みの7月29日から8月31日までの間、このクラスは三葉リゾートパークホテルで、住み込みで実習をすることになった」

突然、ウチのクラスの担任が意味不明な事を言い出した。

何言ってるんだ？ その時期は夏休みだろ!!

クラスのみんなも担任の言った事がよく分からないみたいで、ザワザワしている。

確かにオレたちはホテル科の学生だ。

これから2年間、ホテルでの仕事なんかをしつかり学んでいくつもりだ。

だけど・・・

「夏休みに実習なんて、有り得ねえーよなー？」

オレはそう言って、となりの席のタケシを見た。

だけど、タケシは机にうつ伏せになって寝ている。

おいおい、いいのかよ、こんな大事な話し聞かなくて！！

「おい、タケシ、起きろよっ！」

「んー、うるせー・・・」

オレは起こそうとしたが、タケシは全く起きる気はないみたいだ。

あとで文句言っても遅いんだからな！

「先生、それって、もう決まった事なんですか？」

いつもはあまり目立たないナオヤがめずらしく発言した。

「そつだ。この実習はホテル科の1年生では毎年行われている事だし、入学案内にもキッチンと書いてあったと思うが」

何だよ、それ。

聞いてねえーよぉー！！・・・ってか、見てねえーよ！！

だいたい1ヶ月以上もなんて長すぎるだろ！！

みんなもオレと同じ気持ちらしく、ブーブー文句を言ってる。

教室内は爆つ発寸っ前だ！！！！

「実習と言っても、ホテルで働くわけだから、もちろん給料も出る。ま、夏休みのアルバイトだと思って頑張ってくれ」

担任はそう言うと、みんなの不満の声から逃げるように、そそくさと教室から出て行ってしまった。

マジかよ・・・

オレの夏休みの計画が……。

まあ、予定って言っても、いとこのケンイチが遊びに来るくらいのもんだけど。

ケンイチのヤツ、ガツカリするだろうな……。

夏休みはあいつと一緒に遊ぶのが恒例になってるからな。

今夜電話してみるか。

月日が流れるのは早いもので、ぼやっとしている間に、もう夏休みになってしまった。

わずかばかりあった休息の時間も、ホテルでの研修の準備で終わってしまった。

そしてオレは今、そのホテルの前に立っている。

高原の中にそびえ立つ、淡いグリーンの巨大なホテル。

「みつばリゾートパークホテルか……。でつかいな」

予想以上の大きさに、オレはひとり呟いていた。

朝、家を出る時は、すでに汗ばむほどの陽気だったのが信じられないほど、ここでは涼しい風が吹いている。

まさに避暑地と呼ぶにふさわしい場所だ。

だが、オレは遊びに来たわけじゃない。

……気を引き締めないとなー！！

「ああーあ、なんだって夏休みに研修なんかやるんだよ！！　なあ？」

いつの間にか隣にいた、タケシが、今更ブツブツ言っている。

文句を言うわりには、しっかりと準備してきたらしく、大きなバックを2つも持っている。

「そんなにたくさん荷物を持つてくるの大変だったろ？」

「いや、別に。オレ車で来たもん」

タケシは涼しい顔で言った。

「ええええええ？！　そ、そうならそうと、はじめから言えよ！！　オレも乗せてきてもらったのに！！」



オレは重い荷物を持ち、暑苦しい電車の中で、汗だくになっていた事を思い出していた。

なんて友達概のないヤツなんだっ・・・!!

「悪い悪い。今朝、突然思いたつてな。誰かが車あると便利だろ？！電話すりゃ良かったな。それより1ヶ月以上もなんて長くねえ?? オレやりたい事あったのによぉ!!」

「何だよ、やりたい事って?」

「・・・バイトとか!」

「・・・そうか。・・・ま、頑張ろっぜ」

ホテルの中に入ると、豪華な雰囲気漂う、広いロビーの端の方に、担任とクラスの奴らが集まっていた。

お客や従業員で賑わっている中、そこだけひと際、重苦しい空気が立ち込めている。

はあ、オレも、あの中(重苦しい中)に入っていくのか・・・。

「光太にタケシ、お前らで最後だぞ。早く来い!」

担任がオレたちを見つけて呼んでいる。

もう諦めるしかない。

オレたちは重い足取りで、担任の方へ歩いて行った。

しばらくすると、ホテルの支配人が現れ、軽い挨拶が済むと、あまり広くない会議室のような所に通された。

オレたちのクラスは、男子5人、女子7人の12人と少なめだが、この部屋は、みんなが入るとちょっと狭苦しく感じた。

今日一日はここで、ホテルでの仕事の説明と、基本的な接客の練習なんかをするらしい。

本格的に働くのは明日からだそうだ。

「それじゃ、私はこれで失礼するから。みんな、迷惑にならないように精一杯頑張るんだぞ」

担任がまたもや意外な事を口走った。

「ええーっ!!」

一瞬みんなの声が部屋中に響いた。

「先生帰るの?? 研修の間、監督としてここにいるんじゃないの  
おー?!」

クラス委員のカスミがみんなの心の内を代弁するかのように言った。

「私は他にも色々と仕事があるから、ずっとここにはいられないんだ。すまないな」

担任は、さも残念そうな口調で言ってるが、本当は帰って夏休みをエンジョイする気満々なんだ。

きつとそうだ!!

ズルイよ、大人って……。

みんなの轟々たる非難を浴びる中、担任は『体に気を付けて、しっかり学んでこい』という言葉を残して去って行ってしまった。

## 第1話 光太と愉快的仲間たち ㄱ2ㄱ

「えー、当ホテルは、本館、別館、第2別館とありまして・・・、レストランではショーが・・・。」

ホワイトボードの前では、ハゲたおっさん、もとい、萩谷さんがホテルの説明をしている。

オレは一番うしろの席で、適当にメモを取りながら聞いていた。

左隣のタケシは相変わらず眠そうで、萩谷さんの話なんか1つも聞いてないみたいだ。

右隣に座っている栄ちゃんは、なぜか嬉しそうにソワソワしている。

「栄ちゃん楽しそうだね。何かあった？」

オレは小声で栄ちゃんに聞いてみた。

「えー、君達はベルボーイと、レストラン、そして本館での仕事を交代で・・・。」

萩谷さんは、オレが隣のヤツに話し掛けているのにも気付かず、説明を続けている。

「うん、……まあ……ね」

栄ちゃんは少し恥ずかしそうに、はにかみながら、前の方にかたまつて座っている女子たちの方をチラッと見た。

なんだあ？

もしかして栄ちゃん、女子の中に好きなコがいるのかあ？？

そんな話し聞いたことないけど……。

それにしても大の男が（栄ちゃんは体がでかい）はにかむなよ！！

オレは心の中で突っ込んでいた。

『栄作』と『はにかみ』ほど似合わないものはない！！

でも、女子の中に好きなコがいるんだったら、この長いホテルでの研修も楽しいんだろうな。

……そんな相手がないオレには、栄ちゃんが少し羨ましく思えた。

ようやく一日目の研修が終わった。

腕時計を見ると、もうすぐ5時になるうとしている。

これからオレたちは寮の部屋へ行き、荷物を整理したら夕食だ。

萩谷さんのうしろについて、みんなゾロゾロと寮へ向かって歩いていく。

こんなに綺麗で立派なホテルなんだ。

従業員の寮も、さぞかし綺麗なんだろう……。

何人部屋かなあ？

男が5人だから、2人部屋と3人部屋かなあ？

タケシと同じ部屋になったら大変だろうな。

あいつ寝起き悪いし、まあ、一番気の合うヤツだから楽しいだろうけど。

栄ちゃんと同じ部屋になって、好きなコの事聞き出すのもいいな……。

オレは寮での暮らしを想像しながら、少し早足で歩く萩谷さんのあとをついていった。

萩谷さんはホテル内の施設を説明するでもなく、黙々と目的地へ向かっている。

やがて従業員の通用口のような所から外へ出た。

まあ、ホテル内に寮があるわけないよな。

綺麗に整えられている庭を通って、細い小道に入ると、寮らしき建物が見えてきた。

4階建てほどで……、かなり年季が入っているように見える。

元は白い建物だったんだろうが、外壁は薄汚れていて、所々ヒビも入っている。

……まさかアレが……？

……まさかな。

いや、でも他にそれらしいのではないし……。

やっぱりアレなんだろうなあ。

あの外見からして、中も期待できないだろう。

案の定、萩谷さんは、その建物の玄関のドアを開けた。

中に入ると、広い玄関があり、一丁前に大きな観葉植物なんかがある。

玄関で靴を脱ぎ、スリッパに履き替えた。

フロアは狭く、ほぼ廊下だ。

下駄箱が左側に沢山並んでいて、右側に管理人らしき部屋がある。

廊下の奥は寮になってるらしく、沢山の部屋のドアが見えた。

右側に階段も見える。

オレたちは案内された下駄箱にそれぞれ靴を置くと、スリッパを履かされ、玄関から向かって左手方面に連れて行かれた。

社員食堂だ。

中に入ると左側に談話室があり、自販機やソファ、テーブルなんかがある。

右側はどうやら風呂になってるようだ。



食堂は広く、たくさんのテーブルがあり、大きなテレビが置いてある。

食堂に入って正面奥に、階段があった。

「女子はあの階段を上って2階。女子はここで少し待っていてくれ」

萩谷さんはそう言って女子達を談話室に座らせ、オレたちを誘導した。

食堂を出て左方面、玄関から見ると右側に見えた階段。

その階段を上った2階がオレたちの部屋のようだ。

つまり、玄関を入るとすでに男子寮だったワケだ。

女子寮へは男子寮経由で食堂を通り、階段を上って2階へ行かなければならぬらしい。

何とも複雑な造りだ。

寮の住人は、男子も女子も、必ず管理人室の前を通らなければならないし、管理人室の前で別れなければならない。

男が女子寮に忍び込めないように、ホテル側が作ったトラップなの

だろうか？

2階につくと、萩谷さんは男子はここで待っているようにと言い、女子たちの部屋を案内しに行った。

萩谷さんの案内も複雑だ。

要領が悪い気がする・・・。

萩谷さんがいなくなった途端、みんなザワザワしだした。

「ここ、古いよな。築何年なんだよ、一体」

「壁になんか変な染みとかあるし、部屋もヤバイんじゃない？！」

「何か出そうだよな」

みんな口々に不満を言っている。

オレも同感だ。

この寮は、なんか暗い。

夕方といっても真夏の5時だ。

外はまだ十分明るい。

窓もあつて外の光が射し込んできているのに、何か得体の知れない薄暗さがここにはある。

「待たせたな。それじゃあ、行くか」

戻つて来た萩谷さんは、再び階段を上り始めた。

3階につくと、真つ直ぐな廊下があり、左側に部屋のドアがいくつか並んでいた。

部屋の向かい側には、洗濯場と乾燥室、トイレがある。

萩谷さんは手前から2つ目の302号室と書かれた部屋のドアを開けると、『ここがお前たちの部屋だ』と言い、さあ、入れと言わんばかりに開いたドアを持って立っている。

およそ12畳一間のその部屋には、2段ベッドが3つある。

左右に1つずつと、正面の窓を邪魔するように置かれた1つ……。

……つて、ええええええええ？？

「もしかして、5人で1部屋なんすかあ?!?!」

オレは思わず大きい声で聞いてしまった。

「そうだ。どうせ寝るだけだし、問題ないだろう」

萩谷さんは、当然のように言うが、いくら寝るだけだったって、このむさ苦しい男たちが5人、1ヶ月以上も同じ部屋で生活するなんて！！

はあ~~~~~。

オレはガツクリと肩を落とした。

今日一日の疲れがドツと押し寄せてきたみたいだ。

これじゃあ毎晩テレビのチャンネル争いで大変だろうなあ……。

……だけど、部屋に入ってすぐ、そんな心配は無意味な事だと悟った。

どこを見渡してもテレビがない。

あるのは2段ベッドが3つ。

それだけだ。

タンスすらない……。

ここで、1ヶ月……。

オレは、しばし呆然としていた。

「風呂は1階にある。さっき見た社員食堂の隣だ。24時間入れるから、好きな時間に入っていいぞ。寮長の部屋は玄関の所にあつたら？ 何かあつたら寮長に相談しなさい！ ちなみに18時から夕飯が食べれるから、荷物の整理が出来たら食べに行くといい」

萩谷さんは要件を言うと、すぐに部屋から出て行った。

「オレ窓際、とぁーりー!!」

タケシは、まるで修学旅行に来た小学生みたいにはしゃいで、窓際に、窓と平行に並ぶように置いてある、2段ベッドのはしごを上っている。

煙と何とかは高い所が好きって言うけど、やっぱり2段ベッドの上の方を取るんだな。

オレは心の中で、『クククッ』と笑い、無意識に右側にあるベッドのはしごを上っていた。

あ……、オレも同じか。

「オレも窓際がいいな」

そう言つて栄ちゃんは、すばやく窓際の下段に陣取つた。

「オレも上がいいからこっちにするぜ」

ナオヤはオレのベッドの向かい側にあるベッドを指差した。

……ナオヤ、オマエもか！！

いつも無口なヤスヒロは、何も言わずオレの下で寝る事に決めたいだ。

こうしてみると、多少は部屋も広いし、ベッドも普通のベッドより大きいから、狭苦しさは感じない。

まあ、部屋の古さは否めないが。

みんなとも普段から仲がいいし、何とか楽しくやっけていけそうだな、オレ。

第1話 光太と愉快的仲間たち 〳〵〵

片づけを一通り終わると、オレ達はみんな揃って食堂へと向かった。中に入ると女子達はすでに来ていて、夕食を食べていた。

他にも従業員の人が何人かいる。

オレ達はどうしたらいいか分からずに、入口付近でマゴマゴしていると、カスミが食事を中断して来てくれた。

「ここで食券を買って、カウンターにいる人に出すの。それからそこに並んでるご飯やおかずを自分で分けて、空いている席で食べるんだよ」

さすがクラス委員、たのもしいぜ!!

カスミの家はオレン家の近所で、小さい頃はよく一緒に遊んでいた、いわゆる幼馴染みってヤツだ。

最近では一緒に遊んだりする事はなくなったが、クラスの女子の中では一番仲がいい。

「わざわざ悪いーな！サンキュー!!」

オレがそう言うと、カスミは『いいってことよ!!』と言って、自分の席へと戻って行った。

さてと、おかずはどんなのがあるかな・・・？

おっ、うまそうなトンカツがある。

腹がググーツと鳴った。

みんなは控え目に1枚ずつしか取ってないけど、オレは2枚食おう  
!!

「光太、取り過ぎじゃねえくえ？ 2枚も食えんのかよ!？」

皿に2枚乗ったトンカツを見て、隣にいたナオヤが突っ込んできた。

「余裕だつて!! オレもう腹減って死にそうだもん」

そのあとオレは、公約通り、トンカツ2枚と大盛りご飯をペロリと平らげた。

さすがにホテルの社食だけあって、味もなかなか良い。

ここ、結構いい所なんじゃねーの？



オレはすっかり満足した。

「ああ、腹いっぱいだああー!!」

オレは部屋に戻ると、すぐにベッドに寝転がった。

少し胃もたれしているような気がするけど、それはまあ、気のせいだろう。

このまま胃袋を下に、左脇腹を下にして少し横になってれば大丈夫だ。

ちょっと休んだら風呂に行くか・・・。

オレはそう思い、軽く目を閉じた。

「光太、起きろって!! 風呂行こうぜ!!」

目を閉じているオレに誰かが話し掛ける。

「寝てねえーっって!!」

そう言って下を見ると、タケシがタオルを持って立っていた。

「ガーガーいびきかいて寝てただろうが!! 早く行こうぜ!!  
他のみんなは、もう上がってきたぞ。オレらが最後だ」

オレらが最後・・・?

ご飯食べて帰ってきたばかりだよな??

タケシの言葉を不信に思って、壁に掛けてある時計を見ると、もう夜の10時だった。

「ん〜?? なにーつつつ!!!!」

オレはビックリして飛び起きた。

じゅっ、10時い〜?!

ついさっき時計を見た時はまだ7時半くらいだったのに!!

なんてこった!!

オレは一瞬で意識を失うように寝てしまったんだ。

ああ〜、勿体ねえ〜!!

オレにとっては数秒しか感じられなかったのに、本当は2時間以上も経ってたなんて・・・。

何か損した気分だ。

オレは急いで風呂に行く支度をし、タケシと共に部屋を出た。

風呂の脱衣所には誰もいなかった。

だけど、服が置いてあるから誰か他に入っている人がいるんだろう。  
オレは急いで服を脱いだ。

別に急ぐ必要はないんだが、もう1秒も時間を無駄にしたくない。

明日から仕事だ……。

貴重な時間をこれ以上無駄にしてなるものか!!

一方タケシは、面倒くさそうに、わざとゆっくり脱いでいるように見える。

服を脱ぎ終えて、浴室の戸を開けようと手をかけた時、向こう側から誰かが戸を開けた。

今まで風呂に入ってた人が、丁度上がるところだったのだ。

目の前は、濡れた薄い髪がオデコにピッタリと張り付いたオッサン。  
……。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

お互い無言で、ほんの一瞬見つめ合ってしまった。

「すつ、すみません。」

オレはなぜか謝った。

「えーっと、おたくは、研修で来た専門学生さん?!」

「はい」

「ああ、そう。ここの寮長の関本だ。挨拶が遅れてスマンな」

「あ、いいえ。松田光太です。よろしくお願いします」

オレ達は浴室の入口を挟んで挨拶を交わした…………。

お互いスッポンポンのまま…………。

うしろではタケシがクスクス笑っている声が聞こえる。

確かに今のこの状況、はたから見ればマヌケだよなあ…………。

寮長と入れ替わって浴室に入ると、5、6人は裕に入れるくらいの、少し大きい風呂があった。

洗い場も結構広い。

オレはまず体を洗おうと、シャワーがある方に向かって行くと・・・

「うわああああーっ!! どうした光太ああーっ!!」

オレに続いて浴室に入ってきたタケシが突然悲鳴をあげた。

「あ??? なんだよ?!」

何騒いでんだよ!! うるせーなあ、なんて思いながら振り返ると、タケシが心底驚いたような顔をしてオレの足を指差していた。

「だ、大丈夫か?!」

「何が??」

そう言っつて、タケシが指差している方を見ると・・・

「うおおおおおーっ!! な、なんだよコレ!!?」

浴室の床が真っ赤に染まっていた。



第1話 光太と愉快的仲間たち 4

オレが浴室に入った時は床が白かったはずだ。

なのに、何で?!

よく見ると、その真つ赤な液体は、ドクドクとオレの足から流れている。

……血?

「オイ!!! 大丈夫か、光太?！」

無言で足元を見つめているオレを心配して、タケシが何度も確認してくる。

「あ、ああ……」

この血はオレから流れているのか?

……って事は、怪我してんのか、オレ??

「ええええーっ!! なんてーっ?!」

状況を把握したオレは軽いパニックに陥った。

怪我をした自覚は全くない。

脱衣所からここまでどこにもぶつかってないし、痛くも何ともなかった。

なのに血が流れている……。

オレの足から、ドクドクと……。

オレの右足は、くるぶしの下がパツクリ割れていた。

まるでよく切れる刃物で切ったみたいだ。

「おい、痛くねえーのか?」

「いてーよ!!」

少しだけ割れたスイカのような傷口を見つめながら、心配して聞いてくれたタケシに、半ばキレ気味で答えた。

正直痛いのか痛くないのか、よく分からない。



けど、こんなに血が流れてるんだ。

痛いに決まってる。

オレは急いでタオルを傷口に当てた。

真っ白のタオルがみるみる赤く染まっていく。

ズキツ　ズキツ　ズキツ

タオルを覆う手に力を入れると、ズキズキ痛んだ。

ガラッ

「どうしたっ?!」

騒ぎを聞きつけた寮長が、勢いよく戸を開けて入ってきた。

今度はパンツとランニングを身に付けている。

「またか・・・」

オレの真っ赤な足を見て、寮長がボソツと呟いた。

『また』ってどういう事だ??

「足を切ったのか？　すぐに救急箱を持ってくるから、そのまま待ってる！！」

一瞬で全てを悟ったかのように、寮長はそう言って走って風呂場を出て行った。

タケシはどうしていいのか分からずに、オロオロしている。

オレだってどうしたらいいか分かんねえよ。

なんで、しょっぱなから、こんな……。

ドタ　ドタ　ドタ

寮長はすぐに救急箱を持って走ってきた。

「ちょっと沁みるぞ！！」

寮長はそう言って、血で真っ赤に染まったオレの足をシャワーで洗い流し、消毒液をつけた。

「いつっ……」

反射的に声を出してしまった。

男なのに、情けないな……。

その後、切り傷用の軟膏をたっぷり塗って、ガーゼで覆い、包帯でぐるぐる巻きにされた。

妙に手馴れている。

元医者か？ この寮長……。

「ありがとうございます。でも、『また』ってどういう事っスか？」

オレがお礼を言いつつ、気になってた事を問いただすと、寮長は救急箱に薬をしまいながら渋々という感じで話してくれた。

「いやね、よくあるんだよ。こういう事。今までに何人もこの風呂場で足切ってたんだ。決まって22時頃に。ここに危険なものはないはずなのに。みんな原因不明なんだ」

……それで、怪我の処置が手馴れてたのか。

それにしても気味が悪いな。

何もない所で、何人もが同じ時間に足を切るなんて……。

何かあるのか?! この風呂は。

「本当に原因が分からないんすか? 思い当たる事とか……」

オレはさらに聞いた。だした。

タケシも風呂に入るのも忘れて、寮長をジッと見ている。

寮長は黙ったまま腕を組んで何か考え込んでいるようだ。

しばらく沈黙が続いたが、その場をジッと動かないオレ達に観念したのか、寮長はようやく重い口を開いた。

「あんまり恐がらせてもいけないと思ったんだがな。実は前に、この風呂場で自殺したヤツがいるんだよ。オレも詳しくは知らないんだが、カミソリで首やら腕やら、あちこち切ってたらしい」

「ここで働いてた人なんですか?」

この重苦しい空気に合わせるかのように、タケシがいつになく丁寧な口調で聞いた。

「ああ、……そんな事があったから、この風呂場もしばらくは使

用禁止になつてたんだがな。新しく改装して、また使うようになったんだよ。それからだな。怪我するヤツが続出したのは「

「そう……ですか……」

背筋がゾォツツと寒くなつていくのを感じた。

「それとな、何人も見てんだよ、ここで」

寮長が意味有り気に浴槽を見ながら言った。

「なつ、何を?!」

だいたい想像はつくが、オレは恐る恐る聞いた。

「……幽霊。もちろん気のせいかもしれんがな。オレは見た事ないし。ただ、夜中に一人で風呂に入つてるとな、見えるらしいんだよ。湯気の向こうに、人影が……」

オレとタケシは同時に浴槽に目を向けた。

ホテルと同じ温泉をひいているという風呂には、薄っすらと湯気が立ち込めている。

「……何も見えないよな、うん。」

「そういう事だから、オマエらも夜中に入る時は気を付けるよ」  
寮長は怖がらせるだけ怖がらせて、オレたちを置いてさっさと自分の部屋に帰って行った。

「なあ、どう思う？ 今の話・・・」

オレはタケシがどう思っているのか気になった。

「自殺したのは本当かもしれないけど、幽霊は噂だろ？！ 気のせいだよ、気のせい」

「・・・うん。でも、オレ、実際に足切ってるしな」

「・・・」

タケシは気のせいとも言えずに黙り込んでしまった。

「オレ、この足じゃ風呂入れねえし、先、部屋戻ってるわ」

オレが脱衣所で服を着ていると、なぜかタケシも後をついてきて、服を着だした。

「風呂入らね〜の？」

タケシの方を見て聞くと、タケシはオレの方も見ずに『ああ!』と、ぶっきらぼうに答えた。

こいつ・・・もしかして、怖いのかな？!

「怖いのか? 1人で入るの」

「あつ、朝入りたんだよ!」

タケシは少し怒ったようにそう言うと、オレより先に出て行ってしまった。

怖いんだな、あいつ。

気のせいとか言ってたくせに・・・。

それにしても元ヤンキーで、高校時代、暴走族に入ってたタケシに怖いものがあるなんてな。

部屋に戻ると、栄ちゃんとナオヤが何やらゲバゲバ笑いながら話していた。

ヤスヒロはベッドに寝転がって、ポータブルCDプレイヤーで音楽を聞いている。

栄ちゃんはオレの足の包帯に気付くと、すかさずどうしたのか聞いてきた。

オレとタケシが風呂場での一部始終を話すと、今までの楽しそうな雰囲気静まり返ってしまった。

「オレ、寝る・・・」

そんな微妙な空気の中、オレは一足先に自分のベッドへと向かった。

怪我をした足を庇いながら、はしごを上る。

こんな事なら、下段にしとけば良かったかな・・・。

後悔しながらも、上り終えてベッドにゴロンと横になった。

さっき、あんなに血が流れてたんだから、包帯にもすでに赤い血が染み出してくるだろうと思ってたけど、薬が効いたせいか、包帯は白いままだ。

少し痛むけど、歩くのには支障がないみたいだな。



それにしても、あの風呂は気持ち悪いな。

もう夜、一人で入れねえよ。

オレは天井を見つめながら、風呂での出来事を思い出していた。

あの寮長、一連の事件を知ってるのに、よくあの時間に一人で風呂に入ってたよな。

怖くないのかよ。

それとも、単なる噂なのか？

。。。。。

考えてても仕方ないし、そろそろ本格的に寝ようかと思った時、今まで何気なく見ていた天井の色が、所々違うことに気付いた。

全体的に薄茶色の天井なのだが、オレの目の前には黒っぽい染みが広がっている。

よく見ると、その黒っぽい染みは、天井中に沢山あった。

なんだあ?? コレ??

上の階にも部屋があるから、雨漏りとかじゃないよなあ。。。。。

まあ、古い建物だから、こつこつ染みがあってもおかしくねえ・・・  
よな?!

まあ、いいや。

明日は朝から本格的に仕事が始まる。

もう寝よう!!

「ふあゝあ」

オレは大きなあくびをして、目を閉じた。

第1話 光太と愉快的仲間たち 4 (後書き)

第1話 『光太と愉快的仲間たち』 おわり

## 第2話 となりのケンイチ ㄱ1ㄱ

2日前までは、お気楽な夏休みを過ごす専門学生だったオレが、今は上下濃い緑色をした、ベルボーイの制服を着て、ホテル別館のエントランスに立っている。

しかも、この制服とセットのヘンテコな帽子まで被って。

オレの隣には、同じ格好をしたベルボーイたちがズラーっと10人は並んでいる。

「光太、似合ってるよっ！！ 制服うっ！！」

オレの隣に並んで立っているカスミが、ニヤニヤしながら話し掛けてきた。

いかにも『全っ然、似合ってるないよ！！ おかしくて、笑っちゃう！！ だはははは！！』と、言うような顔をして……………。

くそっ！！ からかいやがっ！！

カスミだって、まるで他人の服をムリヤリ着てるみたいに似合わないくせに……………。

『お前だって、相当似合ってるぜ!!』と、言ってやるつと口を開きかけた時、一台の車が目の前の玄関に停止した。

「お客様だ!! 2人共、ついて来て!!」

羽本さんはそう言って、車まで小走りで行った。

今日一日、オレとカスミはこの羽本さんにくっついて、ベルボーイの仕事を教わる。

今朝、みんなの仕事の割り振りが決まって、オレとカスミは同じチームでベルボーイをやる事になった。

栄ちゃんとカスミの親友のまいも、別館のベルボーイになったが、オレとは違うチームだ。

タケシは……レストランでウェイターだったっけかな？

ベルボーイの仕事は、お客様の荷物を持ち、フロントで鍵を預かって、部屋まで案内するというものだ。

羽本さんは部屋に着くまでの間、窓から見える景色や気候の話などをして、お客様を退屈させないようにしていた。

だけど、オレとカスミは話しにも入っていきせず、ただ、笑顔で荷物を運んでいるだけだった。

結構、楽勝だな・・・なんて思っていたのも束の間。

客は次から次へとやってくる。

10人以上いるベルボーイたちはフル稼働で、オレたちは玄関から部屋まで重い荷物を持ち、何回も往復した。

まだ仕事に慣れていない事もあり、ベルボーイ初日は予想以上に疲れた。

「お疲れ様。今からチップ分けるから。ちょっと待ってる!!」

従業員控室に入ると、羽本さんはそう言って、制服のポケットをゴソゴソと探り始めた。

チップ・・・??

オレはあっけにとられて、その様子を見ていた。

そういえば部屋まで案内し終わった時、お客様がよく『ご苦労様!』とか言っつて、羽本さんに何か渡していた。

羽本さんは特に何も教えてくれなかったから、重要な事じゃないだ

ろうと思つてたけど、チップだったんだな、アレ。

羽本さんは律儀にも、今日貰ったチップを3等分にして、オレとカスミに渡してくれた。

その金額……4千円!!

「ええっ?!こ、こんなにい??…なんか悪くて、受け取れません……」

優等生ぶつてそんな事を言うカスミに、『余計な事、言つな、バカ!!』と心の中で突つ込みつつも、オレも一応カスミの真似して、悪そうに羽本さんを見つめた。

「いいから、いいから!! お客様の気持ちだから、とっとけよ!!」

羽本さんはそう言つて、爽やかにニカツと笑つた。

「はい、そうします!!」

オレはこれ以上、カスミに余計な事を言わせないために、すかさずそう言つてお金をポケットへしまった。

カスミも申し訳なさそうな顔を装いつつも、ポケットにお金を入れている。

「よく貰うんですか？ チップとか・・・」

オレは『今後の参考のために・・・』と、羽本さんに聞いた。

「ああ、そうだな。オレが入社した頃はそんなでもなかったけど、ここのところ、ずっと景気がいいだろ！？ ほとんどのお客様がチップくれるよ。みんな金持ちなんだな」

「へえ、そうなんですか」

学生だから実感なかったけど、よく好景気だ何だって言われてるもんなあ。

まったくいい世の中だぜ！！

「気前のいい客なんかだと、チップに1万円くれることもあるぞ！」

「マジっすかあ?!」

羽本さんの話しにオレは色めきたった。

カスミも心なしか目がキラキラしている。



「それにベルボーイの先輩なんか、誰とは言えないけど、ある芸能人を案内して、チップ10万円も貰ったんだぜ!!」

「じゅ、じゅうまん・・・!!!!」

オレとカスミは目を合わせて驚いた。

そんな事ってあるのかよ!!

荷物持って、部屋まで案内しただけで10万円って・・・。

「今日は初めてだからチップを分けたけど、普通はそういうことしないから。明日からは自分がもらったチップは、全部自分のものにしていいからな」

そう言つと羽本さんは「お疲れ」と言つて控室を出て行った。

オレは俄然、このベルボーイという仕事に気合が入った。

それは多分、カスミも同じだろう。

やる気に満ちた目をしている。

一日の仕事を終え部屋に戻ると、タケシとナオヤがすでに部屋でくつろいでいた。

みんな慣れない仕事で、さぞかし疲れているだろうと思ったが、2人はわりと元気そうだ。

タケシはレストランのウェイターで、ナオヤは確か本館でベルボーイだったはずだ。

・・・きつと2人もチップ貰ったんだろうな。

「お疲れ、光太。足、大丈夫だったか?!」

オレが部屋の畳に腰を下ろすと、タケシが側に寄ってきて言った。

そう言えばオレ、足怪我してたんだよな。

全然痛くないから、すっかり忘れてた。

「おう!! 平気、平気!!」

そう言っつて、大きな絆創膏を貼った足を見てみると、昨日あんなに血が出たのが嘘のように、少しも血が滲んでいなかった。

昨夜、風呂場で起きた、突然の事故・・・。

浴室に入った瞬間、何もない所でオレの足が突然切れた……。

そして、思い出されるのが、寮長の、あの言葉……。

『いやね、よくあるんだよ。こういう事。今までに何人もこの風呂場で足切ってたんだ。決まって22時頃に。ここに危険なものはないはずなのに。みんな原因不明なんだ……』

そう、同じ時間に、何人もが同じ箇所を……。

『あんまり恐がらせてもいけないと思ったんだがな。実は前に、この風呂場で自殺したヤツがいるんだよ。オレも詳しくは知らないんだが、カミソリで首やら腕やら、あちこち切ってたらしい……』

風呂場で自殺……。

そして……。

『……幽霊。もちろん気のせいかもしれんがな。オレは見た事ないし。ただ、夜中に1人で風呂に入っていると、見えるらしいんだよ。湯気の向こうに、人影が……』

夜な夜な現れる、湯船に浸かる幽霊……。

さて、どうするか……。

風呂・・・。

このまま入らないワケにもいかないし、夕飯の前に入っておくか。

1人で入るのは嫌だったので、オレはみんなを誘って一緒に入る事にしました。

## 第2話 となりのケンイチ ㄥㄥ

3日目ともなると、ベルボーイの仕事にもすっかり慣れた。

難しい仕事ではないし、オレは元々話し好きだから、お客様と話しをしながら荷物を運ぶのも苦じゃない。

おまけにチップも貰えるし。

案外向いてるのかもな、ベルボーイに。

いつそのまま就職しちゃうか？！

オレが今日1日に貰ったチップを、大事に財布にしまいながら1人ほくそえんでいると、風呂から帰ってきたタケシがニヤニヤしながら話し掛けてきた。

「光太、フロ上がるの早え〜よっ！！ 一緒に行つたんだから一緒に帰ってくるだろ普通う〜？！ まあいいや。それより・・・  
・オレ、今・・・面白いモン見た！！」

「何、何??？」

面白いモンと聞いて、好奇心旺盛なオレはベッドから身を乗り出し

た。

「隣の部屋に男2人いるだろ。そいつら、さつき手を繋いで自分達の部屋に入って行ったんだよ。オレが見てるのに堂々とだぜ!! あいつら絶対にデキてるよ!!」

「デキてるって……男同士だろ?? ……ホモか?!  
……マジで?!」

「ああ、間違いねえな。お互い見つめ合ったりしてたし……隣の部屋のヤツはチラツとしか見た事ないけど、確かスキンヘッドのガツチリした男と、もう1人は顔は良く分からないけど色白でナヨナヨした感じだったな。」

……ああ……何かソレっばい。

オレはその2人が見つめ合ってる姿を想像して身震いした。

今度見たらよく観察しないと。

なんて考えていたらオレたちの部屋をノックする音がした。

近くにいたタケシがドアを開けると、訪ねてきたヤツの話し声が聞こえてきた。

「あの〜、隣の部屋の者なんですけど。今日から……」

なに〜〜〜〜〜!!!!

となり〜〜〜〜〜っ!!!!

オレは急いでベッドのハシゴを滑るように下りた。

ホモの顔をしっかりと確認しようとドアへ近づくと、そこには……

「あああ〜あああああああああ〜〜〜っ!!」

驚きのあまり絶叫してしまった。

「ケ、ケンイチ〜〜〜〜〜??!!」

「こ、光太にいちゃん!!! この部屋だったんだ!! 良かったあ〜〜〜!!」

ドアの向こうにいたのは、従兄弟のケンイチだった。

「オマエ、何で??? ここに?!! とっ、とにかく入れよ!!」

ケンイチを部屋の中に招き入れると、オレは興奮しながらタケシとベッドに寝転がっているヤスヒロに紹介した。

まさか、こんな所でケンイチに会えるなんて。

今年の夏はもう会えないと諦めていたのに。

今、ここにケンイチがいる！！

オレは嬉しくてしょうがなかった。

「光太にいちゃんが研修でここで働くって言うから、ボクもここでバイトする事にしたんだ。夏休みは光太にいちゃんの家で過ごすっていうのが恒例になってたから、今年は遊べないと思うと寂しくてね・・・」

「何で内緒にしてたんだよぉ〜！！ビックリさせやがって！！」  
「ただど、オマエも住み込みでやるんだろ?? こんな山奥まで通えねえもんな。よく、親、許したな・・・」

オレは嬉しさを隠しきれず顔がニヤけているのが自分でも分かった。

ただど、それはケンイチも同じだ。



「まあね。来年は3年になるから大学受験で遊べないでしょ。だから今年だけどうしてもって頼んだんだよ。光太にいちゃんも一緒だって言ったら許してもらえたよ!!」

「そーか、そーか!! しかし、すぐに会えて良かったなー!! 別の階の部屋とかだったら当分会えなかったかもよ・・・」

「ホントだね。ボクもこんな大きなホテルだと思ってなかったから・・・」

「お~~~~い。話が弾んでる最中、悪いんだけどさ、ちょっとだけ割り込んでいいかあ〜?」

オレとケンイチが興奮して喋りまくっていると、タケシが遠慮がちに間に入ってきた。

「オマエら、どうしてそんなに仲いいワケ?? ただの従兄弟同士だろ?! オレはそんなに仲の良い従兄弟いねえから、オマエらの気持ち分かんねえなあ~~~~!!」

タケシの疑問はもつともだ。

確かにオレたちは仲が良すぎる。

オレに会いたいが為にケンイチが研修先にまで押し掛けて来るなんてよっぽだもんな。

「そうだな。オレも他にも従兄弟が沢山いるけど、こんなに仲良  
いのはケンイチだけだもんな。！！ 何でだろ?? . . . . .と  
にかく気が合うんだよな。まるで離れて暮らしてる兄弟 . . . . .みた  
いな!!」

「そう、そう!!」

オレの言った事にケンイチが同意してくれた。

本当にこいつはオレの事を実の兄のように慕ってくれてるんだな。

嬉しくて涙が出そうだぜ!!

「オレには実の兄貴がいて、遠く離れて暮らしてるけど、久々逢っ  
てもロクな会話ねえ。なあ。そういえばケンイチ君? 君、越し  
てきた部屋、隣の部屋って言ってたよね? もしかして、あのホモ  
たちと一緒に??」

オレが1人涙を堪えてると、タケシがケンイチに話し掛けていた。

「えっ?? 何ですかホモって . . . . .ボクの部屋にはボク以外い  
ませんけど . . . . .」

ケンイチはいきなり『ホモ』なんて聞いてビックリしている。

「あれ?! 君、何号室?？」

タケシが不思議そうに聞いた。

「303号室ですけど・・・」

「ああ~~~~!! 反対側ね。おい、ケンイチ。301号室にはホモがいるから気をつけるよ!」

タケシはケンイチをからかうように言った。

「ええ~~~~!! 何をどう気を付ければいいんですか~~~~?!  
本当?? 光太にいちゃん!」

「えっ?! あー、うん。・・・いや・・・まあ・・・」

オレは実際に見たワケじゃないから、曖昧に言葉を濁した。

しばらく話し込んでいたが、ケンイチは明日も早いからお風呂に入ってもう寝ると言って帰って行ってしまった。

ああ、もう22時になるもんな。

オレも明日の朝、早く起きなきゃいけないから、そろそろ寝るかな。

……ん??

22時……?!

ヤベツ!!

ケンイチにフロの事、話してなかった。

あいつ男のくせに怖がりだからな。

しょうがねえ〜。

オレはもうフロに入ったけど、あいつと一緒にもう1回入ってやるか。

もちろん22時半くらいになってから。

オレが急いでタオルを持ってケンイチの部屋に行こうとした時、ちよつど遅番の仕事を終えたナオヤが青ざめた顔で部屋に帰ってきた。

「おいおい、ナオヤ。随分、顔色が悪いなあ〜!! 仕事、そんなにハードだったのかよ!!」

オレはなるべく明るく話し掛けたが、ナオヤの表情は暗い。

「いや……。。さっきイヤな話を聞いたやつてな……。」

このあと、オレたちはとんでもない事実を耳にする。

## 第2話 となりのケンイチ くろく

ナオヤの言葉にタケシは興味を持ったらしく、ベッドの梯子を上っている途中だったが、すぐに下におりてきた。

ナオヤが部屋の真ん中に腰をおろしたので、オレとタケシはナオヤの正面に座り、その『イヤな話』を聞く事にした。

「先輩から聞いたんだけど、ちょうど一年前の……」

ガチャッ

ナオヤが話しはじめた時、いきなりドアが開いて、のんきな顔をした栄ちゃんが「ただいまー!!」と元気良く帰って来た。

栄ちゃんも遅番で仕事が終わったばかりなのに、部屋への入り方はナオヤとはエライ対照的だ。

「何なに?? どうしたの?! みんな真剣な顔して!!!」

栄ちゃんはおちゃらけたように言いながら、オレの隣に座った。

栄ちゃんも帰って来たし、せっかくだからと、興味なさそうに寝転がっているヤスヒロもムリヤリ誘い出して、オレたちは部屋の真ん

中で輪になって座った。

「それで?? どうしたんだよ・・・」

タケシが話すよう促すと、ナオヤは床を見つめたまま話し始めた。

「ちょうど一年前の今頃に、このホテルで事件があったらしいんだ・・・」

「事件・・・?!」

今まで「修学旅行みたいで楽しいな!!」なんて言っていた栄ちゃん、事件と聞いて顔つきを変えた。

「この寮に住んでいた従業員が死んだらしいんだ。しかもその死体が発見されたのは本館の客室だったって・・・」

「何で客室で?? 客に殺されたのか??? それともホテルに対する嫌がらせの為にわざわざ客室で自殺したとか・・・?!」

事件と聞いたら黙っちゃいられない。

オレは一所懸命、推理しようとした。

頭の中にはサスペンスドラマのテーマ曲が流れている。

オレは今、この寮に住み込んで働いてるから良く分かる。

寮で死ぬならまだしも、客室で死ぬってのは明らかにおかしい。

絶対に事件だ!!

「……で?? やっぱり自殺?！」

探偵が事件を推理している時のようなしかめ顔でオレはナオヤの言葉を待った。

「それが、未だに解決していないんだ……。自殺か他殺かも分からない……」

マジかよ!!

未解決だつて?!

しかも自殺か他殺かも分からないって……!!

「死因も原因不明で……」

ナオヤは非常に暗い表情のままボソボソと語る。

原因不明???



そんな馬鹿な!!!

ナオヤはみんなの顔をグルリと見渡すと、もったいぶった素振りも見せず、強烈な事実を語り始めた。

「・・・ただ、発見された時、両足がグニャグニャに変形してたつて・・・」

「・・・マ、マ、マジかよ!!!」

グニャグニャ???

両足がグニャグニャに変形??!!

こ、怖ええええええええ!!!

「それはまた・・・不気味だな。だけど、それなら他殺で間違いないだろ!!!」

「なんで??」

自信満々で断言するタケシにオレは即行ツッコんだ。

「だって飛び降りとかならともかく、部屋の中で自分の足グニャグニャにして自殺するヤツいねえ〜だろ!!!」

確かに……

だけど、足がグニャグニャになっただけで人間って死ぬんだろうか？？

そもそも『グニャグニャ』ってどんなモンなんだ？？

関節とか無視して曲がりくねったのだろうか……

もしかしたら心臓が止まるほどの恐怖かショックな事があったのかもしれない……

オレが1人考え込んでいると、ナオヤはさらに不可解な事を言った。

そのナオヤが語る半端なく恐ろしい事実は、オレたちの心臓を通り越して後ろの壁まで突き刺すような衝撃だった。

「検死の結果、その人の死亡推定時刻が出ただけど……」

突然背中に寒気を感じる。

強烈な寒気だ。

これ以上聞きたくない！！

だけどナオヤは無常にも淡々と話しを続け、オレ自身、今この時点

で耳を塞ぐのは不可能だった。

聞きたくない。

でも、聞かなきゃいけない。

そんな気持ちを抱いていたのはオレだけではないだろう。

今、部屋でナオヤの話を聞いている全員が背中に悪寒を感じているに違いない。

ナオヤの話を聞きたくないのに聞かなきゃいけないという、矛盾の交差する不気味な空間の中、ナオヤ以外の時間が止まったかのように部屋は静まりかえっていた。

「ちょうどその時刻、その人の死んだ時間に、同僚がこの寮でその人と会ったって言うんだ。ちゃんと会話もしたらしい……」

死亡推定時刻に寮で話しをした人がいる??

ど〜いう事だ〜?!!

こ、怖ええ〜!!

それは怖えええ〜!!

オレはその話しを聞いてゾォーツとしたけど、タケシは現実的なも

んで、冷静に反論した。

「死亡推定時刻なんて、しょせん推定だろ?!　ズレてたんだよ。時間が……」

「オレもそう思ったけど、死体が発見されたのは、その人が話していた時間の5分後だって」

「えっ……」

みんな言葉を失った。

この寮から本館までは結構、遠い。

どんなに急いでも5分で着くかどうかだ。

その上、客室まで行って殺されるなんて……無理だ!!

せめて10分、いや15分は欲しいよな。

「それでな、その死んだ人っていうのが、この部屋の隣に住んでたらしいんだよ」

「隣って、まさかホモの部屋??」

タケシの言葉にナオヤはキョトンとしていた。

「誰だよホモって……303号室だよ。それ以来ずっと空室にな

ってるってね」

「……………303号室?!」

どっかで聞いたな。

それもごく最近……………

「あああ~~~~!!!!」

「なっ、なんだよっ!!」

オレが突然大声をあげたので、ナオヤをはじめ、みんな驚いている。

「303号室って、ケンイチの部屋だよ!! あっ、そうだ、フロ……………!! すっかり忘れてたあああ!! オツ、オレちよつと行ってくる!!」

何でオレが騒いでいるのか全く分からないみんなを残して、オレは慌てて部屋を出た。

あいつも、もうフロに行っちゃったよな……………

いや、でもまだ部屋にいるかもしれないし、一応部屋に行ってみるか……………

オレが303号室の前でウロウロしていると、廊下を走る音が聞こえた。

音がする方に耳をやると、ケンイチが物凄い勢いで走ってきた。

「こ、光太にいちゃーん！！！！」

ケンイチは慌てて服を着たのが、Tシャツの後ろ前が逆だ！！

しかも濡れている！！

おそらく体を拭かずに来たんだろう。

髪からもポタポタと水滴が落ちている。

そのケンイチの慌てぶりから、尋常じゃない様子が窺えた。

「どうしたケンイチ！！ フロで何かあったか？！」

オレは聞きながらケンイチの足首を見た。

血が出た様子はない。

やはり脳裏に浮かぶのは初日のフロでの怪我だ。

一瞬ケンイチもか?! ……と、思ったが、幸いオレみたいな怪我などではないみたいだ。

「で、出たんだよ~~~~!! ほ、本当だよ!! ボク、見ちゃったよ~~~~!!」

ケンイチは半泣き顔で訴えてくる。

「見たつて、何を?! ……もしかして……………ユーレイか??」

オレは心の中でケンイチが否定してくれるのを祈った。

……が!!

ケンイチは何も言わずに黙ってコクリ頷いたのだった……

高2の男が泣きべそで……

第2話 となりのケンイチ 4

なんてこった・・・！！

ケンイチに来た早々怖い思いをさせてしまうなんて！！

従兄弟のケンイチを実の弟のようにかわいがっているオレは、兄心とでも言うべきか、非常に残念な思いを抱いた。

オレがちゃんとフロの事をケンイチに伝えていけば・・・

一緒に入ってやっていけば、こんな事には・・・

オレのミスだ！！

すまん、ケンイチ・・・

オレは心の中で何度もケンイチに謝りながら、とりあえずオレの部屋に連れて行った。

みんなビシヨ濡れで登場したケンイチに驚いたが、オレが事情を話すとすぐに受け入れてくれた。



ケンイチにバスタオルを差し出すと、ケンイチはフロ場での出来事を話し始めた。

「……………脱衣所に誰の服もなかったから、入っている人がいないと思ってお風呂に入ったんだ。その時は確かに誰も入ってなかったよ。ボク1人だった。だけど……………体を洗ってお湯に浸かろうとしたら、誰かが湯船に入ってたんだ……………」

「体洗ってる間に人が入ってきたとかじゃないのか?!」

オレの問いにケンイチは大きく首を振った。

「そんな気配はなかった。それに……………モヤでハッキリは見えなかったんだけど……………」

その時誰かが生唾を飲み込む音が聞こえたが、オレはケンイチの声だけに耳を傾けた。

「……………顔が!! 顔が真っ白だったんだ!!」

ケンイチはそこまで言うと、頭からバスタオルを被ってしまった。

ケンイチの後ろ前が逆のTシャツ、そしてビシヨ濡れの髪、慌てて走ってきた時のあの表情と今の言葉、どれをとっても嘘は見当たらない。

顔が真っ白のユーレイ……

マ、マジかよ!!

「フロにユーレイが出るって噂、本当だったんだな……」

ナオヤがボソツと呟いた。

そういえばナオヤと栄ちゃんは仕事から帰って来たばかりだ。

これからフロに入るんだろう。

気の毒に……

「栄ちゃん、一緒にフロに行こうぜ!! 1人じゃ入りたくねえよ!!」

ナオヤが栄ちゃんを誘うと、栄ちゃんは何か少し考え込んでから言った。

「オレ、もうしばらくしてから別館の大浴場に行くから」

栄ちゃんの無表情の言葉に、ナオヤはあっけにとられた顔つきで目を丸くした。

「エッ?! 何で?? ダメだろ、あそこは!!」

ナオヤの疑問はもつともだ。

客が使うホテルの大浴場は従業員は入っていけない事になっている。

「だから深夜にこっそり行くんだよ」

少しニヤついた口元に、ナオヤは眉間にしわを寄せる。

「でも、遠いぜ」

「それでもユーレイが出るフロに入るよりはマシだ」

ナオヤの心配もご無用とでも言わんばかりの堂々とした表情と佇まいは、さすが恐いモノ知らずの栄ちゃんとも言うべきか。

栄ちゃんの口から『ユーレイ』という言葉が飛び出したものの、心底この人は信じちゃいないのは見え見えだ。

それに、一人で夜中に大浴場って・・・

ま、それは個人の問題だから、別に干渉はしないけど・・・

ユーレイが出るフロよりマシ???

いやいや、真夜中に暗くて長い廊下を通って、別館の大浴場に行く方がよっぽど怖え〜から！！

みんな口にこそ出さないが、心の中では同じツッコミを入れてるに違いない。

「じゃあ、いいよ！！　オレは明日の朝、入るから」

ナオヤはふてくされたように言った。

「・・・とにかくケンイチ。おまえ今日はこの部屋で寝ろ！！　ナオヤのベッドの下、開いてるから」

すっかり怯えてしまっているケンイチを、このまま例の変死者が住んでいた部屋に帰すのはかわいそうだ。

みんなも同じ思いらしく、オレの提案に賛成してくれた。

電気を消して真っ暗になってから間もなく、栄ちゃんのイビキが聞こえてきた。

栄ちゃん、大浴場はどうした??!

起きるんだよね??　後で起きるんだよね??

タケシの寝息も聞こえる。

こいつらは肝が据わってるよな。

あんな恐い話を聞いた後だってのに……

ナオヤの恐怖の噂話にケンイチの体験談……

足がグニャグニャ、あれはもう考えるのはよそう。

想像すると気持ちが悪くなる。

それに怯えると引き寄せらるって言うしな……

……しかし、あのケンイチが見ちゃうとは。

いまだかつてケンイチの恐怖体験なんて聞いた事なかったな……

あいつはそんな世界とは一生無縁だと思ってた。

そんなケンイチが初っ端からコレだよ。

こりゃモノホンだよ。

ヤバイよココ……

この寮、このホテル、ヤバイよ、マジで……

・・・ケンイチがフロで見たって言う、真っ白いユースレイって、一体どんなだったんだろう？？

全体的に真っ白に、人の影のようなカタチで見えたのかな？？

それとも『のっぺらぼう』のように顔だけがなかったのか？？

・・・どっちにしてもケンイチに聞き出すのはよそつ。

これ以上あいつを怖がらせると、せつかく偶然にもここで一緒に働けるのにヤツはこのバイトを辞めて家に帰りかねない。

・・・とか何とか色々と考えていたが、徐々に意識が薄らいでいった。

翌朝、オレはケンイチと一緒に朝食をとるため食堂に向かった。

昨夜、栄ちゃんが本当に夜中に別館の大浴場まで1人で行ったのか眠ってしまったので分からないが、オレたちが部屋を出る時にはまだベッドで爆睡していたから、どっちにしても無事だった事には間違いない。

別に心配してたワケじゃないけど・・・。

「おはよ、光太!!」

食堂の入口でカスミにバッタリ会った。

長いサラサラな髪が、朝の光でキラキラに光り輝いて見える。

それにシャンプーのいい匂い。

カスミのヤツ、朝シャンか〜?!

「・・・あれ?? となりの人は・・・??」

カスミはケンイチを見て、少し不思議そうな顔をしている。

オレが学校のヤツら以外のヤツと一緒に居るもんで、意外だったんだろう・・・

「ああ、こいつケンイチだよ。昔、一緒に遊んでただろ?! 昨日からバイトで・・・」

「ウツソー!! ケンちゃん?! あの小さかったケンちゃん?! ホントに〜〜?!!」

オレが話し終わらないうちに、カスミが驚きの声をあげた。

「あの・・・カスミおねえさんですよ。お久しぶりです」

ケンイチは少し照れくさそうに笑みを溢す。

「うわ〜、大きくなったねえ〜!! 昔なんか、こ〜〜〜んな小っちゃかったのに、随分大人になっちゃって〜!! 光太の事も、もうすぐ追い越しちゃうじゃん!!」

カスミが大きなジェスチャー付きで、興奮気味に話してる。

うるせー、ケンイチの背が伸びようがオレの背がケンイチに追い越されようが、そんなの大きなお世話だつて!

・・・つたく、親戚のおばちゃんみたいなお事、言いやがつて!!

と、オレは心の中でツツコンでいたが、とても口には出せなかった。

とにかくカスミは怖いから。

ある意味、ここの怪談話なんかより全然怖いぞカスミは・・・。

オレたちは小さい頃、よく3人で遊んでいた。

だけど、それも小学生くらいまでで、中学に入った頃からオレとカスミは遊ばなくなっていたから、必然的にカスミは小さい頃のケンイチしか知らない。

そう思うとカスミが驚くのも無理ないか・・・



ケンイチも今じゃ、もう立派な高校生だもんな。

オレたちは昔を思い出し、3人で朝食をとる事にした。

昔話をしながら楽しく食べていたが、もうすぐ食べ終わるといふ頃、カスミの表情が少し暗くなった。

「あのさ……。男子寮の部屋は、何ともない？」

ふたつ向こうのテーブルで、背を向けて朝刊を読んでいるオッサンにすら気を配りながら、カスミは小声で言った。

「は?? 何だよ、いきなり。……まあ、色々あるけど、何?! 女子寮の方も何かあるワケ?!」

カスミが突然そんな事を聞いてくるなんて、きっと女子寮で何かあったに違いない。

変態が出た!!! ……とか?

下着ドロボーが出た!!! ……とか???

「うん……。誰かのイタズラなのかもしれないけど……。」

ちよつとね……」

遠くを見つめる二重まぶたの瞳に、女子寮への入口の階段が映る。

「女子寮にも出るんですか？　幽霊……」

昨夜、本人曰く、正真正銘の幽霊を見たばかりのケンイチが、青冷めた顔をさらに青くしながらカスミの返答を待った。

「……ううん。そんなんじゃないの。……そんなんじゃないと思うんだけど……」

カスミの口から出た言葉には、オレが想像した『変態』も『下着ドロボー』もなかった。

それから終始、オレもケンイチも真剣な面持ちでカスミの話しに聞き入った。

とんでもなく薄気味悪い話だった。

本人は気のせいかもしれないし、なんて無理に笑ってたけど、オレは何となくイヤな感じがした。

イヤな予感もする……。

今夜、ちゃんと調べてみる、なんて言ってたけど・・・

大丈夫なのかよ、アイツ・・・

第2話 となりのケンイチ ㄱ4ㄱ (後書き)

第2話 『となりのケンイチ』 おわり

### 第3話 カスミの憂鬱 ①

その部屋ではじめて異変を感じたのは、研修2日目の朝だった。

「キヤアツ！・・・ちよ、ちよっと、誰よこんなイタズラするの！  
気持ち悪いじゃない!!」

朝一番に起きて、部屋にある備え付けの洋ダンスを開けた『みどりが叫んだ。

「どうしたのよ。。。こんな朝っぱらから・・・」

私はまだ眠い目を擦りながら、みどりが悲鳴をあげた洋ダンスに近づいてみると・・・

そこには・・・

開けっ放しになっている、観音開きの洋ダンスの中には、たくさんのハンガーが掛かっていて、それぞれみんなの服が掛けられている。

右側の扉の裏側には鏡が付いていて、その下にはネクタイ掛けが・・・

昨日の夜には、そこには誰も何も掛けていなかったはず。ただ、そこには、真っ黒な長い髪の毛の束が掛かっていた。

「やだっ、何これ……」

私は何かの見間違いかと思って、よ～～く、それを見てみたけど、そこに掛かっていたのは確かに髪の毛だった。

触ってみる勇氣は……ない。

「何かあったの??？」

タンスの前で立ち尽くしている私とみどりの所に、まいちゃんとりサもやってきた。

「きゃッ」……!!

「うわっっ」……!!

ネクタイ掛けに掛かっている、髪の毛の束を見つけた2人は、同時に小さく悲鳴をあげた。

「誰がこんな事したの?!」

みどりはそう言って、怒った顔をして私を見た。

まいちゃんとりさも私を見ている。

私の髪を……

「ちょ、ちょっと！ 私じゃないわよ！！」

「じゃあ、これは誰の髪よ！ この部屋で髪が長いのは、カスミしかいないじゃない！！」

みどりは私が犯人だと決め付けている。

「それはそうだけど、私、こんな所に髪の毛なんて掛けてない！ だいたい、こんな事する意味ないじゃない！！」

確かにそこに掛かっている髪の毛は、この部屋の住人の中では、一番私の髪に似ている。

まいちゃんの髪には、ゆるくウェーブがかかっているし、リサは肩までのセミロング。

みどりはクルクルパーマだ。

「んんん、カスミちゃんの髪とはちょっと違うよね、色とかペリッヨッに……」

まいちゃんが、私の髪とネクタイ掛けの髪を、見比べながら言った。

「そっだね〜」

リサも、おっとりした口調で同意した。

「でも・・・、だったら誰の髪なの?? これ・・・」

みどりは、まだ納得できずにブツブツ言っている。

「さて、そろそろ準備しないと、仕事に遅れちゃうよ〜」

リサは、そう言って、ティッシュでネクタイ掛けの髪の毛を取ると、まるでその辺に落ちていたゴミを捨てるように、丸めてゴミ箱に捨てた。

リサって、普段はおっとりしてるのに、何気に強いんだなあ〜。

気持ち悪くて、髪の毛に触れられなかった私は、リサを少し尊敬した。

その日、一日の仕事を終えて部屋に戻った頃には、もう朝の出来事なんかすっかり忘れていた。



みんなもそうみたいで、あの髪の毛の事を話す人は、誰もいなかった。

だけど……

次の日の朝……

それは、また同じ場所に……

その日、一番最初に洋ダンスを開けたのは私だった。

真夏でも高原の朝は少し肌寒い。

私は、洋ダンスの中から、何気なく上着を取り出した。

ちょうど顔の高さにある鏡を見た時、少し違和感を感じた。

何だろう?? ……と、下に目をやると、鏡の下にあるネクタイ掛けに、昨日と同じように、長い黒髪が掛かっていた。

「……………えっ?! また……………?!」

私は、すぐに昨日の事を思い出した。

その髪の毛の束から目が離せず、心臓はドクドクと早くなっていく。

な、何だか・・・

何だか、昨日より髪の毛の量が多くなっている気がする！！

ドクン ドクン

ドクン・・・

昨日は、せいぜい2、30本ってところだったけど、今、目の前にあるのは、その倍くらいはあるだろう・・・

「カスミちゃん？　どうかした??」

タンスの扉を開けたまま、固まっている私を不思議に思った、まいちゃんが、後ろから声を掛けてきた。

「ヤダッ!!　それ、またあったの?!」

「.....うん.....」

私が助けを求めるようにまいちゃんを見ると、もともと大きいまいちゃんの目が、さらに大きく見開かれていた。

まいちゃんの声聞いて、みどりとりサも、すぐにかけ寄って来た。

「わっ、私じゃないからね!!」

私は、みどりにまた何か言われるんじゃないかと思って、急いで否定した。

「誰もそんな事、思っていないって!!」

リサが困ったように笑って、そう言ってくれたけど、みどりは何も言わずに眉間にシワを寄せて、その髪の毛を見ていた。

「誰かのイタズラだよ・・・」

まいちゃんは力なくそう言って、自分のベッドへ戻っていった。

その、まいちゃんの咳きを聞き逃さなかったみどりは、明らかに怒った口調でまくし立てた。

「じゃあ犯人は、この4人の中の誰かってワケね!! だって、夜、寝る前は部屋の鍵をちゃんと閉めて寝たし!! 外から誰か入って来るなんて出来ないもん!! 一体誰なのよ!! もう、やめてよ

ね、こんなイタズラ、気持ち悪いじゃない!!」

「みどり・・・落ち着いてよ。明日は、もう、こんな事ないから、ねっ!!」

興奮したみどりを、リサはなだめるようにベッドへと戻した。

洋ダンスの前に1人残された私は、本当はすぐ~~~~く、イヤだったけど、昨日のリサの勇姿を思い出し、その髪の毛を捨てる事にした。

ティッシュを3重にして、なるべくその髪の毛の感触を感じないように、そ~~~~と。

みどりは怖いんだ!!

私だって怖い!!

まいちゃんも、リサも同じはず!!

こんな、誰のだから分からない髪が束になって、有り得ない所に掛かっているんだから。

もし、誰かのイタズラだったとしたら、私だって犯人を突き止めた  
い。

でも………

本当に犯人なんて、いるのかな………

やめよう!!

深く考えるのは……!!

リサも言うように、明日は、もうないはず!!

うん、きっと……

私は自分に強くそう言い聞かせて、今日は元気良く働こうと決めた。

### 第3話 カスミの憂鬱 ㄥㄥ

「おはよう、光太！！ 今日も決まってるね、制服！！」

だるそうに前を歩いている光太に、私はいつも以上に元気に声を掛けた。

「うるせー！！・・・ったく、朝から元気だよな、オマエ。これから仕事だつてのに、なんてノーテンキな・・・」

「朝の挨拶は『おはよう』でしょ！！」

光太がまだ言い終わらないうちに、私は光太を追い越して、アツカンをベールにして持ち場へと急いだ。

今日の目標は、光太より、チップをたぐぐくさん貰う事！！

そして、仕事が終わったら、光太に勝ち誇ったように金額を告げるんだ！！

ハハッ、何か光太のくやしそうな顔が目に見え始める。

そうやって、忙しく仕事をしていけば、今朝のイヤな出来事も、き

っと忘れられるだろう……。

何も考えず、仕事に集中しようとして頑張っていたが、やけに長い髪の毛が気になる。

あのネクタイ掛けに掛かっていた髪の毛の色は、ちょうど、このお客様のような黒髪だなあ……とか、でも、長さがちょっと足りないなあ……とか、考えなくてもいい事ばかり。

こういう時に限って、ロングヘアのお客様にばかりあたるし……。

いつまでも朝の事を引きずっている自分に嫌気がさして、気分を変えようと、私は短い休憩をとる事にした。

控え室に向かっていると、スラツと長い黒髪の女性が、従業員用の通路に入っていくのが見えた。

その髪は、ネクタイ掛けに掛けられていた髪の毛に、とてもよく似ていた。

……！！！！

背中にゾクツと寒気が走る。

い、今まで、あんな従業員は見た事がない！！

制服も着ていなかったし……。

私は一瞬とまどったが、きっとお客様が道を間違えたんだ、正しい道にご案内しないと、と思い直し、急いでその女性の後を追った。

小走りで従業員用通路まで行って見たが、真っ直ぐに伸びている、その通路には誰もいない。

……？！

あの女性との距離は、そんなに離れていなかったはず……

途中にある控え室や更衣室、トイレも覗いてみたけど、とうとう、その女性を見つける事はできなかった……

その後の仕事は上の空で、ぜんぜん集中できなかった。

事務的に何とか仕事をこなし、ただ時間が過ぎるのだけを待っていた。

仕事が終わった途端、元気になった光太が……

「カスミ！！ オマエ、今日、チップいくら貰った？ オレ、五千



円~~~~!!」

なんて話し掛けてきたけど、私は「あっそ、よかったね・・・」とだけ返した。

光太とのチップ勝負なんて、もう、どうでもいい!!

早く部屋に戻って、何も考えずに布団を被って寝てしまいたかった。

そして、朝起きて・・・

洋ダンスを開けて・・・

もう何もなかったら・・・

それで終わりだ!!

もう、髪の毛長いお客様を気にする事もないし、従業員用の通路で消えたあの女の事も、少し不思議な出来事だった・・・で、済む!!

・・・だけど、何も考えないなんて、まず無理だ!!

部屋に戻れば、イヤでもあの洋ダンスが目に入る。

私は一気に部屋に戻る気をなくし、まだお腹は空いてなかったけど、真っ直ぐ社員食堂へ向かった。

食堂に入ると、同じクラスのメグミがいた。

メグミとは、部屋割りで別の部屋になってしまったが、普段は仲が良い方だ。

一人で食堂に来た私は、ちょっとホツとして、同じく一人で窓際の席に座り、ジュースを飲んでいるメグミに近寄った。

「お疲れ〜、メグミ！！ もう仕事終わったの？ 早いね！！」

「あつ、カスミちゃん、お疲れ！！ 私、今日、午後から休みだったから、一人で部屋に居てもつまないし、ここでテレビ見てた・・・」

「そうなんだ。部屋にテレビないのでってキツイよね。ホテル側もケチケチしないで、寮も全部屋にテレビ入れてくれればいいのにな！」

「ホント、ホント・・・」

私たちは、しばらくクダライ話しをしていたけど、私はふと、朝のまいちゃんの言葉を思い出した。

『誰かのイタズラだよ・・・』

あの髪の毛が、誰かのイタズラだとしたら・・・

そして、犯人が私たちの部屋の中の誰でもないとしたら・・・

犯人は、どうにかしてコッソリ真夜中に侵入してきてるって事？

みどりは鍵もかけてるし、外からは誰も入って来れないって言うってたけど・・・

私は思い切って、メグミに聞いてみた。

もちろん、メグミと同室の、リョウコやココロを疑っているワケじゃないけど・・・。

「メグ、あのさ、昨日の夜中か今朝早くに、私たちの部屋に誰か来なかった？」

「?????・・・誰も行ってないと思うけど。私もずっと起きてたワケじゃないから分からないけど、誰もそんな事、言ってなかったし。それに、夜中にわざわざ行くほど緊急な用事がある人もいないでしょ?!」

「そ、そうだよね〜!」  
「ごめんね、変なこと聞いて!」

「何かあったの?」

「……うつん、何でもない！ ……勘違いだったかも……多分……」

歯切れの悪い返事を返す私を、メグミは不信そうに見てたけど、それ以上その事については何も聞いてこなかった。

夕食を済ませた私は、いつまでも食堂に居るわけにもいかず、仕方なく部屋に戻る事にした。

部屋の前に着くと、ちょうど、みどりとりさが、これからご飯を食べに出て行く所だった。

「これから？ 行ってらっしゃい！」

「は〜い。行ってきま〜す！！」

みどりとりさは、楽しそうに部屋から出て行った。

もう少し食堂にいればよかったかな……?!

今からまた行くのは変だし……

カチャッ

部屋の中には誰もいない。

まいちゃんは遅番だから、あと一時間ほどしないと帰って来ないだろう。

あ~~~~あ・・・

あと一時間、退屈だなあ~~~~。

・・・・・・?!

な、なにコレ?!

な、何か、いつもと雰囲気が違う・・・・・・

1人きりの部屋の中には、なぜだか重苦しい空気が漂っていた。

### 第3話 カスミの憂鬱 ㄱㄱ

今まで感じたこともない、重苦しい空気。

でも、部屋は何の変わりもないし、そんな気のせいだと言いつき聞かせ、私は上着を脱いだ。

それを掛けようと、洋ダンスを開け、ハンガーに手を伸ばした。

………だけど、私の手は、ハンガーに触れる前に止まってしまった。

このまま、またここに上着を掛ければ、明日の朝も洋ダンスを開けなくてはいけない………。

もし、その時また、あの髪の毛があったら………

私は迷った。

上着を掛けなければ、少なくとも私はここを開けなくて済む。

他の人も、もう掛けないかもしれない。

実際、今は誰の服も掛かっていない。

でも、開けて中を見なければ、それはそれで気になるし……

「髪の毛が掛かってなかった!」って、安心する事も出来ない。

私はしばらく悩んだが、結局、思い切って掛けておく事にした。

明日の朝は、絶対、何も無いはず!!

……その事に期待して。

だけど……

私の期待は見事に裏切られた……。

翌朝、私は早くに目が覚めた。

枕元に置いてある、小さな目覚まし時計を見ると、まだ6時前だった。

起きなきゃいけない時間までは、まだ、1時間以上もある。

二度寝大好きの普通の私だったら、喜んですぐにまた眠りについた  
だろう。

だけど、今日は違う。

ベッドの中で目を閉じてみても、頭はすっかり覚めてしまっていた。

洋ダンスが気になる……

いくら頑張っても、寝ようとしても、洋ダンスの中が気になっ  
てしょうがない。

私は、諦めて起き出し、洋ダンスの前に立った。

みんなは、まだ寝ている。

ドクン ドクン

ドクン……

シーーーーンと静まり返った部屋の中で、私の心臓の音だけが、やけ  
に大きく聞こえた。

私は1度、大きく深呼吸して、勢いよく洋ダンスの扉を開けた。



.....!!!!!!

「.....な、何で、また、あるのよ.....!」

洋ダンスの中には、私の上着一枚と、長い黒髪の束だけが掛けられていた。

私はその髪の束をティッシュに丸めて捨てると、すぐにお風呂へと向かった。

一気に寒くなった体を、早く温めたかった。

だけど.....

お風呂に入っけていても、あの髪の毛の事ばかり考えてしまう。

このまま、ずう~~~~と続くんだろうか.....?!

私も、もう、あのダンス使うのやめようかな.....

でも、『あかすのダンス』なんかがある部屋で、一ヶ月も過ごさなきゃいけないなんて、イヤだ!!

一体どうすれば……

……気味悪がっているだけじゃ、何も解決しないよね。

体が温まってくるにつれて、私の気持ちはだんだん強くなっていったらしく、お風呂をあがる頃には、私はある決意を決めていた。

部屋に戻ると、みんなはもう起きて準備を始めていた。

私はまいちゃんの所へ行き、お風呂の中でずっと考えていた事を話した。

「えっ?? また、あつたの?! あの髪……」

まいちゃんは髪をとかしていた手を止めて、私の事を見た。

「うん……。それでね、私、確かめようと思うんだ!」

「確かめるって、どうやって?」

「明日は休みだし、今晚、徹夜してあの洋ダンスを見張る!」

決意のこもった私の声を聞いて、まいちゃんは、カスミちゃんらし

いねって言って笑った。

「それでね……。一人で起きてるのって、かなりキビシ〜と思うんだ。私、すぐ眠くなっちゃうし。だから、お願い！！ まいちゃんも付き合ってー！！」

「え、ええ〜〜？？ わ、私も〜？！」

「うん！！ お願い！！」

私は手を合わせて頼んでみた。

本当は、一人で起きているのが怖かった。

考えたくはないけど、真夜中に何か得体の知れないモノを見ないと  
も限らない。

もしそうだった時、一人じゃとても耐えられないと思った。

そんな時、一緒にいてほしいと思うのは、やっぱり親友のまいちゃんだ。

そういう私の気持ちを察したのか、まいちゃんは嫌な顔もせず  
に言ってくれた。

「しょうがないなあ〜。いいよ、私も明日は休みだし。それに、

「この部屋の問題だね。付き合おう……！」

### 第3話 カスミの憂鬱 ④

そして夜・・・

私とまいちゃんは、お菓子をたくさん買い込んで、戦闘準備を整えた。

みどりとりサはもう寝てしまっているので、部屋の電気は消し、ベッドスタンドの明かりの中で、私たちはなるべく小さな声で話していた。

せっかく徹夜するんだから、どうでもいい話をしててもつまらない。

私はなるべく、楽しくて盛り上がる話しをしようとした。

いくら洋ダンスを見張るための徹夜だからと言っても、あの髪の毛の話は厳禁だ！！

ただでさえ、こんな怖い雰囲気なのに、余計に怖くなる。

まいちゃんも同じ気持ちらしく、その事には一切ふれてこない。

「こういう時は・・・」

「やっぱり・・・」

『恋バナ』だよねえ~~~~!!

「ねえねえまいちゃん。誰か気になってる人とかいるう~~~~?」

「えっ?! な、ナニ、突然!! ベっ、別にそういう人は・・・」

あっ、何か、まいちゃん動揺してる~~~~。

「いるんでしょ~~~~? 誰、誰? クラスの男子?！」

私はニヤニヤした顔で聞いた。

「いないよ~~~~。そんなの~~~~」

「ほんと~~~~う? もしかして栄ちゃんとかなんじゃないの~~~~?」

「何で栄ちゃんっ??!! 意味わかんないっ!!!!!!」

私はただ、頭にたまたま思い浮かんだ人を言ったただけだったけど、

まいちゃんは思いつきり否定した。

そ、そんな即座に否定される栄ちゃんの立場って………。

「栄ちゃんとまいちゃんって、同じチームだから言ってみただけな  
んだけど……」

「……」

「でも、いいと思うよ、栄ちゃん。何か強そうじゃん。空手か何か  
やってるって言ってたし……」

私はちょっと栄ちゃんが気の毒になって、どうでもいいフォローを  
してみたけど、まいちゃんの心には届かなかったみたいだ。

「そういうカスミちゃんはどうなのよ……!! 光太くと仲い  
いじゃない?!」

「光太はただの幼馴染みだよ。問・題・外っ!!」

「そっか……、まあ、そんなカンジだよな。それにしてもカッコイ  
イ人って、なかなかいないよね……」

「そっだね……」

何だか恋バナの締め括りって、いつもこんなこと言ってるなあ……

・

これから何年経っても、また同じ事を言っている私たちを想像して、ちよつと笑えた。

その後も、くだらない話しをしつつも、私たちは洋ダンスの中を1時間おきくらいに確認していた。

朝は開けるのが怖い洋ダンスも、2人一緒だと心強い。

今夜は徹夜で見張ると言った時、みどりには「あんたたち本当に起きていられるの?!」なんて言われたけど、まいちゃんとなら一晩中話していても飽きないし、朝まで起きていられる自信があった。

……はずだったのに!!

眠くしょうがない!!

まいちゃんも口数が減って、その代わりに、あくびの回数が増えた。

今はもう、4時半。

外も白々としてきた。

夜明けはもうすぐだ。



……でも。

どうしようもなく眠い!!

私は正直に、まいちゃんに眠い事を伝えた。

すると、まいちゃんも素直に「今、ちよつと寝てた!!」なんて白状した。

「じゃあさ、5分おきに交代で寝ない??」

このままだと2人とも寝てしまうと思った私は、回らない頭で考えた、無茶な提案をした。

「そうだね。カスミちゃん、先に寝ていいよ。5分経ったら起こすから……」

私同様、頭の回らないまいちゃんは、その提案をすんなりと受け入れてくれた。

まいちゃんのお言葉に甘えて、目を閉じた私は、すぐに眠りへと落ちていった……

くあ~~~~、気持ちいい~~~~……

「カスミちゃん、5分経ったよ!!」

「……………うん」

まいちゃんに起こされて時計を見ると、きっかり5分経過していた。時計からまいちゃんに目を移すと、すでにまいちゃんは眠っている。よっぽど眠かったんだな……………

まいちゃんが寝ている間、私は頑張って起きていようと、目を必要以上に大きく開けたり、瞬きの回数をいつもの20倍にしたりした。それにしても、長い。

5分って、超、長い……………。

5分がこんなに長く感じるなんて、後にも先にもコレきりだろう。

ようやく5分経った!!

私はすぐにまいちゃんを起こし、一瞬で眠りについた。

「カスミちゃん、5分経ったよ!!」

マジっスか??

は、早っ!!

交代で、5分寝ては起こされる……

私たちは、それを何度か繰り返した。

途中からは、もう時計なんて見ていなかった。

と、言うより、起こされても何も見えていなかった。

きつと、2人とも起きしているフリをしているだけで、実際は起きている番でも眠ってしまったんだろう。

その証拠に、一瞬で起こされる時があれば、長い時間眠っていたような時もある。

でも、2人とも、それについて怒るような態度も見せず、素直に受け入れていた。

私が最後に目覚めた時、夜はもう、すっかり明けていた。

慌てて時計を見ると、すでに6時を大きく過ぎていた。

ヤバイ!!

みどりとりさも、もう起きてしまう!!

「まいちゃん、起きてっ!! もう、朝になってる!!」

「うっそお~~~~?!!」

飛び起きたまいちゃんと一緒に、急いで洋ダンスまで行き、何の躊躇もせずに扉を開けた。

「キヤーーーーーッ!!」

最初に叫んだのは、まいちゃんだった。

バサ バサッ

扉を勢いよく開けたせいか、足元に髪の毛が落ちてくる!!

その量は前の日よりも、さらに増えていた。

ネクタイ掛けにも、まだ2、30本は残っている。

・・・なんで?!

こ、こんなにいっぱい・・・!!

一体、どこから?

誰が?

誰の髪の毛なの?!

・・・もう、ヤダ!!

声もなく、ただ呆然と立ち尽くしている私たちを、あざ笑うかのよ  
うな意地悪い女の高笑いが聞こえたような気がした・・・

第3話 カスミの憂鬱 ④ (後書き)

第3話 『カスミの憂鬱』 おわり

#### 第4話 タケシと休日 〔1〕

「結局、原因は分からずじまいだったってワケか？」

「……うん」

少し遅めの朝食をとろうと社員食堂へ行くと、すぐにしよぼくれた顔で座っていたカスミとまいを見つけた。

昨日カスミから聞いた、女子寮の話が気になってたから、オレはカスミたちのいるテーブルに行くと、カスミは昨夜から今朝にかけての出来事を教えてくれた。

カスミたちの部屋にある洋ダンスには、毎朝誰のだから分からない髪の毛がかかっているという。

犯人を突き止めようと、カスミとまいが寝ずの番をしたが、結局何も分からないまま、今朝も洋ダンスには髪の毛がかかっていたと。

「それで？ 今日徹夜で見張るのか？」

「ううん。もうやめる。なんか、そんな事してもあんまり意味ないような気がするし……」

オレの問いにカスミはいつになく弱々しい声で答えた。

「じゃあどうすんだよ。このままそのダンス使い続けるのか？ 気持ち悪いだろ？」

「気持ち悪いよ！ だからもう使わない。中にある服は全部出したし、この研修が終わるまで、もうあのダンスは絶対に開けない！」

「そうか。みんなも、もう使わないのか？ 不便じゃない？」

今まで黙って聞いていたまいに話しをふると、まいは・・・

「大丈夫。あのダンス使うくらいならちよっとくらい不便な方がいいよ」と言った。

女って男と違って服とかいっぱい持ってきてそうだから、ちよっとどころじゃなく不便だと思うんだけど。

まあ、本人たちがそれでいいって言っただからいいか。

オレじゃないし。

だけど、その洋ダンスをこのままずっと開けないってのも問題じゃないか？



「でもさ、このままずっと開けないでいたら、そのタンスの中髪の毛でいっぱいになっちゃったりしないか？」

「ちよつと光太！ 気持ち悪い事言わないでよ！ あと1ヶ月もあるタンスのある部屋で暮らさなきゃならないこつちの身にもなつてよねー！」

オレはただ、素直に疑問を口にしただけなのに、カスミにいきなり怒られた。

あ、何かまいも引きつったように怒った顔してる。

別に怖がらせるつもりはなかったんだけどな・・・

「私たち、昨夜寝てないからもう戻って寝るから！ 光太も休みだからってボケーっとしてないで、洗濯くらいしなさいよね！」

自分たちはこれから寝るくせに、オレには洗濯しろと捨てゼリフを残してカスミたちは席を立った。

何なんだよ。

八つ当たりか？

休みなんだから何をしようがオレの勝手だろ。

バーカ、バーカ！！

オレは心の中で悪態をついた。

絶対口には出せないけど。

・・・怖いから。

あゝあ・・・

ヒマだあゝゝゝ!!

朝食を食い終わったオレは、ベッドの上でゴロゴロとしていた。

持ってきていたマンガも数ページ読んだだけで、何かもう読む気がしなくなってきたし、一緒に休みだった栄ちゃんも「ちょっと走ってくる」とか言って外に行っちまったし・・・

しょうがねゝから洗濯でもすつかゝ。

カスミに言われたからするワケじゃないからな！ と心の中で呟きながら、他に何もする事のないオレは、数枚のＴシャツとパンツを持って洗濯室へと向かった。

洗濯室は、オレたちの部屋の廊下を挟んだ向かい側にある。

中には3台の洗濯機があった。

オレは入口から1番近い洗濯機の前に立って考え込んだ。

洗濯って・・・

どうやってするんだ？

自慢じゃないが、オレは1度も洗濯をした事がない。

いつもは母親がやってくれるし、洗濯機の使い方を教わった記憶もない。

でも、母親やみんなが使いこなせるくらいだから、たいして難しくもないだろう。

こんなのはテキトーでいいんだよな、テキトーで。

オレは洗濯機の中に洗濯物を放り込んで、とりあえずスタートボタンを押してみた。

・・・が！

何も起こらない・・・

スタートボタンの隣を見ると、水の量を決めるボタンがあった。

ははあ~~~~ん・・・

その隣は、すすぎの回数と脱水時間。

どうやら、この設定をしないと動かないらしい。

水の量は、洗濯物の量がそんなに多くないから、1番少ないのでいいか・・・

すすぎは1回で十分だろ。

脱水は、よく絞った方が早く乾くよな。

・・・10分にしよう。

あとは・・・

そうだ！

洗剤を入れないとな。

えーっと、洗剤は・・・

洗濯室を見回してみると、棚の中にいくつもの洗剤箱が並んでいた。

洗剤なんてどれも一緒だろ！と思って、オレはテキストにその中の1つを手を取った。

洗剤の箱を開けると、付属のスプーンが入っている。

どのくらい入れればいいんだろ？

オレはとりあえず洗剤を、スプーンでひとすくいすくって入れてみた。

何か物足りないな……

これだけじゃ、ちゃんと汚れ落ちないだろ。

もうひとすくい入れた。

まだ不安だ。

結構、汗かいたし。

……

オレは考えるのが面倒くさくなって、洗剤を1箱全部、洗濯機に入れた。

これだけ入れれば大丈夫だろ。

再びスタートボタンを押すと、今度はちゃんと洗濯機が動き出した。

よし、楽勝ーっと！

あとは洗濯機が全部やってくれる。

終わったら隣の乾燥室に干せばいいだけだ！！

洗濯が終わるまでの間、オレは昼寝でもする事にした。

まさか、あの洗濯が、あんな騒ぎになるなんて・・・

その頃のん気に昼寝していたオレには想像もできなかった・・・

## 第4話 タケシと休日 〳〵

「ちょっとーっ!! 何だよコレー!？」

オレがベッドでうとうとしていると、廊下の方から叫び声が聞こえた。

何だよ、ウルセーな! と思って、渋々ベッドから下りて廊下に出てみると、ガツチリとした体格の男が洗濯室の前で騒いでいた。

「何かあったんスかー?」

オレが声を掛けると、その男は慌てた様子で振り向いた。

「げっ、となりのホモだ!!」

「これ見るよー! 誰だよこんなにしたヤツ!!」

洗濯室を覗き込んでみると、1番手前の洗濯機から、大量の泡が溢れ出ていた。

ゲゲッ〳〵〳〵!!

オ、オレだああああ~~~~あ!!!

泡は床にまで流れ出ている。

な、何でっ??!

「あ、あの〜。オ、オレかもしれないです……。って言うか、オレです……」

目の前の惨状にたじろぎつつも、オレは素直に白状した。

「なにーっ!! あんただんだけ洗剤入れてんだよ! スプーン1杯で十分だろ、普通!」

「……すみません……」

「あーっ! しかもオレの洗剤使ってるし! まだ開けたばかりだったのよー! 何でもうなくなってるんだよっ!!」

「……すみません……」

「ちゃんと大塚って書いてあんだろ! よく見ろよ、ったく……」

「ほんと、すみません……」



「今度からは自分の洗剤用意しとけよなっ！ あとここ、ちゃんと掃除しとけよっ！！」

「はい……すみません……」

ホモの大塚さんは、それだけ言うと洗濯をせずに帰って行ってしまった。

たかが洗濯とあなどっていたオレがバカだった。

ここにある洗剤って、みんなそれぞれ自分で用意したものだったんだな……

洗剤の量も1杯でいいのか。

……教えてくれてありがとう、大塚さん。

オレは雑巾を持ってくると、床の掃除を始めた。

あゝ、なんてバカだったんだオレは……

反省しながら床に広がった泡を綺麗に拭いとっていると……

ピーッ　ピーッ　ピーッ

と、洗濯終了を告げるブザーが空しく響いた。

洗濯機の中は泡だらけで、とても洗濯が終わったとは思えない。

大量の泡のせいで、洗濯物もぜんぜん見えないし……

泡の中に手を突っ込んで、洗濯物を取り出してみても啞然とした。

硬く絞られたTシャツやパンツには、溶けきれずに固まった洗剤が、これでもかと言わんばかりに固くこびりついている。

オレは泣きそうになりながら、水道の水でその固まった洗剤を、一所懸命洗い流した。

かーちゃんありがとう。

いつもオレの服を洗濯してくれて……

「ブワッハッハッハッハッ！」

一連の洗濯事件を、仕事を終えて帰ってきたタケシに話すと、大爆笑された。

「それで廊下中洗剤臭かったのか。まったくやってくれるよな、光太！」

何がそんなに可笑しいのか、タケシは腹を抱えて笑い転げている。

オレが散々な目に遭ったっていうのに、いい気なもんだ。

「だけどさ、オレ自分で洗濯してみて、改めてかーちゃんに感謝したよ。いっつもあんな大変な事やってくれてんだもんな・・・」

「いや、フツーに洗濯してたら、光太みたいに大変な目に遭わないから！」

ヒトがせっかく母親に感謝してるのに、タケシは冷静につっこんできた。

そうか、タケシは一人暮らしだもんな。

洗濯も普通にやってんのか。

何かオレだけ世間知らずみて〜。

はあ〜・・・

オレが溜め息をついていると、タケシはひとしきり笑ってもう満足したのか、明日どこかに行かないかと提案してきた。

「光太は明日も休みだろ？ オレも休みだから遊び行こうぜ。せっかく車持ってきたんだし！」

「おおっ！ いいね〜！！ ここにいてもヒマなだけだしな！」

休みに寮にいても、やる事は洗濯くらいしかないと言つ事を知っているオレは、即賛成した。

このホテルから一時解放されるなら、行き先なんかどこでもいい。

そうだ！

せっかくだから、カスミとまいも誘ってみるか。

あいつらも明日休みでヒマだろうから・・・

#### 第4話 タケシと休日 ㄱ3ㄱ

朝食を食い終わると、オレたち4人はすぐに車に乗り込んだ。

発車する前にどこに行くか話し合っていたが、みんな意見がバラバラでまとまらず、結局テキストに走って面白そうなところを見つけたら寄るといふ事になった。

行き先も決まっていなかったが、みんな開放感からか妙にテンションが高く、車内はうるさいくらいに盛り上がっている。

不意ながら、オレの昨日の洗濯事件が1番ウケた。

カスミとまいも涙を流しながら笑ってる。

そんなに可笑しいかあ？

しばらく走ると市街地へ出た。

今まで山の中で木とかしか見ていなかったから、何の変哲もない街並みが新鮮に感じられた。

大きめのショッピングモールを見つけ、オレたちはそこに立ち寄る事にした。

そこで昼食を済ますと、カスミとまいが洋服を見たいと言うので、別行動をとる事にした。

オレはとりあえず、地下にあるスーパーへ向かった。

何かおいしそうなお菓子でも買おうとスーパーの中をウロウロしていた時、ふと洗濯用の洗剤に目が留まった。

そうだ、洗剤を買わないと！

でも、結構種類がいっぱいあって、どれを買っていいのか分からない。

……大塚さんが使ってたのと同じでいいか。

……大塚さんにも買ってった方がいいよな、やっぱり。

昨日全部使っちゃったもんなあ……

オレは昨日使った洗剤と同じモノを2つ持ってレジに並んだ。

その後もテキト々に店内をブラついていたら、あつと言う間に、も

う夕方になっていた。

カスミたちと無事合流し、オレたちはホテルへ戻る事にした。

「結局ショッピングモールに行っただけだったな。」

タケシが運転しながら言った。

空は夕焼けで真っ赤になっている。

ホテルに着く頃には、もう暗くなっているだろう……

「でも、楽しかったよ。買い物もできたし。」

そう言うまいの手には、買った洋服が入った袋が握られている。

行きとは違い、帰りの車内は静かだった。

話をする人もほとんどいない。

みんな、またあのホテルに帰って仕事をしなきゃいけないと思うと  
憂鬱なんだろうな……

外がだんだんと暗くなっていく中、車は山道を上っていった。

そんな中、タケシが沈黙を破って話し出した。

「この近くにさ、心霊スポットがあるらしいんだけど、肝試しに行ってみる？」

「おお！ 心霊スポットか！！ おもしろ・・・」

「いやっ！！ 絶対にいちゃっ！！！！」

オレが面白そうだとノリかけたのに、カスミがオレの言葉に割り込んで猛反対した。

「肝試しなら、寮の部屋で十分にしてるから！ わざわざ心霊スポットになんて行きたくないよ！」

カスミが言う事はもっともだと思った。

カスミたちは毎日、髪の毛が湧いて出てくる洋ダンスのある部屋で寝起きしてんだもんなあ。

それにオレたちのいる男子寮にだって幽霊の噂は絶えない。

言わばあの寮自体が心霊スポットのようなものだ。

「それもそうだな・・・」



オレがカスミの意見に賛成すると、タケシは「・・・まったく、つまんねえ」の」と言っていたが、別にタケシも本気で行きたかったわけじゃないらしく、それ以上は何も言わなかった。

ホテルに着いた時には、案の定、もう真っ暗になっていた。

「今日はありがとう。また明日から頑張ろうね！」

車を降りると、カスミとまいはそう言って寮へ戻っていった。

オレらも早くメシ食いにいこうと思って寮に向かい始めた時、タケシが・・・

「あっ、オレ、ジャンプ買うの忘れてた!!！」

と、言っただち止まった。

「オレ、コンビニ行って買ってくる。光太は先に帰ってるよ」

そう言ってタケシは再び車に乗り込もうとした。

「コンビニだったらオレも行くよ」

腹は減ってたけど、まだホテルには戻りたくないという気持ちもあって、オレはタケシに付き合う事にした。

そしてオレたちは、また暗い山道の中を走り出した。

コンビニは山の麓まで行かないとない。

山を半分ほど下りた所でオレは前方に何かを見つけた。

「何だアレ？」

それは真っ暗い道の中、ヘッドライトに照らされ白く光っている。

「げーっ！ 犬の死体だああ〜〜あああ！！！」

タケシは叫びながら、その死体を避けるようにハンドルを大きくきった。

擦れ違いざまによく見てみると、真っ白い大きな犬が、道路にぐったりと横たわっていた。

アスファルトには犬の血が広がっている。

「マジ、ビビッたあ〜〜！ さっきは何もなかったのに、なんでいきなり犬の死体なんてあるんだよお〜?!」

タケシが言うように、ここはついさっきも通った道だ。

一旦ホテルに行つて、またここに来るまでには15分も経っていない。

……って事は、他の車にひかれた直後って事か？

死にたてほやほや？

「怖え〜な……」

オレは、つい何分か前まで元気に生きていたであろう犬の事を想像して呟いていた。

その後は、また帰りにあの犬の所通るの嫌だな・・・とか、何か不吉な予感がする・・・なんて話しながらも、何事もなく無事にコンビニに到着した。

コンビニの中は予想以上に明るかった。

オレたちは、その明るさにホッと、立ち読みしたり新製品の缶コーヒーを物色したりした。

いつまでもここにいたい気分だったが、そういうわけにもいかず、タケシはジャンプを買い、オレはチョコレートを買ってコンビニを後にした。

「・・・確か、この辺だった・・・よな？」

「あ、ああ・・・」

オレたちは、また犬の死体がある所を通らなければならぬのを警戒して、道路を注意深く見ながら走っていた。

もし見逃して、死体をタイヤで踏ん付けてしまったらイヤなので、タケシの運転も慎重だ。

「・・・にも拘らず、犬の死体はいつこうに現れない。」

もう山も半分以上のぼってきているのに、オレたちが死体を目にする事はなかった・・・。

「もう、とっくに過ぎたよな？」

タケシが周りの風景を見ながら言った。

「ああ。多分……」

犬の死体のあった所に、特に目印になるようなものはなかったが、もしあったとしても、周りは街灯もなく、真っ暗で分からないけど、コンビニからの距離からしても、もうとっくに過ぎていっているように思えた。

「もしかしてあの犬生きてて、もうどこかに行っちゃったんじゃないかな？」

「………だったらいいけど。……でも、血の跡も見てねえよな」

タケシが言うように、生きててくれていたんならそれが一番いいが、オレはあの時ハッキリと犬の下に広がる血を見ていた。

その血の跡すらまだ見ていない……。

犬がどこかに去っていたあとでも、血は残っているはずだ。

オレは注意深く道路を見続けていた。

その時……



#### 第4話 タケシと休日 ㄱ4ㄱ

「あれ?! 何だ?!!! う、うしろから何かついてきてる!!  
光太、見てくんねえーか?!」

タケシがバックミラーをチラチラと気にしながら言った。

「ん? 何? 車じゃねえの?」

オレは後ろを振り返って啞然とした。

何か白いモノが走ってきているのが見える。

明らかに・・・

明らかに車じゃない!!

真っ暗な道なのに、やけにその白さが際立って見える。

よぉよぉく目を凝らして見ると、その白いモノのカタチがだんだんハッキリしてきた。

「あああああああゝゝゝっ！！ い、い、犬だあああゝゝゝっ！！  
！ 犬が走ってきてるっ！！！」

オレは驚きのあまり、大声を出してしまった。

真っ白い犬が、必死の形相、猛スピードで車を追いかけてきている。

「うわあゝゝゝっ！！！」

タケシもバックミラーでその犬の姿を確認したのか、アクセルを強く踏み込んだ。

それなのに、その犬は離されるところか、どんどん近づいてくる。

口から血をダラダラ流しながら、それはもう、物凄い形相で……。

「うわああゝゝゝっ！ 何でだよっ！！ ひいたのはオレじゃねえゝ  
って！！！」

タケシはさらにスピードをあげた。

暗い山道でそんなにスピード出すなよ、危ねゝなあゝとか悠長に言  
つてられる状況じゃなかった。

オレたちは命の危険をかえりみず、必死でその犬から逃げようとした。



「やっべー赤だ!!」

ひたすらスピードをあげ続けていたタケシがいきなり叫んだ。

前を見ると、目の前の信号が赤になっていた。

「何でこんなところに信号なんかあんだよぉ〜!!」

タケシは叫びながら思いっきりブレーキを踏んだ。

キキキーツ!

車が急停車したら、後ろから猛スピードで追いかけてくる犬は車にぶつかってしまった。

オレは目をかたく閉じて、来たるべき衝撃に備えた。

キキキキーツ!!

車が完全に止まった。

車が止まるまでの間はほんの一瞬だったろうけど、オレにはやけに

ゆっくりと、スローモーションのように感じられた。

すぐに犬がぶつかってくる。

そう思って身構えていたが、なかなか衝撃がこない。

「？」

犬はあんなに猛スピードで走っていたのに、しかも車のすぐそばまで追いついてきていたのに、何でだ？

あの距離で、あのスピードでぶつからないワケがない。

オレは目を開けて後ろを見てみた。

……が！！

そこに犬の姿はない。

車の周りをよく見回してみても、どこにも犬の姿はない。

急に方向転換して横道に走った気配も、ない……。

「な、なあ、タケシ……。犬、どこ行っちゃったんだ？」

「……………さあ」

「……………あれ？　今までいたよな？　犬。オレたち追いかけてたよな？！」

「……………ああ。とても犬とは思えないスピードでついてきてた」

「……………だよな……………」

「あ、青だ。」

オレたちは呆然としたまま、今度はゆっくりとホテルへと帰っていた。



第4話 タケシと休日 〽4〽 (後書き)

第4話 『タケシと休日』 おわり

第5話 ある家族と第2別館 〔1〕

タケシと体験した犬の話をケンイチにしたら、大爆笑された。

オレとタケシにとっては、全然面白くもない話だ。

むしろ思い出ただけで震え上がるほどの恐怖体験。

全くもって摩訶不思議なその話しを、オレの従兄弟のケンイチは腹を抱えて笑っている。

・・・なんでオマエはそんなに可笑しいんだよ！

「だって光太兄ちゃんの話し方が可笑しいんだモン！」

「・・・あのな〜！ あの時はホントに必死だったんだぞお〜〜！  
！」

「それにゾンビ犬って・・・アハハハハッ」

ケンイチめ！！ 絶対信じてないな。

・・・ま、所詮、そんなもんだ。

あの時の恐怖体験は、実際に体験したヤツじゃないと分かんねえんだよ。

オレだって、ケンイチが風呂場で幽霊を見たって話も正直、半信半疑だし・・・。

ケンイチが部屋に帰った後も、オレは談話室の自販機を見つめたまま、しばらくふてくされていたが、さっきまで笑っていたケンイチの顔を思い出すと、あの恐怖体験って、実は面白い話だったんじゃないか？と思えてきた。

2日間の休日を終えて、オレは引き続き別館のベルボーイの仕事に就いた。

今回は遅番だ。

早番は朝が早くて辛かったから、ゆっくり寝ていられる遅番は嬉しい。

まず、早番と遅番の違いは精神的リラクスの度合いだ。

ちよつとくらい夜更かししても、遅番だと気にならないのがいい。

早番だと、あと何時間で仕事だな・・・とかつてブルーな気分になるからな。

肉体的にも違いがある。

夜になると、到着するお客も少なくなるし、早番と比べるとラクに感じるんだ。

そんなこんなで、遅番3日目。

いつものようにズラーっとな廊下に並んだベルボーイ達の中にオレもまざっていた。

ザッと10人はいる。

外は快晴。

ホテルの玄関に、高級外車が1台停車している。

駐車場が少し遠い場所にあるので、ホテルまではこのツヤツヤの黒い車が送り迎えするのだ。

その車がお客様を乗せて玄関に戻ってくると、ホテルの中から2人



ほど外に出向き、お出迎えするワケだ。

お客様が車から降りると、待っているのは荷物受け取り係り。

玄関の入口をくぐると、沢山のベルボーイが頭を下げて待っていて、赤い絨毯の上を歩いてフロントまで一直線。

宿泊する部屋に辿り着くまで2名ほどのベルボーイがお供する。

お客様にとってはこの上ない至福の時だろう・・・。

まさに時代は絶頂期ってヤツだ。

金さえ払えば誰でも王様気分だもんな。

夕方5時頃、一組の家族がホテルのリムジンに乗ってやってきた。

40代くらいだろうか。

普通のお父さんのような男性が車から降りる。

次に、ミニスカートをはいた、いかにもお出掛け風ファッションに身を包んだお母さん。

若作りに見えないのは、今の時代、女性と言ったら派手な格好が主

流だからだろうか。

ブランドバックがやけに目に付くが、それも普通って言えば普通だ。

車の後方から、テンションの超高いガキが2人飛び出してきた。

こいつら夏休みの真っ只中。

羨ましい・・・って言うか、ムカつく！

何だよ、そのプクプクした頬っぺた。

水分を随分と吸収した頬っぺたと、その腹！

少しはダイエットに励め、少年。

両親と2人の小学生の男の子が玄関の入口をくぐった。

近くのテーマパークで遊んできたのだろう。

両親は疲れたようではあったが、オレたちのお出迎えで、さわやかな笑顔になった。

いつもならすぐにお客様の元に向かうのだが、その時に限って、なぜか一番近くで待機していたにも拘らず、オレは誰か他の人が行ってくれないかな〜と思いつながら、一步も動かずにその場に立っている。

た。

「おい、オマエ行けよ！」

隣に立っているベルボーイが肘で突付いてきた。

「オレっスかあ〜？！ 先輩、行って下さいよっ！」

お客様を案内するのを嫌がるなんて、今まで一度もなかったのに、なぜだか無性に行きたくない。

「ダメだ、行けっ！！」

オレたちは小声でやり合っていたが、いつまでもお客様を待たせるワケにはいかない。

オレは渋々その家族を案内する事にした。

「お待たせしました。こちらへどうぞ・・・」

荷物を預かり、フロントから鍵を受け取った。

その家族が宿泊するのは、今いる別館のずっと奥の方にある第2別館だ。

受け取った鍵を見つめて、オレは誰にも気付かれないように小さく溜め息をついた。

第2別館は遠い。

家族4人分の荷物も多いし・・・。

やっぱり、行きたくない。

・・・だけど、今更やっぱりイヤですとも言えず、仕方なく近くでホケーっとしていたカスミに応援を頼み、お客様を誘導しながら第2別館へと歩き始めた。

別館と第2別館をつなぐ長い廊下を渡りきると、今まで近代的なホテルとはガラリと変わって、古い旅館風の第2別館に辿り着いた。

この第2別館は、繁忙期だけ使われる旅館だ。

別館という大きな高層ホテルが満室になると、この第2別館のお出ましになるのだ。

ホテルと旅館が1つの通路で別れていて、その変わり目が面白い。

徐々に変化すれば違和感がないのだろうが、イキナリ雰囲気が変わる。

廊下も壁も、コンクリートから木に変わるし、空気も微妙に違う。

突然、都会から田舎にワープするような感覚なのだ。

ホテルに到着した時点では、フロントが高級感漂う別館なので、そこでお客様のイメージが良くなるのだが、いざ部屋に案内されると、今までのイメージを払拭させる古ぼけた旅館。

それほどまでに悪い旅館ではないのだが、どうしても別館とのギャップが強いため、お客様からすれば、裏切られた感は否めない。

宿泊料金は別館より五千円ほど安いのだが……。

オレも今まで何度か文句を言われたが、下っ端のオレにはどうする事もできない。

それに別館はどこも満室だから第2別館になったワケで……。

お客様、運が悪うございましたねえ〜としか言えなかった。

いや、そんな事、口には出せないけど……。

0204号室が近づくと、足取りが重くなっていくのを感じた。

それが、お客様のガツカリする顔を見たくないから足取りが重いのではないのだ。

何か・・・

何かが警告を発するような・・・

この、胸のザワザワ感は一切・・・

## 第5話 ある家族と第2別館 ㄥㄥ

第2別館にお客様を案内するのは、これが初めてじゃない。

今までだって何度も、何も変わらず普通に案内してきた。

なのに、今日に限って妙な胸騒ぎがするのは、なぜなんだ?!

思えば玄関でお客様を出迎えた時もそうだ。

いつもなら違和感なく出迎える事ができるのに、妙にこのお客と関わりたくないと思ったのだ。

見る限り、別に至って普通の家族なのに……。

これが強面のおっさんだったり、ヤンキー軍団の案内だったら何となく分かるのだが……。

そういえば、一緒に案内しているカスミも終始無言だ。

存在感は人一倍あって、妙にテンションの高いカスミが、今日は霞んで見える。

いつもなら陽気にお客様に話し掛けながら案内してるクセに、何で

黙りこくってるんだよっ！！

そう言うオレもだけど……。

お客様も終始無言だ。

リムジンから元気に飛び出した子供たちも、両親にならって大人しくしている。

妙に重い足を疑問に思いながら、第2別館のお客様の宿泊する部屋まで辿り着いた。

オレはカスミに鍵を預けると、荷物を持ったまま外を眺めていた。

夕日が山並に沈んでいく所だ。

これから、この家族は夕飯を食べるために、すぐにレストランへ行くのだろうか。

それとも昼間の遊び疲れを癒すため、家族揃って温泉でリフレッシュが先なのだろうか。

カスミはオレから鍵を受け取ると、部屋のドアノブの鍵穴にキーを差し込もうとドアの前に立った。

オレはお客様と一緒に、ドアが開くのを黙って待っていた。



その時・・・!!

「きゃっ!!」

カチャーン

ドアノブに鍵を差そうとした瞬間、カスミは小さく悲鳴をあげて鍵を落とした。

「どうした？」

カスミの顔をのぞき込むと、カスミは青ざめた顔をしている。

「あっ、ゴメン、な、何でもないの・・・」

カスミは引きつったような笑顔で首を振っているけど、何でもないワケねえくだろ!

顔、真っ青じゃねえか!!

オレはカスミに何で鍵を落としたのか、何で悲鳴をあげたのか、もっと詳しく聞きたかったが、お客様に嫌な思いをさせるワケにもい

かず、慌てて鍵を拾い上げた。

今度はオレが鍵穴にキーを差し込もうとすると……

カッ チャン

はっ?!

な、何??

オレは、思わず鍵から手を離してしまった。

鍵穴にキーを差し込んだだけで、まだキーを回していないのに、鍵の外れた音が聞こえた。

き、気のせい……か?!

動揺しているオレをよそに、ドアノブがひとりでに回転してドアが開いた。

「……………」

オレはカスミと顔を見合わせた。

今の光景をカスミも目撃したはずだ。

それなのにカスミは一瞬で笑顔になり、お客様の方に向き直った。

「こちらがお部屋になります。その前に、あちらをご覧ください・・・」

カスミは通常通り、非常口等の説明を始めた。

オレはその間、真っ白になりそうな頭をどうにか働かせ、なるべく気付かれないようにドアノブを確認した。

元々鍵はかかってなかった・・・何て事はないよな。

あの時、確かにカチンと音がして・・・

まるで誰かが中から鍵を開けて部屋の中に招き入れてくれたような・・・

でも、部屋の中になんか誰もいねえ〜じゃねえ〜かつ!!

・・・いるワケねえ〜し。

オレは自分の想像に鳥肌が立ちつつも、現実を目の当たりにして冷静に自分をツッコんだ。

その時、チラッと部屋を覗き込んだオレの視界に、変なモノが映った。

テーブルと小さなラックと金庫。

部屋は夕日で赤く染まっていて、障子と屏風が旅館的な雰囲気醸し出している。

そんな中、白い壁に、まるで人型をかたどったような染みが、真っ黒に浮かび上がっている。

な、何だ、アレ〜〜！！

思わず口に出しそうになったが、オレはその叫びを寸止めした。

その人のカタチをした、真っ黒い大きな染みを言葉もなく口を開けて眺めていると、カスミがお客様を部屋に招き入れ始めた。

「ちょ、ちょっと待てよ、カスミ・・・」

小声でオレは、カスミにお客様を部屋に入れるのを止めるよう言った。

「何バカな事言ってるのよ。・・・こちらが部屋になります。どう

ぞ……」

カスミはオレの忠告を無視し、お客様を部屋に入れた。

「何、コレ?!これで一万円なの?!」

その家族の母親が、部屋を見回して声をあげた。

そう言うのも無理はない。

この第2別館は、本館や別館と比べると明らかに古いし、部屋は狭いし……。

それ故、夏休み中の繁忙期にも拘らず、格安の料金で泊まれるワケなんだが……。

それにしても、この部屋でひとり一万円じゃ、確かに高いよな。

うん、オレもそう思う。

オレが心の中で相槌をうつっている時、旦那さんは奥さんをなだめていた。

「まあ、いいじゃないか、どうせ一晩寝るだけなんだし。それに窓

の外はいい景色だぞ」

旦那さん、あなたは何て心の広い方なんだ。

そうだとも、この時期に人気のある避暑地に泊まれるだけありがたいじゃないっすか。

オレもこの旦那さんみたいな広い心を持った父親になりたい・・・  
そんな事を思っているオレをよそに、子供たちは部屋に入るなりテ  
ーブルの周りを走り回り出した。

「それでは失礼します・・・」

カスミはそう言って、部屋から出て行った。

カスミを追いかけるように、オレも急いで部屋から出る。

あっ！！

あの黒い染み・・・！！

オレは部屋に入る前に見た、あの人型の大きな黒い染みを思い出し、  
後ろを振り返った。

・・・が、そこには何もなく、ただの白い壁があるだけだった。

やっぱり、オレの気のせいか……。

確かに、あんな大きな染みがホントにあったら、部屋に入った時点でみんな気付くよな。

奥さんが部屋の料金の高さをツツコンできたから忘れちゃってたけど。

しかし……

オレが見たあの黒い染みは何だったんだ？！

オレ、よっぽど疲れてんのかな？

さっきもカスミが霞んで見えたしな……。

きつとそうだ。

オレは疲れてるんだ。

特に、目が……。

「なあ、カスミ、あの時どうして鍵、落としたんだ？」

オレに負けず劣らず早足で第2別館を去ろうとするカスミに聞いてみたら、カスミは困った顔をして「分かんない」とだけ言った。

「でも、あの時オマエ、顔、真つ青だったぞ。ドアだって勝手に開くし、あの部屋おかしくねえ〜?!」

オレは同意を求めたが、カスミは黙ったままだった。

カスミがあの時、何を感じていたのか非常に気になったが、カスミは、もうこれ以上聞いてほしくなさそうだったから、オレはあの部屋の話をするをやめた。



第5話 ある家族と第2別館 くら

午後21時40分。

もうすぐ仕事が終わる時間だ。

この時間になると、到着するお客様もほとんどいない。

あんなに控えていたベルボーイも、1人、また1人とあがってしまい、残ったベルボーイはオレとカスミだけになっていた。

オレは早く夕飯が食いたくて、時計と睨めっこしながら時間が過ぎるのを待っていた。

その時、慌てた様子で一組の家族がオレたちのいるロビーに走ってきた。

あの家族は確か・・・

オレとカスミが案内した、第2別館の0204号室の家族だ！！

父親は、フロントで怒鳴り声にも近い声をあげている。

子供たちは泣きじゃくり、母親は青ざめた顔で子供たちを抱きかかえている。

「……もしかして、あの部屋で何かあったのか?!

カスミはその光景を、目を丸くして見つめている。

「どうしたんだろううん……??」

オレが訊ねるが、カスミは固唾を呑むだけで、何も答えられずにいた。

この異様な光景を目の前に、冷静に家族に何があったのか分析できるワケないよな……。

「オレ、様子見てくる」

「……うん」

カスミが小さく頷いた。

オレは状況をいち早く知りたく、急いで母親の元へ走り寄った。

「大丈夫ですか？ 何かあったんですか?!」

話し掛けると、母親は震えながらオレの顔を見た。

間違いない、あの時の母親だ。

気の強そうな母親に見えたけど、今はあの時の気高さはなく、まるで子羊のように怯えている。

「で、出たんです!!」

「はい??」

「出たんですよ！ ゆ、幽霊が!!」

母親は明らかに取り乱していた。

子供たちも泣き止む気配がない。

「ゆ、幽霊……ですか……?」

幽霊と聞いて、オレは不謹慎ながらも「やっぱりな」と思ってしまっただ。

この家族がロビーに現れた瞬間、思ったんだ。

だって、何か雰囲気がおかしい。

事故とか怪我とか、そんな雰囲気じゃなかったから……。

とにかくオレは、その家族を落ち着かせようと、なるべく優しい声で話した。

「幽霊って、一体どんな幽霊だったんですか？」

そう訊ねながら、オレは日常からズレた話しを真面目にしている自分を冷静に見ていた。

このホテルで働いてから、それほど日数が経つワケじゃないのに、もう何度も幽霊話を耳にしているから慣れっこになっていた。

……けど、いつもは仲間たちの話だったり、尾ひれが付いてるような気がして現実離れた世界だと思っていたけど、今回は真剣にオレの目の前に突きつけられた問題だった。

心の隅では野次馬的な部分もあったけど、やっぱりオレが案内したお客様という事もあり、何か少し責任を感じていたのかもしれない。

いつもだったら面倒な事には首を突っ込まず、知らんぷりだったが、今回は放っておけないと思った。

「でも、何かの見間違いかもしれませんよ。カーテンが風で揺れて  
そう見えただけだとか・・・」

オレはそう言いながら、障子の向こうのガラス窓にぶら下がっていた、白いカーテンを思い出していた。

「見間違いなんかじゃありません!!」

「でも、ホラ、目の錯覚とか・・・」

オレは母親の証言を否定しながら、あの部屋で見た黒く大きな人型の染みを思い出した。

思えば、あの時オレも変なのを見たっけ・・・。

アレを幽霊って言ってしまえば幽霊になるかも、な。

だけど、それを認めてしまったら・・・。

アレが、あの黒いのが幽霊だって認めちまったら・・・

怖いじゃねえ〜〜か!!

・・・だからこそ、オレはこの母親の証言を否定しているのかも  
れない。

自分が見たアレを、認めたくないから……………。

怖い、イヤだから……………。

「2度も家族全員で見たんですよっ!!」

「2度……………ですか？」

「2度目なんか、気味の悪い女たちが、布団の周りをぐるぐると……  
……もう、イヤっ!! 何なのよあの部屋は!!」

「あ、あの、落ち着いて下さい……………」

半狂乱になっている母親を何とか落ち着かせようとしていると、フ  
ロントに行っていた父親が戻ってきた。

「今、新しい部屋の準備をしてもらっているから、そのソファ―  
に座って待ってよう」

そうか、部屋を替えてもらえるのか……………。

良かった……。

そこには妙に安心するオレがいた。

ソファーに座って少し落ち着きを取り戻した家族に、オレはコーヒ  
ーとジュースを持っていった。

「あの……もしよろしかったら、詳しい話しを聞かせてもらえま  
せんか？」

その家族がオレなんかになんか何があつたか教えてくれるとも思えなかつ  
たが、どうしても気になり、ダメ元で聞いてみた。

すると父親は、意外にも事の経緯を語り出した……。

第5話 ある家族と第2別館 4

「はじめはレストランで食事をして、部屋に戻った時なんです。明かりをつけたら、見知らぬ男が部屋に立っていて……」

オレはその時、この父親と同じ立場だったらどうなのだろうかと、父親と自分を重ね合わせて話を聞いていた。

家族楽しくレストランで食事を済ませて、ワイワイと部屋に帰ってきたワケですよね。

そんで鍵で部屋を開ける。

当然電気を消して行けば、その頃には部屋は真っ暗なワケで……

照明のコードを引っぱったら、目の前に見知らぬ男性がいた、と……

こ、怖え……じゃねえ……かよっ……!!

こ、怖い……!!

マジ、怖いっス、お父さんっ……!!



あんだ、よくそんな冷静に語れますねっ?!

その話し、ヤバイっスから!!

オレは早速ビビってしまった。

「一瞬、泥棒かとも思っただんですが・・・」

いや、泥棒ですって!!

旦那さん、あんだの目の前に立ってるの、泥棒ですよ、泥棒!!

「その男は私たちの目の前で消えてしまっって・・・」

出たよ、消えたよ。

やっぱり消えたんだよ。

・・・って事は、この旦那さんの幻覚か、幽霊かって事になるよな、やっぱり。

「だからあの時に部屋を替えてもらえば良かったのよ!!」 それな

のに、あなただったら気のせいだなんて言って……」

奥さん、まあ、そう興奮なさらずに……。

でも、気持ち分かりますよ。

そんな部屋に帰るなり、男が立ってたんですよ？！

そりゃ、そんな部屋に居たくないっスよね。

ましてやそこで寝なきゃならないんスから。

ゴキブリが出たってのはワケが違いますからね。

幽霊ですモンね、幽霊。

「……ああ、悪かった。だけど、オレは幽霊なんて全然信じてなかったし、本当に気のせいだと思ったんだよ……」

ですよね……。

普通、やっぱりそこで部屋替えまではしないっスよね。

オレも旦那さんと一緒に、気のせいだって思い込もうとしますよ、最初は……。

「気のせいのはずないじゃないっ!! あんなにハッキリと4人も見たんだから!!」

うっ……!!

奥さん、奥さんも見たんですよね?!

それに、その負けん気の強そうなガキ共まで……。

そりゃ、信憑性があるとかないとかの次元じゃないっス。

いましたね!

そこに、確かにいたんですよ!

それを家族揃って見たんですよ。

消えちゃったんですよね……?!

幽霊ですね、幽霊。

そりゃ、俗に言う幽霊って事になりますよ。

で、それを見ちゃったら、これからどうするかってのが問題ですよ……。

一緒に一晩過ごすのか、それとも帰るのか……。

高い金出して、このまま帰るのはバカみたいですからね、まずはフロントに相談ですよね……。

分かります、気持ち。

オレもそうしますモン！！

そりゃ、自分がアホな事を言おうとしてるってのは痛いくらい感じると思いますよ。

普通の人、幽霊って聞いただけで笑いますから……。

でも、家族揃ってみんなが見てしまった以上、自分のプライドを捨てても家族を守りますよ。

フロントにバカにされるのを承知で相談に行きますよ。

ちよっぴりフロントの人間は紳土的だから、優しい笑顔で対処してくれないかなって期待はするけどね。

「……だけど、幽霊だなんて思うはずないじゃないか。だいたいオレはそんなものが存在するなんて思ってなかったんだし……」  
旦那さんが興奮してきた。

「あなたが……」

奥さんの睨みが増したぞ！

夫婦喧嘩？！

やばい、止めなくては……！！

「あ、あの……」

放っておくと夫婦喧嘩がさらにエスカレートしていきそうだったので、オレは2人の話しに割って入った。

「ご主人は、今は信じてるんですか？　……その、幽霊の存在を……」

オレは事態を穏便に済ませようと、今、現在という部分を強調した。

そうする事によって、以前までは幽霊を信じてはいなかったが、今は信じるという旦那さんの言葉が、奥さんを少しだけなだめるであろうと思ったからだ。

すると、案の定、旦那さんの口からは期待通りの言葉が飛び出した。

「信じざるをえないでしょうね。あんなの見ちゃ……」

ですよねえ……!!

気持ち、痛いくらい分かりますよ、マジで!!

「だって今日は疲れてたし、早めに寝ようと思って、布団に入って電気を消したら……」

そりゃ〜そうですねよ、疲れますよ、お父さんは……。

車の運転だって旦那さんだったんでしょ?!

きつと……。

長いドライブの後は、このうるっさい子供たちと遊園地。

そりゃ〜へトへトですよ。

そんで仕舞いには男の幽霊と来たモンだ!!

早くも寝たくなりますよ。

で……?!

「突然どこからか女が2人湧いてきて・・・」

ちよ、ちよっと待って下さい。

布団にもぐって、電気を消したら?!

突然どこからか、女が2人、湧いてきたあ~~~~?!

湧いてきたって何っスか?!

湧いてきたって・・・?!

「布団の周りを・・・」

ふ、布団の周りを・・・?!

「ヴェエエエ・・・って気味の悪い声を出しながら回りはじめたんですよ。有り得ないでしょ?!」

・・・!!

・・・!!

だ、旦那さん、あんたの唸り声、怖いっすから。

臨場感ありすぎ。

でも、旦那さんが大袈裟じゃないってのは分かりますよ。

奥さんの顔引きつつてるから、チラチラ気にしながら語る旦那さんが、今の唸り声もだいぶ抑えてるのはオレにも分かります。

……って事は、実際は、もっと!!

……!!

さ、さらに、そんな薄気味悪い唸り声をあげながら、自分たちの布団の周りを、回り始めたって?!

どっから湧いて出てきた2人の女性が?!

あ、有り得ねエ~~~~!!

と、心の中で叫びつつ、一応ホテルマンのオレは、紳士的に対応した。

「そんな事が……」



「妻や子供たちは泣き出すし、私も一喝しようとしたんですが、なぜか声が出なくてね……」

奥さんと子供が泣いてるんですよね?!

確かに父親だったら、その場で家族を守るために、幽霊を一喝したくもなりますよ。

でも、自分の身に起きてる事態が頭の中で処理できなかったんですよ。

……認めてしまいたくなかったんでしょかね?!

心の隅で、きつと幽霊の存在を認めたくなかったんでしょかね……。

それに、今まで生きてきて初めての出来事だろうし、どう対応していいのかわからないですよ、やっぱり。

旦那さんは臆病者でも何でもないっす。

オレも同じですから。

オレも同じ立場だったら、やっぱり言葉もないっす……。

「やっとの思いで電気をついたら、その女たちは消えてしまいましたけどね」

旦那さんの話しを聞き終わると、オレの全身には鳥肌が立っていた。この旦那さんは淡々と話していたけど、実際自分がそんな目に遭ったと思うと……

・・・ヤバイ。

今夜、眠れないかも。

部屋の準備が終わると、その家族は新しい部屋へと移動していった。もちろん新しい部屋に案内するのはオレたちのようなベルボーイではない。

このようなクレーム？に対応するのは黒服の仕事だ。

時計を見ると、仕事の終わる時間はとっくに過ぎている。

1人で寮に戻るのがイヤだったので、オレはカスミが着替え終わるのを待って、一緒に寮に戻る事にした。

「あの部屋、やっぱり出たな。しかも男1人に女2人だけ。マジ、半端ねエ〜よな・・・」

オレはカスミにあの家族が体験した事を、詳しく教えてやった。

カスミは黙って聞いていたが、突然立ち止まって話し始めた。

「あの時・・・私があの部屋の前に立った時にね、部屋の中で、誰かがザワザワと話しているような音がしたの。でも、きつと、となりの部屋なんだろうなって思って、鍵をドアノブに差し込もうとしたら、確かに聞こえたんだ。ドアのすぐ向こうから・・・」

その時カスミは、少しだけうつむいた。

「おかえりなさいって・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・！！

マジ、ハンパねえ〜！！

オレはその時、あの部屋で見た黒い人型の大きな染みの事を口に出しかねたが、さすがにこれ以上カスミを怖がらせる事はできず、それ以上は何も言わずに寮に帰った。



第5話 ある家族と第2別館 〳4〵 (後書き)

第5話 『ある家族と第2別館』 おわり

## 第6話 栄ちゃんの怪談 ㄱ1ㄱ

カスミと体験した奇怪な話しを終えた頃には、すでに時計は夜中の0時を回っていた。

みんな今まで興味津々聞いてたくせに、明日早番の奴らはオレの話しが終わると、さも迷惑そうに布団にもぐっていった。

何だよ、さんざん人の話を根掘り葉掘り聞いてたくせによおゝ！

1番興味を示したタケシなんて、もうイビキをかいてやがる。

1番怖がりな従兄弟のケンイチすら、ブリーフからはみ出したケツを搔きながら、もう眠っている。

・・・って、オイ、オマエらオレの話しを信じてねえゝのか？！

いつもは大概話しに尾ひれを付けるけど、今回はマジで実話だったんだぞおゝゝ！！

と、その時、ベッドから栄ちゃんが起き出した。

「光太はまだ寝ないの？ オレ、今からフロ行くから・・・」

え?!

あ、いつものアレね……。

栄ちゃんは寮のフロに入らず、わざわざ遠い別館の大浴場まで毎晩通っていた。

本人曰く、夜中は広々とした大浴場が貸切状態で最高に気持ちいいらしい。

オレも少しは行ってみたいと思ったけど、あんな遠くまで歩くのはちょっと……。

「オレもこのジュース飲んだら寝るよ。しっかし栄ちゃんはタフだね。大浴場までメツチャ遠いじゃん。仕事の疲れもあるだろうに、よくそんな体力あるね?!」

「ま〜ね」

栄ちゃんは何か嬉しそうに出て行った。

オレにタフって言われたのが嬉しかったのかな?!

それにしても栄ちゃんは強いな……。

オレには無理。

だって、怖いもん。

このホテル、マジやばいつてー！

今まで沢山の怪談話あったじゃん。

栄ちゃんだって聞いているはずじゃん。

それに、オレのさっきの話聞いて何とも思わなかったのかよ？！

あんな話を聞いた後に、よく別館に行けるよなあ。

別館に幽霊が出たって話を聞いた矢先だぜ？！

栄ちゃんには想像力ってモンがないのかよ！！

ま、オレじゃねえから、別にいいけど……。

オレは栄ちゃんが出て行った後、しばらくして布団にもぐった。

頭から布団を被ってはみたものの、頭にはどうしても仕事場での出来事が過ぎる。



忘れてくても当然忘れられないだろうな……。

あの、ひとりでに回ったドアノブ。

カスミがドアを開ける前に聞いた、ザワザワとした誰かの話し声と「おかえりなさい」という声。

オレが見た、白い壁の真っ黒い影。

そして、あのお客が目にした数々の恐怖……。

どうにもこうにも寝付けなかったが、栄ちゃんがこんな夜中に一人で大浴場まで行ってるという事実が、不思議とオレの心を和らげていった。

そうだよな……。

栄ちゃんなんて、1人であんな所まで歩いて行ってるんだよ……。

それと比べたら、オレって何て平和なヤツなんだ。

猛者共がこの部屋には5人もいるんだぜ。

幽霊?!

こ、怖かねえよ、バカヤロー！！

みんなが側にいるから何も怖がる事もないと自分に言い聞かせ、オレはとにかく寝る事に専念した。

次の日、今日はこの別館でのベルボーイ最後の日だ。

ベルボーイっていい仕事だったなー、チップももらえるし。

ずっとこの仕事でも良かったのに……なんて考えていたら羽本さんに話しかけられた。

「昨日第2別館の204号室に案内したの松田君たちだったよね？」

「そうですよ」

「じゃあ、あの家族が幽霊が出たって部屋替えてもらったの知ってる？」

「知ってます。オレ本人達から詳しく聞きましたから」

「そうか・・・、しかし2度も部屋替えるなんてな」

「はあ・・・、えっ？ 2度も?! 1回じゃないんすか？」

「なんだ知らなかったの？ 替えてもらった部屋にも幽霊が出たとか何とかでまたフロントに泣きついてきたらしいよ」

「まじっすか!!」

「ああ、それで朝一番に逃げるように帰って行ったよ。『もう二度とこない!!』って捨てゼリフ残して」

「ははは・・・まあ、もう来たくないでしょうね・・・」

あの家族の事を考えると胸が痛んだ。

せつかくの家族旅行がこのホテルのせいで台無しだな・・・ホント、すみません・・・ってオレが謝ることじゃないけど。

「それとな、それだけじゃないんだよ。昨日の夜は・・・」

羽本さんはさらに話を続けた。

「別の客も真夜中に血相変えてフロントに来たらしい」

「・・・また幽霊っすか？」

「いや、今度は女が2人飛び降りたから救急車呼べって」

「えっ?! 自殺があつたんすか?!」

羽本さんは溜め息をつきながら首を横に振った。

「フロントの人が慌ててホテルの周りを確認したけど何もなかった」

「どういうことですか?」

「その客はなかなか寝付けなくて窓の外をボーッと眺めてたんだと。そしたら上から女が立って続けに2人落ちていったって。でもな、その人の部屋最上階なんだよ。このホテルには屋上なんてないし、上から人が降ってくるなんて常識的には考えられないんだよ」

「……ってことは……やっぱりソレも……幽霊? ……みたいなの?」

「だろーな。よく幽霊が出たっていう客はいるけど、一日に二組もっていうのはさすがに初めてだな」

はっ、羽本さん!!! 今サラッとだけ言ったけど、こっつて幽霊よく出るんすか~~~~!!

前言撤回！ ずっとここでベルボーイの仕事でもいいと思ったけど、  
それウソ！！

今日で終わりで良かった~~~~！！！！

チチチチチ・・・

次の日の朝、目覚めると、オレは部屋に独りぼっちだった。

そうか・・・。

今日は休みだ！！

別館でのベルボーイの仕事も昨日で一段落し、今日と明日は休みだった。

明後日からは、ついにレストランでの研修が始まる。

ウェイターか・・・。

ベルボーイは簡単だったけど、ウェイターって何か大変そうだな・・・。

噂では厨房の人がキチガイらしいし・・・。

ま、いいや。

明後日からの事を今から悩んでもしょうがない。

それに今日は休みだ。

思いつきり、休むぞおお~~~~!!

・・・と、言っても何をしよう。

このまま布団にもぐってたら、きっと1日寝てしまう。

そんな勿体ない時間の過ごし方だけは勘弁だ。

そうだ!!

まずは、洗濯をしよう。

その後ホテル内を探索だ!!

ケンイチやタケシをからかってやろう・・・・・・・・。

洗濯室に入ると、見覚えのある男が洗濯をしていた。

鷹のような鋭い目つきをした男と目が合う。

大塚さんだ！！

この人、スキンヘッドだし一重まぶただから、一見怖いんだ。

「あつ、大塚さん。この前洗剤置いといたの気付きました?! あん時大塚さんの全部使っちゃったんで、弁償しときました」

「コレ、オマエかよ。だったら一言声かけろよ。大塚ってマジックで書いてあるけど、誰のかわかんないから使わなかったんだぞ!」

ちえつ。

人がせつかく新しい洗剤用意して、しかも名前まで親切に書いて置いといたつてのに、何だよその態度。

オレはそれから大塚さんを見ないようにしながら洗濯を始めた。

・・・さて、洗濯も終わったし、後は乾燥室にこいつらをぶら下げて完了だな。

乾燥室に入ると、大塚さんが真っ黒いブリーフを干していた。

ブーメラン・・・・・・・・。

そう、それはまるで、ブーメランのように見えた。

ブーメランを干す大塚さんの目が、優しいお母さんのような目になっている。

あ、あぶねえ~~~~!!

オレは急いで自分の洗濯物を干すと、直ちに乾燥室を後にした。

な、何なんだよ、さっきのあの人の目は……。

まるで自分の宝物を干すような、あの危ない目は……。

・・・・・・・・ま、そんな事はどうでもいい。

これからどこに行こうかな?!

そうだ、レジャーランドに行ってみよう。

あそこにはケンイチがいる。

レジャーランドは、別館の隣の施設で、ゲームセンターやアトラク



シヨンなどが豊富な場所だった。

別館の仕事場への通り道だったのだが、実際遊び目的で行くのは初めてだ。

そのレジヤールランドの売店でケンイチはバイトをしている。

さっそく行ってみよう。

軽く支度をして部屋を出た。

廊下を歩いていると、隣の301号室のドアが全開になっているのが付いた。

無意識で301号室の部屋の中を覗くと、1番最初にテレビが視界に入った。

何だよ、ホモたちの部屋にはテレビがあるのかよぉ。

自分たちで用意したのか？！

おっ？

テレビの上だ、写真がある……。

・・・っ???!!

その時オレは、見たくないものを見てしまった・・・!!

第6話 栄ちゃんの怪談 ㄥ2ㄥ

大塚さんともう1人、おそらくこの部屋の住人だろう。

2人仲良くボートに乗っている写真だ。

まるでカップル。

いや、正真正銘のカップルなだろう。

まったく見せつけてくれる……。

アツアツだぜ！

オレは大塚さんたちの写真を見て、微笑みながら階段を下りた。

レジャーランドは意外にも大盛況だった。

そうだよな……。

世間は夏休みだ。

テーブルゲームは対戦格闘ゲームが熱く、所々人だかりが出来てる。オレもゲームは得意な方で、結構自信があるんだが、こいつらと戦って勝つても嬉しくない。

仲間たちがギャラリィとしているなら自慢にもなるが、1人で、しかもこんな所で勝ち誇っても……。

ポケットに手を入れてキョロキョロ歩いていると、お化け屋敷が目に入った。

へえ、お化け屋敷ね。

500円、妥当なトコだな……。

そのお化け屋敷には、ちょっとした行列が出来ていた。

ケンイチのヤツ、どこでバイトしてるんだ？！

まさかお化け屋敷の幽霊に扮してるなんてオチ、ないよな……???

おっ?!

まるでコンサートホールのような大きなレストランの入口付近に、  
情けない格好をしたケンイチが暇そうに立っている。

「何やってんのオマエ……。はっはっはっはっ……。カブト虫  
の売店かよー!」

「光太にいちゃん、そんな大きい声で笑わないでよ、恥ずかしいじ  
ゃんよっ!」

「ごめん、ごめん。つい……」

ケンイチは、小さな虫かごに入れられたカブト虫やクワガタを突付  
いたり、掴まえたりしながら時間を潰しているようだった。

「こんなもの買うヤツいるのかよ……」

「いるワケないじゃん」

「だよな。……で、いくらっ?」

「1匹500円。この大きいヤツ、1000円」

「高っ! ……ま、頑張れよ。そのうち金持ちの都会の親子連  
れが買ってくれるだろうよ」

それにしても情けない世の中になったもんだ。

カブト虫やクワガタで商売をするなんてな……。

……それを売るケンイチが気の毒だな。

ま、いいか。

オレじゃねえし。

「おっ?! そういえば、オレ、明後日からここで働くんだよ」

コンサートホールのようなレストランの入口を覗くと、奥に大きなステージが見える。

「へー、凄いな。宝塚のようなショーやってるぜ」

「そうだよ。いつも凄いショーやってるよ。ここにいるとね、結構見えるんだ。あ、でも、明後日からショーが変わるらしいよ……」

その時、一枚のポスターが目飛び込んできた。

「きさらぎ座長の自信作?! 大江戸歌舞伎の舞い?! 人情花吹雪?!・・・何コレ?!」

「・・・旅芸人の劇団でしょ?! 光太にいちやん良かったね。これから毎日コレが見れるよ」

「オレも宝塚シヨーがいい!! 何で寄りにも寄ってオレが働く日から、こんな和風の催しなんだよ。西洋風の華麗なシヨーが見たかったああああ〜〜!!」

「我がまま言ってもしょうがないじゃん」

「・・・うう。タケシが言ってたんだよ。レストラン最高だって。お客の残りメシは旨いし、何よりもシヨーが感動的だって・・・」

「それより光太にいちやん、昨日の話しなんだけど、アレって本当なの?!」

「当たり前だろ!! 何疑ってたんだよ。オレがみんなに嘘を言ったとでも?!」

「いや、そうじゃなくて。もし本当ならさ、やっぱりこのホテル出るんだなあ〜って・・・」

何だよ、ケンイチ、その暗い顔は……。

まさか、怖いから帰るなんて言い出すんじゃないだろうな?!

オレらを置いて1人だけ脱出するなんざ、許さんぞケンイチ!!

「オマエ、まさか……、バイト辞めたいなんて言うんじゃないだろうな?!」

「そりゃ辞めたいのは山々だよ。こんなヘンテコな売店の仕事なんてウンザリだし。でも、せっかく光太にいちゃんたちと一緒に居れるんだし、ボクは辞めないよ」

「そうか!! オマエは何ていいヤツなんだ……」

「……泣いてるの?! 光太にいちゃん??」

「泣くもんかっ!! 目にゴミが入っただけだ!!」

「そう?! なら、いいけど」

「そろそろおいとまするぜ。達者でな……」

「またね……」



さあ~~~~て、今度はどこに行こうかなあ~~~~と。

そういえばカスミも今日は休みだったっけ。

あいつの事だから、部屋でグータラしてんのかな?!

ブラブラとレジヤールランドを歩いていると、後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あれ? 光太?! どうしたの、こんな所で!?!」

振り返ると、蝶ネクタイをしたタケシがこっちに向かって歩いてきた。

「プププツ。何だよその格好。まるでインチキバーテンだな。今から休憩?!」

「そうだよ。あのな、人の事見て笑ってるけどな、オマエも明後日からオレと同じ格好するんだからな!?!」

「ゲツ! それもそうかつ」

「今から寮に戻るんだけどさ、光太も寮に帰るの?!」

「いや、別に。ね、休憩って何分あるの？」

「15分くらいかな?! 良く分かんねえけど・・・」

「マジかよ。タケシ、15分の休憩でわざわざ寮まで戻るのかよ?!」

「まさか。1時間はとるよ、休憩・・・」

「だよな。この世のルールはタケシが決めるんだもんな」

「当たり前じゃん。オレは世間のルールに呑み込まれるほどお人よしじゃないからな・・・」

そう言うとタケシは颯爽と寮に帰っていった。

さすがタケシ。

見習いたいもんだ。

・・・が、オレには無理かな。

アイツほどの度胸はオレにはないな・・・。

15分の休憩だろ?!

長くて30分が限度かなあ〜？！

1時間はタケシクラスの猛者じゃないと無理だろ、フツー。

その後、オレはレジャーランドで時間を潰し、夕方には寮に戻った。食堂で夕食を済ませ、部屋に戻るとまだみんなは仕事から帰ってきていなかった。

もう夜の9時だぜえ〜？！

誰一人仕事が終わってないって何なんだよ。

朝はオレが目を覚ます前だから、8時前にはみんな出て行ったはず。

13時間の拘束だぞあ〜！！

いくら職場の隣の寮に住んでるからって、働かせすぎだろあ〜！！

「ただいま〜〜〜」

その時、栄ちゃんが帰ってきた。

「お疲れ。みんなはまだ仕事?!」

「……じゃ、ないか?!」

「ね、栄ちゃん。一緒にフロ行かない?!」

「いいよ、別に。夜中でいいなら……」

「ええ〜、夜中〜?! たまには大浴場じゃなくてさ、そのフロでいいじゃん!!」

「1人で行けばいいじゃん。あ、もしかして怖いのか? 光太、初日に足怪我したもんな〜」

「あ、いや、怖いつていうか……。それより栄ちゃんこそ、夜中にあんな遠くまで行って、怖くないのかよ?!」

「オレには幽霊つてのが理解できない。この世にいないモンに怯えるっていう意味が分からないぞ」

「……だよな。ま、いいや。オレ、フロ行ってくるから」

ぶつちやけ怖いんだよ、フロが!!

みんなと一緒にきたかったんだけど、アイツら待ってたらいつになるか分からないし、モタモタしてたら22時になっちまうもんな。

22時って言ったなら、あの魔の時間だよ。

・・・あの時間だけは1人で入るの避けたいからな。

しかし、栄ちゃんは肝がすわってるって言うか何て言うか・・・。

とにかく大したモンだ。

ああいう性格は見習いたいモンだぜ。

この時オレは、あの栄ちゃんが、あんな体験をするなんて、夢にも  
思わなかった・・・。

## 第6話 栄ちゃんの怪談 くら

その晩、オレはダラダラ過ごした1日のせいで、全く眠気がこなかった。

みんなは……?!

タケシもケンイチも、ナオヤもぐっすり眠っている。

夜中の12時だもんな。

こいつらは明日も仕事だ、寝るよな、フツー。

オレの下のヤスヒロも、さっきまでシャカシャカ音楽が聞こえたが、今はもう聞こえないから眠ったよな。

栄ちゃんはさつき大浴場に行ったばかりだから、あと1時間は帰ってこない。

頑張って寝るか……。

と、その前に、小便行きたくなつたな。

怖いからあんまり行きたくねえけど、子供じゃねえもんな。

ギイイー

オレは怖いのを我慢しながらトイレに向かった。

洗濯室の隣にある、煌々と明かりのついたトイレに入ると、最初にチカチカした電灯が目に入った。

もうすぐ切れそうだな、この電気……。

消えたり点いたりを繰り返す電灯の下に、洗面台の鏡があった。

……げっ!!

鏡に映った自分の後ろに、誰かがいたような気がした。

「……………」

気のせい、気のせい。

……ちつきしよ……!!

一瞬、変なの見たぞ!!

な、何だ今のは?!

い、いるはずなのに……!!

そ、そっだよな。

気のせい、気のせい……。

急いで小便を済ませ、オレはもう一度鏡の前に立った。

鏡に映る自分。

さっきはオレの後ろに誰かがいたような気がしたけど、今はやっぱり誰もいないし、それと見間違えるようなものは何もない。

「……気のせい、気のせい」

オレは自分に言い聞かせながら部屋に戻った。

真夏だというのに寒気を感じながら布団にもぐる。



しばらくテキトーにくだらな事を考えながら目を閉じていると、足元に人の気配を感じた。

……マジかよ、オイ!!

オレは2段ベッドの上段で、部屋の出入り口に足を向けて眠っていた。

その足元、部屋の入口付近に、人の気配を感じたのだ。

もしかして、さっきトイレにいた幽霊?!

一気に血の気がひく。

……どつする?!

確かめる……?!

確かめる、必要、あるよな?!

なっ?!

オレは自分にそう言い聞かせ、根性を見せてガバツと起きた。

「……」

思わず変な声を出してしまった。

「な、何だよ、栄ちゃんかよ………」

そこには、直立不動で立ち尽くす栄ちゃんの姿があった。

ドアを開けた状態でそのまま部屋には入らず、廊下に立ち尽くす栄ちゃんの顔は、真っ暗だというのに蒼白した顔がここからでも分かった。

「どうしたの栄ちゃん………」

オレは蒼白した栄ちゃんを見かねて声を掛けたが、一向に返事が返ってこない。

「何かあったの?!」

最初は状況をつかめなかったが、栄ちゃんの異変に気付いたオレは、ベッドから下りて栄ちゃんに近づいた。

やっぱり真っ暗な中でも栄ちゃんの顔が青いのが分かる。

これは、おかしいぞ!!

「どうしたの、栄ちゃん、青い顔して・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いつもは朗らかで、決して人を無視するようなヤツじゃないのに。

今の栄ちゃんヤバイ!!

「栄ちゃん、おい、大丈夫かよ!!」

オレは栄ちゃんの様子に不気味ささえ感じ、少し荒っぽく言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それでも栄ちゃんは口を開かない。

一点だけを見つめたまま動こうともしない。

パンッ

オレは栄ちゃんの頬を手の平で叩いていた。

それは無意識の行動だった。

おそらく栄ちゃんを正気に戻そうと思い、頭より先に体が動いたのだらう。

それだけ切羽詰った状況だったのだ。

「・・・痛っ!!」

片目をつぶり、叩かれた頬に手をおく栄ちゃん。

「どうしたの?!」

オレは眉間にシワを寄せて栄ちゃんに問いただした。

「あつ、光太・・・」

栄ちゃんは、まるで記憶喪失が戻ったかのように、オレの顔を見て言った。

「栄ちゃん、一体何があったの?!」

いつもの栄ちゃんからは今の状況は決して考えられない。

何でも理屈で考える栄ちゃんは、どんな事があっても理性を失う事がないと思っていた。

ちよつとやさつとじゃ動じない、不動の精神を保っていると思って

いた。

体だって人一倍でかく、喧嘩だって強い。

本人曰く、高校の時、ラグビー部のヤツらと腕相撲をして10人抜きをしたという伝説まである。

このホテルでの研修だって、みんな弱音を吐きまくる中、一人だけポーカーフェイスだった。

現実離れしているが、このホテルで聞いた幽霊話にだって、ちっとも動じる気配はなかった。

「オレには幽霊つてのが理解できない。この世にいないモンに怯えるっていう意味が分からないぞ」とまで言っていた栄ちゃんが……。

220

「笑わないで聞いてくれよ、光太……」

「ああ……。わ、笑うワケないだろ」

「……実はな、見たんだよ」

「な、何を……?!」

「……幽霊!!」



## 第6話 栄ちゃんの怪談 ④

寮のフロは幽霊が出るとか噂もあったが、栄ちゃんはそんな事を気にして遠くの大浴場に行っていたワケではなかった。

栄ちゃんは、1人でのんびりとフロに入るのが好きだったのだ。

まるで貸し切り状態の大浴場で、1日の疲れを癒すのが毎日の楽しみだった。

従業員はお客様専用の大浴場に入るのは禁止されていた為、栄ちゃんは夜中にこっそり通う事にした。

大浴場で汗を流せるメリットはあったが、デメリットもあった。

それは寮から別館の大浴場までは、結構距離があるという事。

歩いて10分はかかる。

長い通路を通らなければならなかったからだ。

オレたちも誘われたりもしたが、往復20分以上かけて、たかがフロに行こうなどとは思わなかった。

それに曲がりくねった長い通路は、毎日仕事場に行く時に通っている。

せっかく仕事を終えて帰ってきたのに、また同じ道を通りたくもなかった。

それに、その通路は何か不気味だった。

朝や昼は何て事ないが、仕事を終えて夜になると、超不気味さが増す。

寮とホテルは結構離れて建っている。

そんな寮とホテルを繋ぐ通路は、建物の中にあるのではなく、その通路だけが外を通り1本のびているカンジだ。

万里の長城のような、長い通路。

もちろん壁も天井も電灯もついている。

壁にはたまに窓がついていて、外の景色が見えたりする。

外の景色はというと、朝や昼間は気にならないが、夜になるとあちこちのホテルの施設や建物が気味悪さを演出し、木々がその不気味さを駆り立てていた。

とにかく、オレはイヤだった。



夜中に1人で歩くなど、言語同断！！

大金を積まれたって……

いや、金が貰えるならチャレンジするかも？！

……って言っても1000円以上だ！！

いや、チップで儲かっている事を考えると、1000円なんて甘いな……。

そうだな、5000円ってトコロかな。

5000円貰えるなら、夜中にあの通路を1人で往復してやってもいいぜ。

……と、まあ、そのくらいあの通路はイヤだって事だ。

だからオレは栄ちゃんをある意味尊敬していた。

そんな栄ちゃんが……！！

「見たって、マジかよ栄ちゃん……」

「……じゃみんなに迷惑だし、社会で話そう……」

そう言つと栄ちゃんは社員食堂へ歩いていった。

ええ~~~~?!

い、今から社員食堂行くのおお~~~~?!

あそこ、この時間、真っ暗で怖いよお~~~~!!

怖い話をするのに、どうしてそんな怖い場所を選んだ、栄ちゃん  
っ!!

オレは渋々栄ちゃんの背中を追いかけた。

社員食堂は案の定真っ暗で、談話室のソファーに腰掛けた栄ちゃん  
の顔が、暗くて薄気味悪かった。

缶コーヒーを自動販売機で買い、栄ちゃんに1本手渡した。

「サンキュ・・・」

「・・・で、幽霊を見たって?！」

オレは缶コーヒーのふたを開けると、神妙な面持ちの栄ちゃんを覗  
きこんだ。

「光太とか、この間のケンイチの話とか、そんなの全然怖くなかった。信じる信じないとか別に、オレには関係ない話だと思ってたしな。まさか自分があんな体験するとは……………」

一体この栄ちゃんは、どんな恐怖体験をしたって言うんだ？！

栄ちゃんほどのお方が見たって事は、やっぱり幽霊って存在するんじゃないの？！

じよ、冗談じゃないぞ、おい！！

「栄ちゃんほどの強靱な男が幽霊だった？！ ははは……………」

オレは強がっていた。

「光太、笑うなって言ったよな？！」

栄ちゃんが恐い目でオレを睨む。

「う、ごめん…………で、何があったの？！」

「…………いつものように、あの通路を通過して大浴場に行ったんだ。30分くらい湯につかって、いつものようにフロから上がって寮に向かった。別館からの帰り道だよ。あの長い通路で見たんだ」

「ゆ、幽霊を?!」

「そう。子供だった・・・」

「こ、子供おおくく??」

「そう。いるワケないだろ?!」

「い、いるワケない!! いくら何でもあの通路に子供がいるワケない!! 客室から迷い込んだとは考えられない。それは明らかにおかしい!!」

「オレも最初はお客さんが迷い込んだのかと思ったんだよ。小さな女の子が目の前にいたんだ。すぐに声を掛けたよ。そしたらその子は笑いながらオレの視界から消えたんだ」

栄ちゃんの話しを聞くなり、オレは背中に強烈な寒気を感じた。

「視界から消えたって、どついう事?!」

「あそこの通路、カーブが多いだろ。その女の子は、顔だけヒョコつと出して、オレの目の前に現れたんだ。ニコニコしてたから、絶対お客さんだと思った。こんな夜中にだぜ。オレはすぐに追いかけたんだ。そしたら今度は後ろから笑い声が聞こえてきて・・・」

笑い声？！

後ろから・・・？！

マジかよ。

「すぐ後ろを振り返った。そしたら、今度は曲がりくねった通路、オレの後ろから、さっきの女の子がヒョコつと顔だけ出したんだよ・・・」

「有り得ねえ〜！！」

「だろ？！ オレはすぐに前に向き直して、その場で考えたんだ。こりゃ、おかしいって・・・」

おかしいだろ、フツ！

前にいたはずの人間が、突然後ろから現れるなんて・・・。

オレだつたら考えずに逃げ出すぞっ！！

「しばらくしたら、今度は前からさっきの女の子がまた顔を出したんだ。オレは今度こそ捕まえようと、その子を目指して走った。確かにいたんだよ。オレは確かにその女の子の後姿を見たんだ。遠くの曲がり角を左に曲がったのを見たんだ。そしたら、その子は遠くからヒョコつとまた顔だけ出したんだ・・・」

オレはその時点でギブアップしそうだった。

だって、栄ちゃんのその話し、マジ半端ねえ~~~~!!

「ちょっとした長い直線をオレは走った。そんで曲がり角を曲がると、すでに女の子の姿はなかったんだよ。もしやと思って、念のため後ろを見ると……」

「見ると……?!」

「いたんだよ。うしろの直線の通路の向こうに、その女の子が立っていたんだ。こっちを向いて。遠くだったが間違いない。オレの前を走っていったはずの女の子だった。オレはその時、気が動転した……」

遅せえ~~~~よ栄ちゃん!!

オレだったら、いや、フツーとつくに気が動転してらって!!

「そつからオレは一目散に走ったんだ!! 部屋だけを目指した。その間、ガラス窓から外が見えるだろ?! 突然、オレの視界に変なのが入ったんだ。何だと思う……?!」

質問なのかよ!!

そこだけクイズなのかよ!!

それを答えろってか?!

こ、答えは簡単だろ……。

そ、それは……。

「まさか……」

「そう。女の子は今度は外にいたんだ。窓の下からニユ〜と顔を出した。オレはその時気付いたんだ。今までその子の顔がよく分らなかったって事に……。その子の顔は……」

オレはその時、栄ちゃんの口から一生忘れられそうもない驚愕の事実を耳にした。

「口しかなかった……。ニヤついた口しか……」

第6話 栄ちゃんの怪談 ④ (後書き)

第6話 『栄ちゃんの怪談』 おわり



第7話 肝試し is 魔屋 ①

昨夜の話は強烈だった・・・

あの栄ちゃんが体験した恐怖体験。

栄ちゃんは馬鹿にされたくないから誰にも言わないでくれって言ってたが、オレは即行、カスミとまいに話していた。

「それ本当?! や、やばくない?! 私、鳥肌たっちゃたヨ。見てよコレ・・・」

確かにカスミの腕には鳥肌が・・・。

それにしても白くて綺麗な手してるなあ、カスミもやっぱり女の子なんだな・・・って、何考えてんだよ、オレ!!!

「ちよつと、カスミちゃんの手って、どうしてそんなに綺麗なのお～～!!」

まいはオレと同じ事を考えていたようだ。

「だよなあ」

オレはついつい本音を口にしてしまった。

「やだ、光太君・・・」

まいがオレをエッチな男を見るような目で見ている。

「そうかなあ？！」

カスミは不思議そうに自分の手を見た。

あれ？！

そこ、照れるトコじゃないの？！

ホラ、顔を赤らめたりとか・・・。

べ、別にいいけど・・・。

カスミとオレは、今日まで休みで明日からレストランでの研修が始まる。

栄ちゃんとまいは今日と明日が休みだった。

休み明け、栄ちゃんとまいもオレたちと同じレストランでの研修が待っていた。

その他のメンバーも、今日と明日が主に休みだ。

みんなそれぞれ働いてる部署のチェンジの時期なのだ。

「そういえばタケシはどこだっけかな?!」

「タケシ君は次、本館だったと思うよ」

まいが答えた。

「そうか。アイツ、オレの行く先を前もってクリアーするプロセスなんだな?! そうか、アイツに色々聞けばいいんだな」

「聞くって何を?!」

カスミが不思議そうな顔をしている。

「へ?! 何って、決まってるだろ。どんな仕事をするのか、とか・  
」

「え〜?! 信じらんない。光太が仕事内容を気にするなんて〜」

「どついう事だよ、カスミ!! オレだって次にどんな仕事をするのか気になる時だってあるって!!」

「嘘?!! 光太君が先の事を考えるなんて、おつどろき」

まいまで調子に乗ってオレをバカにしている。

確かにオレは大ざっぱで無責任で、日和見者で・・・って、おいおい、オレはこう見えても真面目な人間なんだぞ!!

「ねえ、タケシ君ってさ、今日、仕事休みだったよね?!!」

「多分。でも部屋で寝てると思うぜ」

「いくらなんでも今日一日は寝ないでしょ?!!」

「まあ、ね。アイツの性格上、休みを無駄に過ごすとは到底思えないけど・・・」

「じゃあさ、またドライブに行きたいなあ。ね、まいちゃん」

「うん。アタシも行きたくい」

「光太、お願い。車持ってるのタケシ君だけでしょ?! うまく言っ  
つてさ、ドライブに誘ってみてよ!!」

「・・・ったく。この前ので味しめたな?！」

カスミは舌を出して、ニコニコしたまいと目を合わせている。

ま、オレも、こんな施設に閉じこもりつきりはゴメンだ。

明日からまた仕事だし、今までの疲れを吹き飛ばすためにも、今日はドライブにでも付き合ってリフレッシュすっかな・・・。

「分かったよ。今から頼んでくるからさ、1時間後にまたこの食堂で落ち合おうぜ」

「サンキュ〜光太!!」

カスミとまいは女子寮へ帰っていった。

さてさて、どうしたものか・・・。

部屋に戻ると、ケンイチ以外の全員がいた。

それにしてもむさ苦しい。

こんな真夏に、こんな狭い部屋に男だらけ。

タケシと栄ちゃんとナオヤが退屈そうに花札をやっていた。

ヤスヒロはみんなに背を向けてベッドで横になって漫画を読んでいる。

「なあ、タケシ。ドライブ行かねえ？！」

「行かねえ〜」

「早っ！！」

「ドライブってドロよ」

「いや、その辺ブラっと・・・」

「何なら鍵かそうか？！」

「いいよ。オレ、人の車運転したくねえ〜から・・・」

困ったな・・・。

タケシ、乗り気じゃねえ〜よ。

でも、今更カスミたちに断り辛いなあ・・・

「ぐわあゝ、また負けたあゝゝ!!」

どうやら花札に負けたらしく、タケシはその場に大の字になった。

「さっ、約束通り、買出し組決定っ!!」

ナオヤがニンマリ言った。

「オレも〜?! めんどくせえ〜!!」

どうやら栄ちゃんも負けたらしく、買出し組のようだ。

「オマエら賭けてたの?!」

「そう。負けたらコンビニでジャンプ買ってくんのだ。…」

ナオヤは頑張つてゝと、手を振っている。

「でもさ、もしもタケシが勝ってたらどうしてたの?!」

「オレがタケシの車借りて、栄ちゃんと買出し」

「へ、そうか。タケシと栄ちゃん、コンビニまで買出しが。そ・  
れ・は・・・グッドタイミング〜!〜!」



第7話 肝試し is 魔屋 ㄥ2ㄥ

食堂に着くと、すでにカスミとまいは支度が済んでいたらしく、退屈そうにテレビを見ていた。

「おっ、待ったㄥ?!」

「待ったわよ。待ち合わせは10時でしょ?! 今、何時だと思ってるのよㄥ?!」

柱時計を見ると、すでにお昼近かった。

「ゴメン。こいつら支度するの遅くって!」

オレがいいわけをしていると、栄ちゃんが話しに割り込んできた。

「え?! カスミちゃんたちも一緒に行く予定だったの?! 知ってれば急いだのに!!! 何だよ光太。そういう事は早めに言えよつ!!!」

なぜか栄ちゃんに怒られた。

タケシにカスミたちの事を話した時、栄ちゃんもオレたちの会話を聞いたはずだぞ。

確かあの時、「へ〜、まいちゃんたちもコンビニに行きたがってんのか〜」とか言ってたような……。

栄ちゃんは女性にはメツチャ優しいしヒイキする。

何か、ズルイな……栄ちゃん。

複雑な気分だが、別にそんな些細な事で揉めたくもないしな……。

ま、いいか。

オレたちは渋るタケシにゴマをすりながら、車に乗り込んだ。

体の大きな栄ちゃんは、満場一致で助手席に選ばれ、後部座席にオレとカスミとまいが乗り込んだ。

「光太、もっとそつちに寄ってよ!!」

カスミの柔らかい腕に触れた途端、これだ……。

何か、肩身が狭い。

場所も、狭い。

車内は栄ちゃんの独断場だった。

オレは昨日の栄ちゃんの怪談話をカスミとまいにこっそり話した時、栄ちゃんは「絶対誰にも言うなよ。内緒だからな!!」って言うってたから、カスミたちには口外するなと念を押した。

しか〜し!

栄ちゃんはガンガン自分の昨日の体験談を語ってる〜!

自分から語ってる〜!

カスミとまいは、栄ちゃんの話を知ってるのだが、初めて聞いたフリをしてきている〜!

複雑な顔で、栄ちゃんの話をしている〜!

オレは益々肩身が狭くなった。

一方、栄ちゃんの話をも初めて聞いたタケシは……

……全く信じていなかった。

クスクス笑ったり、鼻をほじったりしている。

そんなタケシは栄ちゃんの視界には完全に入っていないかった。

栄ちゃんはルームミラーでチラチラとこっちを見ながら熱く語っている。

途中、オレとタケシがこの間体験したゾンビ犬の話をしようとも考えたが、何となくシラケそうだったのでやめた。

その話しを出さなかったタケシも、きっとオレと同じ気持ちだったのだろう。

やがて目的地のコンビニに着いた。

しかし、ここまでホント遠いよな。

あのホテル、マジで山のとっぺんにあるし。

カスミとまいは、コンビニに着くなり車から飛び出した。

よっばど栄ちゃんの話が怖かったのか・・・

それとも・・・

よっぽど栄ちゃんの話がつまらなかったのか・・・

オレには分からない・・・。

栄ちゃんもカスミたちを追いかけるようにコンビニに入っていった。

「なあ、タケシ。これからどうする?! ここだけで帰るのも、ねえ?!! この間はこの先のモールに行ったけどさ、こっからまだまだ時間が掛かるだろ。今日はこの前とは違う所に行きたくない?!!」

「行くって言うてもな。遊園地とかに行ってもこのメンバーじゃあ、な・・・」

「遊園地ねえ。そうだな、カップルとかならまだしも、な・・・」

「ま、栄ちゃんとカスミちゃんをくつつけるってのとか面白そうだけど」

は?!

何言ってるんの、タケシ。

栄ちゃんとカスミって・・・

どういう事？

「オレさ、何となくだけどな、栄ちゃんはカスミちゃんが好きなんじゃないのかなあ〜って思うんだ」

そ、それは困る!!

なぜ困るかって?!

そ、それは……

実は、オレとカスミは密かに栄ちゃんとまいをくつつけようとしていたのだ。

ま、面白半分で……なんだが。

実際、まいは栄ちゃんの魅力を熱弁しても、一向に苦い顔をするだけなんだが……。

しかし、オレは密かにこう思っていた。

実はまいはタケシが好きなんじゃないのかな……って。

……なんとなくだけど……。

オレとカスミは栄ちゃんとまいをくつつけたくて・・・

でも、まいはタケシが好きで・・・

え〜と、栄ちゃんはカスミが好きで・・・?!

な、なんかこんがらがりそう。

ただ・・・

栄ちゃんとカスミをくつつけるのだけは勘弁願いたい。

オレは、何となくそう思った。

「ところで、どうする光太・・・」

「どうしような・・・」

オレとタケシが相変わらずこれからどうするかで悩んでいると、コンビニからカスミがひとり先に出てきた。 □

「栄ちゃんとまいは？」

車に乗り込んだカスミにタケシが聞いた。

「まだコンビニにいるよ。ふたりで仲良く喋ってたから先に出てきた」

カスミは栄ちゃんどまいをくつつける作戦を密かに実行しているみたいだ。

オレはいましたがた浮上してきた疑問をカスミにぶつけてみることにした。

「あのふたりってさ、両想いなわけ？ お互い別の人が好きって落ちはない？ なんか今夕ケシが栄ちゃんはカスミが好きなんじゃないかって言ってたけど・・・」

「はあ？ わたし〜?! ナイナイ、それは絶対ない!! 栄ちゃんが好きなのはまいちゃんだよ、絶対!」

「でも栄ちゃんってやたらカスミちゃんのこと気にかけてないかなあ、光太？」

「オレに同意を求められてもな〜、まあ、でもそう言われてみれば・・・」

「まったく、ふたりともダメダメだな〜。照れ隠しに決まってんじゃない! あの超シャイな栄ちゃんがみんなの前で好きなコの名前を連発できるとでも?」



「・・・・・・・・たしかに」

オレとタケシは妙に納得してしまった。

「まあ、あのふたりがくつつくのも面白いかもな」

おっ、タケシも乗ってきたな。

「だよ〜。それはそうと・・・・・・・・」

カスミはいきなり話題を変え、これからの行き先について意外な提案をしてきた。

第7話 肝試し is 魔屋 33

「山菜採り?!」

オレは思わずカスミの言葉に絶句した。

タケシもオレと同じらしく、ヘンテコな顔をしている。

何でオレらが山菜採りなんてしなきゃなんねえくんだよ……つてのが本音だ。

どうやらその思いが顔に出てたらしく、カスミはすぐに表情を歪めた。

「……だって、まいちゃんと栄ちゃんが」

「まいと栄ちゃん?!」

その言葉に、今度はタケシの表情が明るくなった。

オレも思わず頬が上がる。

「よし、面白そうだ。なあ、タケシ、山菜採りに行こうぜ!」

「マジかよ。面白そうだけど、オレそんなのやった事ないぜ」

「オレもねえよ」

「私もないよ」

その時、栄ちゃんとまいがコンビニから出てきた。

「ねえ、カスミちゃん、栄ちゃんが、寮に帰ったら料理してくれるって!」

「凄い。栄ちゃん料理できるんだ」

カスミは関心している。

カスミは実は家庭的で、料理の腕前は料理人並だという事をオレは知っていたが、今は黙っていた。

「料理って、寮に料理できる所なんかあったか?」

タケシが言う事はもつともだ。

「それがあるんだよ。オマエら料理しないから視界に入らなかった

んだらうけど、トイレの隣に料理できる所あるぞ。調理器具が一式揃ってるんだ。おそらく自炊するヤツ用に会社が用意したんだらうな。あそこでオレが料理してさ、食堂でみんなで食べようぜ」

栄ちゃんが鼻息荒めで力強く語った。

「分かったよ。オレらは分かんねえからオマエらに任せるぞ……」

オレは栄ちゃんとまいを見ながら言った。

「まいちゃんも山菜系は得意だモンね」

「まあ、ね……」

「さっすがまいちゃん!! 頼もしい!!」

カスミのヨイシヨも加わり、まいも満更ではなさそうだ。

……おっ?!

何かいい雰囲気じゃない?

栄ちゃんとまい。

これはオレとカスミ(+タケシ)の『栄ちゃんとまいの恋のキューピット作戦』が現実化しちゃう?!みたいなカンジだ!!

面白くなってきたぞ。

カスミもオレと同じ気持ちらしく、オレの目を見て「やったね」みたいな顔をしている。

タケシは栄ちゃんの指導の下、いい山菜がありそうな方面へ車を走らせた。

森林の細い道に左折し、車は山の中へと入っていった。

舗装された道ではないため、車は上下にガンガン揺れた。

「おいタケシ、こんな細い道ではスピード落とせよ……」

栄ちゃんが怒るのも無理はない。

後部座席のオレとカスミとまいは、もうすぐ車酔いする所だった。

しばらく車を走らせると、大きな建物があり、そこから先は行き止まりだった。

車が3台ほど止められそうな駐車場があり、大きな木で出来た看板があった。

「モーター……か。だいぶ古いな」

栄ちゃんが言った。

「そうね。もう廃墟になってるもんね。何か不気味じゃない？  
この建物……」

カスミが眉をしかめている。

その時、突然タケシが車から降りた。

「おい、どうしたんだよタケシ!!」

オレはタケシの不審な行動を疑問に思い、後を追った。

タケシは看板の前で立ち止まる。

「オレさ、この間、言っただろ。心霊スポットがあるって……」

「あゝ思い出した。カスミとまいが嫌がったヤツだろ?! あの時  
言っただ心霊スポットって、こここの事?!」

「間違いない。ここだ……」

「タケシ、ここの場所知ってたんじゃないかっただけ？」

「し、知るわけないだろ！！ 地元じゃあるまいし……」

「だよな。偶然だよな……。ところで、ここが心霊スポットだって、誰に聞いたの？！」

「ナオヤ……」

「ナオヤか。あいつそういうの詳しいもんなあ」

オレはナオヤが昔付き合ってた彼女と、数々の心霊スポット巡りをしていたという話を思い出した。

その彼女は霊感が強かったらしく、ここに幽霊がいるとか、あそこにいるとかズバズバ言い当てていたらしい。

何でもそういう霊感というのは人から人へ飛び火するらしく、霊感の強い人の側にいると、その人も次第に強くなるというのだ。

当時ナオヤも、彼女と一緒に幽霊を見た事があったという。

ま、その彼女と別れてからは、幽霊のゆの字もないみたいだけど……。

「どろしたの〜?？」

カスミとまいが車から降りてきた。

同時に栄ちゃんも降りる。

「ホラ、ここがこの前言ってた心霊スポットだよ」

オレは思わず口走っていた。

しまった!!

カスミとまい、怒る?!

タケシがわざとここに連れてきたって勘違いする?!

・・・と、オレが怯えていると、カスミの口からまたしても意外な言葉が飛び出したのだった。

「肝試し、する?!!」



第7話 肝試し is 魔屋 4

「オマエ、マジで言ってるのかよ?!」

オレはカスミの後頭部を睨んだ。

「じよ、冗談よ」

カスミは「へへへ・・・」と笑っていたが、明らかに最初はマジで言ったような気がする・・・。

「オレはやってもいいぜ・・・」

栄ちゃんだ。

「面白そうだな。どうする？ チーム作って行くこつぜ」

タケシも栄ちゃんの見解に賛成のようだ。

「裏表で決める？」

何と、まいも乗り気だ。

「じゃあ、3階かな？ あそこの最上階の窓から顔を出して手を振って戻ってくるの。いい?！」

いつの間にかカスミまで……。

やっぱりカスミのヤツ、冗談なんかじゃなかったじゃねえか……。

……たく、コイツらは……って、オイ!!

何かオレ、ビビってるヤツみたいじゃねえかよ。

オレも参加するって!!

オレ抜きで話しを進めるなって!!

「じゃ、裏表な……」

オレはまるで自分が言いたしっぺのような勢いで、みんなをまとめた。

「うっ、うっ……裏、表っ!!」

「……っ」

チームが決まった。

カスミとまいとタケシチーム。

オレと栄ちゃんチームだ。

な、何かつまんね〜!!

な〜んか、マジ、つまんねえ〜!!

栄ちゃんとまいをくつつけよう作戦ここでは実行しねーの〜!?

でも、ここで文句言うのもおかしいし。

しゃ〜ね〜な、栄ちゃんて我慢するか……。

ま、この人がいれば怖いモノなしだな。

……でも、ないのか?!

この人、昨日ホンマモンの幽霊見てるしな……。

そうこうしているうちに、タケシたちはモーターの窓から顔を出した。

「おい、中って大丈夫なのかよっ?! 建物腐ってねえの?!」

「余裕!」

オレの問いに、粋がつてるのが見え見えのタケシが答えた。

さすがに両手に花を抱えて無様な姿は見せられねえモンな。

それから数分後、カスミとまいがキヤーキヤー言いながら帰ってきた。

そのちよつと後、ポケットに手を入れ、何となく威張りながらタケシが1人で帰ってきた。

「足場とか大丈夫なの?」

栄ちゃんがいつになく優しい口調でカスミに聞いた。

「あゝ、階段気をつけた方がいいかも・・・」

マジかよ。

もし階段上ってて落っこちたらどうすんだよ？！

あ、明日から仕事できねえ〜じゃんよっ！！

そしたらそれはそれでラッキーかな？！

怪我したのを理由にあのホテルから脱出できるかも……。

……ってな事より、マジで大丈夫なのかよ。

「何してんだ光太。行くぞ！！」

「ハイハイ……」

さすがに廃屋の心霊スポットだけあって、建物の中は荒れていた。

瓦礫の山。

壁には落書き。

穴もボコボコ開いている。

でも、見た目は木造なのだが、どうやら造りは鉄筋らしい。

柱がすっかりしてるため、階段もすっかり原型をとどめていた。

栄ちゃんはスタスタと先に行ってしまった。

「栄ちゃん速いって……」

オレは栄ちゃんを追いかけるように早足で階段を上った。

「あでっ……」

何だよ、この階段……！

やけに足場が狭いじゃねえよかよっ……！

これの事か……？！

カスミが言っていた階段に気をつけろって……。

くっそ、ガキじゃあるまいし、何で転んで擦りむかなきゃなんねえよんだよ……！

ホラ、膝小僧から血が出てるし……！！

・・・たく、ついてねえ〜!!

2階に辿り着くと、そこは広い、何もない空間だった。

ここってホントにモーターだったのか?!

何かの会社とかだったんじゃないの?

だって、ここなんてビルの中みたいだぞ?!

いくら何でもおかしいぞ?

少くらしいモーターだったっていう痕跡あってもいいだろう?!

しかし、栄ちゃん速すぎ。

すでに栄ちゃんは3階でオレを待っていた。

窓から顔を出すと、退屈そうにカスミたちが座り込んでいた。

ま、一応ルールだからな。

オレはヤツらに大きく手を振った。

おい、見ろよ、こっち!!

・・・つたく。

その時!

「おゝい!!」

栄ちゃんだ。

栄ちゃんがニッコリとみんなに手を振っている。

それに気付いたみんなは、ちょっと楽しそうに手を振って返した。

「何もなかったな。くだらねえな・・・」

栄ちゃんが帰り際にボソツと言った。

オレ、足擦りむいたから、何もなかったって事はないけど・・・くだらねえってのは同感かな。



・・・でもさ、栄ちゃん。

あんたが最初に「オレはやってもいいぜ・・・」って言ったんだぜ！

それに、あんたさっき、さも楽しそうに手を振ってたじゃん！！

別にいいけど・・・。

オレと栄ちゃんが建物を出た瞬間だった。

「光太！ オレの前を歩け！！」

栄ちゃんがオレに命令口調で言った。

「何でだよ?!」

「いいから、後ろを振り向かずに歩けって！ 早くっ!!」

はあ？

何言ってるんの栄ちゃん・・・？

後ろを振り向くなつて?!

オレは一応、栄ちゃんの横顔が怖かったので、言われるがまま、栄ちゃんの前を早足で歩いた。

「車まで逃げ、絶対後ろ振り返るなよ!」

栄ちゃんはそう言つと、オレを抜かして走り出した。

はあ?

オレの前を歩けつて言つてたくせに、何、追い越してんだよ。

はは〜ん。

さては、オレをからかつてるな?

「おい、タケシ、車のエンジンかけてくれ!!」

タケシたちのもとへ駆けつけるなり、栄ちゃんが叫んだ。

「ええつ? なんだよ〜!」

「いいから、早くっ!!」

疑問たつぷりのタケシをよそに、栄ちゃんはなおも叫んだ。

カスミもまいも栄ちゃんのマトモじゃない雰囲気には驚いている。

「みんなも急いで車に乗れっ!!」

そんな栄ちゃんの異様なまでの雰囲気におされ、オレたちは言われるがままタケシの車に乗り込んだ。

バタン

「タケシ、早く車を走らせろっ!!」

みんなが車に乗り込むと、またもや栄ちゃんの指示でタケシは苦い顔をした。

「一体どうした、栄ちゃん? いい山菜ある場所思い出したワケ?」

半ば投げやりな口調だったが、タケシは言われるまま車を走らせた。

キキキーッ

・・・と、その時!!

タケシは突然急ブレーキをかけた。

「何だよタケシ!!」

オレの問いに、タケシは黙って目の前を指差した。

そこには何も無い。

来た時に通った道があるだけだった。

「あれ？ おかしいな……。確かに今、目の前に真っ白な顔をした髪の長い女の人がいたような……。」「

タケシがおかしな事を言っている。

カスミもまいも、車内の尋常じゃない雰囲気、ずっと黙り込んだままだ。

「おい、ふざけんなよタケシ!!」

オレが声を張り上げると、今度は何と、栄ちゃんがとんでもない事を口走った。

「オレさっき急いでただろ？ 何で分かるか?!」

「何で?!」

「光太とあのモーターを出たとき見たんだよ！ オレらの後ろ付いて来てた。半端ないぞ、アレは!!! オマエらに見せたくなかったから早く車を出すように言ったんだ!!!」

「「キヤーツ」」

その時、カスミとまいが突然叫び声をあげた。

まいもそうだが、カスミが叫び声をあげるなんて尋常じゃない。

「どうした?!」

オレはすぐにカスミとまいを見た。

2人とも、後ろを見て顔を引きつらせている。

「何アレ?! 何か追いかけてくるよ〜」

まいが今にも気が狂いそうなほど怯えた表情で言った。

「はっ、早く車を出せって!!」

栄ちゃんがタケシに怒鳴った。

「エ、エンジンがかからねえ〜!!」

「何言ってるんだタケシ!! オマエ、エンジン切ってるねえ〜だろ!!」

オレは後ろを見ないようにしながらタケシに言った。

「だって突然止まったんだ!! オレだって分かんねえ〜よ!!」

「マニュアルだろ?! セカンド発進しろって!! キーを回したと同時にアクセル踏めっ!!」

栄ちゃんが青筋を立てながら怒鳴った。

ブルン

バウッ

車がガクンガクンと上下に揺れながら走り出した。

「すぐにファーストに戻せって!!」

栄ちゃんがまたも怒鳴った。

「うるせーよ、分かってるって!!」

タケシは慌ててギアを戻した。

ガガガガガッ

ブブウ~~~~ン

車は通常通り走り出した。

その時、オレは運転するタケシの横にある、外側のバックミラーを見てしまった。

気のせいなのか？！

アレは一体何なんだ？！

アレはゆ、幽霊なのかつ？！！

子供のような、大人のような、得体の知れない何者かが、物凄い形相で追いかけてきていた。

髪の高い、真っ白い顔をした女性が……！！

頬がこけ、口を長丸に開けている。

目はギョロリと大きく見開いているが、眼球に白い部分が見当たらない。

両手をこっちに向けて、まるで車にしがみつこうとしているようだ。

カスミとまいが見たものは、オレが今見てるこいつと同じヤツなのか？！

栄ちゃんがさつき見た、オレたちに見せたくなかったものは、こいつなのか？！

こいつがあのもーテルからずっとオレたちの車を追いかけてきているのか？！



オレはそれ以上バックミラーを直視できず、すぐに目をそらした。  
その瞬間、ルームミラーに目が行った。

バックミラーよりも後ろの視野が広がるルームミラーに……。

しかし、そこには追いかけてくる何者かの姿はなく、廃屋の建物が  
見えるだけだった。

オレはすぐにさっきの外側のバックミラーに目を移した。

………いる!!

追いかけてきているっ!!

ルームミラーには……いないっ!!!!

でも、バックミラーには映っている!!

き、気が変になりそうだ。

みんなの目には、どんなモノが映っているのだろうか………?!

オレたちは一言も語らず、ただただ車が無事に車道へ出てくれる事だけを祈った。

やがて車道へ出ると、今までのがまるで夢だったかのように、何事もなく車の流れに紛れ込んだ。

何度も後ろを確認するが、それらしきものは見当たらない。

それからオレたちは、ホテルまで一言も話さなかった……

第7話 『肝試し』 i s 廃屋 4 (後書き)

第7話 『肝試し』 i s 廃屋 『おわり』

## 第8話 ヤスベさんの仕事 ①

「・・・と、まあ、そんな事があつたワケですよ」

その夜、オレとタケシと栄ちゃんは、各々が感じた恐怖な体験を、そのままリアルにケンイチとナオヤに話した。

相変わらずヤスヒロはオレたちの怪談話には興味を示さなかったが、時折チラチラとこつちをうかがっていたのを見る限り、多少なりとも話しを小耳にははさんでいたとは思ふ。

ケンイチとナオヤは大層なりアクションを見せてくれた。

見た事もないほどギョロ目を見せるケンイチは、栄ちゃんの深刻でリアルなフェイスと低いボイスに、かなりビビっていた。

ナオヤは、いつもはオーバーなタケシの語りが、今日に限って繊細で密度の濃い真面目なトークに、随分と感心し、時々神妙な面持ちで相槌さえうっていた。

きつとカスミとまいも、今頃女子寮では、廃屋のモーターでの恐怖体験で盛り上がっている頃だろう。

……いや、もしかするとその逆か？！

カスミとまいの性格上、無闇に人を怖がらせたりしない。

オレらと違って女子達は、やたらデリケートだ。

ちょっとした怪談話にも敏感なヤツらばかりだし、変なヤツ扱いされるのを恐れて、カスミもまいも今回の事は黙ってるかもな……。

女子の中ではみどりが妙にその辺に敏感だ。

ちょっとした怖い話しをしようモンなら、即、否定されるし……。

それを考えると、やっぱりカスミもまいも口を閉ざすか……。

ま、あいつらの事なんて、どお～～～～でもい～～～～けど。

明日からレストランでの研修だという事で、オレはとっとと寝る事にした。

さんざん怖がらせるだけ怖がらせといて、ケンイチには申し訳ないが仕方がない。

幽霊も怖いけど、明日からの面倒くさそうな料飲の仕事の方が、オレにとっては現実的で妙に怖い。

何でも、レストランは最悪らしい。

経験済みのタケシが言っていた。

厨房はヤバイぜ……と。

そして、中でも皿洗いはとんでもないらしい。

ま、これはタケシも誰かから聞いた噂でしかないが……。

タケシは厨房で何度か怒鳴られ、数回キレたらしい。

タケシはああ見えても温厚だ。

そんなタケシがキレるくらいだから、よっぽど理不尽で荒い現場なのだろう。

とにかく、噂の厨房を想像すると、明日からのレストランの研修が憂鬱になる。

オレは自分で言うのも何だが、ガラスのハートだ。

ちょっとした口撃でも口も崩れる。

周りの誰も信じてくれないが、オレは人一倍悩みやすく、繊細な心の持ち主なんだ！

・・・誰も認めてくれないが。

・・・たく、外見で人を判断すんなよ。

ま、どうせ誤解されそうな顔をしてるよ、オレは!!

と、まあ、そんなカンジで明日の事を、自分流に想像したりシミュレーションしていると、すっかり時計の針が1時を越えてしまった。

ヤバイ・・・!!

寝なければ明日の仕事に差し支えるっ!

睡眠を十分とらねば、過酷な長時間労働には耐えられまい。

何たって17時間労働だモンな・・・。

しかも毎日!

労働基準法、オーバーしてねえの?!

などなど考えていたら、オレの意識も薄らいでいった・・・。

次の日の朝は、衝撃的な展開で始まった。

バタン

凄い勢いで部屋のドアが開いた。

まずはその音で目が覚める。

な、何事だ?!

まだ頭の中で物事が処理できない。

音のした方を見ると、一人の男性が入口に立っていた。

寮長だつ!!

寮長が立ち尽くしてこっちを睨んでいる。

オレは周りを見渡した。

栄ちゃんが半ケツで寝ている。

ヤスヒロもナオヤも、タケシも爆睡中だ。



ケンイチは一足先に出勤しているみたいだが・・・。

オレはとっさに時計を見た。

や、やっちゃった!!

その時、寮長が衝撃的な一言を放った。

「光太君、大至急、出勤してくれ!!」

オレは、レストランでの研修初日、さっそく遅刻してしまった。

第8話 ヤスベさんの仕事 ㄥㄥ

慌てて料飲用の制服に着替え、寮からレジヤールランドまでの連絡通路を猛ダツシユする。

まさかレストラン研修の初日から遅刻してしまうなんて……！

オレとした事が……！

そう、オレは滅多に遅刻した事がない。

朝はスパッと目覚めるのが常だったもんで、寝坊の経験は久しぶりだ。

何て嫌なスタートなんだ！！

トホホ……。

ついてない……。

自己嫌悪で頭を一杯にしながらレジヤールランドをひた走っていると、

途中の売店でケンイチが視界に入った。

「おい、ケンイチ！！ 起こせよなっ！！」

オレが走りながらケンイチに文句を言っていると、ケンイチは目を丸くしてこつちを見た。

「え？ 光太兄ちゃん今日から仕事？ みんな明日からじゃなかったっけ？」

「オレとカスミだけ今日からなんだよっ！！ 初日から遅刻だぜよ！ やってらんねえよ」

コンサートホールのような入口から中に入ると、大勢の従業員が一塊になっている所があった。

どうやらミーティングをやっているらしい。

とにかく息を切らしながらそこへ飛び込んだ。

運良くオレが遅刻した事など誰も興味を示さない。

それより、何かコワモテのおっさんが怒りに満ちた表情で怒鳴っているのが気になった。

周りの従業員たちは、みんな下向き加減で深刻な顔だ。

朝から説教なのか？！

噂通り、最悪の現場なのか？！

オレは恐る恐るカスミを探した。

・・・いない。

あれ？！

オレ、もしかして現場を間違えてる？！

いや、あそこにいるのは隣の部屋、301号室の大塚さんともう1人のホモ。

確かあの2人は厨房の皿洗いだったよな・・・。

タケシの話だと、あのホモ2人は同じ現場にいるって言ってたから、オレの現場がここなのは間違いないとは思っただけど。

不安になっていると、息を切らした女性が後ろの入口から姿を見せた。

カスミだ！！

ナンだよ、オマエも遅刻かよっ！！

「ゴメン、寝坊した」

カスミが申し訳なさそうに小声で言った。

オレは軽く頷いた。

オレも遅刻したんだと言いたかったが、こんな殺伐とした沈黙と、1人の権力者の演説の中で私語をする勇氣はない。

となりのカスミはこめかみから一筋の汗を流していた。

それを見ると急に笑いが込み上げてきたが、何とかそれを押し殺した。

その時！！

「オマエらっ！ おい、オマエら！！」

今まで死んだ目で演説していた権力者がこっちを見て怒鳴っている。

どういうことだ？

まさか・・・オレ？！

オレはキョトンとした顔で自分の顔を指差し、こっちを見ている権力者を見た。

前にいる沢山の従業員もこっちをチラチラ見ている。

ちつきしょく、カスミのせいで見つかった。

お、怒られるのかっ?!

「そう、オマエらの事だ!!　こっちにこい!!」

どうやら、あの権力者はオレとカスミを呼んでいるらしい。

しかもこっちに来てと言っている。

知らない人だらけの中、この人ばかりをかき分けてアイツの隣に立てと言っのか?!

何でまた??

こんな朝っぱらから恥ずかしいじゃないかっ!!

だ、だが、そんな事を躊躇している暇はなさそうだ。

オレとカスミは、捕らえられた囚人が監獄に入るときのように、観念した暗い表情で権力者の隣に立った。

目の前には沢山の従業員の顔ぶれ。

何で朝からこんな目に……!!

オレは一体これから何をされるんだ?!

公開処刑が始まるのか?!

「この2人は例のホテル科の学生さんで、今日からここで研修をする。確か、明日からまた2人増えるよな?」

いきなり、質問っすか?

「は、はい」

オレは栄ちゃんとまいの顔を頭に浮かべながら返事をした。

「君は、テナントのレストランでウエイトレスをやってくれ」

権力者はカスミを指差しそう言った。

「はい」

声を裏返しながらカスミが返事をする。

「オマエは……、どうしようかな……」

オ、オマエっすか？！

そっつすよね、やっぱりこんな下っ端はオマエ呼ばわりですよね。

で、オレはどこっすか？！

「……オマエは今日は皿洗いだ！！」

さ、皿洗いつすか？！

へイ、どこでもいいっすよ、もう。

勝手にして下さい。

「ふぁい、ヨロシクお願いします」

オレはとにかく居心地の悪いこの場所から離れたかった。



「自己紹介しろ」

はい?!

オレは一瞬自分の耳を疑った。

何を言ってるんだこの人は?!

自己紹介だとおゝ?!

「早くしろ!!」

げっ、やるしかねえのか?!

「ま、松田光太です。レストランの仕事は初めてなので不安と緊張で一杯です。どうかお手柔らかに・・・」

な、何を言ってるのか分からないが、とにかく自己紹介終了だっ!!!

「春野香澄です。このホテルでの実習と経験を活かし、将来はホテル業で活躍できる人材を目指しています。初めてなので分からない事ばかりですが、先輩方の迷惑にならないよう一生懸命頑張ります」

ので、どうぞよろしくお願いします・・・」

カスミは堂々と自己紹介を終わらせた。

な、ナンだよ今の自己紹介は！

何、気取ってんだよカスミのヤツ!!

最初のオレの自己紹介が、ナンかカッコ悪いじゃねえかよ！

べ、別にいいけど・・・。

自己紹介が済むと、オレたちを残し、朝のミーティングが終了した。

間もなく、カスミはテナントの従業員に連れられてどこかに消えた。

オレはどこに行けばいいんだ?!

演説をしていた権力者の姿はもうない。

さてさて、どうしたものか・・・。

どこに行けばいいのか分からずウロウロしていると、突然何者かに呼ばれた。

「おい、オマエ!! そのコンテナ持ってきてくれ!!」

オレに声を掛けてきた男は、レストランの人っぽいが、作業は裏方専門らしい。

作業服を着た、20代後半位の痩せこけた男だ。

主に食材などの荷物運びや運搬が仕事なのだろう。

「はい」

へい、へい、この黄色いコンテナっすね。

お安い御用でやんす。

痩せこけた男の後ろを、コンテナを持ってついて歩いてみると、突然また呼ばれた。

「何やってんだテメエ、早くこっちに来やがれ!!」

「は、はい?!」

立ち止まってオレを呼んだ方を見ると、厨房で体の大きなおっさん

が怖い顔をしてこっちを見ている。

「おい、早く持って来いって」

前から、さっきの痩せこけた男の音がする。

オレはどっちの指示に従えばいいんだ？！

「い、今行きますので」

厨房のおっさんに声を掛け、コンテナを先に運んだ。

「じゃあ、今度はあの青いコンテナを・・・」

「すみません、向こうの人に早く来いって言われてるんですけど・・・」

「はあ？・・・ざけんなテメエ！！　づべこべ言っただけでさつさと運べ！！」

「ふぁい！！」

痩せこけた男の声に圧倒されて指示に従っていると、また厨房の方から怒鳴り声が響いてきた。

「テメーは皿洗いだろお〜が!! 早くやんねえ〜と溜まってくん  
だよ!! 早く来いよクソが」

「ふあい」

とにかく返事をした。

な、ナンなんだ、この状況……。

第8話 ヤスベさんの仕事 くら

「すみません、遅くなりました」

コンテナ運びの仕事を終えて厨房に入ると、さっきまで怒鳴りまくっていた体の大きなおっさんは、奥の方で調理をしていた。

どうやら調理に夢中で、オレの存在に気付いていないようだ。

「オマエは今日、皿洗いだろ?! あっちだよ、あっち!! さっさと行けよ」

中学生?!

そう思わせるほど若い男が指を差した方を見ると、見るからに皿洗いの現場がそこにはあった。

蒸し暑い。

とにかく蒸し暑い。

厨房の中は熱気でムンムンしているが、ここの皿洗いの現場はそれ

以上だ。

そんな皿洗いの現場の片隅で、存在感の薄そうな男性が1人仕事をしていた。

死んだ魚のような目をしたおっさんが1人、黙々と皿を機械に入れている。

皿洗いと言っても、自動らしい。

これならオレにも出来そうだ。

ここにぶち込んでいけばいいのかな？！

さっさとやらないと溜まっていくって言ってたモンな、さっきのおっさん。

「あ〜、ジブンはここでコレをココに入れてればいいんすか？」

死んだ魚の目のおっさんに話しかけるが、おっさんは完全に無視している。

・・・この人は耳が聞こえないらしい。

オレはしょうがなく、そのおっさんの真似をして皿やコップを機械に入れようとした。

その時！！

「触るなタコスケ！！」

死んだ魚の目のおっさんが、こつちを見ずに、小さな声で威圧的な声をあげた。

「はい？」

タコスケ？

そんな事はどうでもいいが、触るなって……？

じゃあ、オレは何をすればいいの??

「ジブンは何をすればいいんすか?!」

「そこに立ってる」

またしても死んだ魚の目のおっさんは、こつちを見ずに小さな声で、何とも耳障りな声をあげる。

「ふあい」



しょうがない、立ってるって言われたら立ってるしかない。

しかし、このおっさん耳、聞こえるじゃねえか。

さっきは無視しやがったな。

ま、忙しそうだから別にいいけど・・・。

・・・はうあっ！..

しばらくおっさんの動きを見ていたのだが・・・

ちょろろと目を離れた際に、死んだ魚の目をしたおっさんは、どこかに行ってしまった。

「……………」

オレは何をすればいいの？

ま、立ってるって言われたモンな。

立ってるか……。

ガツチャーン

その時、オレの足元で皿が粉々に砕け散った。

はい?!

頭の中が真っ白になる。

「テム〜何突つ立ってんだコノヤロ〜!! やる気あんのかあ〜?  
」

ガツチャーン

2 皿目だ。

痩せ型でヒゲ面の厨房のオヤジが、オレの足元に皿を投げつけている。

キチガイだ。

これが噂の最悪の現場なのか?!

噂どおり、いや、噂以上だ!!

「早くやれよ!!」

「立ってろって言われたんすよ」

とにかく言い訳かもしれないが、オレは自己主張はしてみた。

「うるせえ、こつやるんだ!! 一度しか言わねえから見て覚えろよ!!」

はいはい、分かりましたよ。

見て覚えればいいんすね、見て覚えれば……。

「……ここを、こつするとあぶねえから、オレはここには絶対手は入れねえ。なぜかって言うと……」

ヒゲのオヤジは見て覚えろとか言ってたくせに、妙に詳しく仕事の仕方を説明しはじめた。

……しかし、何て現場だ。

砕けた皿が床に散らばってるじゃねえか。

いいのか、こんなん……?

「・・・と、まあ、こんなカンジだ。後でここら辺掃除しといてくれな。頼んだぜ、若いの」

ヒゲのオヤジは、なぜか急に優しい口調になった。

自分なりに上手に説明が出来たようで、ご満悦のご様子だ。

ワケが分からない。

ま、ヒゲのオヤジのかんしゃくの後始末はオレがやれって事だね。

とにかく目の前の仕事をこなしていくしかない。

オレはただひたすら皿やコップを機械に並べ、自動洗浄の機械操作に従事した。

しばらく一人で仕事をしていると、見慣れた顔が隣にやってきた。

隣の部屋の本モ、大塚さんだ。

「よお。やってるかい？　しっかし大変なところに配属されたな。ここはこのホテルの中でも最悪中の最悪の現場だぜ。オレはここで半年やってるけどな、未だに慣れないよ」

大塚さんはニヤついた顔で言った。

「マジっすか。オレ、もう帰りたいっす」

「だろ？ ここの現場に来るヤツは、ほとんどキレて辞めるか泣いて逃げてくぜ。今は朝食の皿洗いだからまだマシだけどな、昼食後は地獄だぜ。へへっ、せいぜい頑張りな・・・」

大塚さんはそう言い残すと、コンテナ運びの仕事に戻っていった。

昼間は地獄だった？

フン、こうなったらどうにでもなれってカンジだ。

やってやるっじゃない！

体育会系のこの腐った現場で、地獄ってモンを味わってやるっじゃないの。

どうせ逃げ場はオレにはないんだし、出来るとか出来ないじゃない。

もう、やるしかねぇー！！

何とか朝食の皿洗いが終了し、しばしの休憩時間になった。

ホモの大塚さんたちの後について休憩室へ向かう途中、カブトムシの売店の前を通りかかった。

「ケンイチ。オレの現場、最悪だぜ！」

「ああ、タケシさんが言ってた厨房の事？」

「タケシは経験してねえ？ あの地獄。アイツはウェイターだけだろ。アイツはウェイターの目でしか厨房を見ていない。オレはモロ、現場だぜ。しかも厨房の中でも最悪と言われてる皿洗いだ  
！！」

「頑張つてね」

「・・・つたく、人ごとだと思って」

「だってそうじゃん。仕事なんてどこだって辛いんだから、文句を言わないでやるうよ。なんて・・・」

「どこでも一緒なワケあるかつ。絶対オレの今いる現場は酷いって  
くそ、実際味わったヤツしか、あの苦しみは分からないかもな」

「話は変わるけどさ、ここのカブトムシの売店、今日までだって  
明日からザリガニの売店になるらしいよ」

「ザイガニ?? ザリガニを売るのがよ?! そんなの前代未聞だな。売れるのかよ??!」

「でしょ? ボクも不安なんだよね」

「焼いて売った方が売れるんじゃないの?」

「・・・気持ち悪いよ」

「はははっ、オマエも大変だな。じゃ、頑張れよ」

「光太兄ちゃん・・・」

「ナンだ?」

「キレたら負けだよ」

「オマエに言われなくたって分かってるって。じゃな・・・」

「・・・まったく、アイツはオレを見抜いてるつもりか?」

オレがキレルワケねえじゃん。

「・・・とは言ったものの、あの状況ではさすがのオレもどうなる事やら。」

でも、もしキレて厨房の人と喧嘩になっても、勝てる気がしないしなあ。

泣いて逃げ出すにしろ、逃げ場はここにはない。

ホテルから抜け出し、家に帰るなんて事はオレの辞書にはない。

やっぱりキレた所でどうしようもない。

やるしかねえよなあ。

そんな事を考えながら休憩室の社員食堂に入ると、ホモの大塚さんと恋人？の連れが、男同士楽しそうにはしゃいでいた。

あんなに楽しそうな大塚さんは初めてだ。

ゲバゲバ笑っている。

さて、今日のメシは何かな？！

おっ、焼肉じゃねえか！！！！

今日の社食は焼肉定食だった。

大きなコースを3枚皿に載せ、テーブルの椅子に腰掛けた。



いただきます。

体力をつけておかないとな。

これから地獄の昼食後の皿洗いが待っている。

うん、うまい！

「ナハハハハハハ」

相変わらず大塚さんたちは笑い転げている。

その時！！

「うるさいでしょ〜があ〜〜〜！！！」

レストランで見掛けたおっさんだ。

黒い服を着た、クシャクシャの髪で疲れきった顔をしているおっさんが怒鳴っている。

「しかも君達は1人で肉を2枚も取って。肉は1人1枚と決まっ

いるじゃないですかっ!!！」

え、ええええええ〜?!

肉は1人1枚だったの〜??

そんなの聞いてないよおおお〜!!!

見つかる前に急いで食わなければ……。

大塚さんたちは、さっきまでエライ楽しそうにしていたのに、今はシヨンボリ暗い食事になってしまった。

そんなこんなで休憩時間も過ぎ去り、行きたくない厨房へと戻った。

ガヤガヤと向こうの店内からはお客様の賑わいの声が聞こえてくる。

やがてウェイターたちが汚れた皿を次々と棚に並べ始めた。

おいでなすっとな。

最初は淡々と皿洗いをこなしていたが、大塚さんが言っていた地獄の時間が訪れるまで、それほど時間は掛からなかった。



第8話 ヤスベさんの仕事 4

とにかくやって来る皿の数が半端ない。

機械をフルに起動させているのだが、全く追いつかない。

もう1台、自動洗浄機はあるのだが、そっちまで行ってる余裕はない。

次々といっぱいになる棚の皿を、流しに仮置きするのがやっとだった。

何やら厨房から罵声が飛んでくるが、そんなのにかまってる余裕もない。

ただ、些細な事で揉めるのが面倒なので、一応返事だけはした。

「おい、何やってんだよ光太。そっちの洗浄機も使えよ」

ホモの大塚さんだ。

「大塚さん。どうしたんですか？ 手伝ってくれるんですか？！」

「ああ。オレ、ここの仕事やりたくなくて、コンテナ運びやってただけど、さっき捕まっちゃった」

「ここっていつも担当者変わるんですか？」

「専属のおっさんが居たんだが、先月自殺したんだよ。それで毎日交代で誰かがここに入ってるんだ。今日は運が悪いぜ」

そうか、毎日交代だったのか・・・。

・・・って事は、運が良ければここで作業するのも今日だけ？

やっほぉ~~~~!!

・・・って浮かれるのはまだ早いな。

運が悪ければ、またここに配属される可能性もある。

だが、このレストランの従業員の数を考えると、その可能性は薄いかもな・・・。

「朝、ここに居たおじさんは？」

死んだ魚の目をしたおっさんを思い出し、大塚さんに聞いてみた。

「何言ってるの？ ここには朝からオマエ一人しか居ないだろうが」

「いや、居ましたよ。なんか魚が死んだような目をして・・・。

オレ、タコスケって言われたから間違いないっすよ。居ましたよ、おっさんが1人」

「もしかして、オマエ……。それ、安部さんの事かな」

大塚さんが、心なしか青い顔をしている。

「ヤ・ス・ベ……。さん？」

「そう。先月自殺した安部さん。オマエ、見たんじゃねえの？  
幽霊」

「まさかあゝ!!」

「いや、たまにいるんだよ。ここで安部さんを見たってヤツ。夜に多いんだけどな。さすがに安部さんの幽霊と喋ったヤツは初めてだけど」

「幽霊？えええ〜？！ そのヤスベさんは死んでもなお、働いてるんすか〜?!」

あまりに興奮して大きな声をあげてしまった。

案の定、厨房からさらに大きな怒鳴り声が鳴り響く。

「何、くつちゃべってんだコノヤロ〜!!」

「ふあゝい、すんませ〜ん」

最初は頭が真つ白になるくらい怒鳴り声が怖かったが、今ではすっかり慣れてしまった。

どうやらこの現場では、普通の会話自体、怒鳴り声なんだと、オレの体が自然に覚えてくれたようだ。

しかし、不思議だ……。

オレは間違いなく、あの死んだ魚の目をしたおっさんと話しをした。

……でも、思えば変な光景だったような気もする。

あのおっさんが動きながら、オレに罵声を浴びせてたんだが、あのおっさんの位置とは若干ズレた位置から声が聞こえたような……。

気のせいだろうか?!

大塚さんが言ってる事が仮に本当だとしても、あまりにリアル過ぎて実感が湧かない。

百歩譲ってオレが喋ったあの方が自殺したヤスベさんだったとしよ

う。

幽霊と喋ったとしよう。

・・・だから何？

そんなカンジだ。

この嵐のような現場で、幽霊の1つや2つナンだっって言っただ？！

怖いのは幽霊なんかじゃなくて、今のこの状況だ！！

これから一体ここはどうなってしまっただ？！

オレと大塚さんは、この山のような食器をはたして今日中にさばけるのか？！

目の前の仕事の方が、今のオレには怖い。

そんな先月自殺した人の幽霊にかまってる暇はない。

それが現実だった。

無我夢中で目の前の食器を洗浄機に入れ、棚の食器を流しにぶち込む。



目まぐるしく動き回ってるうちに、何とかメドがたつてきて、ついに一段落する時がきた。

今まで余裕がなかったが、ふと時計を見ると夕方18時を回っていた。

「こっからだな。あとは夜の23時くらいまで暇がないぞ・・・」

何を言ってるんだ、この人は。

オレは大塚さんを見て固まってしまった。

地獄と言われる由縁。

それはまさに、昼前から夜中までトイレに行く暇すらないという口しだったのかっ?!

オレは今、あらためて皿洗いの恐怖を思い知らされた。

この蒸し暑い厨房の片隅で、汗だくになってるから小便は別に気にならないが、これが毎日だと思つと気が狂つ。

専属皿洗いで自殺したつていうヤスベさん・・・。

アンタの気持ち、何となく分かる気がする・・・。

そんな事を思つてふと大塚さんの後ろを見ると、窓の外の暗闇に人影が見えた。

その人影はこつちに向かつて歩いてくる。

窓の外の人影は、まるで厨房を覗き込んでいるようにそこに立ち止まった。

その人影は・・・！！

まさに朝に見た、例のヤスベさんの人影そっくりだった！！

「来たぞ！！！」

大塚さんが慌しく動き出した。

さっそく夕食の皿やコップが次々と棚に置かれていく。

ちつきしょく、ウェイターどもめ、こつちの気も知れず・・・。

そ、そんな事より、ヤスベさんが・・・！！

さっきの人影があつた窓を見たが、すでに誰もいなかった。

見間違いか・・・？

気のせいだ！！

そうに違いない。

ヤスベさんの事を考えていたからそう見えただけだ！！

とにかく自分にそう言い聞かせた。

相変わらずヤスベさんの幽霊にかまっている暇はない。

23時まで、あと5時間、この戦場で戦わねばならないのだから・・・。

「終わったあ~~~~~！！」

仕事が全部終わったのは24時ちょっと前だった。

さすがの大塚さんもしかがみ込んでヘトヘト状態だ。

厨房と店内はすっかり電気が消え、レストランでまだ働いてるのはオレと大塚さんと清掃さんくらいだった。

「よく半年もやってますよねえ」

それがオレの本音だった。

「でもね、皿洗いに入らなければね、意外とラクなんだぜ・・・」

大塚さんが痛そうな頭を振りながら言った。

「給料いいんすか？」

「派遣だから給料いいよ。あのね、ボクの給料言っちゃうとね、この社員辞めちゃうから、言えないけどね・・・」

へえ、ハケンって給料いいんだ・・・。

社員はボーナス貰ってるって聞いたし、年齢分くらい毎月貰えるって聞いたけど、それよりいい給料だなんて、一体どれだけなんだ？！

ま、そんなのオレには興味ないし、関係ないけどね・・・。

すっかり暗くなった店内を見渡してみた。

まるでコンサートホールだな。

・・・と、その時。

おっ、こんな夜更けに稽古か？！

舞台上、たった1人、踊りの稽古をしている男がいた。

例の旅芸人の人が・・・。

まだ、若いな。

オマエも頑張れよ。

オレは温かい眼差しでそれをチラ見し、レストランを後にした。

真っ暗い連絡通路を1人歩く。

ここで栄ちゃん、子供の幽霊見たんだっけな・・・。

見たくねえくな、そんなの。

サワサワサワ

夜風に揺られ、外の木の葉が大きく揺れた。

少しだけ空いた窓から、廊下の蒸し暑さを少しだけ癒すような風が入ってくる。

その時、前から1人の男性が歩いてきた。

こんな夜中に・・・、夜勤か？！

ご苦労なこつた。

それとも、栄ちゃんみたいに大浴場にも行くのかな？！

「お疲れさまです」

一応、ヘトヘトながらもオレは挨拶をした。

擦れ違いざま、男性と目が合う。

・・・っ！！！！！！

死んだ魚の目をしたおっさん！

朝、皿洗いの現場にいた、あのおっさんだ！！

思いつきりニヤけた顔でこっちを見ている。

全身に物凄い勢いで鳥肌が立つのが分かる。

背骨に沿って、ツツーっと一筋の冷や汗が流れ落ちた。

ヤ・ス・ベ・・・さん??!!

とっさに後ろを振り返るが・・・!!

だ、誰もいない!!

確かに今、擦れ違ったはずなのに・・・

誰もいない。

廊下には・・・オレ・・・1人しか・・・

いなかった・・・。

第8話 ヤスベさんの仕事 ④ (後書き)

第8話 『ヤスベさんの仕事』 おわり



第9話 東条登場 〔1〕

その日は一晩中、オレたちの部屋は爆笑の渦に巻き込まれた。

隣の部屋の、ホモの大塚さんたちは、さぞ迷惑だっただろうが、そんなのに構ってる余裕はない。

とにかく面白い話題で持ちきりだった。

オレとタケシは腹がよじれるほど笑い、ナオヤは何度も引っくり返りながら笑った。

いつもポーカークフェイスの栄ちゃんも、この日ばかりは人目を気にせず大笑い。

しかも、普段は滅多にオレたちとは交わろうとしないヤスヒロも、雑誌に目を向けてるものの、恥ずかしそうにクスクスと笑い、ヒクヒクと肩を揺らしている。

このヤスヒロ、決して雑誌の記事で笑ってるワケではない。

なぜなら、ヤスヒロが見ている雑誌は、お堅い経済関係の雑誌だからだ。

そんなシャイなヤスヒロですら笑いを堪え切れない中、1人だけ迷惑そうな顔をしている男がいる。

オレの従兄弟のケンイチだ。

もっとも、彼のバカ話で盛り上がってるのだから仕方がない。

そして注目は、この男。

オレたちは今日が初顔合わせだった、東条アキラだ。

むさ苦しい男子寮の狭い一室に、実に7人もの大の大人が寄り集まって雑談しているのだ。

はたから見たら、さぞ異様な光景だろう。

カップラーメンやお菓子を囲んで、最初は東条アキラの自己紹介から始まった。

「劇団きさらぎの、東条アキラ、ヨロシク。部屋はこの2つ隣だから・・・」

アキラはオレたちと同年代だった。

とてもそうは見えないくらい、オレたちより大人に見えた。

普段はカツラを被っているが、素顔はリーゼントを決めて、ちょっとワイルドな男だ。

私服はヤンチャなワイシャツで、チャラチャラとアクセサリーを色んなトコロにぶら下げている。

元ヤンキーのタケシ系と言ったトコロか。

二重まぶたがハッキリしていて眉毛は細くキリッとしている。

目鼻立ちもいいので女性にモテそうなタイプだ。

そして驚いたのは、2週間も前から同じ階の男子寮に住んでいたという事。

今までどうして気が付かなかったのだろう。

アキラは旅芸人、東条ハルオ率いる、劇団きさらぎの一員で、ポスターにもすっかり顔写真が載ってる若手芸人だ。

その手の雑誌には、時折、記事や写真が載るなど、全国的にも東条一家は名が知れているようだ。

カシラの東条ハルオは、かつて有名な劇団に所属していたらしい。

そんな東条ハルオが3年前に立ち上げたのが、劇団きさらぎ。

スタッフを含め、12名という東条一家の若手のホープ、それがアキラだ。

そんなアキラとは、オレがレストランでの研修中に出会った。

レストランは、主に宿泊客の朝食、昼食、夕食の会場として使われる。

もちろん宿泊客のみならず、日帰りの観光客も利用している。

この他にも沢山レストランがホテル内外にはあるらしいが、オレはそこまでよく知らない。

オレが研修をしているレストランは、この広いホテルとレジヤ施設でも一番大きなレストランで、コンサートホールのような造りだった。

レストランに入ってすぐに目に付くのが舞台だ。

その舞台では、年中、宝塚のようなショーをやっているのだが、オレがレストランの研修に入った初日からショーが変わってしまった。

最初にレストランで研修を済ませた連中は、みんな声を揃えてショーを絶賛していたので、オレは心底ガツカリした。

オレもみんなと同じく、宝塚のような西洋風の華麗なショーが見れると思ったのに、どうして和風の大衆演劇なんだよ……！

……と、最初は文句を言っていたが、この旅芸人の芝居、見てみると非常に面白い。

幕が上がると座長の落語から始まり、江戸の商人の娘さんと、1人の侍が恋に落ちるといふ、義理と人情味の溢れる熱い舞台がメインで行なわれ、最後は全員で歌を唄って華やかに幕が閉じる。

オレは仕事も忘れ、この舞台に夢中になってしまった。

な、なんて美しい女性なんだ……。

遠くから見る舞台の娘さんは、オレの目には物凄く清楚で可憐な女性に映った。

昼と夜の2回公演で、毎回同じ舞台が見れる。

激務の皿洗いは初日のみで、あとの日数はレストランでの上げ膳、下げ膳の仕事らしい。

こいつは舞台を見れる、いいチャンスだ!!

オレは何度見ても、その舞台は飽きなかった。

そんな中、たまたま1人で舞台稽古をしていたアキラに声を掛けられたのだった。

レストラン研修が始まって、5日目の事だ。

夕方、静まり返った薄暗いホールで、1人黙々とテーブルを拭いていると・・・

「この辺に、コンビニってないんですか？」

舞台稽古をしていた1人の男性が、オレに向かって話しかけてきた。

「コンビニ二つすか？ ないっすよ。ここはまるっきり隔離されたホテルっす。山を下りないとないつすね」

「そうっすよねえ」

オレは目の前の男性と喋りながら、少し疑問に思った事があった。

この人の着ている衣裳・・・、いつも見ている娘さんの衣裳だよな・・・。

と、すると・・・

げげげっ？！

あ、あの娘さんは、実はこの人が演技してたのぉ？！

オレが惚れてた娘さん、ホントは・・・お、男かよっ！！

そう、それがアキラとの出会いだっただ。

いつも顔を真っ白に塗り、カツラを被っているのだが、その時のアキラは素顔だったのだ。

てっきり舞台の娘さんは、そのまんま女性だと思っていたので、アキラの素顔を初めて見た時はホント、ガツカリした。

オレは舞台の娘さんを好きになりそうだった自分を、その時思いつきり地球の裏側までぶっ飛ばした。

「そうですかあゝ、残念だなあゝ。いやね、シェービングクリームを切らしてしまっただね・・・」

アキラはあごを触った。

シェービングクリーム？！

だよね、そりゃあゝ必需品だよねええええ。

「電気カミソリは？！」

オレは電気カミソリ派なので、T字カミソリ派の苦労は何となくしか分からないが、クリームがないと肌が痛むのだろう、とは思った。

「持ってない。寮のフロあるじゃないですか。その石鹸でもいいんですけど、どうしても肌に合わなくて・・・」

「でしょうね。商売上、肌荒れはね……。そうだ、確かうちの部屋の連中は、みんなシェービングクリーム持ってますよ。よかつたら貸しますか？」

オレはタケシと栄ちゃんがT字カミソリでヒゲを剃っていたの思い出した。

「いいんですか？　では、よければ今晚あたりお邪魔します。お部屋はどこですか？」

・・・と、まあ、そんなカンジでアキラがオレたちの部屋に来たワケだ。

アキラが登場した途端、部屋の空気が変わった。

いつも同じメンバーで、いつも同じ様な話題で飽き飽きしていたオレたちは、新鮮なアキラの登場がホントに嬉しかった。

とにかくアキラのテンションの高さが場を盛り上げる。

タケシもオレも、アキラのテンションには合わせ易く、オレたちはあっという間に仲良くなった。

そんな中、オレたちを爆笑の渦に巻き込んだ話が飛び出す。



オレの従兄弟のケンイチ。

ケンイチがバイト初日に見た、例の幽霊の話だ。

あの、湯船で見た、真っ白い顔の幽霊。

ケンイチはその幽霊を見て、恐怖のあまり、着ていた服を後ろ前、反対に着て部屋に戻ってきた。

しかも体を拭かずに、ビショビショで……。

まあ、それも仕方なかったのだろう。

なんせ、オレが初日に血みどろになったあの風呂で、ケンイチは幽霊をモロ見ちまったんだから。

そんなケンイチの恐怖体験、実は裏があったのだ!!

……なんと!!

ケンイチが見た湯船の幽霊の正体は、アキラの後輩、つまり、旅芸人の一員だったワケだ。

舞台が終わって風呂に入った際、普段は顔を洗ってから入るのだが、その時は忘れて真っ白い顔のまま湯船につかってしまったらしい。

これには一同、大・爆・笑!!

オレたちは、幽霊話が1つなくなってしまっただけで少し残念だったが、面白い話が1つ増えたので、みんなかなり盛り上がった。

そしてさらに盛り上がる出来事が、明日、オレたちに待ち受けているとは、この時は思いもなかった……。

第9話 東条登場 〳2〵

あれが、ケンイチが幽霊と見間違えた、例のアキラの後輩かあ〳〵〵

レストランの大ホールで繰り広げられる、劇団きさらぎの大舞台。

大衆演劇の人情話にチラホラと登場する、16歳の青年、東条フコヒコだ。

フコヒコは新人という事もあり、演技はイマイチだが、アキラにはだいぶ可愛がってもらってるようだ。

ちょっとセリフをかむ回数と、背が高すぎるのが気になるが、真面目で年配に好かれそうな好青年なのは確かだ。

将来はアキラと並ぶ、劇団きさらぎのエースになるのかどうかは、まあ、本人次第だろう。

オレがお客様に料理を運び終え、ホールの隅っこに隠れるように立ち、舞台に目を向けていると〵〵〵

「ちよつとおくく、アンタたち、一体何してるんですかああくくくく！！！」

黒い服を着た、クシヤクシヤの髪のおっさんが、相変わらず疲れきった顔をして怒鳴っている。

このおっさん、別に偉くもないが、なぜかいつもレストランを仕切っている。

「こんなトコロでコソコソとおくくく！！　こんな事していいと思ってるんですかあくくく！！！」

おっさんはなおも怒鳴っている。

思えばこのおっさん、オレが激務の皿洗いの日、ホモの大塚さんを怒鳴っていた人だ。

どうやらバイトたちが、下げ膳が済んだお客様の残り物を、厨房や皿洗いにバレないように個室に隠し、盗み食いしていたのがバレたらしい。

「どうせやるならコソコソしないで堂々とやりなさいよっ！！！」

そこかよっ？！

おっさんが怒ってるトコロはそこなのかよっ?!

お、おっさん、食ってるよ!!

しかもバクバクと、バイトを押し退けて食ってるよ!!

餓えたハイエナのように群がって、個室はお客様の残り物にかぶりつく者達でいっぱいになっていた。

オレはそんな食い物よりも、何の気兼ねもなく舞台に集中できるのが嬉しかった。

その日の夜、終礼が終わって寮に帰る仕度をしていると、ケンイチがつるっばげのおっさんと共に厨房に入ってきた。

「おっ? どうしたケンイチ。オマエがここに現れるのは初めてだなあ」

オレが気さくに声を掛けるが、ケンイチは暗い顔のまま、つるっばげのおっさんの後をついて、黙って奥の方まで歩いていった。

「ケンイチのヤツ、元気ねえなあ。カブトムシが売れないからしぼられてんのか?」

さすがに栄ちゃんも気にかけていたが、帰る支度が済むと、「じゃ・  
・」と言って寮に一足先に帰って行った。

オレは仕事をしているフリをしながら、ケンイチの近くまで行って、  
2人の会話を盗み聞きする事にした。

誰も居ない厨房の片隅のテーブルに、つるっばげのおっさんが、デ  
ンと大きな発砲スチロールを2箱置いた。

ガリガリガリガリ

白い発砲スチロールからは、聞き慣れない不快な音が聞こえる。

生き物かっ?!

あの箱の中には、何か生き物がいるのかっ?!

オレは発砲スチロールの中の生物が何なのか気になったが、もうし  
ばらく様子を見る事にした。

「明日から、カブトムシの売店改め、このザリガニを頼んだぞ、ケ

ンイチ君！！」

つるっばげのおっさんはそう言っつて、発砲スチロールの中から赤いアメリカザリガニをつまみ出した。

ケンイチはそれを見て、顔を引きつらせている。

ザ、ザリガニ~~~~？！

ケンイチがザリガニ売り~~~~？！

ザリガニつて、金出して買う人いるのかよっ！！

ガリガリガリガリガリ

一体何匹いるのだろう。

こっから見ただけでも相当な数がつかがえる。

「そうだな、一匹200円つてトコかなあ。お買い上げのお客様には、この糸をザリガニの首に巻きつけて渡してあげてよ。犬の散歩みたいだね、ホラ、カワイイでしょ・・・」

つるっばげのおっさんは、テーブルの上でザリガニの首に糸を巻き

つけ、それを歩かせてみせた。

「こ、この小さなザリガニはいくらで売れば……」

か細い声で、ケンイチが訊いた。

「そうだねえ。150円でいいよ。この大きいヤツなんてのは400円くらいで売ってね。そうそう、この400円のお買い上げのお客様には、特別小さいのを100円にまけていいからさ……」

つるっばげのおっさんは、恵比須顔で答えた。

一匹、200円？

ザリガニが、一匹、200円？

小さいのが150円？

でかいのが400円？

でかいの買った人には、小さいのが100円？

ザ、ザリガニ……！！

オレは固まったまま微動だにしないケンイチを見て、腹筋が物凄く痛くなった。



今にもその場で大爆笑したかったが、何とかギリギリで耐えていた。

「う、売れるのでしょうか・・・？」

ケンイチが訊いた。

もつともだ！！

その言葉を待っていたぞ、ケンイチ！！

「売れる、売れる！！ 大丈夫、飛ぶように売れるから。ここはね、東京の観光客が多いから。都会とかにはザリガニなんていないから、みんな珍しがって買うよ。一応、明日の晩も、これと同じくらいの数を仕入れてくるから、心配しないでガンガン売っちゃってね・・・」

つるっばげのおっさんは、非常に自信有り気だ。

しかし、飛ぶように売れるって？！

マジかよ！！

しかも明日の晩も同じくらい仕入れるって？

在庫の山かかえていいのかよ？

ザリガニの在庫だぜ?!

「じゃあ、一応この冷蔵庫にしまっておくからさ、明日から売店でこれを売ってね・・・」

つるっばげのおっさんは、ケンイチにそう言い残すと、鼻歌を唄いながら去っていった。

「だっはっはっはっはっは!!!!!!!!」

オレは大粒の涙を流し、太ももを叩きながら大爆笑した。

「光太兄ちゃん、いくらなんでも笑い過ぎだから! 人の不幸を・・・!!!!」

「・・・い、いや、誰でも笑うって!!! ...だって、だって、オマエ、ザリガニ売りだぜ?!

「まったく、アタマ痛いよ・・・」

ケンイチは大きな大きな溜め息をついた。

この時のオレたちは、まさかあんな大変な事態が訪れるなんて、この時は知る由もなかった……。

第9話 東条登場 〵〵〵

「脱走?!」

それは、ケンイチがザリガニ売りのバイトに突入してから2日目の事だった。

夜中である。

みんなが寝静まった頃、寮長がオレたちの部屋の電気を付けた。

「ケンイチ君、大変だ!! ザリガニが脱走した!! 大至急、捜索にあたってくれ!!」

夜中の2時30分56秒、レストランの細密巡回をしていた警備員が、厨房でザリガニの徘徊を発見。

内線で総支配人に通報。

総支配人は寮長に連絡。

内容は、直ちにザリガニの回収に向かう事!!

そして起こされたのが、ケンイチってワケだ。

みんなは迷惑そうに一旦は目を覚ましたが、自分には関係ないと思うと、各々毛布にくるまって身を隠した。

そんなオレも、自分には関係ない話なので、すぐ寝る体制に入った。

・・・が!!

寮長が去ったあと、しばし呆然としていたケンイチがオレに話しかけてきた。

「光太兄ちゃん、光太兄ちゃん、ねえってば!!」

「うるっさいなあ〜!! 何時だと思ってんだよ。真夜中だぜえ〜!!」

「頼むよ〜、ザリガニ探すの手伝ってよあ〜・・・」

「やだよ、オマエ1人で探せよ!!」

「明日休みでしょ?! 知ってるんだからね。この中で明日休みなの、光太兄ちゃんだけじゃん。お願い、手伝ってよ・・・」

「やだよ、オマエ一人で探せよ!!」

「怖いよ」

「何が……」

「あの連絡通路通るのが……」

そこかよっ!!

それがイヤでオレを誘ってるのかよっ!!

「ちつきしよ……ったく、しよ〜がねえ〜ヤツだなあ〜!!」

オレは仕方なくケンイチのザリガニ回収に付き合っ事にした。

「ありがとう、光太兄ちゃん!!」

「いいよ、別に……」

オレは眠い目を擦りながら、適当に私服に着替えると、廊下に出てトイレに向かった。

すると、トイレでバツタリ、アキラに出会った。

アキラの後輩のフユヒコもいる。

「こんな夜中にどうしたの?!」

オレはキョトンとして2人に声を掛けた。

「いや、ただトイレに来ただけだから・・・」

アキラが笑顔で答える。

「・・・もしかして、今稽古が終わったの?」

オレは、アキラがいつも夜中まで舞台の稽古をしているのを知っていた。

「まあね。光太はこんな夜中にどうしたの、そんなカツコウで。外にでも散歩でもしに行くのか?! 分かった、夜這いだろ?!」

アキラとフユヒコは、オレを見てニヤニヤしている。

「そんなんじゃないよ。搜索願いが出たから、ボランティアで手伝うんだよ!」

「搜索願い?! オレらも一緒に探すぞ!! フユヒコも来い!!」

「はいつ!?!」

アキラは急に真面目な顔になって、正義感をみなぎらせた。

フユヒコもアキラの後に続く。

「いいよ、オレとケンイチだけで・・・」

「そうはいかない。オレらも同行させてもらう!?!」

このアキラという男、よっぼどの熱血漢らしい。

搜索願いという言葉一つで目の色を変えて、険しい顔でこっちを見ている。

「・・・分かったよ。一緒に来てもいいけど、絶対後から文句を言うなよ・・・」

オレは2人に一応念を押した。

「当たり前だろ!! ...で、一体どんな人が行方不明に・・・?!」



「・・・ザリガニ」

「・・・はい?!」

アキラの目が点になる。

「・・・だからあゝ、ザリガニ」

「・・・へ?!」

フユヒコの目も点だ。

「ザ・リ・ガ・ニ・・・」

オレは指でハサミを作ってチヨキチヨキしてみた。

「ザリガニの搜索だあ~~~~?!!」

突然アキラが顔色を変えた。

「・・・だから言っただろ?! 後から文句を言うなって。・・・だからいいよ、来なくて。オレとケンイチで探すから」

「お、男に、・・・に、二言はない!!」

アキラは明らかにムカついているようだが、唇をとがらせてそう言った。

「オ、オレも！！」

フユヒコもアキラに続く。

かくして、オレとケンイチと、東条一家のアキラとフユヒコの、ザリガニ大搜索の幕がきって落とされた。

連絡通路を4人でレストラン方向に向かって歩いていると、2人の男性が前から歩いてきた。

何と、座長の東条ハルオだ！！

流石にスターだけあって、独特のオーラを放っている。

体は太めで背が低いが、スターのオーラが小柄さを包み込み、体の小ささを全く感じさせない。

いつもはカツラを被っているが、素顔のハルオは七三ワケのサラリーマン風の髪型だった。

年は50代後半といった所だろう。

そのすぐ左後ろから歩いてくるのは、次期若頭とうたわれている、劇団きさらぎの看板スターの東条ナツオだ。

22歳の、細目でしょうゆ顔のナツオは、舞台では侍の役をこなしている。

女性に人気の高い、二枚目スターだ。

いつもナツオが登場すると、黄色い歓声があがり、カメラのフラッシュが舞う。

おひねりが一番多いのも、このナツオの特徴だ。

舞台のナツオは、お堅い侍を演じ、最後は戦いで敗れて見事な最期をとげる。

桜舞う木の下でのナツオの死に際が、舞台の一番の見所なのだ。

オレも何度かそのシーンでは泣いた。

そんな、舞台では硬派を演じるナツオだが、はじめて見る素顔のナツオはイメージと大違いだ。

軟派な風を漂わせるヨレヨレのアロハシャツに、今時珍しいロングヘア。

18金のネックレスと左手首に光る金のブレスレットが眩しく輝く。

「おつかれっす!!」

アキラとフユヒコが深々と頭を下げた。

「ウム!! オマエらも、これから大浴場に行くのか?!」

いぶし銀な太い声で、ハルオが首に巻いたタオルで額の汗を拭った。

どうやらハルオとナツオは大浴場からの帰りらしい。

栄ちゃんのような人たちだ。

「いや、これから搜索っす。ちょっとした事案がありまして・・・」

「はて? 一体何事かな?」

ハルオは眉にシワを寄せて立ち止まった。

「搜索願いが出たモンで!!」

フユヒコが高い声を出した。

「搜索願い?! 座長、ボクらもお手伝いしましょう!!」

「ウム!! 場所は?!」

ナツオの反応に、ハルオもすぐに呼応した。

ナツオと座長のハルオも協力するのだった？！

ザリガニの搜索だぞ?!!

オレはとっさにアキラを見た。

アキラは意地悪そうな顔をしている。

「……でも、お気持ちだけでいいですよ。ホント、ボクたちだけで探しますから。アキラさんも、フユヒコさんも、夜も遅いし部屋に帰って下さい!!--」

ケンイチが申し訳なさそうに言った。

「……そうはいかないっすよね、座長!!--」  
アキラだ。

「ウム!! ワシもぜひ手伝わせてくれ!!--」  
ハルオが勇ましく応える。

「アキラ、場所は?! 一体誰を探してるんだ?! お客様のお子様でも行方不明になったとか……?」

ナツオがアキラに聞いた。

アキラとフユヒコは、オレとケンイチに視線を送っている。

オレからは、それがザリガニだなんて、とても言えない!!

言え!!

オマエが言うんだ、ケンイチ!!

その時、フユヒコが高い声をあげた。

「ザリガニっす!!」

パシン

すぐさま座長のハルオに頭を叩かれるフユヒコ。

「……だから言ったでしょ?! ボクらだけで探しますから!!

光太兄ちゃん、早く行こうよ!!」

ケンイチがオレの腕を引っばる。

「ま、待てい！！」

座長のハルオだ。

「男に二言はない！！　ワシらも手伝うぞい！！」

熱い！！

流石、劇団きさらぎのドン、東条ハルオだ！！

・・・でも、なんてマヌケなヤツらなんだ、東条一家！！！！

第9話 東条登場 4

最初の一匹は、厨房に入った瞬間、床下に現れた。

真っ赤なアメリカザリガニは、腕を高々と上げ、チヨキを天井に向けていた。

オレはハサミにはさまれないよう、慎重にザリガニを持つと、それを一先ず厨房の流しに置いた。

「一体、どうしてザリガニが脱走したんだよ！！ 厨房の冷蔵庫に保管してたんじゃないのかあ?!」

オレはケンイチに文句を言った。

「初日は冷蔵庫に入れたんだけど、厨房の人に次の日激怒されたんだよね。冷蔵庫の中が泥臭いって。何でも中の食材が、みんなザリガニ臭くなっちゃったらしくて・・・」

「オマエ、厨房のヤツらに激怒されて、よく生還できたな・・・」

「ボクは直接怒られてないよ。つるぴかのおじさんが、じつぴどく怒られたみたいで・・・」



その時、噂をすれば何とやら・・・

つるぴかはげまるのおっさんが現れた。

「はあ、はあ、はあ、ゴメンなさい。みなさま、わ、私のせいで・・・」

おっさんが息をきらしながら厨房に走ってきた。

「あなたは一体、どこにザリガニを保管していたんですか?!」

座長のハルオが、つるぴかはげまるに訊いた。

「これはこれは、東条ハルオさんではないですか。申し遅れました、私、係長の松方です」

松方さんが、いつも低い腰を、さらに低くして言った。

「いや、あなたの名前とか役職は聞いていない。私はどこにザリガニを保管していたのかね?と、あなたに訊ねただよ?!」

怒ってるよ!!!

ハルオ、怒ってるって!!!

アキラ、オマエのトコの大將、絶対怒ってるぞ!!!

オレがアキラに視線を送ると、アキラはこっちを見てニヤツと笑った。

アキラ・・・意地悪なヤツだなあ・・・。

「いやね、冷蔵庫がダメだって言うからね、昨夜、そのテーブルに置いたんですよ。ちゃんと発砲スチロールにサランラップをかけたんですけどねえ〜。おっかしいねえ〜」

松方さんは、発砲スチロールの箱を見つめたまま涙目になっている。

大きな長方形の発砲スチロールの箱が4箱。

縦45cm、横60cm、高さ30cmといった所か。

一体、この中に、何匹のザリガニが飼育されていたのだろう。

蓋にしたと思われるサランラップは、無残にも、いたるところが引きちぎられてビリビリに破られている。

ま、中に居るのはハサミを持ったザリガニだから、当然だろう・・・。  
ちなみにケンイチによると、ザリガニ売り初日、お買い上げゼロ。  
売店に立ち寄ったお客様すらいなかったという。

・・・にもかかわらず、松方は昨夜、さらにザリガニの在庫を増やしたらしい。

「ジャンジャン見つかるぞー!!」

ナツオが次々とザリガニを捕まえてくる。

「一体何匹いるんだよ?!」

オレはケンイチに訊いた。

まさか答えるとは思わなかったが、ケンイチは正確な数字を出した。

「88匹!」

「なんで分かるんだよ?!」

オレとアキラは思わず「ッ」む。

「棚卸がラクになるし、会社の貴重な財産だから、しっかり毎日チェックしろって・・・」

ケンイチがザリガニ管理ノートとマジックで書かれたノートを見せた。

それにはザリガニの体調や、臭いなど細かくチェック項目が書かれていた。

実にマヌケなノートに思えるのは気のせいだろうか？！

「ハチハチ（88匹）ね。そうと分かりゃ話はラクだ。よっしゃ、全部探すぞ！！」

アキラが張り切り出した。

「フユヒコはその流しでザリガニの数をしっかり数えてなさい。ワシは北を探す。ナツオは東、アキラは南。光太さんとケンイチさんは西を頼みましたよ！！ 松方さん、あなたは一応、レストランのホールの方を探してみてください。遠征しているザリガニがいるやもしれん」

座長のハルオが指揮をとり、一斉にザリガニ搜索が始まった。

それにしても凄い光景だ。

劇団きさらぎのスター4人が、こんな夜中にザリガニ探しを手伝っている。

ガリガリガリガリ

厨房の中は、ザリガニが徘徊する異様な音に包まれた。

しかも泥臭い。

これは明日の朝までに全部見つけておかないと、松方さんとケンイチが殺されるぞ〜！！

しかし、見つかる見つかる。

床下を歩いてるヤツ、テーブルの下を歩いてるヤツ、角を歩いてるヤツ、壁を上ろうとしているヤツ、色んなザリガニがいるが、ちょっと探したただけですぐに見つかる。

・・・が、それも最初だけだった。

試練は80匹目から訪れた。

6人という大人数で探しているにもかかわらず、のこり数匹辺りからいつこつに見つからない。

「松方さあ〜ん。そつちには居ますかあ〜ん?!」

オレはレストランのホールを探していた松方さんを思い出し、声を掛けた。

「う〜ん。5匹ほど見つけましたあ〜ん?!」

松方さんは、自分が見つけたザリガニを、足元で歩かせながら他のザリガニを探していた。

「何やってんすか〜?! そんな手際の悪い事してないで、さつさとこつちに持つてきて下さいよあ〜ん! せつかく捕獲しても、また逃げられますよ〜!!」

「ゴメンね〜」

松方さんは、ペコペコ頭を下げながらザリガニを厨房まで運ぶと、流しにポンポン投げ入れた。

その時、座長の睨みが松方さんを襲う。

おそらく松方さんは、少しでも座長と顔を合わせたくなくて、厨房にしばらく顔を出さなかったのだろうと思った。

残り3匹……。

あれからどのくらい探したのだろうと、ふと時計を見ると、朝の6時を回っていた。

みんな夢中になって、時間を忘れていたのだろう。

オレは休みだからいいけど、劇団きさらぎの東条一家は午前の部があるはずだ。

ケンイチも松方さんも、この分だと徹夜か？！

時間を教えるべきか？！

いや、やめとこう。

今言ったら、おそらく座長のハル才は帰ると言い出す。

今は少しでも人数が欲しいトコロ。

厨房がそろそろ来るぞ！！

どうする、みんな？！

・・・と、その時！！

「・・・助けてえ〜！！！」

小さな、小さな金きり声が聞こえた。

確かに、た・す・け・て・・・と、聞こえたが？！

オレは両腕に鳥肌が立った。

女性の叫び声が、厨房の冷蔵庫の裏辺りから聞こえたのだ。

人が侵入できるスペースはそこにはない。

ふと周りを見ると、みんな驚いた顔で同じ方向を見ている。

冷蔵庫の方だ。

・・・と、いう事は、みんな聞いたのか？！



あの声！！

さらに！！

「……助けてえ〜！！」

今度は別な冷蔵庫の裏の辺りから、同じような小さな叫び声が聞こえた。

みんな目を丸くしている。

その時、ケンイチが青い顔でその場を飛び出した。

物凄い速さで厨房を走り去る。

オレはその光景を見て、背筋に強烈な寒気を感じた。

「……な、なあ光太、今、聞いたよな?!」

アキラが真剣な顔で言った。

「助けてって……オレには聞こえたけど……」

「オレも・・・」

アキラは生唾を呑み込んだ。

「ボクも聞いたんですけどぉ〜」

フユヒコが怯えた声をあげた。

「オレも確実に聞いたぜ!!」

ナツオも真面目な表情で言った。

「アキラ、冷蔵庫の裏を探せ!!」

座長のハルオだ。

座長のハルオも聞いたのか?!

やっぱり、みんな聞いたのだろうか?!

松方さんは?!

松方さんはオレたちからは離れた位置で、こっちにお尻を向け、製氷機の下を覗き込んでいる。

この人だけ聞いてないようだ。

「いましたあ~~~~!!」

アキラは叫び声のした冷蔵庫の裏から、ザリガニを1匹、見事に見つけ出した。

そして、さらに・・・

「こつちにもいましたあ~~~~!!」

ナツオが、やはり叫び声のした冷蔵庫の裏から、ザリガニを1匹見つけ出した。

一体、あの叫び声は何だったのか?!

オレたちはそれぞれが疑問に思っているであろう、その事実を、誰一人声に出す者はいなかった。

おそらく信じがたい出来事だったので、未だに誰もが頭の中で処理

できないのである。

そりゃ、そつだ……。

ザリガニが言葉を発するはずが……ない!!

では、みんなが、少なくともここにいる5人が耳にしたあの叫び声を、一体どう説明すればいいのだろう。

……と、その時!!

「お早うございます……」

あくびをしながら、中学生くらいの若者が厨房に現れた。

ついに厨房の連中がやってきた!!

やばい!!

残り一匹だったのに、タイムリミットだあ!!!!

厨房の人たちがやってきたと同時に、ふと我に返った東条ハルオは、小走りで厨房を出た。

後に続いてアキラたちも走って出て行く。

オレも松方さんを残し、その場を去った。

厨房の流しにザリガニを大量に入れっ放しなのを思い出し、松方さん、お気の毒に・・・と思った。

レストランのホールに着くと、ケンイチが客用テーブルの椅子に腰掛けていた。

「どうした、ケンイチ。いきなり飛び出しやがって・・・」

「・・・ゴメン。こ、怖かったから・・・」

「はあ?!」

「・・・だって、女の人のような、変な声が聞こえたでしょ?!  
怖いよ、アレは!」

「オレはオマエが突然飛び出した方が怖かったぞ!! なんか、憑依されて気でも狂ったのか?とか思ったぞ!!」

「・・・ゴメン。あっ、ザリガニどうしよう!! ・・・あと一匹  
!」

ケンイチは大きく口を開けたまま、困った表情をした。

「これだけ探しても見つからないんだ。しょうがないではないか。後は松方さんが上手く処理をしてくれるはずだ。ワシらは午前の部の支度があるからおいとまするよ……」

座長のハルオはそう言うと、レストランを後にした。

アキラたちも「じゃ……」と手をかざすと、ハルオの後に続いて寮に帰って行った。

マジで、申し訳ないっ!!

座長、今日の舞台、徹夜ですけど……頑張って!!

オレは心の中でそう叫んだ。

……しかし、あの時、厨房の冷蔵庫の裏辺りから聞こえた、小さな叫び声は一体何だったのだろうか。

1度のみならず、2度聞こえた、あの声。

「……助けてえ〜!!」

・・・と、いう声。

人が入れるスペースはなかったし、もちろん誰もいなかった。

いたのは、ザリガニ・・・・・・・・。

しかもそれを聞いたのは、オレとケンイチ、座長のハルオとアキラ、ナツオとフユヒコ・・・・・・・・。

実に、6人も男が同じ声を聞いている。

この事実をどう説明すればいいのだろう・・・・・・・・。

あれが何だったのか、誰にも分からない。

そして、それから数日後、残りのザリガニ、最後の一匹が、レストランから離れた連絡通路の片隅で見つかった。

発見者の証言によると、ザリガニはカラッカラに干乾びていたという・・・・・・・・。





第9話 東条登場 ④ (後書き)

第9話 『東条登場』 おわり

第10話 アキラとあかずの間 ㄱ1ㄱ

そこは、見る者を震撼させるに相応しい、まさに、あかずの間だった。

湿った空気が鼻をつき、薄暗い部屋の奥には、おびただしい数の人形が立ち並んでいる。

日本人形はない。

どれもこれもフランス人形だ。

水色や真っ赤なドレスを身にまとった人形は、不気味に微笑んでこちらを見ている。

どれも薄汚れていて、随分と長い間、その場に放置されているのがうかがえる。

そこに、そのフランス人形を誰が置いたのかは不明だが、おおよそ見当はつく。

おそらく、この部屋で亡くなった方への供養のために、仲間のダンサーの方々がそこへ飾ったのだろう。

今もなお、このホテルでは、歴史のあるダンスグループが、華麗なるヨーロッパ系のショーを、レストランの大ホールで日夜、たくさ

んのお客様の前で披露してくれている。

火事で焼け焦がれた部屋……。

そこはかつて、ダンサーたちの寮だったそうだ。

噂では何十年も放置されているという……。

一体、なぜホテル側はこの部屋を改装しないのだろうか。

一説によると、改装のためここに立ち入った業者に、次々と不幸が訪れたという……。

それが一度ならず、二度、三度と……。

結局どの業者もお手上げで、ホテル側は呪いだの災いだのと騒いだ拳句、臭いものにはフタをしる！とばかりに、この部屋をあかすの間にしたのだという。

そんな、見るだけでも背筋が凍るあかすの間に足を踏み入れたオレたちは、2度と思い出したくもない恐怖体験をした。

真夏の太陽がサンサンと大地を照らし終え、すっかり昼夜が逆転した真夜中、蒸し暑い館内を大勢で探索していた時だった……。

それは、遊び半分であかすの間に足を踏み入れた、オレたちへのタリだったのだろうか……。

その日の晩も、またアキラがオレたちの部屋に来た。

むさ苦しい男ばかりが6人、所狭しと同居して半月以上が過ぎた。

すっかり慣れた部屋の狭さも、さすがに男が1人も増えると話は別だ。

「おっ疲れ〜!!」

アキラは今日も元気に、部屋のドアをノックもせずには開ける。

・・・が、みんなは仕事の疲れで今晚はグツスリのような。

例によつて栄ちゃんだけは、大浴場に行つてて今はいない。

「残念だったな、アキラ。今日はみんな寝たぜ・・・」

オレは薄目を開けてアキラを見た。

「いゝや、起きてる。光太、オマエだ!!」

アキラはランランと目を輝かせてオレを見ている。

なぜかオレは、アキラに気に入られたようだ。

アキラは、どっちかって言うと、オレなんかよりタケシ辺りと気が合いそうな気がするのだが、そんなタケシは狸寝入りなのかマジ爆睡なのか、毛布を被ったままピクリとも動かない。

「しよ〜がねえ〜〜なあ〜〜〜!!」

オレは、アキラの輝かしい笑顔に負けて、仕方なく起き出してやる事にした。

とりあえず、みんな寝ているという事で、オレたちは社員食堂に向かった。

食堂は電気も消えて真っ暗だったが、夜中にもかかわらず沢山の人がいた。

みんな若い連中ばかりだ。

アルバイト、派遣の人、社員もいる。

カップル数組と、数人で固まって盛り上がってる連中がパラパラといた。

その、数人で固まっている連中は、男が2人、女が3人のグループ

だった。

その中に、ホモの大塚さんもいる。

大塚さんは一見30代位に見えるが、まだ20才になったばかりだという。

どっかの大学生らしいが、定かではない。

その隣にいるのは、いつも影が薄い、大塚さんの恋人？の男だ。

スキンヘッドの大塚さんとは間逆で、真面目な真ん中ワケのサラサラヘアの大学生だ。

この男は20才に見える。

……っていうか、20才だ。

その隣に座っているのは、別館でのベルボーイの時に見掛けた女性社員だ。

この人は確か、23才。

彼氏いない歴3年とか言ってたっけ。

長い髪で顔半分隠し、まるで幽霊みたいだ。

でも、髪を掻き分けると化粧が上手い、飲み屋のお姉さんってカンジの人だ。

その隣にいるのが、丸い顔でちょっと太めな、こちらも23才の女性社員。

別館でロビーに立ってた時によく見掛けた。

話したことがなかったが、打ち解けるのが早そうな、気さくなカンジに見てとれた。

その隣にいるのが、今人気の男性お笑いタレントに瓜二つな女性。

この人は派遣でやってるらしい。

20才前だとは思っ。

オレと同じ年代なのは確かだ。

しかし、男のタレントに似てるってのは気の毒な話だ。

現にこの人のあだ名はそのタレントにならって「浜ちゃん」だった。

そして・・・

目を合わさないようにしていたのだが、ついつい、大塚さんと目が合ってしまった。

その瞬間・・・

「おっ、光太！ちようど、今、オマエの噂話で盛り上がった所だぞおっ！！」

大塚さんがとんでもない事を言っている。

オレはこう見えてもシャイなんだ！！

オレの噂話だつてえっ？！

ふざけんなよっ！！

女の前で！！

オレと同年代くらいの女性が3人、ニヤニヤとオレを見て笑っている。

い、一体どんな噂話なんだ・・・？！

冗談じゃないっ！！

なんでそんな見知らぬ女たちに笑われなきゃならねえっなんだよ



!!

その時、アキラが余計な口出しをした。

「光太の噂？！面白そうジャン。オレらもまぜてよー!!」

・・・たく、ノリのいいヤツだ。

アキラはオレに断りもなく、固まって話をしている連中の輪に入っていた。

人見知りなオレは、苦い顔をしつつ仕方なくアキラの隣に座る。

横には大塚さんと、恋人？の男がいる。

「・・・で、どんな話し？」

アキラがニコニコしながら女性に話しかけた。

「ねえ〜ねえ〜、幽霊見たって本当??」

女性の1人が、アキラを無視してオレに話しかけてきた。

……だよね。

オレはてっきり、オレのルックスとか、ヘアースタイルとか、そんな話しをしてたのかと思ったよ。

幽霊ね、幽霊。

はいはい、もう十分なほど見ましたよ。

それが、何か……？

とりあえず黙っていると、大塚さんがオレの代わりに話し始めた。

「例のヤスベさんだろ。その他にさ、こいつ別館でも見てるらしいぜ！！」

「大塚さん、それはオレの体験談じゃないっすよ。お客さんっす、お客さん……」

オレはドアノブがひとりでに回った時の事を思い出したが、面倒だったのでそれは伏せることにした。

「お客さんが幽霊見たの？ 聞きた〜い！！！」

女性たちは興味津々だ。

・・・つたく、面倒くせえ〜！！

いちいち説明すんの面倒くせえ〜！！

「・・・大した事ねえよ。それよりこのホテルそのものが、一体何なのかオレは知りたいけど。幽霊なんて噂話しは山ほどあるだろ？！ 一体何でそんなに逸話があるのか、オレはそこが知りたい！！」

「何かツコつけてんだよ、光太。彼女達はオマエの体験談が聞きたいんじゃないの？！」

またアキラが余計な事を・・・。

女性達はオレの怪談話を期待しているようだ。

みんなの視線がオレへ、まるで空腹にレストランのショーケースを目の前にした子供達のようなランランとした目が集中している。

ちつきしょ〜、面倒くせえ〜〜〜なあ〜！！！！

オレは仕方なく、マジで仕方なく、一部始終話す事にした。

嘘偽り、大袈裟でもない、事実のみを！！

まず最初に、このホテルに足を踏み入れたその日、足を怪我した時の事。

カスミの部屋での怪奇事件。

タケシと見たゾンビ犬。

別館でのお客様の見た幽霊話。

そしてオレが体験したドアノブ回転の話し。

栄ちゃんの恐怖体験。

廃屋で見た謎の女幽霊。

ヤスベさんの幽霊。

アキラたちとのザリガニの悲鳴……

約1時間近い、オレの独断場だった。

すでに時計は夜中の1時を過ぎていているのに、オレはみんなを興奮させてしまったようだ。

いつの間にか、周りは今からホテルの館内を探索しようとノリノリに盛り上がっている。

「光太も行くだろ?!」

アキラが馴れ馴れしくオレの肩に手を回してきた。

「・・・行かないって言ってもどうせムダだろ?!」

アキラの楽しそうな瞳に負けて、オレは観念した。

「そうこなくちゃな!!」

アキラは満面の笑みを溢す。

これが、あの、オレが惚れた女性を演じた役者の正体だなんて・・・

・・・と、ガックリと肩を落とすのも束の間、オレは大塚さんとアキラに促され、連絡通路の先頭を歩かされていた。

これから、とんでもない恐怖が待ち受けているとも知らずに・・・

第10話 アキラとあかずの間 ㄥㄥ

長い連絡通路で栄ちゃんと擦れ違った。

さすが長風呂だ。

実に2時間以上もこの人は大浴場にいたようだ。

寝てたのか？

湯船で寝てたのか？！

やけに眠そうでテンションの低い栄ちゃんが、まるで汚いものを見るかのようにオレたちを冷たい視線で見ている。

確かに明日も仕事だったのに、こんな夜中に大勢で寮とは逆方向に歩いているのだ、頭のイカれた奴らだと思われても仕方あるまい。

一応、栄ちゃんも誘ってみたが、返ってきたのは「やめとけ!!」  
と言わんばかりの険しい表情だけだった。

栄ちゃんは無言で首を振ると、さっさと寮に向かって歩き出した。

「栄ちゃん待つてよお～～～！！ オレもホントはそっちに帰りた  
いんだよお～～～！！」と、オレは心の中で悲痛な叫びを放ったが、  
栄ちゃんの冷たい背中には到底届きそうもなかった。

明日は栄ちゃんも含め、カスミやまいにも説教をくらいそうだ。

「何シケたツラしてんだよ。今更引き返すなんて言うんじゃないだ  
ろうな、チキンの光太くん！！」

アキラがオレの肩に手を回しながら挑発している。

別にチキンと言われようが馬鹿にされようがどうでもいいが、これ  
以上女性の前でオレを小馬鹿にはしてほしくない。

「オレは全然平気だけど、みんなが大丈夫か心配してるだけだ！！」

アキラはオレの言葉にどう反応するか見ものだったが、全くのポー  
カーフェイスで話題を変えた。

どうやらコイツは、女性達が怖気付くのを恐れているらしい。

アキラのヤツ、とにかくこの場のテンションを落とさないように気  
を配っているようにも見えるし……。

ただ単に、夏休みをエンジョイしてる若者と一緒ってワケね。

健気なヤツね……。

しょうがねえな、せつかくだから、オレも思い出の真夏の夜を楽しみますかっ!!

そうこうしているうちに、オレたちはレジヤールランドへと辿り着いた。

言うまでもなく、そこは昼間の活気とは全く別物の「異空間」だった。

オレたちは、昼間では店員がいて中に入れない、入場料の必要な施設にも顔を出してみた。

デイズニールランドを彷彿させる、ちびっこに好まれそうな施設に初めて顔をのぞかせてみたが、これはオレたちでも楽しめそうだとみんが思ったようだ。

乗り物に乗って、ジャングルの中を探検できる。

昼間に来て、タケシたちと乗ってみたいと思った。

その他、ラスベガスをイメージした、ギャンブルまがいのゲームセンターにも入ってみた。

24時まで営業していたらしく、今でも少しだけタバコの匂いが残



っていた。

一通りレジヤールランドを見て歩いたが、照明の消えた館内には楽しいと思えるものは特になかった。

普段はお金を払わなければならない所も、今では自由に出入りできるので、王様気分を味わえるかと思いきや、仕事で見回る施設警備員にでもなったような、少しだけ寂しい気分になるだけだった。

そして、オレたちが今まで避けてきた、一番の目玉だけが残った。

お化け屋敷だ！！

オレたちは各々レジヤールランドを歩き回っていたが、誰が号令をかけるでもなく、みんな同じくらいの時間に、自然にお化け屋敷の前に集まっていた。

大塚さんやアキラの顔を見ると、幽霊の「ゆ」の字もないが、女性達は少しだけ不安そうに見えた。

さすがに真夜中のお化け屋敷だ。

躊躇するよな、普通。

なのに……

アキラはスキップをしながらお化け屋敷に突入した。

「おい、本気で行くのかよ……」

オレはとりあえず女性達を代弁するかのようにはアキラに言ってみた。

すると、女性達は「え？　光太君は入らないの??」と不思議そうな顔で言った。

こいつら怖がってるように見えるのは見た目だけか??!

……まったく、女ってヤツはホント分からん!

外見は気弱そうな女の子を演じ、内面は男顔負けの不屈の冒険心つてヤツかよ!!!

こうなったら行くしかねえな。

別に怖いワケじゃねえけど、オレも一応男だし、根性見せて女性を守らないとな……。

そう、いくらレジヤールランドのお化け屋敷とはいえ、この幽霊ホテルの事だ。

何があるか分からない。

アキラを先頭に、オレ、そして女性達、一番後方に大塚さんと恋人？の男で突入した。

どうやら大塚さんたちは腕を組んでいるらしく、女性達はクスクスと後ろの2人の噂話で盛り上がっていた。

ま、これで正真正銘、大塚さんはホモ確定！

どくでも、いけど。。。。

「足場、気を付けろよ！」

アキラが壁に頭をぶつけながら言った。

「キャ〜！」

時々女性達がかわいらしい小さな悲鳴をあげる。

心底怖がってるようには聞こえない叫びだ。

怖いといえば、照明がないのでぶついたり転んだりして怪我をするおそれがあるって事だ。

作り物のお化けより、真つ暗闇を歩かなければならない方に気をとられ、結局何もなймаまオレたちは出口まで辿り着いてしまった。

「どうする？ もう一回入る？」

アキラがそんな事を言っているが、みんなは少々シラケモードだ。

オレたちが真夜中のお化け屋敷を探索して気付いた事、それは、普段のお化け屋敷は、照明や演出に頼り切っていたという事だ。

妖しい光や音、そんな演出が作り物のお化けを怖いモノにしていたのだ。

電源も落とされている為、動きもないお化けたちは、ただの飾り物にすぎなかった。

拍子抜けだ。

これでは女性達が「帰る」と言い出すのは時間の問題だ。

それを感じたアキラが、まるで待ってましたとばかり「とっておきを出してきた。」

「実はな、凄い情報があるんだよ！！」

それはまさに、アキラの隠しだまだった。

今日のイベント？にふさわしい、メインイベントになるのは間違いないだろうと思った。

……だが、それはあまりにも危険の伴う賭けのようなものだった。

一時の楽しさを味わいたいだけで、それだけの危険を冒していいのだろうか……？

根拠はないが、そんな不安がオレには過ぎった。

アキラの提案、それにはリスクが多大な気がしてならなかったが、大塚さんたちを含め、女性達も乗り気だった。

今日の日を、無駄な日にしたくない。

そんなみんなの気も分からないまでもない。

食堂での怪談話で始まり、レジャーランドやお化け屋敷の探索、そしてアキラの隠しだま。

ここまで来れば、その隠しだまでフィナーレを迎えたいみんなの気持ちは分かる。

だけど、ホントにいいのか?!

オレはアキラに返す言葉も見つからないまま、みんなの後を追う様に歩を進めていた。

本物のお化け屋敷へと……

第10話 アキラとあかずの間 くら

見慣れたコンサートホールのようなレストランを過ぎ、一本道の廊下を歩きながらアキラが口を開いた。

「これから行く所が、このホテルで一番ヤバイって言われてるあかずの間だ！」

「え〜?! やっぱりそこに向かってるワケ？」

飲み屋のお姉さんのようなシズさんが大声を出す。

「知ってるの？」

アキラの問いに「当たり前じゃん」と言うような顔をしてシズさんは大きく頷いた。

「知ってるも何もねえ、このホテルじゃ有名な話だもんねえ〜！」

小太りな磯野さんも知ってるみたいだ。

そんな中、タレント似の浜ちゃんは、1人だけキョトンとしている。

「……あかずの間って何?!」

そっからかよ!!

オレが説明するまでもなく、アキラが語り出した。

「みんな知つての通り、このホテルは巷じゃ幽霊ホテルとして有名だ。そんな幽霊ホテルというレッテルが貼られたのは、最近の話じゃないんだ。実は、数十年も昔から、このホテルは幽霊ホテルと言われていたらしい……」

それは初耳だ。

てつきりこのホテルが幽霊ホテルだったのは、オレが最近広めたのかと思つていたのに……。

「みんなも知つての通り、オレがやってる演劇の舞台は、三葉ダンスグループに一時的に貸してもらつてる舞台だ!」

それ、知らない。

へへ、そうだったのか……。



「このホテルがいつからあるのかは知らないが、設立当初から、そのダンスグループはこのホテルの大ホール、そのレストランの舞台でショーをやっているらしい。そのダンスグループの寮が、この先にあっただ。数十年前までね！」

「今はどこにあるの？ その、ダンサーたちの寮……」

浜ちゃんがアキラに訊いた。

「何ボケてんの？ みんな私達と一緒に寮にいるじゃない。女子寮にいるよ。3階とかに……」

浜ちゃんは磯野さんにどつかれた。

それを一笑したアキラが続ける。

「三葉ダンスグループの寮が、職員の寮に移動になったのは、ある事件がきっかけだった……」

その時、シズさんと磯野さんの、固唾を飲み込む音が聞こえた。

「原因不明の火事があったんだ。死傷者が出るほどのね。火事は報道されたかどうか、そこまでは知らないが、大事件だったとは思つ。人が死んだんだからね。……実は、その火事の現場が当時のまま、今でも残つてると言うんだ……」

はい？

なぜ？！

改装くらいするだろフツ！。

こんなに大きなホテルなんだぜ？！

金がないワケでもないだろ〜に！！

「おかしいな、それ。何か意味でもあるのか？」

大塚さんが腕を組みながら眉間にシワを寄せた。

「嘘かホントか定かじゃないが、一説によると、何度も改装を試みたらしい。・・・が、立ち入る業者が次々と姿を消すらしい。結局断念したのはホテル側ってワケで、それっきりあかすの間として放っておかれてるって話だ・・・」

「・・・なぜ？！ 何で業者は仕事を放棄したんだ？！」

さすがのオレもこれ以上黙ってはられない。

どうして金を貰ってる業者が逃げ出すんだ？！

一体どんな理由で?!

「携わった業者の人間に、次々と不幸が訪れたって話だぜ……」

「まさか……。ピラミッドのツタンカーメンの呪いじゃあるまいし……」

「その、呪いってヤツだよ。ここで死んだダンサーの幽霊が、立ち入る者に呪いを仕掛けたって話だ……」

「マジかよ。……んじゃ、オレらだってヤバイじゃん。立ち入ったら呪われるんじゃないのか?!」

「バカかよ、オマエは!! そんな話し、マジで信じてるの?!」

アキラ〜!!

言い方キツくねえ〜か?!

そりゃ〜オレだって、そんなクダラナイ話し信じちやいねえ〜けどさ。

しかし、アキラのヤツ、持って行き方が上手いよな。

そうやってオレを挑発して、どうにかあかずの間にオレを引き込もうとしている。

その上、話を膨らませて物語を壮大なものにしようとしている。

しょうがねえな、乗ってやるか。

「呪いってのは大袈裟かもしれないけど、次々に業者不幸が訪れるってのは引つ掛かるよな。例えば業者が怪我したり、交通事故に遭ったりとかなのかな・・・？」

オレがアキラに訊いた瞬間、あの男が割り込んできた。

「ま、大方ヤクザな建設業者が立て続けにホテルからの改装費を持ち逃げしただけの話だろうな。三葉側の予算ワレってだけの話だろう？ そのまま面倒だから適当に経営者が放っておいてるだけの話だ！」

大塚さんが現実的に俺たちの空想を終わらせた。

おそらくアキラはまだまだ空想を膨らませたかったに違いないが、大塚さんの言葉に返す言葉もないまま黙りこくってしまった。

「一先ず行ってみようよ・・・」

今までオレたちの後ろを歩いてきたシズさんが先頭で歩き出した。

女性達に誘導されるように、オレたちはあかずの間に向かう。

何か変な光景だ。

言いだしっぺのアキラが後方で、情けない顔で付いて来ている。

それはそれで面白いが・・・。

オレたちはついに廊下の突き当たりに辿り着いた。

正面には小汚いドアがあり、そこには南京錠までしてあった。

ドアの前にはカラーコーンが置いてあり、バーには立ち入り禁止の札までついている。

それに、ドアにも大きな立ち入り禁止の張り紙がしてあった。

「これじゃ、入るのは無理だな。諦めて帰るか・・・」

時間も時間だ。

今日はこれで十分。

みんな、噂のあかすの間の入口を見たってだけで大収穫だろう・・・。

さあ、帰るぞアキラ・・・・・・・・

そう思ったのも束の間だった。

「見てみるよ、簡単に開くぜ・・・」

ドアの開閉部分の南京錠の意味が分からない。

ドアの右側の止め具部分が壊れていて、簡単にドアが動いた。

アキラはドアを抱えながら、右開きでドアを開けた。

おそらくオレたち以外にも、こうやって中に侵入を試みた輩が今までにもいたに違いない。

そう思えた。

第10話 アキラとあかずの間 4

中は異様な空間だった。

手前に12畳一間の部屋があり、奥にも同じ大きさの和室がもう一部屋あった。

そこは、見る者を震撼させるに相応しい、まさに、あかずの間だった。

一番最初に、湿った空気が鼻をつく。

タマネギが腐った時のような臭いがした。

畳にはゴミが散乱していて、空気は明らかに淀んでいる。

それが数十年光の当たらない密室だったから、というだけではなく、別な意味で空気を濁してるんじゃないかと思えたのは、薄暗い部屋の奥の不気味なモノに気付いた時に感じた。

自分の腕、両足、そして背中まで鳥肌が立つのが分かる。

それだけじゃない。

周りにいるみんなにも鳥肌が一齐に立つのを感じた。

自分のだけではなく、人の鳥肌を自分の肌で感じるのは、生まれて初めての経験だった。

薄暗い部屋の奥には、おびただしい数の人形が立ち並んでいる。

日本人形はない。

どれもこれもフランス人形だ。

水色や真っ赤なドレスを身にまとった人形は、不気味に微笑んでこちらを見ている。

どれも薄汚れていて、随分と長い間、その場に放置されているのがうかがえる。

そこに、そのフランス人形を誰が置いたのかは不明だが、おおよそ見当はつく。

おそらく、この部屋で亡くなった方への供養のために、仲間のダンサーの方々がそこへ飾ったのだろう。

見たくはないが、「サヨウナラ」「天国でも幸せにネ」「ありがとうね」などの寄せ書きが視界に入る。



フランス人形に交じった千羽鶴が、哀しげな現場を引き立たせていた。

焼け焦がれた畳や壁は、今もなお、当時の炎や煙を感じさせる生々しい光景だった。

亡くなった方は、どうして逃げ遅れたのだろうか。

さぞ、無念だったに違いない。

そんな中、シズさんが写真を見て小さな声を出した。

「この人・・・、足がなかったんだ・・・。」

その言葉に、オレの太ももは更に鳥肌を増した。

「見て、この写真。たぶん当時のダンスグループの写真だよ。真ん中にいるのがこのコじゃない？ ホラ、このコの写真が、いくつかあるし・・・。」

確かにその女性が1人で写ってる写真がいくつか飾られている。

額に入ったものもあれば、むき出しのまま飾られていて、セピア色に色褪せている写真も数枚ある。

車椅子に乗ってる写真。

確かに足がない。

一緒にショーに立つのを志、夢の途中で怪我が病気で足を失ったのだろうか……。

そう思えるのには理由があった。

三葉リゾートパークホテル設立記念と書いてある、ダンスグループの集合写真が1枚あった。

その写真のその女性は、しっかりと自分の足を地につけている。

オレたちは言葉もなかった。

足のないダンサー。

そんな心が痛む、切ないダンサーが、火事で逃げ遅れて命を落とすというのか……。

生き残った仲間達は、さぞ、やりきれない、無念な思いだったろう……。

そんな想いが、このあかすの間を作り出したのかもしれない。

当時、フランス人形が大好きだったこの女性への、みんなの想いがこの部屋を作り出し、そして……

いや、待てよ。

そんなにこのコを想うんなら、なんでこんな薄汚れたまま放っておくのだらうか？

年月が経つにつれ、1人また1人と引退して、今に至る……つてのが妥当な所だらうが、これじゃ、あまりにも無残じゃないのか？！

……って言っても、オレたちにはどうしようもないつてのが本音だけ。

「ねえ、もう行くつよー!!」

磯野さんだ。

「私も、もう耐えられない。気持ち悪くなってきた……」

シズさんも部屋を出ようとしている。

あれ？

大塚さんたちは？！

いたっ！！

大塚さんと恋人？は、怖くて中に入ることさえ出来なかったらしい。改装費だの経営者だのと大人な事を言ってたくせに、案外臆病なモンだ。

ま、普通の人はこんな光景を目の当たりにしたらとつくに逃げ去るだろうな。

それを考えると、こうしてここに5分も居られたオレたちはどうだ？！

肝が据わってるだろ？！って、誰に自慢できるワケでもないが・・・

「行くぞ、光太！！」

アキラがスタスタと部屋を出て行った。

どうやらアイツも内心ビビってたようだ。

シズさんも磯野さんも、逃げるかのように走って出ていってしまった。

おい、待てよ!!

オレをこんなおっかねえところ一人にする気かあ??!

オレもついつい早足になり、ついにはその足を走らせた。

その時!!

シク シク・・・

出口付近で泣き声に気付いた。

シク シク シク・・・

後ろを振り返ると、部屋の奥隅で浜ちゃんが泣いている。

そうか、すっかり忘れてた!!

「どづしたの?! 行くよ!」

オレが大きな声を掛けたが、浜ちゃんは泣き顔で顔を歪めたまま動こうとしない。

「どづしたの?!」

さらに声を掛けるが、浜ちゃんは立ち尽くしたまま動かずにいた。

異変に気付いたみんなもあかずの間に顔を出す。

「どーした? 浜ちゃん、置いてくよぉ?」

磯野さんが声を掛けるが、浜ちゃんは動かない。

「どづしたの、浜ちゃん?!」

シズさんが浜ちゃんに近づいた。

その時……

「来ないでえ〜〜!! イヤ〜〜!!」

浜ちゃんが突然大きな声で泣き出した。

何かにとり憑かれてもしたのだろうか？！

オレたちは、目の前で起きている事が何なのか分からず、ただただ立ち尽くしていた。

シズさんは、情けなく立ち尽くしているオレたちを払いのけ、浜ちゃんのもとに駆け寄った。

「ふざけないでっ！！」

パチン

シズさんがいきなり浜ちゃんの右頬をひっぱたたいた。

こういう時の女性は強い。

ま、確かに今は尋常じゃない。

シズさんのきつつけの一発が、浜ちゃんの意識をどうやら戻したようだ。

「動かないの、足が、動かないの……!!!!」

浜ちゃんは気が狂ったように泣き喚いている。

「みんな来て〜!!」

シズさんの号令で、オレたちは急いで浜ちゃんに駆け寄った。

大塚さんが浜ちゃんをおぶさり、オレたちは駆け足であかすの間を立ち去った。

火事で焼け焦がれた部屋……。

そんな、見るだけでも背筋が凍るあかすの間に足を踏み入れたオレたちは、2度と思い出したくもない恐怖体験をした。

それは、遊び半分であかすの間に足を踏み入れた、オレたちへのタリだったのだろうか……。



「いい？ 今日の事は私達だけの秘密だからね！！ 誰にも言わないこと！！」

帰り際、おっかない顔をしたシズさんに念をおされた。

一番口外しそうなアキラですら、真面目な顔で何度も頷いている。

どうやら浜ちゃんは、足のないダンサーを見たらしい。

もちろんオレたちは何も見えなかったので、そんな話は信じられない。

・・・が、あの場を見てしまった以上、それを100%否定はできないってのが正直な所ではある。

浜ちゃんの話によると、足のないダンサーが、自分に向かって流れるように近づいてきたと言うのだ。

それを見た瞬間意識が遠のき、ただただ涙が溢れてきたという。

気が付いたら足が動かなくなっていたというのだ。

しかし、今は何もなかったかのように、浜ちゃんの足は正常に戻っていた。

シズさんは、そんな浜ちゃんの恐怖体験が噂話になるのを考慮してなのか、それとも目に見えない何かを恐れてなのか、オレたちに今日の出来事を口外するのを禁止した。

確かに今日の出来事を誰かに話せば、瞬く間に怪談話としてホテル中に広まるだろう。

場合によってはオレたちは何らかの処罰を受けるかもしれない。

それだけじゃなく……

もしかしたら、目に見えない何かの呪いを……

男子寮に付いた頃には、すっかり朝日が昇り始める時間だった。

「なあ、光太。オマエは今日のアレ、信じるか?!」

オレの部屋の前で、別れ際にアキラがボソツと言った。

「信じるも何も、なあ……」

今のオレは、言葉もない。

とにかく疲れた。

早く寝たい。

出勤まで何時間寝れるんだ？ オレは・・・。

「オレさあ、足のないバレリーナの話しを思い出しちゃったよ・・・」

アキラが青い顔をしながら言った。

「足のないバレリーナ？ 何それ?!」

「オマエ知らないの？ 都市伝説で有名だぜ!! 20歳になっても覚えてたら死ぬんだよ・・・」

「アキラ、いくつなんだよオマエは?!」

「来月、20歳!!」

ゲツ、1コ上かよ!!

先輩じゃねえか!!

今まで同じ年だと思ってた。

ずっとタメ口きいてたのに、今更オレ年下だったなんて言いづらいな。

黙ってよつと。。。。

「。。。。じゃ、また明日な!!」

アキラは自分の部屋へと帰って行った。

明日なって言っても、もう日付も変わってとっくに今日なんだけだな。。。。

。。。。足のないバレリーナね。

何の話なのか、何の都市伝説なのか知らないけど、20歳までその話を覚えてたら死ぬって?!

その方がよっぽど怖えよ!!



第10話 アキラとあかずの間 4 (後書き)

第10話 『アキラとあかずの間』 おわり

第11話 陽炎のまい 〵1〵

いよいよレストラン編も最終日だ。

思えば色々あった。

激務の皿洗いにヤスベさん？の幽霊事件。

東条一家の登場。

アキラとの出会い。

ケンイチのザリガニ脱走事件。

あかずの間での衝撃体験・・・etc・・・。

「よっ、ここ開いてるう〜？ いいよね、座って？ ダメって言われても座っちゃうもんねえ〜〜！！」

昼食時間、いつもの食堂で、いつものように人より多めにおかずを取り、2杯目のご飯を口に入れた瞬間だった。

少な目の昼食をのせたトレーを持ったカスミが、いつになくハイテンションと笑顔で話し掛けて来た。

いつもはおつかないカスミが、今日は随分ご機嫌と見える。

「ねえ光太あ〜！ 知ってるう〜？！ 今日、小柳輝こやなぎあきらが来るらしいよ〜！」

「はあ？！ マ、マジ〜？！」

さすがにオレもそれにはビビッた。

オレの引っくり返った裏声に、周りの従業員たちがこっちを見た。

小柳輝……。

おめえ〜、小柳輝っていやあ〜、そりゃ〜ビッグネームよ！

ロクにTVなんぞ見ねえ〜オレだってそれくらい知ってるってモンだ！！

そんな小柳輝が今日、ここに来るってえ〜？

ウソだあ〜！

「カスミ……。オマエ、それマジで言ってるの？！」

「私が嘘をつくとも？！」

「まあ、それはそうだけど……」



ぶっちゃんオレは、芸能人に弱かったりする。

お金を払ってでしか芸能人を見たことなかったし、何かTVに出てる人っただけで、そりゃ〜もう、雲の上の人たちだし、輝いて見える。

ぶっちゃん少年時代は、将来、俳優を夢見てた時もあったし・・・。

そんな憧れの芸能人ってヤツに、無料で会えるなんてな。

しかも小柳輝だぜえ〜!!

小柳輝は一昔前の映画スターで、うちの年代の親たちの憧れのスターだ。

歌手としても活躍していて、オレだって何曲か知っている。

中でも『熱き男に』は名曲だ。

特別思い入れのある芸能人なワケではないが、ビッグネームには違いない。

・・・ところで、いくらこのホテルに来るからって、オレたちみたいなヒヨっ子が、そんなビッグネームに会えるのかな?!

会えるワケ・・・ないよな〜。

夕方、グラスをダスターで磨く作業中、隙を見てオレは舞台上稽古しているアキラたちの所に行った。

「小柳輝あゝ？！ オマ、オマ、マジでオマエ言ってるの?!」  
アキラが大声を出した。

目が飛び出しているトコロを見ると、コイツ…………。

「そりゃゝゝ小柳輝はオレの憧れのスターだぜ!! オレのアキラは小柳輝からとったんだ!!」

「ホントかよ、アキラ…………」

「いや、ホント!! ウチの母親が大ファンでさ…………」

アキラの輝話あきらのは永遠に終わりそうにない…………。

オレは隙を見てバックヤードに戻った。

厨房の人たちも、レストランの従業員たちも、みんな小柳輝の話をしている。

中には輝の歌の、鼻唄まで歌っている人までいた。

どうせ会えないのにな、みんな…………

どこか楽しげなみんなを見てみると、今まで小柳輝が見れるかも……って期待してた自分が、少しだけ恥ずかしくなってきた。

夜になり、仕事の合間をこっそり抜け出し、いつものようにホール  
の片隅で、東条一家の相変わらず素晴らしい舞台に見入っていると、  
トントンと肩を叩かれた。

つるぴか係長の松方さんだ!!

「生きてたんすか?!」

思わず本音を言ってしまった。

最近姿を見なかったから、てっきり例のザリガニ脱走事件でこの  
オーナーから消されたのかと……。

「はい?」

どうやら場内が沸いてるお陰で、松方さんにはちゃんと聞こえてな  
かったようだ。

「い、いえ、何でもないっす!!……で、何の用っすか?!」

「小柳輝に酒を注いでくるんだけど、一緒に来てもらえないかなあ  
く?!」

「ふえ〜?!」

何を言ってるんだ?! このおっさん!!

小柳輝だあ〜〜?

酒を注ぐだあ〜〜?

紅白歌合戦でしみじみと酒を飲みながら、輝の歌声に酔いしれてる年配ファンに申し訳ないだろお〜〜が!!

こんな、別に輝ファンでも何でもない若輩者が、そんな大それたマネをして許されるのかあ〜〜?!

ま、注ぐのはこのおっさんで、オレではないだろ〜けど・・・。

・・・って、それより小柳輝、どこにいるの?!

どっ? どっ??

「い、いたあ〜〜!!!!」

一番前の特等席を陣取って、十数名がソファーに腰掛けて舞台を見ていた。

特等席と言っても、即席の特等席だ。

いつもはあんな席はない。

誰が見ても特別扱いのスペースだ。

周囲の客は、小柳輝の存在にみんな気付いているが、カメラのフラッシュもサインも、特等席を囲んだいかついガードマンがしっかり受け付けない様子だった。

・・・油断してた。

てっきりここには来ないと思ってた。

一般ピーポーが集まる大ホールなんかで夕飯を食べるとは思わなかった・・・。

絶対ホテルの部屋から出ないと思ったのに・・・。

そういえば東条アキラの動きにいつものキレがないな・・・。

そうか、あいつ憧れのスターを目の前にして緊張してやがるな？！

ぶっはっはっはっは！！

こりゃ、傑作だ！！

しかし・・・

「ついつい東条一家の素晴らしい舞台に見惚れてしまい、ビッグスターのお出ましなんて全然気が付かなかつたな。

・・・で？

何だっけ・・・？

「さっ、いくよ、光太君！！」

つるぴか係長の松方さんは、オレにナプキンと高級ウイスキーと氷を手渡した。

「頑張れよ、光太！」

栄ちゃんの声が背後から聞こえる。

あれ？

いつもは別なレストランで研修中のカスミとまいもいる。

どうやらホテル側の計らいで、専門学校からのホテル研修のオレた

ちに花を持たせる意向らしい。

その中の代表がオレってワケか？！

ホテル側の計らいは素直に嬉しいが、いきなり過ぎるだろ！！

心の準備ってモンが……！！

ゲッ！！

松方さんが行ってしまった！！

情けなく後ろを振り返ると、カスミが鼻の下に汗をかきながら黙って頷いていた。

何でオマエが緊張してんだよ！！

オレの緊張は、カスミの鼻の下の汗を見た途端なくなった。

行けばいいんだろ？！ 行けば！！

真っ暗い通路を歩き、際立ったオーラを放つ舞台前の特等席を目指した。

途中、松方さんが足をひねってヨロけたので、ますますオレの緊張は吹き飛んだ。

ビッグスターだか何だか知らねえけど、所詮人の子。

思えばオレが緊張する必要なんてどこにもないワケだ！

小柳輝に世話になってたワケでもないしな……。

さてさて、実際の生小柳ってヤツは、一体どんな顔をしてんのかな……？

「……おお！！」

思わず声をあげてしまった。

目の前にする小柳輝は、流石にビッグスターのオーラを放っていた。

座長、東条ハルオの100倍のオーラだ！！

輝は左右5人ずつ、計10人の黒い服を着た男達に囲まれ、真ん中にデーンと腰を掛けていた。

ソファアに深々と腰掛け、何とテーブルに足を乗せている。

もちろん靴を履いたままだ。



な、なんて行儀の悪いヤツなんだ!!

見るからにヤクザな男。

しかし、ここまでふんぞり返った人は初めて見たなあ。

やっぱ、芸能人は違うなあ。

そんな事を思っていると、松方さんに目で合図をされた。

はいはい、オレはアンタのお供ですもんね。

「光太、酒を注げ!! 早く!!!!」

松方さんが指図する。

マジっスか?!

オ、オレが注ぐんスか??!

松方さんは震える手でオレに高級ウイスキーを手渡した。

オレに花を持たせようってのか?

いや、違うな。

ああ、違う。

このおっさんは手が震えて上手く注げないから、オレに自分の大仕事をふっただけだ。

・・・ま、いいけど。

しかし、一体いくらするんだ？ このウイスキー！。

ナポレオンの絵が描いてある。

一口壱万とかしたりして・・・？

・・・まさかな。

「失礼します!!！」

オレは輝の目の前に方膝をつき、目の前のグラスにウイスキーを注いだ。

見下したような輝の目と、オレの獣のような見上げた目が合った。

その瞬間、輝がニヤツと笑った。

・・・ふっ、随分と余裕なモンだな。

そのうち足元をすくわれるぜ、大将・・・。

オレは心の中で、ビッグスターにそう呟いた。

「どうだった、光太!!」

真っ暗な大ホールから抜け出し、明るいバックヤードに着いた瞬間、栄ちゃんが興奮しながら駆け寄ってきた。

「どうもごつもないよ。ただのヤクザなヤロオーだよ」

「光太君すごい。小柳輝にお酒を注いだなんて、一生の思い出になっただねえ〜!」

まいも興奮状態のご様子だ。

一生の思い出って言われてもな・・・。

オレにもプライドってモンがあつてさ、あんなヤロオーに酒を注いだくらいの事を、オレの思い出に刻むのはどうかと思っぞ!

尊敬に値する男だったら別だったけどな・・・。

・・・しかし、よっぽどオレを怒らせちまったようだな、小柳輝。  
ま、仕方ないよな。

テーブルに足、だもんな。

あそこまで天狗だったとは思わなかったぜ、芸能人ってヤツは。  
いい勉強になったな。

今まで芸能人ってヤツを少し尊敬の眼差しで見てたけど、これからは見る目が変わりそうだ。

「良かったね、光太・・・」

カスミが笑顔で話し掛けて来た。

鼻の下の汗がなくなっている。

いつ、拭いたんだろう・・・。

・・・別に、どうでもいいけど。

そんなこんなで最後のレストラン編は終了した。

明日と明後日は念願の休みで、休日明けからいよいよ本館での研修が始まる。

またベルボーイの仕事だ。

1泊4万円の高級ホテル、三葉リゾートパークホテル、本館。

はたして、どんなエピソードがオレを待ち受けているのやら……。

ごっこ期待……ってヤツだな。

第11話 陽炎のまい 〳〵

チチチチチ

小鳥のさえずりで目が覚めた。

何て清々しい朝なんだ。

全開に開かれている窓から気持ちのいい早朝の風が部屋の中に入ってきて、オレの頬を優しく撫でた。

ゆっくりと目を開ける。

相変わらず汚ねえ〜天井だなあ〜。

これじゃあせつかくの良い気分が台無しだぜ！！

天井の染みにガツカリしながらチラリと右側を向くと、いつもの2段ベッドが見える。

上段にはナオヤ、下段にはケンイチが寝ている。

ナオヤはランニング一丁で腹を出して寝ていた。

風邪引くなよあ〜。

ケンイチは・・・お、おい、ケンイチ！！

オマエ暑くないのかよ！

真夏にそんなに布団被って寝るかヨ、普通！！

そういえば、ケンイチもここに来てから散々な目に遭ってるモンな・・・。

最初に入れられた隣の303号室が、殺人事件だか何だか分かんねえ〜けど、本館の客室で死んだ従業員の部屋だったんだよな。

それから一連の怪談話のオンパレードだ。

ケンイチはまだ高2だし、コイツ、昔から臆病だったしな・・・。

今でも何かに怯えて布団被って寝てんのかな？

・・・まさかな。

オレはゆっくりと上半身を起こし、清々しい風が吹く、窓側を見た。

「よっ、早いな、光太！！ 今日、早番？」

いつもは寝起きの悪いタケシが、上半身裸、トランクス一丁で爽やかな笑顔を見せた。

「いゝゝゝや、休みだ!! タケシは？」

「な、なにい？ 休みだつてえゝゝゝ?! ヒキョゝだぞ!!」

何が卑怯だコノヤロオ!

爽やかな笑顔を見せるモンだから、てつきりタケシも今日は休みだと思つたんだが……。

「オレは今日は早番だよ。光太、明日休み？」

「あ、ああ、休み休み!!」

「オレも明日休みだ。休み合つたの久しぶりじゃね？」

「……そういえば、そうだな。どうする?どっか行くの?」

オレはタケシの車での外出を期待して聞いた。

「……別に」

……だよな。



外出って言っても、この辺ロクな所ねえ〜しな。

変な犬に追いかけられたり、幽霊屋敷でオバケに追いかけられたり、ドライブしたってロクな事ねえ〜しな。

どうやらオレは、このホテルで働いてから、随分ネガティブになったようだ。

このままだと、うつ病も時間の問題だな……………。

……と、その時！！

「今晚、この近くで祭りがあるらしいぞ。花火大会もあるってよ！」

タケシの下の段で、栄ちゃんがケツを搔きながら言った。

何だ、栄ちゃんも起きてたのかあ〜？

しかし、この2人が誰よりも早起きするなんて珍しい。

「花火大会？ 何発??？」

タケシがトランクスからはみ出したモノをしまいながら、下の段の栄ちゃんに聞いた。

「100発くらいだろ？ 小さな公園の祭りらしいから、そんなに期待できないと思うぞ！」

ひゃっぱつ？

それだけかよ、随分シケた花火大会だなあ〜〜。

「面白そうだな、今晚見に行こうぜ、光太！！」

マジかよ、タケシ！！

オマエ、どんな田舎育ちなんだよっ！！

普通、花火大会って言やあ〜最低でも3000発くらいは上がるぞ！

「カスミちゃんとまいも誘って行こうぜ！！ もちろん栄ちゃんも行くんだろ？」

おっ？

珍しくタケシの口から女子の名前が出たぞ。

「あ、ああ……。別にいいぞ。オレは今日と明日は光太と一緒に休みだからな！」

栄ちゃんが楽しそうに答えた。

そうか、タケシー!!

引き続き『栄ちゃんとまいの恋のキューピット作戦』再始動ってワケね。

そうと決まれば話しは早い!

何か無性にワクワクしてきたゼイ!!

今晚は5人で祭り&花火大会だあああ~~~~!!!!

どうやらオレのネガティブ+うつ病は、単なる妄想にすぎなかったようだ。

やがて、あっという間に夜。

オレは今日、貴重な休み、何をして過ごしたんだっけ??

洗濯だろ? 昼寝だろ? あと、何してた?

ちつきしよ~~~~!!

勿体無いったらありゃしない!!

ムダな休日を通<sub>ご</sub>しちまったあああああ~~~~!!

こうなったら、今からエンジョイしてやる。

爆走してやるぞおお~~~~!!!!

寮の風呂からホカホカになって帰ってくると、部屋には誰もいなかった。

アイツら気が早いなあ~~~~。

・・・って、オイ、もう19時かよ!!

花火は100発しか上がらないんだぞおお~~~~!!!!

終わっちまうよ、早くしないと。

オレは急いで支度をして部屋を飛び出した。

食堂を猛スピードで通過した時だった。

「光太兄ちゃん！」

ケンイチの声だ。

社員食堂を覗き込むと、ケンイチとカスミが談話室で誰かを待っているようなカンジでソワソワしていた。

「アレ？ カスミ？ オマエ、花火大会行かないの??」

「ケンちゃんと一緒に、アンタを待ってたのヨ（怒）!!」

カスミのこめかみに、十字路が出来ている。

マンガとかでよく見かける、アレだ。

青筋ってヤツ？

別にカスミともケンイチとも待ち合わせをしていたワケではなかったが、どうやらこの2人はオレを待っていてくれたらしい。

優しいんだか、優しくないんだか、カスミは外に出るまで恐い顔をしていた。

ヒュ~~~~

バアアアアア~~~~~ン

寮から出た瞬間だった。

夜空に小さくだが、綺麗な花火が花開いた。

「ここで見るってのもいいかもね・・・」

花火の光で、明るく虹色に輝いたカスミが呟く。

茜色の頬。

碧色の瞳。

桃色の唇。

紫色の耳。

蒼色の髪。

黄色の首。

橙色の肩。

そんなカスミの七色の横顔を見た瞬間、オレにかつてない衝撃？

稲妻？・・・何が走った！

言葉では言い表せない、何が……………。

し、しかし、オ、オレは何とかその衝撃？ 稲妻？ ……何かを振り払い、どうにか平静を保とうとした。

・・・保とうとしたって言うより、保った。

「寮の玄関で花火観覧？ 風情がないだろ。せつかくだから、その祭りってヤツ見に行こうぜ！」

「うん！」

オレたちは3人並んで、花火が上がった方角に歩き出した。

あのカスミが素直に返事した。

しかも今まで聞いた事もない、可愛らしい返事だ。

かつてない衝撃に、またもやオレは平静さを保つのに必死だった。

ヒュ……………

バアアアアア……………ン

「綺麗だねえ〜！」

カスミが花火を見て楽しそうに微笑んだ。

あのカスミが、今夜はいつもと違く見えるのは・・・

夜道だから？

これから祭りに行くから？

花火大会だから？

この雰囲気のせいだろうか・・・？

「そういえばさ、昔、ボクが小さい頃はさ、3人でよく花火やったよね・・・」

ケンイチが懐かしそうに昔を思い出しながら語った。

「そうよね。何回か、花火大会も行ったよね・・・」

「カスミおねえさん、浴衣似合ってた、綺麗でしたよねえ〜〜」



「そお〜〜お？ 照れるワねえ〜〜」

オレはその時、「浴衣なんて着てなくても、今だって十分綺麗だぞ」  
・・・って言いそうになったが、寸前で止めた。

昔はそれくらい簡単に言えたのに、今はとても言えない。

言ってしまったら、何かが壊れてしまうような気がした。

せつかくのいい雰囲気、いい関係・・・そんなモノが崩れてしまう  
ような気がした。

・・・大人になるって、面倒くさい。

「なあ、カスミ、あの洋ダンスの髪の毛ってどうなった？？」

オレはなんとなく話題を変えてみた。

「アレねえ〜、実はずっと開けなかったんだけど、みどりがあまり  
にも毎日イライラしてたみたいだから、まいと一緒に寮長に相  
談に行ったの。そしたら、寮長が部屋に来てくれて・・・」

「・・・来てくれて？」

何気なく聞いた話題だったが、最近女子寮の近況を聞いてなかった  
ので、オレは息を呑みながらカスミの話に耳を傾けた。

ケンイチは聞きたくないらしく、少し離れて小石を進行方向に蹴り  
始めている。

カスミの部屋の洋ダンスのネクタイ掛けには、毎朝、髪の毛の束が  
かかっているという謎の怪奇現象があった。

捨てても捨てても、次の日になると髪の毛の束がかけてあるという。  
原因不明であまりに不気味なので、みどりもリサも、カスミもまい  
も洋ダンスを使わなくなったのだ。

・・・とは言っても、そんな不気味な洋ダンスと生活を共にするの  
は過度のストレスになる。

何といっても、毎日髪の毛の束が増えるなら、いつかはダンスの中  
が満杯になるだろう。

もしも大量の髪の毛がダンスから溢れ出てきたとしたら・・・

「今までそんな話し聞いた事ないし、こんなケースは初めてだから  
って言って、寮長が掃除機を持って来たのね。それで、メグとか他

の部屋の「も来て、みんなで見守る中、寮長が洋ダンスを開けたの。  
そしたら……」

「……そしたら？」

第11話 陽炎のまい くら

「カラツポだったのよ!」

はい??

オレは開いた口が塞がらなかった。

有り得ねえくらだろ、それは……!!

だって、開ける度、毎日あったんだろ? 捨てても捨てても毎日出現してたんだろ?・・・髪の毛の束。

だったらずっと開けてなかったんだから、髪の毛でいっぱいになってるはずだろ!!

オレが変な顔をしていたせいだろうか?

カスミが淋しそうな顔をしている。

疑ってるワケじゃねえが、信じられねえくらだろ、フツツ!!

でも、カスミが嘘をつくようなヤツじゃないってのは、オレが一番

良く知っていた。

きつと、カスミはオレが疑ってるんじゃないかって思ってるんだろ  
うな。

こういう時、何て声を掛ければいいんだろ???

オレはとにかく、考えずに言葉を発した。

「・・・上手く言えねえけど、元気だせよ。そのうち、また出て  
くるって!」

「えっ?」

カスミの眉毛が吊り上がり、眉間に強烈なシワができた。

アレ?

オレ、今、変なコト言っただけ???

それからオレたちは、無言のまま大通りまで歩いた。

ケンイチは心配そうにオレとカスミを横目で交互に見ていたが、オ

レは余計な事は言わずに黙っていた。

また口を滑らせて変な事を言ったら、今度こそ間違いなくカスミの雷が落ちるから……。

近くから太鼓の音や、賑やかな声が沢山聞こえる。

大通りの急カーブを曲がると、物凄い人で賑わっていた。

誰だ?!

小さい公園で小規模の祭りだなんて言ってたヤツはっ!!

……つたく、相変わらずテキト々な情報ばっかだなあ。

右を見ても左を見ても、屋台、屋台、屋台。

人、人、人。

花火も夜空にガンガン打ち上がっている。

1000発だっけ?

10000発の間違いじゃねえ〜の?

ここに来るまでにとっくに100発越えてるだろっ!!

人ごみには、見たことのある顔ぶれもある。

別館の従業員や、レストラン、厨房の連中。

ホモの大塚さんは恋人と楽しそうに金魚すくいをしていた。

地元の人たちに、観光客や宿泊客も加わって、祭りは大賑わいを見せている。

カスミはメグミとココロとリョウコを見つけてはしゃいでいた。

部屋が違うから、普段はあまり会わないのかな？ あいつら……。

……おっ?!

アレは……?!

やぐらの高い所の中央で、かつこよく太鼓を叩く中年がいた。

額の汗が銀色に光り輝き、バチを握った両腕の筋肉の盛り上がり、男らしさを醸し出している。

何よりふんどしがまぶしい。

今時ふんどしかあゝゝ、風情だねえゝゝゝ、なんて思いながらよく太鼓を叩く中年を見ると・・・・・・・・

「ハルオぢやねえゝゝゝか!」

なんと、ふんどし一丁で太鼓を叩く熱い男は・・・・いぶし銀、東条ハルオだった。

流石だ!!

やっぱり芸能人は違うね。

小柳輝とは大違いだね、ウン。

その時、となりのケンイチが呟いた。

「あの人、パンツはいてないよ・・・・」

ケンイチのしている方角を見ると、何とそこには大きなウチワを振りかざすフユヒコの姿があった。

背中に祭と描かれたハッピをはおり、やぐらの周りをグルグルと踊りながら回っている。



ハルオにやらされてるのかな・・・？

「よく見てみるよケンイチ。パンツはいてないように見えるけど、肌色のスパッツみたいなのはいてるぞ！」

「ホントだ。なぐんだ・・・」

ケンイチが何か残念がっている。

フルチンが良かったのか？

でも、公衆の面前でフルチンはマズイだろ、フルチンは・・・

「ゴメン、待った？」

カスミが戻ってきた。

「いや、別に・・・」

「あっ、アレ、座長だね。あと、あのパンツはいてないように見えるのは・・・フユヒ君？」

そうか・・・

やっぱりカスミの目にも、彼はフルチンで踊っているように映るのか・・・

頑張れ、フユヒコ。

「・・・って事は、アキラ君とかもいるのかな？」

「どうかな？ でも、あいつから祭りの誘いはなかったからなあ」

「・・・あつ、いたあ~~~~!!」

カスミが指差す方向には、知らない女と仲良く歩くアキラの姿があった。

一丁前に浴衣なんか着やがって、あのヤロあ~~~~!!

アキラの隣の女性はピンクの浴衣姿で、年はうちらよりは少し上っぽい。

20代前半ってトコか？

水風船なんぞ持って、アキラにベッタリくっついて楽しそうだ。

「妬いてるの？」

カスミがニヤけ顔でオレを覗き込む。

「・・・何、言ってんだよ！！ アキラは男だぜ！！ アイツだつて彼女くらいいるだろ。あいつモテるし」

「でもホラ、光太とアキラ君って超仲良しじゃん。いつも一緒にいるし。アタシはてつきり2人は付き合ってるのかと思ってたヨ・・・」

「馬鹿言うんじゃないやねえよ！！・・・アホか・・・?!」

「・・・良かった。」

・・・へ？

何が???

「ホラ、早くあっち行こ！！ アキラ君に見つかっちゃっしょ！！  
ジヤマしたくないでしょ？」

オレはカスミに引っぱられた。

カスミに引っぱられ、人ごみを避けながら小走りしていると、まい

と擦れ違った。

まいの隣には見覚えのある男がいる。

軟派な風を漂わせるヨレヨレのアロハシャツに、今時珍しいロングヘアー。

18金のネックレスと左手首に光る金のブレスレットが眩しく輝く。

・・・ナツオだ!!

まいはカスミを見つけると、見たこともないくらいの笑顔とハイテンションでカスミの所へ来た。

ナツオがキラキラした歯を見せながら、カスミに手を振ってやがる。

「あの人、いつも色んな女と一緒にいるよね・・・」

ケンイチ、いたの？

オマエの存在、忘れてた・・・ゴメン。

「オレはアイツの事、良く知らねえから分かんねえ。別にどうでもいいし、カンケうねえし・・・」

それより、さっきのカスミの一言が気になった。

『・・・良かった。』

良かった??

何がだ?!

オレはさっきの会話をもう1度思い出してみた。

『妬いてるの?』

そこでカスミがカワイイ顔（今日だけ特別?）でオレを覗き込むんだ。

『・・・何、言ってんだよ!! アキラは男だぜ!! 彼女くらいいるだろ。あいつモテるし』

呆れ顔でオレは言った。

『でもホラ、光太とアキラ君って超仲良しじゃん。いつも一緒にいるし。アタシはてっきり2人は付き合ってるのかと思ってたヨ・・・』

何かいつものカスミじゃないような口振りだった。

オレを馬鹿にして冗談っぽく言ったようには聞こえなかった。

『馬鹿言うんじゃないやねえよ!! . . . アホか . . . ?!』

さらに呆れ顔でオレは言った。

『 . . . 良かった。』

ここだ!!

何でそこで、そのセリフが出たのかが分からない。

何が良かったんだ?!

オレとアキラがホモじゃなかったから良かったのか?!

. . . いや、違う。

何か、囁くような『 . . . 良かった。』だった。

そしてあの時、今までカスミからは感じた事がないような、そんな  
雰囲気を感じたんだ。

. . . . . なぜだ??

どうしてオレは、そんな事を気にしてるんだ . . . ?!

オレらしくないぞ、オレ！！

・・・と、その時、オレの視界に見覚えのある人物が飛び込んできた。

・・・あれ？

あそこにいるのは・・・

第11話 陽炎のまい 4

「しっかし、ウチのクラスの男子って、ホントみんなガキだよねえ  
」

「何を今更……」

「ねえ、カスミちゃんはそう思わない？」

「そりゃ、光太みたいな幼稚なヤツを筆頭に、ウチのクラスはみ  
んな子供よ！」

「でっしょ。だよねえ」

「……で、彼は何？ ……何でまいちゃんがあんなヤツと一  
緒なワケ？」

「カスミちゃん、ひどおしい。ナツオ君はそんな変な人じゃ  
ないんだからねえ」

「付き合ってるの？」

「やめてよカスミちゃん。私とナツオ君は、そういう関係じゃ  
ないんだからあ……！」

「……でも、仲良さそうじゃん」



「だってホラ、ナツオ君って私たちより年上だし、モテるし。私の事はただの友達としか見てないよぉ〜」

「分かんないよぉ〜。恋は突然訪れるから・・・って、いつものま  
いちゃんのセリフじゃん！」

「もう！ からかわないでよ!!！」

「お〜い、まい〜!!！」

ナツオがまいを呼んでいる。

「は〜〜い!!！・・・じゃ、またね!!！」

まいはナツオの元へ駆け寄って行った。

そんなカスミとまいの会話なんてつゆ知らず、オレは屋台をつまらなそうに眺めるタケシと栄ちゃんを見つけ、2人の元へ歩み寄った。

心なしか、タケシと栄ちゃんが怒っているように見える。

こいつら、喧嘩でもしたのか？

オレを見つけるやいなや、タケシがオレの耳元で囁く。

「・・・まいがナツオに引っ掛けられたぜ。どうする？」

どうするも何も、どうするの？

オレには状況が全く読めないんだが・・・

何か、あった？？

「どういう事だ？ 確かにまいとナツオが一緒にいたのは見たけど・・・」

オレは栄ちゃんに聞かれないように、小声でタケシに聞いた。

「オマエ知らないのかよ。ナツオの醜態。アイツはとにかく手が早いぞ。今日は確実にまいを狙ってるぜ！」

ナツオの醜態？

手が早い？

まいを狙う???

・・・ま、だいたい読めてきたぞ。

「栄ちゃんは見たのか？ アイツらが一緒にいたのを・・・」

「・・・ああ。オレと一緒に見たよ」

「そうか・・・」

参ったな、こりゃ。

これはカスミがキレるのも時間の問題だな。

「光太！！ 話があるの・・・ 2人だけで・・・」

ホラ、来た。

カスミはオレをひと気のない場所まで連れてきた。

空き地に土管、まるでドラえもんの空き地みたいな所だ。

「・・・そこなくちゃ！！」

オレはファイティングポーズをとってみたが、カスミは少しも笑ってくれない。

ちよつと高度なギャグだったかな？？

「まいちゃんの事なんだけど・・・」

「それなら、ボクも一言あります・・・」

アレ？

ケンイチ、いたの??

カスミもオレと2人きりで話しがしたかったんじゃないのか？

ケンイチを含めると3人になっちゃわない？

ケンイチがいても、2人だけの会話になるっていうのか??

それじゃ、ケンイチに失礼じゃないのかあ??!

・・・でも、この重苦しい雰囲気の中、オレたちに黙ってついてきたケンイチも、自分の存在がオレとカスミ2人だけの会話の邪魔にならないって分かっていたのか？

・・・ま、今はそれどころじゃない、な。

「あのナツオって人、ボクが知ってるだけでも10人くらい彼女がいますよ!!!・・・それに、これは凄く言い辛いんだけど・・・」

「何だよケンイチ。話せよ！」

「光太兄ちゃんと、カスミおねえさんと同じクラスの女の人なんだけど……」

「それなら知ってるわ。ココロでしょ？」

「……うん」

はて???

何のこっちゃ。

オレはケンイチとカスミが何の話しをしているのか全く読めない。

ココロが……?

ココロって、うちのクラスの女子のココロだろぉ?!

ナツオは、ケンイチ曰く、10人くらい彼女がいる……

そのココロが、ナツオと……?

ナツオと・・・?!

ココロとナツオが、×××ってか?!

ココロの性格上、自分から声を掛けるとは思えない。

オレの知ってる範囲でしかないが、ココロは純粹で真面目なヤツだ。

・・・って事は、やっぱりナツオが言葉巧みにココロを口説き落と  
して×××・・・?!

まいが危ねえっ!!!

その時、カスミがオレに救いを求めるような表情を見せた。

おそらくカスミも、まいとナツオを想像して、何か嫌な予感がした  
のだろう・・・。

分かったよ、カスミ!

オレたちが今、出来ること、やってやるっじゃねえっかっ!!!

精一杯なっ！！！！

・・・その時！！

カスミが口を開いた。

「あのナツオってヤツ、このままじゃ、まいちゃんを・・・」

「分かった、カスミ。皆まで言うな。オレたちは仲間だ。それに、まいは栄ちゃんと・・・だろ？！」

「・・・うん！」

オレはカスミの腕を掴むと、タケシたちの所へ走った。

「おい、タケシ！！ 栄ちゃん、来いっ！！！！」

「ああ？！ どこにだよ・・・」

タケシが面倒くさそうに言った。

「どっつて、決まってるだろ！ まいを助けに行くんだよ！！！！」

オレの一言に、栄ちゃんの覇気が上がったのを感じた。

「力を貸してくれ！ 仲間だろ、オレたち！！」

「・・・分かったよ！！」

タケシが右手の親指を立てた。

人ごみを避けながら、オレたちは走った。

まい、どこだ？！

見つからない！！

「光太、どうする？！ 手分けして探す？」

その時、オレは今までずっとカスミの腕を掴んでいた事に気が付いた。

「・・・あ、ゴメン」

オレはすぐに手を離れた。



「うづん、いいの。それより、これから、どうするの？」

「心当たりがあるとすれば、駐車場じゃないかな・・・」

ケンイチだ。

「駐車場・・・？」

「うん。ホラ、ボク、売店やってるじゃん。たまに外でもやるのね・・・」

初耳だ。

「・・・で、社員の駐車場を通るんだけど、そこでナツオって人が車に乗る所見た事あるんだよね・・・。多分、自分の車だと思うんだよね。何かその車、ナツオって人に似てたし・・・」

あのヤロー、車を持ってたのかっ！！

みんなで一緒に全国を旅してるんじゃないのか？！

それより、ナツオに似てる車って・・・

ケンイチ、オマエの表現、何となく通じるぞ！！

「それなら、オレも良く知ってるぞ!!」

栄ちゃんだ。

今まで沈黙を保ってきた栄ちゃんが、ついに口を開いた。

今の栄ちゃん、非常に不気味だ!!

この人、絶対、敵に回したくない。

「オレ、夜中に風呂に行くだろ、・・・そんな時、連絡通路の窓から見えるんだよ、走り去る車が・・・。だいたい、いつも同じくらいの時間にな。いつも助手席の女は違うってのも、運転席にいるのがアイツだったのも・・・!!」

そこまで言うと、栄ちゃんは上下の歯を力強く閉じた。

「タケシ、車、出せるか?!」

場合によっては、タケシの車が必要だ。

「当然!!」

タケシの背中と横顔がいなせだ。

「ケンちゃん、場所教えて!!」

「こつちだよ!!」

オレたちは走った。

とにかく全速力で。

みんな、嫌な予感がしているに違いない。

大通りを抜け、敷地内に入った時だった。

三葉リゾートパークホテル側から町方面へ右折する車を発見した!!

………ナツオとまいだ!!

「急げっ!!」

タケシが叫んだ。

「ちつきしよ~~~~!!」

栄ちゃんも叫ぶ。

「タケシ、鍵は?!」

もしも鍵が部屋の中だったら、かなりのロスになる。

「ある!!」

タケシがポケットから鍵を取り出した。

「ナイスだ!!」

オレたちはタケシの車に辿り着くと、大急ぎで乗り込んだ。

栄ちゃんは助手席に、オレとカスミとケンイチが後ろに乗った。

ガールルルン

ブオオオオオオオオオオ

凄じい勢いでタケシの車は走り出した。

数秒後には敷地内から出ていた。

車内には緊張が走る。

おそらく、みんな同じ事を考えているのだろう。

ナツオの行き先……。

『ラブラブホテル じゃん子のお城』に違いない……と。

なんたって、この辺のラブホはそこしかないもんな……。

は、速いっ!!!

予想以上にタケシの車は速かった。

……が、ナツオの車に追いついた瞬間だった!!!

まいを助手席に乗せた車が左折する。

その瞬間、オレの目には、目の前の光景がスローモーションに映った。

ほんのちよつとだった。

あと、ほんのちよつとだけ、早く追いついていねば……。

最悪の結末だ!!!

オレたちの目の前で・・・

まいを乗せたナツオの車が・・・

『ラブラブホテル じゃん子のお城』に入っていくなんて・・・

スローモーションで口を大きく開けるタケシ。

スローモーションで口を大きく開ける栄ちゃん。

スローモーションで口を大きく開けるカスミ。

スローモーションで口を大きく開けるケンイチ。

スローモーションで口を大きく開けるオレ。

しばらくオレたちの時が止まった。

沈黙を破ったのは、ケンイチの一言だった。

「どうして、中に入らないの?!」

愚問だ。

「ホテルに入られた時点でアウトだよ……」

減速しながらタケシが力なく呟いた。

「大人になれば分かるよ……」

栄ちゃんも哀愁の眼差しで呟く。

オレの隣で黙り込むカスミ……。

こんな時、どんな言葉を掛ければいいんだ?

……神様?

もし、いるなら教えて欲しい。

あんな悔しそうな顔をしているカスミを見たのは生まれて初めてだった……。





第11話 陽炎のまい ㄥ4ㄥ (後書き)

第11話 『陽炎のまい』 おわり

第12話 bye bye 夏男 〔1〕

ラブホから数十メートル離れた所にタケシは車を止めた。

しばらく呆然と、静止した森林を眺めていると……

ラブホからトボトボ歩いて出てくる人影があった。

人影はゆっくりと三葉リゾートパークホテル方面へ歩いている。

「まいちゃん??」

カスミが叫んだ。

タケシの車から飛び出すと、カスミは淋しそうなまいの背中を追いかけた。

「オレも行ってくる!!」

オレも降りようとして、ドアに手をかけた時。

「待てよ光太。ここはカスミちゃんに任せよう……」

栄ちゃんの低い声に、オレの手はすぐに引っ込んだ。

そうだよな・・・

オレらが行った所で、何がどう変わるワケでもない。

むしろ状況を悪化させるだけかも・・・。

両手で顔を隠すように溢れる涙を流し、うつむいたまま、まいは歩道を歩く。

そんなまいにカスミが追いついた。

突然のカスミの登場に一瞬驚きを見せたが、充血した眼を隠すように、まいはまた、うつむいた。

こんな時、何て声を掛ければいいんだろう・・・？

いいやつ、テキトーに行こっ!!

「陽炎みたいな恋ね・・・」

カスミは慰めるでもなく、笑みを溢しながら優しくそう言った。

「カスミちゃんには言われたくないわ!」

うつむいたまま、まいは素っ気無く言った。

「ど、ど、ど、ど、どという意味よ!」

カスミが少しだけムツとして訊く。

「そのまんま霞のことよ。カスミちゃんだっていっつも霞んで見えるような儚い恋ばかりしてるじゃん・・・」

少しだけ正面を向くまいだったが、相変わらずカスミの方を向く事はなかった。

「意味わかんない!」

カスミは一瞬キレがあったが、状況の空気を読んで、ここはグッと堪えた。

B型同士、いっつも大事なシーンでこうなるのよね・・・

お互い擦れ違いの会話・・・

カスミは少しだけ溜め息をついた。

哀しそうなまいの横顔。

そんなまいを見て、カスミはどうしても放っておけなかった。

「大丈夫？」

カスミがそう訊ねると・・・

「ウン。向こうがシャワー浴びてる時に逃げてきちゃった！！・・・怖かったんだ、正直言つて。初めてだし・・・。怒ってないかナ、アイツ・・・？」

まいは正直に胸中を語った。

「いいんじゃない？ あんな『運命の人』でもないヤツ・・・。どうでもいいじゃない！」

まいちゃんには、あんなナツオみたいな軟派なヤツ似合わないよね。

やっぱり硬派でたくましくて、男らしい人じゃないと。

そう、あの人みたいなの、ネ。

「はい？ 何よ、その『運命の人』って！！」

まいが何かを察したのか、身を乗り出してきた。

「栄ちゃん！！」

「カスミちゃあ~~~~ん。いいかげんにしてよあ~~~~ん！！」

いつの間にか、まいにいつもの笑顔が戻っていた。

2人はそのまま女子寮へと歩いて行った。

一方その頃……

ガコーン

「遅せえ〜な、あのヤロオ〜！！」

タケシが怒りの拳をハンドルにぶつけた。

「そろそろ出てきそつなモンだがな……」

暗闇の車中、助手席の栄ちゃんの目が恐い。

おいおい、雰囲気ヤバイぞ・・・

ホラ、ケンイチの心配そうな顔つたらないだろ？！

まいの身に何もなかったのは明白なんだから、もう帰るつよつて顔してんじゃん。

どうすんの？

ナツオが出てきたら、車に体当たりでもすんの？？

引きずり出して、ボッコボコのギタンギタンにでもすんの？！

そのまま首を絞めて、その山奥に埋めるのか？！

お、オレは監獄だけは御免ごつむるぞ！！

「出て来たっ！！」

ナツオのオープンカーが『ラブラブホテル じゃん子のお城』から出て来た瞬間、タケシが車から降りた。

同時に栄ちゃんも降りる。

オレも降りる。

ついでにケンイチも降りた。

道路の真ん中で、覇気を身にまとった男4人が、ズラリと横に並んだ。

ポケットに手を入れて、あごを突き出し睨みつけるタケシ。

パンパンに膨れ上がった両腕の筋肉がピクピクと痙攣し、軽くうつむいた状態から睨み上げる栄ちゃん。

勇む2人に後押しされるように少しだけ前に出て、真ん中で腰に手を当てるオレ。

一応みんなのマネをしてみるが、どうにもさまにならないので、一歩下がって腕を組んでいるケンイチ。

ナツオがラブホから出た時のヘッドライトで照らされ、オレたちの姿は暗闇から浮かび上がる。

4人のシルエットがとてもカッコいいんじゃないか・・・と思う。

ホラ、こうして4人が一列に並んで立ってるシチュエーションって、滅多にないじゃん。



道路の真ん中でさ……。

今のオレたち絵になるよ、絶対。

……でも。

ブルルルルルル……。

ナツオはオレたちの存在に気付かないまま、排気ガスをいっぱい吹きかけて反対方向へ行ってしまった……。

そくだよな、オレたち立ってる所、三葉リゾートパークホテル方面じゃなくて、町方面だモンな。

せめて、一瞬だけでも気付いてほしかった……。

カッコいいオレたちを、一目だけでも見て欲しかった……。

排気ガスでしかめっ面をする栄ちゃんと、ナツオの車のテールランプで眩しい顔をしたタケシからは、さっきまでの覇気はすっかり見られなくなっていた。



第12話 bye bye 夏男 〳〵

オレたちが社員食堂に辿り着いた頃には、カスミとまいが談話室で楽しそうにおしゃべりをしていた。

さつきまでの禍々しい雰囲気はどこへやら・・・

下駄箱でアキラと擦れ違う。

浴衣姿のアキラは、ニコニコしながら林檎飴の棒をくわえて草履を下駄箱に入れている。

「アレ？ さつきの彼女は??」

つついオレは、余計な事を聞いてしまった。

今はコイツの自慢気な恋愛話など聞きたくもない気分だったので・・・

「ふえっ?! 彼女?? 何だソレ?!」

アキラがすつとぼけてやがる。

オレは楽しそうにベタバタしてるテーマを祭りの大通りで見掛けてんだよ。

オレもカスミも、ケンイチもな・・・

・・・と、その時！！

ナツオが車のキーホルダーをクルクル回しながら玄関に現れた。

一瞬でその場の空気が変わる。

栄ちゃんとタケシが玄関前で仁王立ちだ。

異変に気付いた寮長がこっちを気にしているほどだ。

ナツオは栄ちゃんとタケシに気付いてるのか気付いてないのか、シラツとした顔で2人を通り過ぎ、そのまま社員食堂へ入っていった。

マズイ！！

このままじゃ、まいと鉢合わせだ！！

そう思った時には遅かった。

ナツオは談話室のカスミとまいのテーブルへと真っ直ぐ向かった。

そして、何を言うのか、この男、信じられない事を口走ったのである。

「オイ、テメー、何逃げてんだよ！ 金返せ、バカヤロー！ ホテル代出せよ、今すぐ！！」

オレは一気に血の気が引いた。

こ、殺されるゾー！！

え、栄ちゃんとタケシに、殺されるゾ、ナツオ~~~~~！！！！

まいは仰天して目を丸くして固まっている。

まいの向かい側に座っているカスミも、今の状況を頭で整理できないらしく、ナツオとまいを交互に見ながら口をパクパクさせているだけだ。

そんな中、一番最初にぶちキレたのはタケシだった。

怒りでタケシのTシャツが散ってしまっんじゃないかと思うほどの  
凄まじい形相だ！

「・・・ざけんな、コラッ！！！」

タケシが怒鳴った。

ナツオとまいとカスミはすぐにタケシの方を見る。

タケシの拳はポケットの中で今は見えないが、おそらく怒りで固く  
握りしめられていると思われる。

ガッ

「待てっ！！！」

その時！！

ガツンガツンと歩み寄るタケシを、思わぬ男が止めに入った。

栄ちゃん？！

何と、栄ちゃんがタケシを羽交い絞めにしている。

「放せ、栄作っ！！！」

珍しくタケシが栄ちゃんを呼び捨てにした。

修羅場だ！！

あそこの区域だけ修羅場だ！！

「うるせ〜！ アタマを冷やせ、タケシ！！ こんなヤツ、やっても空しくなるだけだぞ！！」

栄ちゃんが尤もな大人の意見を・・・

そんな栄ちゃんからは、タケシ以上の怒りのオーラを感じるのは気のせいか？！

オレの気のせいなのか？？！

現場は騒然としている。

食堂と談話室には、祭り帰りの寮のヤツらでいつもより人が多い。

みんなタケシと栄ちゃんの剣幕に押され、その場で静止状態だ。

「どうした、どうした?! 何でオマエら喧嘩してんだよ!! やるなら外でやれって!!」

アキラだ。

アキラが眉をハの字にして、止めに入ってきた。

大したモンだ。

あの修羅場区域に無防備で入って行くなんて・・・

・・・でも、ちょっぴり冷や汗をかいている。

こいつ内心かなりビビってるに見える。

少しだけ足もガタついてるし・・・。

「オマエはカンケーね〜から、あっち行ってるヨ・・・」

ナツオがアキラを軽くあしらった。

・・・ナツオのヤツ、よっぽどの自信だな。

オレらを随分と下に見てるようだ・・・。



ナツオの余裕の表情を見て、オレもムカっとしてきた。

おそらく喧嘩になったら、確実にナツオはのされるに違いない。

タイマンでも栄ちゃんとタケシには敵わないだろう。

栄ちゃんは空手家だし、昔、腕相撲でラグビー部を全滅させたという伝説を持つ猛者だ。

一方、タケシは誰もが知ってる元暴走族。

喧嘩なら百戦錬磨。

どうする、ナツオ？

「喧嘩したってしょうがないだろ、子供じゃないんだし。話し合いで解決しろよ、オマエら！」

アキラは、どうにかタケシとナツオを冷静にさせようと必死だ。

「いいから、いいから・・・」

ナツオが薄っすらと目を閉じ、微笑みを浮かべながらアキラをまたもや軽くあしらう。

「オマエ、ムカつくんだよ!! オモテに出ろっ!! オラ、オモテに出ろっ!!」

タケシが激高した。

「落ち着けて、タケシ!!」

怒り狂うタケシを、冷静に羽交い絞めにする栄ちゃん。

しかし、栄ちゃんの羽交い絞め、凄い……。

あのタケシが全く動けないでいる。

一生懸命、腕を振ったり足を出したりしているが、全く手出し出来ない状態だ。

「……一体どうした? ナツオと誰が揉めてんだ?!」

アキラが小さな声でカスミに訊ねた。

「……」

カスミは困った顔でまいを見た。

まいは今にも泣き出しそうな顔でうつむいている。

オレはそんなカスミとまいを見て、何もしてやれない自分に対して、  
少しずつ腹が立ってきた。

・・・オレは一体、何なんだ？

ただの傍観者か？

目の前で困っているカスミやまいを、ただ黙って遠くから見ている  
だけで、少しも助けてやれないのか？

思えば、まいを助けようって言い出したのはオレじゃねえのか？！

全然関係ない、あのアキラだって頑張ってるっていうのに。

これじゃ、ただの男じゃねえ〜か。

そこら辺の、どうでもいい、ただの男じゃねえ〜か。

その時、オレの背後で怯えているケンイチが見えた。

・・・ケンイチ。

オレはケンイチの前ですら、男を貰けないのか？

やっぱりオレは、腑抜けな、ただの男なのか？

みんなが困ってるのに、助けてやれず、ただ黙って見てるだけの、ただの男なのか？

そんなんじゃない。

オレは・・・

オレは・・・

オレは・・・！！

オレは、漢<sup>おとこ</sup>じゃあああ~~~~~！！！！

その時、オレの中の不動明王（光太の勝手な想像）が、メラメラと炎を上げた。

気が付くと、オレも修羅場の中に入っていた。



第12話 bye bye 夏男 く3く

いつの間にか社員食堂の人だかりに、クラスの女子たちもまぎって  
いた。

カスミとまいの同部屋の、みどりとりサ。

それに、リョウコとメグミ・・・

ナツオと何か関係があると噂される、ココロもいる。

みんな修羅場区域には近付けないでいた。

寮長は何を考えているのか、この騒ぎでも部屋から出ようとせず、類  
について社員食堂を遠くから見つめているだけだ。

子供の喧嘩に大人が首を突っ込むなってヤツか？

・・・ま、今は誰にも邪魔されたくない状況だから、寮長が止めに  
来ないのは願ったりだけど。

ホモの大塚さんたちもいる。

何かみんな、他人事だと思って楽しそうだ。

そりゃ〜、花火大会の興奮も冷めやらぬ時に、こんなサプライズを見せられちゃ〜な。

・・・と、まあ、オレたちの周りの状況はさておき、とりあえずこれからどうするか・・・だ。

勢い余って修羅場に入ってきてはみたものの、何をしていたのやら。

「何なんだ、テメ〜は?!」

ナツオがオレに突っかかってきた。

タケシに何を言われても言い返さなかつたくせに、コイツはオレに口撃してきやがつた!!

もしかして、オレ、舐められてる??

「光太、どけよ!! そいつはオレに殴らせる!!」

タケシがもがきながらオレに言った。

オレはそんなタケシの正面に左手を伸ばし、ナツオと向かい合った。

すぐ横では、近くで見ると実は意外と興奮しているアキラが、オレ

をギョロつとした目で見ている。

額からツツーっと汗を流しているアキラは、千両役者のこのオレの登場に、『一先ずダンナが来たからにやあ、安心でやんすね。へへへ、あとはお任せしやしたぜ、ダンナ・・・』ってトコロかな？

「カンケくねえだろ、オマエら。これはオレとまいの問題だつつのー！」

ナツオが威勢良くオレにガンを飛ばしながら言った。

さすがにこの修羅場区域、ビンビンくるねえ。

遠くからじゃ分からない、何かこう、凄いんだよ、とにかく！

みんなの興奮状態の息遣いを肌で感じるって言うかさ・・・。

それに、ナツオの迫力も凄い。

もっとヘラヘラしてんのかなって思ったけど、やっぱりいつも舞台の第一線で活躍してるだけあって、持ってるオーラは半端じゃねえよ。

ゾクゾクするよ。



何か、こう、今すぐにもコイツの胸ぐらを掴みたい気分だ。

・・・でも、まだ、待て。

大人の喧嘩は駆け引きってのが大事だ。

すぐ手を出しちまったら、子供の喧嘩と一緒にだモンな・・・。

その時・・・!!

「光太・・・」

カスミの救いを求めるような小さな声がオレの耳に入った。

そのまま、その一声は、心臓を貫き脳天を通り越した。

そして、オレの魂をメラメラと燃え上がらせる。

・・・カスミ!!

今、助けてやつから・・・!!

「・・・何だ、その目は?! やんのか? アアツ?!」

ナツオが臨戦態勢に入った。

ナツオの人を小馬鹿にしたような細い目が見開かれた瞬間、オレの魂の炎は一気に爆発炎上した。

「うるああああ〜〜!!」

頭に一気に血が昇り、オレはナツオの軟派なアロハシャツの胸ぐらをグツと掴んだ!!

その瞬間!!

ドンッ

「・・・だから、やめろって!!」

ズデン

アキラに突然押されたオレは、勢い余って情けなく尻餅をついた。

こゝ、こんな沢山のギャラリーの前で・・・!!

か、かつこ悪いったら、ありゃしねえ〜〜〜!!

「……ざげんなよ!」

オレは急いで起き上がると、アキラを押し返そうと手を押し出した。

……が、オレの手は、空振りし、前のめりに転がった。

大勢の見物人の目の前で、これからカツコイイ姿を披露しようと思  
った矢先のどんでん返し!

みんなの前で、真面目な顔で前転である。

小学生の体育館でやる授業じゃねえ〜〜〜つつ〜〜〜の!!

しかもマット引いてないしっ!!

しかもオレは、前転しながらギャラリィに突っ込んでいた。

「キヤー」

誰かの悲鳴が聞こえる。

こうなったら、もう、オレの頭は真っ白だ。

「喧嘩だ、喧嘩だ!!」

祭りから帰ってきた連中が、一斉に社員食堂に詰め寄り、いつの間にか大勢に囲まれていた。

「どうしたの？ アキラ!!」

祭りでアキラと楽しげにデートしていたアキラの彼女?!

アキラの彼女が恐々と声をあげた。

どうやらオレとアキラがやり合っていると勘違いしてるらしい。

「このバカがよお・・・!!」

アキラは彼女に向けて、オレの事をバカ呼ばわりして何かを言おうとしている。

その瞬間、オレはキレた!!

『このバカがよお・・・!!』 だと?!

くそつたれがあ！

女の前だからってカツコつけんじゃねえ〜よ！

オレに内緒で女とイチャイチャデートしやがって！

オレに女がいねえから気をつかったつもりかあ？！

それによ〜、さっきのはマジでアツタマ来るぜ！

てめえがオレを押しからオレが尻餅ついたんじゃねえ〜かつ！！

しかもその後みんなの前で前転しちまうし。

みんなに突っ込んでしまうし。

ムカつくんだよ、このヤロ〜！！

もう、許さねえ〜！！！！

いつの間にかオレの怒りの矛先は、目の前のアキラに代わっていた。

ドゴッ

オレの強烈な一発が、ついにアキラの右頬に炸裂した。

スローモーションで吹き飛ばすアキラ。

アキラは忍者のようにスチャツと着地すると、すぐさまオレに飛びかかってきた。

ガキッ

アキラの痛恨の一撃がオレの左頬に直撃した。

スローモーションで宙を舞うオレ。

カスミが逆さまに見える。

・・・カスミのヤツ、鼻の下に汗をかいてやがる。

緊張してたんだな・・・

・・・誰だ？

誰だ？！

カスミの鼻の下に汗をかかせた、すつとどつっこいは、どっのどいつだあああゝゝ！！

オマエかああ〜〜!!

オレはいきり立つアキラめがけて突っ込んだ。

こうなったら、もう、メチャクチャだ。

オレとアキラはムキになって殴りあった。

鼻だ!!

とりあえずあのヤローの鼻っ柱だ!!

アイツを泣かせればこっちのモンだ!!

オレの思考回路もメチャクチャになっていた。

対するアキラも、オレの鼻をめがけてビュンビュンパンチを繰り出してくる。

こうなっては、もう、誰も止められない。

まるでちびっ子の喧嘩である・・・。

羽交い絞めを解かれたタケシも、栄ちゃんも、呆然と立ち尽くしていた。

「やめないかつー!!」

その時、あの男の声が社員食堂の中に鳴り響いた!!



第12話 bye bye 夏男 4

突然の事で何が起きてるのかサッパリ分からない。

オレは大外刈りで回転し、アキラは背負い投げで宙を舞った。

いきり立って、オレを投げ飛ばした男に詰め寄るが、その男の覇気に圧倒され、オレは足を止めた。

「やるか？ オレとやるのか?!」

デデーン

そこには、劇団きさらぎの巨匠、座長の東条ハルオがそびえ立っていた。

いつもは小柄な体型が、富士山のように高く見えた。

寮長も駆けつけ、オレたちの混乱は、大人2人によって收拾された。

寮長が社員食堂の野次馬たちを追い払い、談話室にはオレとアキラ、

カスミとまい、栄ちゃんとタケシ、そしてナツオだけが残った。

ハルオと寮長は、オレたち一人一人から事情を聞き、終始冷静に対処した。

タケシはナツオに対して納得のいかない表情だったが、ナツオの涙を見て少しは落ち着きを取り戻していた。

ナツオの醜態を耳にしたハルオが、看板スターのナツオを下ろすと言い出したのだ。

仕舞いには破門だと……。

それにはさすがのアキラも反対した。

黙って涙を浮かべるナツオに代わり、アキラが土下座をして許しを乞うほどだった。

そんなアキラを見て、ナツオは反省してるのか、それとも破門がよっぽどイヤだったのか、今までの自分の醜態を深く詫びた。

「もう2度としません……。スミマセンでした……」

何をしないのか、何がスマナイのか分からないが、ナツオはオレたちにそう謝ってきたので、それ以上オレたちは何も言えなかった。

カスミが哀れな顔でオレを見ている。

・・・思えば、オレは何だったんだ？！

カンケーないアキラをぶん殴り、最後にはハルオに投げられ、カスミには哀れな目で見られ・・・

情けねえ〜〜。

タケシも栄ちゃんも、まるで他人事だったかのように、オレを哀れな目で見ている。

「ワシはナツオを破門にしたいのは山々だが、今回は生徒さんたちに免じて目をつぶろう・・・」

ハルオがワケの分からない事を言っている。

オレたちに免じて？

意味が分からない。

アンタがホントは看板スターを失いたくないだけなんじゃないのか

?!

やっぱね、ホラ、経営上・・・って、おい、ハルオ~~~~!!

そこんトコロどつなんだ、ハルオ~~~~!!

さらに・・・

「これにて、一件落着うう~~~~!!」

勝手に締めくくりやがった。

部屋に戻ると、ナオヤが心配そうに救急箱から絆創膏を出した。

「大丈夫かよ、光太。アキラと喧嘩したんだって？」

そうだよな・・・

みんな、そう思ってるよな。

オレとアキラの揉め事だつて・・・。

「光太兄ちゃん、カツコ良かったよ……」

洗面所で歯を磨いてる時、となりのケンイチが呟いた。

「……はあ？ どうしてオレがカツコ良いの。変な慰めはよしてくれ……」

オレはケンイチの気遣いだけで嬉しかった。

余計な慰めの言葉はいらない……

本気でそう思った。

次の日。

ちよつとだけ目が腫れていた。

殴られた頬も痛い。

それに、ハルオに投げ飛ばされた時、ちゃんと受け身がとれなくて、腰の辺りも痛めたんだ。

昨夜はさんざんだったなあ……。

オレが溜め息まじり一人で昼食をとっていると、隣の席にカスミとまいが座った。

「何だよ、からかいに来たのか？」

「何、怒ってんのよ?! みんなアンタに感謝してんだからね!!」

は？

感謝??

カスミがワケの分からない事をぬかしている。

「ココロも、光太君にお礼言っといてって言ってたよ・・・」

まいが優しく微笑みながら、意味不明な事を言った。

ココロって、あのココロ？

ウチのクラスのココロだろ?!

ナツオの餌食にあつたヤツ。

何でオレがココロに感謝されなきゃなんねえ〜の。

「私も少しは見直したよ、光太！」

カスミが笑顔を見せた。

は？

何なんだよ、さっきから。

妙な慰めやめろって！！

本気で怒るぞ！！！！

「あの時、光太君が来てくれて、アキラ君と喧嘩をしたフリをしてくれて、ホント助かったよ。もしもあの演技がなかったら、タケシ君とナツオが喧嘩しちやって大変な事になってたよね！」

まいがオレに手を合わせて感謝しながらそう言った。

「ホントよねえ。アキラ君なら分かるけど、光太の迫真の演技には正直驚いたよ！ 光太とアキラ君が全てを背負い込んでくれたお陰でみんな丸く収まったし、ナツオにもギャフンと言わせられたしネ！」

カスミがなぜかオレを、まるで尊敬の眼差しのような目で見ています。

へ???

今、オマエら何て言った？

演技？！

オマエら、オレとアキラのあの喧嘩、演技だと思ってるの？！

マ、マジだったんだけど……。

確かにカスミたちから見たら、オレとアキラがあそこで喧嘩する理由が見当たらないよな。

殴りあったオレ本人すらワケわかんなかったし……。

え、演技でいいんなら、演技だった事にしちゃうけど。

その方がオレにとっても都合がいいし……。

「ま、まゝな……。はははっ……」

とりあえずオレは、昨日の喧嘩は演技だった説に飛び乗った。

……そういえば、ケンイチも昨夜、言ってたよな。

オレがカッコ良かったって。



もしかしてアイツも、オレとアキラが演技してるって思ったのかな？！

野次馬たちにまいの事もバレずに済んだのも、ナツオが公衆の面前で赤っ恥をかかなかったのも、タケシや栄ちゃんが巻き込まれずに済んだのも、みんなオレとアキラのお陰ってか？！

思えばココロも、ナツオに対して怒りを抱いてたのかもな・・・

それをああやって恨みを晴らしてくれて、感謝ってワケか。

何か、複雑なヒーローだな・・・。

その夜、風呂の帰りに廊下でアキラと擦れ違った。

・・・かける言葉が、ない。

・・・と、思っていると、アキラの方から声を掛けてきた。

「カスミちゃんとまいちゃんから感謝されたよ。昨夜はありがとつてね。オレらの喧嘩が演技だったよ。そう信じてるみたいだったから、オレは否定しなかったよ・・・」

「オマエもか。オレもだよ。……って言うか、アレは元々オレの綿密な計算のシナリオ通りの結果なんだけどな。最初から演技だよ、オレの。まさかオマエに本気で殴られるとは思わなかったぜ……」

……と、オレは嘔吐してみた。

「ウルセー、ボケ！ あんなマジな演技あるか！ オレの大事な顔に傷つけやがって！！」

アキラが腫れあがった唇を強調して見せた。

「ゴ、ゴメン……」

毎日舞台上に立ってるアキラを想像し、オレは恐縮した。

「い、いや、別にいいよ。オレこそ、ゴメンな……」

アキラもオレのマネをして恐縮している。

「そつえば話は変わるけど、オマエらのクラスのゴで、メグミっ  
ているだろ？」

メグミ?!

ああ、カスミと仲良いメグミね。

「メグミがどうした?! オマエ彼女いるだろ。手え出すなよ・・・!  
! 彼女にぶっ飛ばされるぜ!! 度が過ぎると破門だぞ、破門!」

「はあ? 何言ってるんのオマエ。あゝ、もしかして昨日、オレが屋  
台通りを一緒に歩いてたアイツの事か?!」

「分かんねえけど、ラブラブに見えたゾ、あの浴衣のコと・・・」

「あのな、オマエ、それ、超勘違い。あの人座長の奥さんだから  
・・・」

アキラの言葉が把握できない。

座長?

ハルオ???

奥さん???

若くねえ???

・・・って、それよか、ハルオって独身じゃねえ???

「オマエ、ヤバイって、それ。悪い事は言わねえ。今すぐ別れた方がいい。ハルオにバレて殺される前にな……」

「……だから、座長の奥さんとオレは付き合ってたねえ。浮気もしてねえ。それよりメグミってコから聞いたんだけどさ、女子寮ヤバくない？」

「何が？」

「何って、怪談話だよ……」

「あ、洋ダンスの髪の毛ね！」

「何だそれ?! そんなんじゃないやなくて、ホラ、CDプレーヤーから女の笑い声が聞こえたってヤツとか、トイレの話とか。……憑依の話し、アレはヤバイな!!」

「……それ、知らん。教えろよ、その話……」

オレはアキラから、女子寮でのとんでもない怪談話を聞かされた。

まさか、オレたちの知らない所で、そんな事が起こっていたなんて……



第12話 『bye bye 夏男』 4 (後書き)

第12話 『bye bye 夏男』 おわり

第13話 憑依されたみどり ㄱ1ㄱ

ついに、備え付けの洋ダンスを開ける時が来た。

寮長が掃除機を片手に、勢い良くダンスを開ける。

すると……

この所、みどりがずっと機嫌が悪かったから、私とまいちゃんは随分と気を遣った。

仕事を終えて部屋に帰ってきて、部屋の空気が重くてちっともリラックスできなかった。私とまいちゃんは社員食堂の談話室にいる事が多かった。

もう1人、同部屋のリサときたら、まるで引越したみたいにメグミたちの部屋へ行ったきり帰ってこない。

リサもリサだ。

私とまいちゃんが大の仲良しなのを知ってるくせに、みどりへの気

遣いもなく黙って部屋を出るなんて。

リサが部屋からいなくなった以上、みどりが孤独になるのは目に見えるのに……。

おそらく、そんなリサの薄情さへの不満と、洋ダンスへの恐怖心が、みどりのストレスを増長させてたんだと思う。

ある晩、とうとうみどりがキレた。

「も~~~~うー!! 何よこのCD!! ふざけないでっ!!!!」

ガンッ

上段のベッドで、みどりが自分のCDプレイヤーを壁に叩きつけていた。

「どうしたの? みどり……」

眠っていたまいちゃんが目を覚まし、みどりのベッドに歩み寄った。

また始まった……みどりのヒステリーだ。

私は寝たフリをしながら、薄目でそれを見ていた。



「いつもなの！ このCDプレイヤー、おかしいのよー！」

「だから、何がおかしいの？ 壊れた？ だからって何も壁に叩きつける事ないんじゃない？ カスミちゃんだって寝てるんだし、私だって明日仕事なんだからね！」

お？

まいちゃんが本気で怒ってる。

どうしよう。

やっぱり、喧嘩になったら起きなきゃダメかな？

「CDプレイヤーからラジオって聞こえる？ 普通？ ねえ・・・。  
有り得くない？！」

「ポータブルCDプレイヤーだよ？ ねえ？ どうなの、カスミちゃん！！ ポータブルCDプレイヤーってラジオ機能あるの？  
ないの？」

なぜ？

なぜ、そこで私にフルの??

まいちゃんー！！

私、寝てるよね？

ねえ・・・寝てるよね？

「・・・んん？ どうしたの、こんな夜中に・・・ムニヤムニヤ」

今、起きたフリをしてみた。

「・・・と、言うワケなのよ。信じられる？」

みどりの話しは驚愕だった。

もちろんみどりのポータブルCDプレイヤーにはラジオ機能なんてついてないのは明白だ。

なのに、CDとは無関係な、人の話し声が聞こえてくるなんて・・・。

最初に異変に気付いたのは、何と初日だという。

ホテルでの長い寮生活、暇な時間や寝る前などを想定し、みどりは沢山のCDを家から持ってきていた。

ポータブルCDプレイヤーはここに来る前日、お母さんに買ってもらった新品だという。

ヘッドホンは音漏れを懸念し、ちょっと高めのを買った。

初日の晩、初めてそのプレイヤーで、大好きな「ロリカム」を聴いた。

・・・すると！

最も好きな曲「Long Long Long」のサビの部分で、聞き覚えのない声が聴こえてきたという。

ヴォーカルのミウの歌声でもなく、語りでもない。

これはオカシイ・・・、もしかして今まで気が付かなかっただけ？

そう思っただけで、さっきの声は聞こえない。

みどりは気のせいだと思った。

次の日の晩、昨夜とは違う「ロリカム」のアルバムを聞きはじめた。

5曲目が大好きな曲だったので、それまで眠らないように歌に集中

して聴いていた。

・・・すると、4曲目が終わって5曲目が始まるミニートの部分で、昨夜のような聞き覚えのない声が聴こえたという。

耳を澄ますと、5曲目が始まってその声は続いていた。

外からの音かと思い、すぐにヘッドホンを外してみるが、何も聞こえない。

もう1度ヘッドホンをつけると、今度はさっきよりも声が大きくなっていた。

その日は気持ちが悪くなり、それ以上CDを聞くのは止めたという。

しばらく音楽は聞きたくないと思ったみどりだったが、ホテルの仕事中、女子社員と「尾形 富」の話題で盛り上がり、どうしても曲が聞きたくなったという。

その日の晩、もうあの声は聞こえませんように・・・という願いを込めて、みどりは「尾形 富」のアルバムを聞き出した。

しばらく何の問題もなかったが、ふと気付くと、あの声が聴こえてくる。

我慢できなくなったみどりは、寝ていたりサを起こし、それを聞いてもらったという。

……しかし！

何度聞かせても、リサにはそんな声は聴こえないという……。

その後もみどりは、何度もCDを聞くのは止めようとしたが、大好きな音楽を聞かずにはいられなかった。

みどりは、その声を無視し、頑張って音楽だけ聴くようにしていたという。

そんな矢先、あの洋ダンスの「髪の毛の束」事件が勃発した。

問題は解決しないまま時は流れ、今日に至る……。

みどりは、ずっと例の声を無視してきたが、今日はどうしても我慢できず、その声が一体何を喋っているのか聴いてみようと思ったそ  
うだ。

そして……

耳を澄ますと……

『……なんだけどさあ、信じ……れる？……ないでしょ？  
アンタも……をつけ……きゃダメよ……』

女性の声っばい。

ラジオのような、途切れ途切れの雑音のような声。

いつも思っていたが、随分と早口だ。

……と、その時。

『……ホラ、アンタの……ろヨ、うしろ!!……まだ……  
……かないの?……待って……うすぐ、ちゃんと会え……  
から……会いに……から……』

こ、恐い!!

今までちゃんと聞いた事がなかったし、声は不特定多数に向けられた何かのラジオのようなモノだと思ってた。

でも、違った・・・？

もしかして、これって、私に向けて話しかけてるの???!

そう思うと、みどりは恐くて堪らなくなった。

『・・・アハハハハハハ』

女性の笑い声を聴いた時、みどりの我慢は限界を突破した。

「も~~~~う!! 何よこのCD!! ふざけないでっ!!!!」

ガンッ

みどりは自分のCDプレイヤーを、とつとつ壁に叩きつけたのだっ  
た。。。。。

次の日、私とまいちゃんは、洋ダンスの件を相談すべく、寮長の部  
屋へ向かった。

みどりのCDプレイヤーの事はどうしようもできないけれど、洋ダ  
ンスの事件を解決できれば、少しはみどりの苛立ちを解消してやれ

るかな・・・って思ったのだ。

寮長は私とまいちゃんの話しを、馬鹿にする事もなく、親身になつて聞いてくれた。

そして、さっそく洋ダンスの中が見たいというのだ。

寮長が、女子寮の私たちの部屋にやってきた。

噂を聞きつけ、メグミとココロとリョウコも見に来た。

バツの悪そうな顔をしたリサも。

ついに、備え付けの洋ダンスを開ける時が来た。

寮長が掃除機を片手に、勢い良くダンスを開ける。

すると・・・



第13話 憑依されたみどり 〵〵〵

クラツポだった。

私もまいちゃんも、ポカンと口を開けたまま呆然と立ち尽くした。

みんなも同じだった。

「・・・また何かあったら呼んでよ。いつでも来るから！」

寮長はそう言い残すと、掃除機を抱えて去っていった。

「・・・私じゃないよ！！ 私、ホントに知らないからね〜〜！！」

不機嫌な顔のみどりを見て、リサが叫んだ。

誰もリサの事なんて疑ってないのに・・・。

次の日の朝は、衝撃的な展開が始まった。

バタン

凄いい勢いで部屋のドアが開いた。

まずはその音で目が覚める。

な、何事?!

まだ頭の中で物事が処理できない。

音のした方を見ると、一人の男性が入口に立っていた。

りよ、寮長?!

どうして、ここに??

寮長が立ち尽くしてこっちを睨んでいる。

私は周りを見渡した。

まいちゃんがヨダレを垂らして寝ている。

みどりも爆睡中だ。

私はとっさに時計を見た。

や、やっちゃった？！

その時、寮長が衝撃的な一言を放った。

「カスミ君、大至急、出勤してくれ！！！」

私は、レストランでの研修初日、さっそく遅刻してしまった。

昨夜、あんな事があったので、夜、寝付くまでに時間が掛ったのだ。

ふえ~~~~ん。

ヨリにも寄って、初日で遅刻なんてえ~~~~！

私は全速力で長い連絡通路をダッシュした。

レストランに辿り着くと、すでに朝礼が始まっていて、シ~~~~ン

と静まり返っていた。

光太がいる。

「ゴメン、寝坊した」

私が申し訳なさそうに小声で言うと、光太は軽く頷いた。

「……………づがねだあ……………」

仕事を終え、部屋に帰って来た私は、靴下も脱がずにベッドに大の字になった。

……………

気が付くと、見慣れた天井が目の前に広がっている。

どうやら私は眠っていたらしい。

……………

みどりがCDラジカセで音楽を聞いていた。

「アレ？ どうしたの、それ。誰か持ってたっけ？」

「うん。社員の子に借りたの。どうしても音楽が聞きたかったから。」

「ぶ~~~~ん」

でも、私の目には、みどりは音楽というより、例の謎の声を探しているように見えた。

険しい顔で、時折ヘッドホンを外して大きな音で聞いたりしていた。

・・・まいちゃんは？

まいちゃんを見ると、朝と同じ体勢で、ヨダレを垂らして眠っていた。

もしかしてまいちゃん、今日一日起きなかった？！

時計も2時を回り、みどりはCDを止めた。

カスミもまいも寝息をたてている。

トイレに行つて、私も寝よう・・・・・・・・。

女子寮の廊下とトイレの電気は、夜中の間、ずっと点灯していた。防犯上そうなのか、単なる資源の無駄遣いなのかは分からない。

電気が点いてるのが当たり前だと思つていたから・・・。

洗面所の窓から見える、向かい側の男子の寮はこの時間真っ暗だ。

明かりが点いてる部屋があるが、おそらくウチのクラスの男子の部屋だろう。

歯も磨いたし、トイレに入つて、ささつと寝よう。

・・・でも、ここのトイレ汚いからイヤ！！

クモは出るし、汚れも酷いし、臭いも・・・・・・・・

みどりは、それでも一番綺麗そうな所を選んで入つた。

ボタン

カチャッ

家は洋式トイレだったので、和式のトイレには抵抗があったが、全部が和式なので諦めるほかなかった。

みどりがトイレにしゃがみこむと・・・

カチン

・・・ええっ??!!

突然だった!

トイレの中が真っ暗になったのだ!

何が起きてるのかわからない!!

て、停電?!

その時!!

「・・・ウフフフ」

笑い声が真っ暗闇のトイレの中で響き渡った。

「誰?! 誰なのぉ~~~~! きゃ~~~~!!」

みどりは恐怖のあまり叫び声をあげた。

「・・・ワタシよ、ワタシ!! アンタに会いに来るって、言ったでしょ?!」

みどりは声が出た上の方を恐る恐る見た・・・

すると・・・

そこには・・・

とても見覚えがある顔が、自分を覗き込んでいた。



第13話 憑依されたみどり くら

私はみどりの叫び声で目が覚めた。

まいちゃんも同じで、2人ともベッドから飛び起きた。

「きゅ～～～～っ！ 誰かあ～～～～！ 誰か来てえ～～～～」  
「！……」

絶叫するみどり。

「何？ 何？ 今のみどりよね？！」

私は廊下を走りながら、体中から不安が溢れてくるのを感じた。

「あそこじゃない?! やっぱトイレだよ、カスミちゃん!！」

ちょ、ちょっと……ど、どとういう事?!

いつも電気が点いてるはずのトイレだが……

電気が消えている!!

誰がいるの?!

悪戯?!

みどりっ!!

私は急いでトイレに駆け込んだ。

洗面所の電気も消えている。

「電気、スイッチはどこ? スイッチは!!」

スイッチを探すが見つからない。

まいちゃんと手分けして探すか、どこにもスイッチが見当たらない。

こんなことって・・・

有り得ない!!

「みどり〜〜〜!」

私は大声でみどりを呼んだ。

・・・すると、トイレの奥からゆっくりと人影が現れた。

「み、みどり?? みどりなの?!」

暗くてよく分からない。

誰かがいるのは間違いない。

・・・でも、もしみどりだったら、助けを求めてたんだし、何か声を出すはずなのに。

返事がないのはおかしい。

「ヤバくない??」

まいちゃんが言った。

確かに、ヤバイ。

私はまいちゃんの一言で、すっかり身の危険を感じてしまった。

「まいちゃん、寮長呼んで来て!!」

「うん、分かった!!」

まいちゃんは走って出て行く。

私は念のため、トイレから一先ず出て廊下で寮長を待つ事にした。

「……ど、どうしたの?!」

まいちゃんを入れ替わるように、メグミが現れた。

どうやらメグミもみどりの叫び声で目が覚めたらしい。

「……だ、誰かいるのよ、トイレに!!」  
でも、真っ暗で誰だか  
分からないの!」

「電気は?!」

「それが、探しても見つからないのよ!!」

「ホント??」

メグミはトイレに入ろうとしている。

「や、やめなよメグ!! もし中に包丁を持った人とかいたらどうすんの?!」

私は思わず想像していた事を言ってしまった。

メグミはその場で怯んでしまった。

・・・その時!

「どうしたあゝ、大丈夫かあゝゝ? 不審者がいるってえゝゝ?!」

パジャマ姿の寮長が、懐中電灯を片手に慌てて走ってきた。

その後ろから、まいちゃんが「はーはー」言いながら顔を出した。

・・・と、同時に!

「大変よ、大変なのよゝゝゝ!!」

廊下をリョウコがバタバタと走ってきた。

ココロもリョウコの後を追うように走ってくる。

「見つかった?!」

まいちゃんがリヨウコとココロに訊いた。

「いなゝゝゝい!! そっちは?!」

リヨウコがまいちゃんに訊く。

「食堂にもいなかったよ。下駄箱には靴はあったから、外には出てないと思う!!」

まいちゃんが言った。

どういふ事?

何があったの??

他にも、事件?!

私が状況をつかめないでいると・・・

「いないの! リサがいないのよっ!!」

「部屋にもいないし、リサが行方不明なのよ!!」

リョウコとココロが信じられない事を言った。

行方不明？

こんな時間に？

リサが？！

それより、今はこつちよ！！

「スイッチがないんです。電気のスイッチが！！」

私は寮長に向かって叫んだ。

「そんなはずは、ないっ！」

寮長が懐中電灯で洗面所を照らすと、何と、簡単に電気のヒモが見  
つかった。

そ、そんな・・・

さっき、まいちゃんと手分けして、あんなに探したのに・・・

そこだって、ちゃんと、何度も・・・

カチ カチ カチ

カチ

「ダメだ。蛍光灯が切れてるらしい・・・」

寮長はそう言つと、トイレの中を照らし始めた。

「寮長!! 気を付けてっ!!」

私は祈るような思いで寮長の背中を見守った。

「.....」

まいちゃんとメグミが私の両脇にくっ付いてきた。

2人とも少し震えている。

私も震えが止まらない。

寮長はトイレの奥を照らして声を上げた。

「誰かいるのか~~~~!!」



返事はない。

寮長が懐中電灯でトイレの奥を照らしてみたものの、人影は見当たらない。

そんなはずはない!!

私はこの目で見たんだから!!

「中に入ってるのよ!」

まいちゃんが言った。

「分かった。とりあえず電気を点けるぞ!」

そう言うと寮長は、壁に付いている電気のスイッチを簡単に見つけ、それを照らした。

ウツソ?

マジ?!

私とまいちゃんは、開いた口が塞がらなかった。

だって、そこは何度も私とまいちゃんが……

言い訳はよそつ。

きつと、さっきは気が動転してて、見つけれなかったただけなんだわ……

私はそつ、自分に言い聞かせた。

カチ カチ

カチ

「ダメだ。ここも蛍光灯が切れてる！」

どうして？

洗面所とトイレの蛍光灯が同時に切れるって、有り得るの？！

「停電ではないですよね？」

メグミが寮長に訊いた。

「廊下は点いてるし……。ホラ、ここに来て最初に見たんだが、

ブレーカーは落ちてないんだよ！」

寮長はそう言っつて、洗面所のブレーカーを照らした。

ですよねえ〜・・・やっぱり、抜かりないですよねえ〜・・・  
つて事は、ホントに洗面所とトイレの蛍光灯が同時期に切れたんだ  
あ〜・・・。

凄い、偶然。

「入るぞ〜!!」

そう言っつと、寮長はトイレに入って行った。

ひとつ、ひとつ、懐中電灯を照らしながら確認する。

一番奥で、寮長が叫んだ。

「お〜〜〜い、開ける〜〜〜!!」

ドンドンドンドン

「ここを開ける〜〜〜!!」

ドンドンドンドン

「開けるぞ〜〜〜〜!!」

寮長がそう叫ぶと・・・

カチャッ

ギイイイイイ

ゆっくりと、そのドアは開いた。

第13話 憑依されたみどり 4

寮長は意を決してドアを叩いた。

「開けるぞ〜〜!!」

その時、ドアが開いた。

カチャッ

ギイイイイイ

「・・・つぶつぶ」

中から誰かが飛び出してきた。

みどりだー!!

トイレの奥から、みどりが笑いながらこっちに向かって走ってくる。

「つぶつぶ」

気がふれている。

「会いに来るって言ったでしょ？ だから、アタシ、会いに来るって言ったでしょ？？」

みどりがワケのわからない事を、早口で口走りながらトイレを飛び出した。

みどりの顔は、まるで別人のようだった。

顔は青白く、目は充血していて、口元は引きつっていた。

みどりはそのまま廊下を走ると、階段を下りてしまった。

急いで寮長がみどりを追う。

みんなもその後続いた。

廊下を走りながら、私はふと、ドアが開けっ放しのメグミたちの部屋を見た。

……っ！

何と、電気の点いたメグミたちの部屋の真ん中に、リサが立っている！！

「リサ?!」

私はリサの元に駆け寄った。

みんなもリサの姿を見つけ、部屋に入ってきて来る。

「どうしたの、アンタ！　今まで何処にいたのよっ！　探したんだからね!!」

リョウコが怒鳴った。

「え〜〜？　どうしたのみんな〜〜?!　アタシ、ずっとここにいたよ〜〜!!」

え？

だって、リサが行方不明だってみんな言っただけじゃなかった？

リサは今までずっと、その部屋で眠っていたと言い張った。

確かに今まで眠っていたような顔をしている。

どこかに行っていたとは考えにくい。

リョウコとココロは納得いかないような顔をしているが、仕方なくリサの言ってる事を信じて、みんなで飛び出したみどりの後を追った。

食堂に着くと、寮長と、正気を取り戻したと思われるみどりが床に座り込んでいた。

みどりは大声で泣いている。

しばらくみんなのみどりを慰めた。

やっと話せるようになったみどりは、とんでもない事を語りだした。

「……トイレに入っちゃがんだ時、電気が消えたの！ そしたら、天井の方から声がした！ 上を見たら、リサがこっちを見てたのよ……」



その時、それを聞いてたりサが叫んだ。

「ウ、ウソよ、そんなのウソよ〜！ ワタシ、ホントに知らないから〜！！ ワタシ、部屋で寝てたんだから！！ ホントなんだから〜！！！！！！」

リサはその場で泣きじゃくってしまった。

「分かったから。分かったから、落ち着こう、ね。みんなリサを信じてるから！！」

私はそう言って、リサの肩に手を置いた。

「・・・だって、だって恐かったんだモン。あの部屋のダンス、恐かったんだモン！」

どうやらリサは、みどりに言い掛かりをつけている原因は、以前、自分が部屋を出た事だと思ってるようだ。

「大丈夫。誰も怒ってないから・・・」

まいちゃんもリサに優しく声を掛けた。

「・・・わ、私の中に、だ、誰かが入ってきたの！！ あ、あの声

よ、あの声の女が入ってきたのよ！！ タンスの髪の毛の束も、きつとあの女なのよ！！ わ、私のCDに、私の体に入ってきたあの女が、あの女が……………！！！！」

みどりは体を大きく震わせながらそう言った。

私たちはしばらく談話室でみどりを落ち着かせる事にした。

寮長は、真夜中だつていうのに、トイレの蛍光灯を交換しに行った。

よっぽどさっきの出来事が、衝撃的だったのだろう。

寮長が帰って来た頃、みどりは落ち着いたから大丈夫と言って立ち上がった。

「リサ、さつきは……変な事、言って……ゴメンね。私もトイレで見たのはホントのリサだなんて、思ってないよ！ リサに化けた、幽霊だったんだと……思う……」

「……………みどり……………！！」

リサとみどりが抱き合って泣いている。

この2人の冷戦も、一先ず終戦したようだ。

その晩から、リサが私たちの部屋に戻ってきた。

みどりもリサが戻ってきたので少し安心したのか、誰よりも先に眠りについた。

明日みどりは仕事が休みだ。

ゆっくり休養してほしい……。

私は、早番なんだけどネ……。

その後は、今のところ私の部屋での怪奇事件はない。

相変わらず女子寮内での怪談話は耳に入ってくるけど、ウチのクラスのコの体験談ではないし、男子ほど強烈ではない……。

それを思うと、光太たちがとても気の毒に思えた。

みどりが聴いた、CDプレイヤーの女の声は何だったのか……

なぜ、みどりに憑依してきたのか……

みどりがトイレで見たのはリサだったのか……

リサは本当にあの部屋で寝ていたのか……

洋ダンスの髪の毛の束は一体……

そして、私があの時、トイレで見たあの人影は何だったのだろうか……

第13話 憑依されたみどり ㄥ4ㄥ (後書き)

第13話 『憑依されたみどり』 おわり

第14話 この上の・・・忌む部屋 ｝1｝

いよいよ三葉リゾートパークホテル最後の砦、本館での実習が始まった。

オレとカスミと栄ちゃんとまい。

このメンバーで仕事をするのもあと10日か・・・。

今まで、チームのみんなは、館内の現場を1人1人分かれて別々の場所で仕事をする機会が多かったけど、ここでは比較的みんな一緒に仕事ができそうだ。

ただ単に玄関に立って、出入りする人に挨拶したり、お客様の荷物を部屋まで運べばいい、単純な仕事なのだが・・・。

1泊4万円の高級ホテル、意外と客室数は多い。

4階建ての建物で、別館とは違い、大理石に高級絨毯、高級家具が立ち並ぶ。

まさに時代は好景気。

客入りも多く、オレたちベルボーイへのチップの金額も、別館での

平均チップ金額を遥かに越える。

「壹万、貳万……参万……！ 凄エ！！ 初日で3万いったよー！！」

休憩中、本館の広い休憩室で、オレは思わず大声をあげた。

「へー、大したモンじゃない。で、それで何買ってくれるの？」

カスミがニヤニヤとオレの財布の中を覗く。

「光太、実はオレも3万いったぞ。もうすぐ4万だ！」

何と、栄ちゃんも初日で3万を越えていた。

「私……7万なんだけど……」

まいが驚愕のセリフを吐いた。

な、7万？

初日で7万？！

有り得ねえ……！！

「ウソだろ?!」

栄ちゃんも身を乗り出す。

「ま、まいちゃん、な、なな、7万って……それ凄過ぎない??」

「え? そうなの? カスミちゃんはいくら?!」

「1万3千円だけど……」

カスミが恥ずかしそうに金額を言った。

いや、オレは1万3千円でも凄いと思う。

7万が異常なんだ、7万が。

「……どうやってそんなに貰えるんだ??」

栄ちゃんが珍しく裏声を出しながらまいに訊いた。

「分かんないけど、お客さんが来たら、すぐ荷物お持ちしますって行くでしょ? そしたら、エレベーターの中で必ずみんな1万円くれたよ。くれない人いるの?」



・・・だよな。

オレもそれは分かる。

ベルボーイにチップくれない客はいないんだよ。

だから、運とタイミングなんだよな。

今日はオレ、初日って事もあって、カスミとばかり仕事してたから・・・

ベルボーイが2人いると、お客様がチップを半分ずつに分けてくれるから、必然的に金額が減るんだよ。

まいはたまたま忙しい時間に1人で行く回数が多かったんだな。

あと、運が良くて、多めの金額をくれるお客様に当たったってワケだ。

なるほど・・・。

明日から1人で行こう。

仕事を終え、栄ちゃんいつもの302号室に帰ってきた。

誰かの寝息が聞こえる。

ヤスヒロが部屋で1人、背を向けて寝ていた。

相変わらずヤスヒロは存在感が薄いなあ、なんて思っていると、いつものようにアキラがノックもせず部屋に入ってきた。

「何処いく？」

イキナリこれだ・・・。

「あのかなあ、アキラ。オレたちは今帰ってきたばかりなんだぜ！  
これから風呂だよ風呂！！」

時計の針は22時をさしている。

アキラは20時にいつもの公演が終わると、そのまま真っ直ぐメイクを落として風呂に直行する。

それに比べてオレたちは、例えば21時に仕事を終えても、寮に帰ってくるまで着替えたり長い距離を歩いたり、その辺で寄り道したり、誰かとくつちゃべったりで、22時に帰ってこれるのは早いからいいのだ。

「早く入って来いよ。オマエ上がったらさ、タケシにコンビニに連れてってもらおうぜ！ 今日ジャンプの発売だろ?!」

「いくら何でも、今日は行かないと思うぜ。タケシ、まだ帰って来てねえし、明日アイツ早番だったと思うゾ！ コンビニまで往復1時間かけて、これからジャンプ買いに行くとは思えねえなあ」

「……だよな」

「アキラめろ!! ジャンプはアキラめて、今日は寝ろ!!」

「分かったよ……」

早っ!!

納得すんの早っ!!

アキラらしくねえなあ。

いつものアキラだったら「夜はこれからだぜ!」なんて始まるのにな。

仕度をし、風呂に行こうとした時、アキラがとんでもない事を言ってきた。

「・・・あのさ、光太。オマエ、オレらの劇団に入らねえか？」

は？

劇団？

劇団ささらぎの事??

「意味分からねえ！ 何でオレがオマエの劇団に入らねえならん！ アホか!!」

「座長がさ、この前のオレらの喧嘩見て、感激してんだよ。・・・んで、オマエの演技力に見惚れたってよ・・・」

「あのなあ。オマエが一番よく知ってるよな？ あれは演技でも何でもねえって。そんな事より今日は寝ろっ!!」

「分かったよ・・・」

早っ!!

納得すんの早っ!!

「実はよあ、ちょっと付き合ってもらいてえ所があるんだよ。」

いいかな？」

はあ？

今、オレが寝ろって言ったら素直に分かったって言ったばっかじゃねえかよ。

「何処に?!」

「4階だよ……」

「4階??」

思えばここに越してから、上の階には行った事がなかった。

確か、人は住んでないって話しただけ……

「どうして4階なんか用があるんだよ？」

「……あ、うん。それがさ……」

言いくそうにしながらアキラが興味深い事を語りだした。

それが、ある恐怖への招待状だったとも知らずに……



第14話 この上の・・・忌む部屋 くら

アキラはフユヒコと2人で304号室、オレたちの隣の隣の部屋に住んでいた。

ちなみに座長のハルオは家族で家族専用の寮に住んでいるらしい。

家族専用の寮というのは、男子寮と女子寮のすぐ近くに建っている3階建てのボロっちい寮だ。

オレたちの寮もボロっちいけど、家族専用の寮の方が少しだけ上回っていた。

そこに、あの若い奥さんと一緒に住んでるらしい。

噂では子供もいるらしいが見た事はない。

ナツオはどこにいるのか知らない。

興味ないから誰も聞かないし、どうでもいいし。

・・・で、アキラたちは、丁度うちらがこのホテルに実習に来た頃ここに来たらしいが、ずっと4階には人が住んでいると思っていたらしいのだ。

最近、4階には誰も住んでないという噂を耳にし、どうしても調べ  
てみたくなったという。

どうやら引越してきた当初から、上の階で物音が聞こえているら  
しい。

人の気配がすると言っただ。

だったら一人で行けよと言っただが、怖くて見に行けないという。

フユヒコはケンイチ並の臆病者らしく、大金を積まれてもそれだけ  
は御免らしい。

「誰も住んでないってのは結局、ただの噂だろ？ 誰かいるんだよ、  
絶対……」

一部始終アキラの話しを聞いていた栄ちゃんが、尤もらしい事を言  
う。

「見に行けば早いじゃん。行ってみようぜ!!」

今しがた仕事を終えて帰ってきたばかりのタケシがノリノリで言っ  
た。

「やめようよお〜。絶対オバケだよ。行ったら呪われるよお〜!!」



売店のバイトから帰って来たばかりのケンイチが、相変わらずひ弱な事を言う。

「・・・・・・・・」

ヤスヒロは背を向けて知らんぷり、だ。

いや、眠っているだけか？

「じゃあ、風呂から上がったらな・・・」

オレはタケシとケンイチと、今帰って来たナオヤと風呂に行った。

風呂から上がり、寮につくと、アキラが懐中電灯を持って待機していた。

「何だよそれ、本格的だなあ」

「ああ、コレか？ 寮長の部屋から持ってきたんだ！」

「栄ちゃんも行くござぜ?!」

オレは一応、聞いてみた。

「……ヤダ。くだらん!」

やっぱり思った通りの返答だ。

「……ケンイチはどうする?」

オレは一応、聞いてみた。

「……ヤダ。絶対ヤダ!」

やっぱり思った通りの返答だ。

「4階って暗いの?!」

ケンイチが誰にでもなく聞いてきた。

「さあ……。誰も行った事がないからなあ。一応、念のためだろ?」

「まあ〜な……」

オレの問いにアキラは頷く。

かくして、オレとアキラ、タケシとナオヤの4人は、誰も住んでいないのに気配がするという、謎の4階に挑む事になった。

時計の針は24時をさす。

廊下を出るとすぐ、301号室が目に飛び込んできた。

真夏で熱いからだろうか、ドアは開けっ放しだ。

電気を消して真っ暗なのだが、テレビの明かりで部屋の中の様子がうかがえる。

「いやあ〜〜ん、やめてよあ〜〜。もあ〜〜」

大塚さんの甘い声。

「少しくらい、いいだろ？」

あの、真ん中ワケのサラサラヘアーの恋人の声。

大塚さんが女で、恋人の方が男なのか？？

ど、どつうでもいいが……

みんなもとつくに慣れっこになっていて、見て見ないフリをしている。

誰も大塚さんたちの事にふれないのもオモシロイと思った。

階段まで来ると、さすがに夜中という事もあって、オレたちは上に行くのをためらった。

「どうする？ やっぱヤメねえ？！」

意外にもタケシが最初に怖気付く。

「あはははは、タケシ怯えてんの？！ あはははは・・・」

ナオヤがタケシのひ弱な横顔を見て笑った。

「こ、怖くねえよ、別に！！」

タケシは強がってみるが、怯えてるのがビンビン伝わってくる。

「アキラ、お前先に行けよ！」

オレは一番後方にいたアキラの背中を押した。

「やめろって！！」

アキラがマジな顔で怒っている。

「だって、お前が言いだしっぺなんだし、懐中電灯持ってんだし、先に行くのが当然だろ！！」

オレの尤もらしい意見にアキラはさらに怒り出した。

「じゃあオマエに懐中電灯やるよ！ ホラ、持てって！！ ホラ・・・！！」

「喧嘩はやめろよ・・・」

タケシが不機嫌そうに言ったので、オレもアキラもそれ以上は何も言わなかった。

結局オレが懐中電灯を持つはめになり、うしろにアキラとタケシとナオヤが続いた。

階段を上り終わると、廊下は真っ暗だった。

何となくはそうだと思っていたが、ここまでだとは思わなかった・・・

物凄い威圧感である。

空気が重いつてモンじゃない。

ここは別世界、別空間・・・この世じゃない。

以前、アキラたちと「あかずの間」に入った時に感じた嫌なオーラの200倍はある。

アキラもそれを感じたらしく、すぐにオレの肩に手を置いた。

ビクッ

突然肩に手を置かれたのでビビッた。

アキラの方を見ると・・・

「・・・」

黙ってアキラが首を横に振った。

行くなつて事だな・・・

確かに、これは誰が見ても明らかだ。

ここには、誰も住んでいない。

決定だ。

そして・・・

これ以上は進んではならない。

そんな気がする。

その時！！

「出たあ~~~~っ！！！」

ナオヤが叫んだ。

オレたちは血相を変えて階段を雪崩のように飛び下り、超高速で部屋に戻った。

みんな髪の毛が逆立っている。

「はあ、はあ、はあ・・・ナ、ナオヤ・・・。な、何を見た?！」

オレは胸の鼓動と肺の痛みが治まるのを待ってから、ナオヤに聞いた。

すると、驚くべき返答が・・・

「…………ゴメン。嘘!!」

ナオヤが、はあはあ言いながら言った。



第14話 この上の・・・忌む部屋 くっく

「そんなトコ、行くのやめなさいよ。何がオモシロイの？ 分からない・・・」

昨夜の事をカスミに話したら、即、怒られた。

「いい？ アキラ君もタケシ君も、ナオヤ君も、光太が行かなきゃついて来ないと思うの。クラス委員長は肩書きは私だけど、みんな光太を頼りにしてるトコロってあると思うんだ。私なんか以上に・・・。だから、光太・・・、もっとしっかりしなきゃダメだと思うよ!」

カスミに説教されてしまった・・・。

もっとしっかりしなさいって、まるでお母さんみたいなヤツだ。

・・・所詮、女のアイツには、男のロマンが分かんねえくんだろな。

この、冒険心あふれる青春時代に、何を恐れるっていうんだよ。

世の中、知らないこと、分からないこと沢山ある。

それを見ないで何が楽しいんだ？

何か不思議な事があつたり、疑問に思う事があつたら、それを解明して分析して、新しい発見をしなきゃ人は前に進めねえ〜〜んだよ。特にオレらみたいな経験の浅い若者は！！

オレは誰が何と言おうが恐れるものは何もない。

あるとしたら、おのれの道に逆らうこと・・・のみ！！

「・・・絶対、行っちゃダメだからね！！」

「はいつ！！」

カスミに怖い顔で念を押されたので、ついつい情けない返事をしてしまった。

「今日は3万だったぜ。明日はもっと稼ぐぞお〜！！」

今日もオレたちは、仕事の帰りにチップを見せ合った。

ちなみにカスミは3万、栄ちゃんも3万、まいは昨日と同じく7万を越えた。

世の中一体どうなってんだ?!

こんなラクして金が儲かるんだから不思議なモンだ。

だんだん物の価値も、お金の価値も薄らいでくるぜ……。

子供の頃は1万円って貴重だったけど、今じゃ、あの頃の千円くらいの価値ってトコかな?

……でも、まあ、稼げる時に稼いでおかないとな。

あと数日しかチップが貰えるチャンスがねえし。

あとはオレらが学校を卒業して、就職するまでお預けだしな。

しかし、オレらが大人になったら、一体どんな生活してんだあ〜  
〜?

みんなそれぞれ、立派なお屋敷にでも住んでるんだらうか?!

寮の部屋に戻ってくると、いつものようにアキラが登場した。

「なあ〜、光太! やっぱ、オレの部屋、変なんだよ! 1回、来

「てみてくれよ!」

あまりにアキラがしつこいので、行きたくもないアキラの部屋に行ってみる事にした。

アキラの部屋、広っ!!

アキラとフユヒコの部屋は、やけに広く見えた。

物もないし、2段ベッドが1つしかないからそう見えるのか?

部屋の大きさはオレらの部屋と変わらなそうだし……。

オレらの部屋があまりにも人数が多いってのもあるかもな。

それにしても、物ないなあ。

いや、旅芸人なんてそんなモンなのかもな。

荷物が多くちや全国まわるの大変だろうし……。

「アキラもフユヒコも、荷物ってそれだけなの? 生きてて楽しいか?!」

オレはどんな反応が返ってくるか聞きたくて、あえてそんな質問をぶつけてみた。

「仕事道具は舞台裏に揃ってるから、余計な物は必要ないしね。ボクは生きてて楽しいよ。色んな人と、こうして出会えるし。きつと一般人より貴重な経験たくさん積んでると思うんだ。だからボクは物なんてなくても幸せなんだと思う……」

フユヒコがカツコイイ事を言っている。

「ハッキリ言つて、オレは物欲つてモンがねえからな。光太は生きてて楽しくないのか?!」

アキラに質問を返された。

「いや、ヒジヨ〜に楽しいけど……」

だって、これから先の長い人生、何があるか分からないんだぜ。

どんな未来が待ってるのか考えると、ワクワクするだろ？

オレはきつと、いくつになつても、この気持ちだけは忘れないぜ。

……そんな事を思つてる時だった!!

ガタン

カタ カタ カタ カタ

「・・・聞いたか?!」

アキラが「やった!! それみる!!」みたいな顔をしながら天井を指差した。

「確かに、誰かいるみたいだな・・・」

オレは素っ気無く言った。

アキラのヤツ、よっぽど怖がりなんだなあ。

だから少しでも気を紛らわしたくて、夜にジャンプ買いに行きたがったり、連日うちの部屋に顔を出したりしてたのか・・・。

それを考えると、年下のフユヒコなんて、随分と肝が据わってるよな。

アキラが怯えるこの部屋に、いつも一人でいるんだもんなあ。

ある意味、大したモンだぜ、フユヒコ。

「フユヒコはケンイチ並の臆病者って言ってたのって、アキラだけ? それはアキラ、本当はオマエ、自分の事だろ?!」ってアキラに言ってやりたかったが、喧嘩になりそうだったのでやめといた。

「なっ、おかしいだろ?! 昨日4階に行った時は、とても人なんて住んでないみたいだったけど、もしかしたら誰かいるんじゃないかって思うんだ!」

「ラップ現象だとしたら?」

オレは意地悪く聞いてみた。

「バカ、ラップ現象のワケあるかっ! 絶対、誰かいるんだよ!」

こいつ、ラップ現象の意味、ちゃんと知ってんのかな?と、アキラに疑問を抱いたが、説明するハメになったら面倒くさいので黙っている事にした。

ちなみにラップ現象ってのは心霊現象の一種で、天井や壁などから音がする現象だ。

オレの実家はとにかくラップ現象が多かったので、幼少の頃から慣れていたので、今の音くらいは何とも思わなかった。

「ネズミだとしたら・・・?」

さらにオレは意地悪くアキラに言った。

「ウルセー、そんなワケあるかっ!! オレは明日の午前中、上に

行ってみようと思うんだ!!」

アキラがそんな事を言っている。

へえ、なるほどねえ。

オレも明日は遅番だから、アキラについて行ってみようかな？

今からとかだったら嫌だけど、昼間だったら日も射してて暗くないだろうし、恐くないはずだ。

その時……

『光太……、もっとしつかりしなきゃダメだと思うよ!!』

『……絶対、行っちゃダメだからね!!』

そんなカスミの声がオレの頭を過ぎったが、オレはそれを掻き消した。

オレがやらなきゃ誰がやる?!

アキラの部屋の怪現象……

このオレが説明してやるぜ!!!!



オレは明日の午前中、アキラに4階の探索を付き合うことを約束した。

あんな前代未聞の強烈な恐怖が、オレたちを待ち受けているとは知らずに……

第14話 この上の・・・忌む部屋 〔4〕

オレとアキラが4階に向かったのは朝8時。

日も射していて気持ちのいい朝だ。

3階の廊下はハッキリ言って暑かったが、4階は驚くべき事に肌寒い。

嘘だろ？

ここだけ季節が違うのか？

なんて思っていたら、アキラもオレと一緒にだったらしく、両手で腕を擦っていた。

真っ直ぐ伸びるガランとした何も無い廊下。

相変わらず不気味な雰囲気、オレたちは声も出なかった。

朝だって言うのに、何なんだこの不気味さは・・・。

4階には住んでる人はいない。

そう思われる。

間違いない。

・・・そんな静けさがこの肌寒さを感じさせるのだろうか？

オレは一番手前のドアを開けてみた。

ギイイイイイ・・・

案の定、誰も住んではない。

2段ベッドがあるだけの、何も無い部屋だ。

広さもオレたちの住んでる3階と同じだ。

・・・と、その時！

「光太！ これ見てみる！！」

「何だよ、いきなり声掛けるなよっ！ ビビるじゃねえか！！」

オレはアキラが指を差す、ドアの上の方を見た。

……っがつ……!!

「何だコリヤ……!!」

お札だ。

色褪せたお札が、ドアの上に貼ってある。

なぜ??

他の部屋のドアの上にも、目立たないようにお札が貼られていた。

長い廊下の左側に立ち並ぶ部屋の入口。

そんな入口のドアの上方に一枚ずつ貼られたお札。

ひとつひとつの部屋のドアの上の方に貼られたお札は、目立たなく貼ったつもりっぽい雰囲気だが、異様な空気の中、逆に目立っている。

「光太！ 関係ない部屋はどつでもいいから、早くオレの部屋の上のトコ行こうぜ……!!」

オレはアキラに急かされ、さっそく目的の場所に向かった。

アキラの部屋の真上の部屋、404号室。

ここにもドアの上にお札が貼ってある。

「光太、開けてくれ！」

アキラがオレに命令する。

オレは一瞬ツッコミそうになったが、しょうがないので開ける事にした。

ギイイイイイイ……

「……………おおっ?!」

何もない。

やはり住んでいる人はなく、部屋の中はガランと静まり返っていた。

ただ違うのは、洋ダンスが1つあるだけだった。

その洋ダンスを見て、オレはカスミの部屋の怪事件を思い出したが口には出さなかった。

「マジかよ？ 何もねえのかよ！！ じゃあ、あのいつも感じてた人の気配とか、物音はなんだったんだよ……」

アキラが放心状態で言った。

「……ま、気のせいだったって事だろ？ ホラ、もしかしたら寮長が夜中に部屋の片付けとかしてたのかもしれないじゃん！！」

オレはテキトーに言ってみた。

すると……

「……そうかつ！！ オマエ頭いいなあ。そうだよなあ。寮長だよ寮長！！ どうして今まで気が付かなかったんだろっ！！」

アキラがオレの言葉に感心している。

いいのか、アキラ？

幽霊のせいになくていいのか？

寮長、夜中に毎晩こんな不気味な4階に来るって事で、いいのか？

部屋の入口に貼ってあるお札は無視していいのか？

「一応、寮長に聞いてみようぜ！！」

アキラもやっぱり納得いってないみたいだ。

だよな……。

そこなくちゃ、な。

「なあ、アキラ。その洋ダンスの中、気にならねえ？」

「そりゃ、気になるさ！ でもよ、恐くて開けたくねえよ！！」

「……だよなあ。でもさ、このまま帰ったら、きつと一生後悔すると思うぞ。あの時開けておけばなあ〜って」

「そんなモンか？ だったら開けてみるよ、光太！！」

またか？！

また、オレの仕事なのか？！

・・・ま、いいか。

オレはドツキドキしながら洋ダンスを開けてみた。

ギイッ

ガンッ

カン カン カン カン

開けた勢いで、中のハンガーが揺れた。

「なあ、アキラ。オマエが部屋で聞いてた音ってコレじゃねえ？」

「・・・ち、違つたらあゝ。オマエも聞いたろ？ あれは誰かが歩く音だつて！！ ネズミだつて現にいねえゝだろ？ アレは絶対誰かが歩く音だつて！！ それに、その音出すにはダンスを誰かが開けなきゃいけないだろあゝが！」

「じゃあ、寮長で決定だな・・・」

「・・・そうだな」

オレの問いに、アキラは真顔で答えた。



「じゃあ、もし寮長じゃなかったら？」

「……………」

オレの問いに、アキラは黙り込んでいる。

「……………やっぱ、アレだよな？」

「……………そうだな」

オレの問いに、アキラは素直に頷いた。

そう、オレもアキラも認めるしかない、アレの存在。

……………幽霊。

404号室を出て、一応405号室も開けてみた。

何もない。

ドアの上の方にお札が貼ってあるだけだ。

帰り際、403号室も開けてみた。

案の定、何もなかった。

「早く寮長の部屋に行こうぜ!!」

アキラは早く結果が知りたいらしく、オレを急かしている。

でも、オレはせっかくここまで来たなら自分の部屋の上の部屋を試みたかった。

おそらく4階に来る事は、もうないだろうし……。

オレはアキラを無視し、おそろおそろ微妙に緊張しながらドアノブに手をかけた。

ギイイイイイイイ

402号室のドアが開く。

ツンとする臭いが鼻をついた。

……瞬間!!

オレは言葉を失った。

「光太っ！！ や、やべえ！！！」

オレの後ろで部屋の中の様子をつかがったアキラが絶叫した。

部屋の中には、びっしりとお札が貼られている！

大小のお札が、所狭しと！！

その数およそ100枚・・・！！

信じられない数である。

白のお札の他、赤いお札、絵馬のようなものや鈴、お守りまで飾られている。

奥のほうには、床に神棚のようなモノが作られていて、そこには火のついてないロウソクが数十本、水のないコップ、カチカチのご飯のような物、古そうな盛塩などが置かれていた。

それだけでも驚愕なのだが、オレはすぐにもっとも恐ろしいモノを

見てしまった。

畳一面に、不気味な染みがこびりついているのである。

「うわあああ~~~~~っ!!!!!!!!!!」

アキラが逃げたっ!!!

「待てって!! 待てってアキラ~~~~~!!」

オレもアキラの後を追う。

オレたちはそのまま、社員食堂まですっ飛んだ。

2人とも頭の中は真っ白である。

息をきらしながら、談話室のソファに転がった。

「な、何かあるぞ、あの部屋! 絶対、何かある! 日くつき部の  
屋だ!!」

アキラが息をきらしながら言った。

「冗談じゃねえぞ、オイ!! あんなのが自分の部屋の真上にあるんだぞ?! 今まで1ヶ月近く、オレたちはあんなトコロの真下で生活してたって言うのかよ!!」 冗談じゃねえぞ、オイ!!」

「光太、寮長だ!! 寮長の部屋に行くぞ!!」

オレたちは、さっそく寮長の部屋に向かった。

寮長の部屋に着くと、寮長の関本さんが、いつものように座椅子に座って新聞を見ていた。

「寮長っ! 402号室って何なんすかっ!!」

オレは単刀直入に聞いた。

・・・すると、寮長は顔色一つ変えずに語り出した。

「・・・あの部屋ね。そうね、5年くらい前かねえ、自殺があったのよ。今日のように蒸し暑い時期ね」

5年前?

じ、自殺?!

「厨房の人でさ、ほら昔は今より厨房は暑かったのよ。冷房なんてきくわけないし」

いや、今でもあそこは十分暑いと思うが・・・。

「繁忙期だからさ、休みなく朝から晩まで働くわけよ。気も狂うわな。こんな山奥で友達もいなけりや、な」

分かる。

分かるぞ。

オレたちも朝から晩まで働かされているが、仲間がいなかったら地獄だと思う。

一人でこんなトコロにいたら、オレは耐えられない。

「ほら、厨房つていっても料理人ならまだいいんだ。その人、皿洗いでね。これがまた熱いのね」

オレには血洗いの過酷さが、よ～～～～く、分かる。

・・・そういえば、先月、血洗い専属のおっさんが自殺したって話  
あったよな。

オレが見た、死んだ魚の目をしたおっさん。

名前は確か・・・・・・・・

ヤスベさん!!

・・・ヤベえ〜つて、あそこ!!

何とかならないのか？

労働基準法だか何だかあるだろお〜?!

監査とかして、国とかが何とかしてやんねえ〜と、またいつか死人  
が出るぞ、あそこ!!

「発見したのはすぐだったよ。遅刻しようもんなら、すぐに部屋に  
かけつけるからね。鍵もないからすぐだったよな」

分かる。

分かるぞ。

関本さんは、遅刻した人がいると、部屋までかけつけて起こしに来るんだ。

カスミも遅刻した時、関本さんに起こされたって言うってたしな。

・・・しかし、関本さんって休みあるのか？

年中無休なのか、この人？

「天井から首を吊っててね、しかも両手の手首も切ってるのよ。よっぽど死にたかったのかねえ？ 傷が深いし、ぶら下がってるから、ほとんどの血をだしたんじゃないのかねえ・・・」

天井から首を吊って？

両手の手首切って？

ほとんど血を出したあゝゝ？

・・・って事は、オレらの部屋の天井の染みって、血じゃねえっかっ！



垂れてきてたのかよっ!!

当時、オレらの部屋に住んでた人、気の毒すぎるぞ、オイ!!

・・・それに、上の階にお札が貼ってあったけど、出たんだよね？

幽霊出たんだよね？

だからお札貼ったんだよね？

何回も出たの？

だから、あんなにいっぱいお札増えちゃったの？

・・・しかし、その部屋を封印するならさあ、せめて置くくらい替えてからにしようぜ。

お札とか、天井の染みは我慢するから・・・。

オレとアキラは、無言のまま自分たちの部屋に戻った。

結局、寮長は、4階には久しく行っていないという事だった。

オレたちは言葉もない。

もう、こんな所、いたくない……。

それが正直な所だった。

そして、これから、さらなる恐怖がオレを待ち受けているのであつた……。

第14話 『この上の・・・忌む部屋』 4 (後書き)

第14話 『この上の・・・忌む部屋』 おわり

第15話 サトちゃんと・・・ ㄱ1ㄱ

「カスミちゃんが光太のお嫁さんに来てくれたら助かるんだけどな  
ㄱ！」

「そうだな。いつもこんなおいしい手作り料理食べられたら幸  
せだなあゝ!!！」

カスミは自分の家で覚えた手料理を披露しに、たまにこうして我が  
家の食卓を邪魔しにくる。

だ、もんで、母ちゃんも親父も、調子に乗ってそんな事を言う。

「カスミちゃん、大きくなったら光太のお嫁さんに来てね。絶対だ  
よ（笑）！」

「はいっ！ 私でよければ!!！」

「何言っただよっ!! ふざけんなよっ!! 誰がお前なんかも  
らってやるもんかっ!!!!！」

「.....」

「コラ、光太！ カスミちゃんに謝りなさいっ！ せっかくわざわざ

ざお料理を作りに来てくれてるのに!!」

「そうだぞ、光太！ カスミちゃんは一人で来てるんだぞ!!」

「だって・・・」

「光太は恥ずかしがり屋で照れ屋さんだから、しょうがないです。それよりコレどうですか？ 家の畑で採れた野菜なんですヨ!!」

「あゝ、通りでおいしいワケね。カスミちゃん、お母さんにお礼・・・」

「はうあっ!!」

オレのすぐ真上の天井・・・

いつもの染みだらけの汚い天井だ。

どうやら今のは、夢だったようだ。

やけにリアルな夢だったぜ。

しかし・・・

何なんだ、あの夢は!!

小学3年生の時、よくカスミのヤツが家に料理をしに来てたけど、確か今の夢のワンシーンは記憶にあるぞ。

でも、夢の中のオレとカスミは今の年齢だった……。

なんてこった……。

どうもオレは、あの花火大会の日から、カスミが妙に気になりだしている。

まさか夢にまでアイツを見ちまうとはな……。

でも……アイツ……最近やけに可愛くなってきたよなあ……。

もしカスミに彼氏が出来たりしたら、オレは今までのようにカスミに接する事が出来るだろうか……。

嫉妬するのかな……？

それは幼馴染みとして？

それとも……。

こここのままじゃ、マジでカスミを……………。

す……………

すきになっちまいそうじゃねえええ……………かつ!!!!

ちつきしょく、アイツがオレの夢なんかに出るから……………  
……………!!!

「光太兄ちゃん、お早う!!!!」

「おっ、ケンイチ、今から仕事か?!」

ケンイチが私服にエプロン姿でオレの横にいる。

どうやら今からいつもの売店の仕事に行くようだ。

「あのさ、ボク、明日で仕事終わりなんだ。もうすぐ学校始まるし……………」

「なにっ、マジでか?! そ、そうだよな……………。オマエ高2だも

んな。そうか……。残念だな。オレらより1週間も先にここから脱出か……。いいなあ……。」

「光太兄ちゃん、残念なのか悔しいのかどっちなのか分かんないんだけど！」

「あゝ、どっちも。どっちかって言うと、残念。オマエとちょっと一緒にいたかった……。」

「光太兄ちゃんってさ、明後日1日だけ休みだよな？」

「ああ、そうだよ。その後はラストまでフル出勤だけど」

「ボク、その日に帰るんだ。わざわざその日に合わせたんだけどね」

「そうか。じゃあ、駅まで見送りに行くよ」

「ムリしなくていいよ。そこのバス停でいいから」

「……。そうか。悪いくな」

「じゃ、仕事行ってくるね。光太兄ちゃんも午後から頑張ってるね」

「ああ。またな……。」



ケンイチ・・・

帰っちゃうのか・・・

がっかりだぜ・・・

「あつ、ケンイチ！！　ちょっと待て！！」

オレはベッドから飛び降りると、廊下でケンイチを呼び止めた。

「・・・ん？　どうしたの？　光太兄ちゃん・・・」

「・・・あ、いやさ、どうでもいい事なんだけどさ、もしな・・・  
もし、オレに彼女が出来たらどう思う？」

ぐあゝ、オレは何を聞いてんだ？

こんな朝っぱらから、しかもケンイチに・・・！！

「嬉しいけど・・・、嫉妬するかも。でも、カスミおねえさんだったら嬉しいかな・・・」

おおっ？

何なんだコイツは？！

人の心が読めるのかっ？？！

「は、ははっ。カスミだってえ〜？ 冗談言っなよっ！！ それは有り得ないだろお〜！！」

「はははっ。そうだよね」

あれっ？

随分、素っ気ないなあ〜。

「もしさ、オレがカスミと付き合っつて言ったら、どう思っつっ？」

「え〜、それはないんじゃない？」

「どっつして？！」

「・・・だって、カスミおねえさんがOKしないんじゃないかな？」

「どうして???!」

「・・・だって、光太兄ちゃんと一緒にだと思っよ。今までみたいないい関係が続けていたって思ってるんじゃないかな? だってさ、もし光太兄ちゃんがカスミおねえさんに告白とかされたら、どう? やだよぉ〜って言うよね。絶対言うよね。同じじゃないかな?」

「そ、そうか……。あ、ありがとな……」

「それだけ?」

「あ、ああ、え〜っと、明後日カスミも休みだったはずだから、3人でケンイチが帰る時間までレジャーランドでも遊ぼうぜ!!」

「やったあ〜! 昔を思い出すね!! いつも3人で遊んでたもんね!! 三葉のレジャーランドを選ぶところが光太兄ちゃんさすがだね。ボクのためにわざわざ思い出作ってあげようって気持ち伝わって、凄く嬉しいよ。じゃ、楽しみにしてるよ!!」

「ああ。じゃ〜な……」

「・・・テキト〜に言ってみただけなんだけどな。

しかし、ケンイチのヤツ、意外と冷静に痛いトコ突いてくるよな・・・

。

ま、所詮アイツはガキンちよだからな……。

恋の相談は年下にするモンじゃねえな、やっぱし。

……って……こ、恋?!

何を考えてんだ、オレはっ!!

い、いや、冷静になって考えてみよう……。

オレはカスミの事、本気で好きなのか??

最近、妙に気になり出してるのは事実。

アイツ、以前とは見違えるくらい可愛くなってるし。

。このままだと、誰かにカスミが告白されるのは時間の問題……。

それだ!!

オレを無性に焦らせてるのは他でもない、それだ!!

カスミが誰かに告白される前に、オレが……告白しないと……カスミが誰かにとられてしまう。

誰かに……

それは、イヤだ!!

なぜだ?!

カスミが好きだから……?

そうか、オレはカスミが好きなのか……。

そうか……。

オレは、カスミが好きだったのか。

オレは、カスミが好きなんだ……



第15話 サトちゃんと・・・く2く

昨日オレは、アキラと見た4階での一部始終をみんなに話した。

栄ちゃんは笑ってたが、他のみんなは度肝を抜かれたらしく、みんな恐怖におののいていた。

そんな中、カスミは激しく怒っていた。

あんなに行くなと言っていたにもかかわらず、オレが4階に行った事に対しての怒りだ。

カスミは怒りを通り越したようで、その後パツタリと口を聞いてくれない。

しょうがないので、ほとぼりが冷めるまで待つしかないと、オレは大人しくする事にした。

もちろんケンイチの話もまだしてない。

仕事が終わりに、部屋に着くと、いつものようにアキラが顔を出してきた。

「よっ、光太、お帰り!!」

「何だよアキラ。今日はオレは疲れてるんだ。天井の染みの話なら昨日さんざんしただろ？」

「そんな暗い話はもういいよ。そんなんじゃない、大事な話があるんだよ」

「何なんだよ、その大事な話って」

「社員食堂に来てくれ・・・」

そう言い残すと、アキラはスタスタ先に行ってしまった。

何なんだよ、面倒くせえ〜なあ〜。

オレはしょうがなくアキラに着いて行く事にした。

食堂には、何と劇団きさらぎの座長、東条ハルオが待っていた。



オレは、その後、ハルオからとんでもない話をされた。

約1時間にわたる説得だった。

どうしてもオレを、劇団きさらぎに入りたいという、とんでもない話だ。

スカウトってヤツ？

オレは最初はテキストに聞き流していたが、あまりのハルオの説得と、アキラの夢のような話に徐々に翻弄されていった。

「劇団きさらぎは、日本だけじゃない。いずれ世界にうって出る劇団にする予定だ。その為には今から将来のリーダー格になる存在、若い力が必要だ。光太君、君のような若い力が・・・」

「光太。オレらと一緒に、世界を目指そうぜ!!」

オレは正直に、自分は演技力などないって事をハルオに話した。

アキラとの喧嘩は演技ではなかったという話しをしたが、ハルオはそんな事はどうでもいいと語った。

大事なのは演技力ではなく、本気で物事にぶち当たる行動力だと・・・

「光太君、それでは良い返事を期待してるからね。待ってるよ・・・」

「オレらはあと1週間でここを去る。その時までには返事をくれよな。一緒に日本中を旅して回ろうぜ！　それで将来は世界だ！！」

ハルオとアキラはそう言い残し、食堂を去っていった。

マジか？！

確かにオレは俳優を夢見てた。

それがこんなにも近くに感じるなんて・・・。

ずっと途方もない夢物語だと思ってた。

それがこんなにも手に届く場所にあるなんて・・・。

もしかしたらこんなチャンス、もう2度とないかもしれない。

学校を辞めて劇団きさらぎに入り、将来は世界中を旅して回り、さらに将来は大物俳優・・・。

マジか？

オレは何で専門学校の、それもホテル科なんかに入ったかというところ、何となく面白そうだったから、それだけの理由だ。

別に将来ホテルマンを夢見てたワケでも何でもない。

将来なんて、漠然としか考えられなかった。

だから胸を張って言えるんだ。

将来は未知数。

何があるか分からないって……。

人生、どこでどうなるか分からない。

今がそうだ。

将来を、未来を変える大きな選択肢。

さて、どうしたもんか……。

その夜、オレは劇団入りの件について、みんなに相談した。

「やめとけって。どうせ稽古についていけなくなって逃げ帰るのがオチだぞ！」

栄ちゃんが尤もらしい事を言う。

「旅芸人が世界を目指すって？　ちよつと無謀じゃねえか、その夢。せめてメジャーを目指すっていう、現実味のある目標にしとけって。それに、オレは光太が学校辞めるってのは反対だな。やるなら卒業してからでも遅くないんじゃないか？」

タケシが珍しく真面目に答えた。

「……でも、そんなチャンスって滅多になくねえ？　やるなら今しかないような気もするし。マジで将来、俳優になりたいんだったら絶対チャンスだって。学校なんか辞めても、勉強なんて将来いつでも出来るけど、俳優になれるチャンスって今しかないと思うけどなあ……」

ナオヤはそう言う。

「ボクは光太兄ちゃんじゃないから気持ち分からないけど、ボクだったらジブんに正直に生きていきたいと思うよ。将来、後悔しない生き方をしたい……」

ケンイチの意見は、オレの気持ちに似ていた。

結局みんなに相談しても答えは出なかった。

ジブンで判断するしかないって事みたいだ。

オレはその夜、興奮して眠れなかった……。

次の日、いつものように本館に到着すると、館内がかなりザワツいていた。

「どうしたの？ 何かあった?！」

早番の栄ちゃんに訊ねると……

「ドレスのサトちゃんがこれから来るらしいぞ!！」

ドレスのサトちゃん??!!

ドレスのサトちゃんって言ったら、オメえ、そりゃ〜有名も有名な  
お方よ。

ドラスターズっていつて、知らない人はいない超有名なお笑い5人組だ。

サトちゃんこと、佐藤 茶は、そんなドラスターズの中でも最も面白くて人気のある芸人だ。

こりゃ、小柳輝以上の大物登場だぜ！！

さすが本館。

噂では佐藤 茶は、毎年この時期ここに宿泊に来てるらしい。

目的はゴルフだ。

避暑地でのんびりゴルフか・・・。

いい、ご身分だな。

そんな事より、ひと目見てみたいなあ、佐藤 茶。

今日、出勤で良かったなあ。

明日だったら見れない所だったぜ。



第15話 サトちゃんと・・・くきく

なぜかロビーに10人ほどのベルボーイが立ち並ぶ。

あれ？

本館のロビーに今までこんなに人いたっけ？

オレと栄ちゃんと、カスミとまいと、あと1人か2人くらいだったのに、いつの間にか人が増えてるぞ。

それに、黒服を着た社員も何人もいるし。

そ、そしてあの男は、誰だ？！

胸に『三葉』の文字が！！

黒服の連中の真ん中に、ひと際オーラの違う、格の高そうなじじいがいる。

そのじじいこそまさに、ここのホテルのオーナー、『三葉 賢司』である。

賢司も佐藤 茶をひと目見ようと、わざわざ着替えて出てきたって



ワケだ。

結構オチャメなヤツだぜ、賢司。

オレは賢司に言いたい事が山ほどあったが、そんなじじいと話しをしている暇などなかった。

佐藤 茶の登場である。

マネージャー？

お供の2人と一緒に佐藤 茶は本館に入ってきた。

そのまま受付で部屋のキーを受け取る。

賢司と何やら話しをしている。

黒服数名に連れられて、行ってしまった……。

あっけない。

「光太、見た？」

栄ちゃんがニコニコしている。

「見た、見た。何か小さかったな。テレビで見るより実物は小さく感じたよ。それに、やっぱりテレビだと面白いつていうイメージだけど、プライベートでは普通の人なんだな……」

「ま、それは当たり前だろ……」

そんなカンジだった。

向こうでカスミとまいがキャツキャツとやっていたが、こっちは目もくれなかった。

そんな中、ある噂が飛び交った。

「今のサトちゃんの後ろを歩いてた人、右 トンペーじゃない?」

「そうそう、トンペー、トンペー!」

何い?!

右 <sup>みぎ</sup> トンペー?!

右 トンペーって言やあ、おめえ、西遊記の猪八戒役で有名な俳優じゃねえ?!

そんな有名人を見逃したってかあ?!

てつきりマネージャーとかスタッフとかだと思ってたぜ。

あまりにサトちゃんのオーラが凄いんで、つい、右 トンペーの存在に気がつかなかった。

ま、みんなもそうみたいだが……。

そして、しばらくすると、またもやビッグニュースが飛び込んできた。

スターとリッキー丸秘報告う〜でお馴染みの司会者、野々やすしが家族で別館に来ているというのだ。

何と部屋まで案内したのは羽本さん。

オレとカスミに初めてホテルの仕事を教えてくれた先輩だ。

そんな羽本さん、野々やすしから10万円のチップをもらったらしい。

お礼にフルーツ盛り合わせを即行で持っていったらしいが、やはり芸能人、スケールがデカイ。

出たよ、チップ10万円。

荷物を運んだだけで10万円。

スゲ〜!!

オレも、芸能人になったら、そんな事が出来るようになるのかな・・・。

しばらくして、オレは何気にトイレに入った。

本当は従業員は専用のトイレがあるのだが、オレは面倒なのでいつもロビーにある客用のトイレを使う。

さすが本館のトイレだけあり、黒塗りの壁はピッカピカに輝き、隅々まで高級感に溢れている。

そんな男子用のトイレに立ち、オレは制服のズボンのチャックを下ろした。

帽子もどうせ誰も居ないしと思い、そのまま脱がずに被っていた。

・・・すると、思いもかけない男が入ってきた!

サトちゃんだ!!

サトちゃんがオレの隣に立った!!

サトちゃんが、オレの隣で小便をし出した!!

いきなりの事でオレはサトちゃんを見たまま固まった。

するとサトちゃんは・・・

「……………ども」

オレを見て、軽くアゴを突き出し、ヒョコッとお辞儀をして去っていった。

「……………」

信じられねえ!!

目の前でサトちゃんを見たああ!!

それだけじゃなく、サトちゃんとシヨンベンしちゃったああ!!  
!!

サトちゃんと並んでシヨンベンしちゃったああ〜〜〜!!

オレは堪らずロビーでホケーッと突っ立っているカスミたちに即行で報告した。

「ええ〜凄お〜い。今、サトちゃんが外に出て行ったところであ〜、光太君いなかったから見れなくて残念だったねえ〜ってみんなで話してたところだったのよ!!」

まいが興奮気味で言った。

「ヒョコツとお辞儀したって?! ああ、想像できる。いいなあ〜、光太・・・」

栄ちゃんが羨ましがっている。

「・・・でも、どうしてお客様用のトイレになんて入ったの? ダメじゃない、ちゃんとルールは守らなきゃ。私たちは従業員用のトイレを使わなきゃダメよ!!」

この期に及んでまで、カスミに怒られた。

・・・でも、これをきっかけに、またカスミと普通に話しが出来る状態にもってける。

オレはどさくさに紛れてカスミにケンイチの事を話した。

すると・・・。

「分かった。じゃあ、明日、朝の9時に食堂の談話室で待ってるから・・・」

カスミが素っ気無く言った。

やったあ~~~~！

カスミと仲直りが出来たっ！

そして明日は、3人でレジャーランド、決定だあ~~~~！！

それから間もなく、オレと栄ちゃんは浴場のタオル交換の仕事を命じられた。

面倒くさそうに2人で浴場に入ると・・・

とんでもない事態が待っていた！！

なんと、右 トンペーが裸で目の前に登場したのである。

オレと栄ちゃんはタオルを交換しに男性更衣室に入った。

濡れたタオルと新しいタオルを交換している時、ガラガラと浴室の扉が横に開いた。

出てきたのは、タオルで前も隠さずスッポンポンのトンペーである。

サトちゃんに続き、トンペーまで目の前で見てしまった！！

しかも今度もフルチン付きだ。

。。。。  
あまりの衝撃に、オレも栄ちゃんも苦笑いするしかなかった。。。。



第15話 サトちゃんと・・・ 4

またもや興奮して眠れなかった。

劇団きさらぎの事、サトちゃんとトンプーの事、三葉での思い出や、カスミの事…………。

オレは学校を辞めて、劇団きさらぎに入るのか?!

それとも、劇団きさらぎ、俳優への道は諦め、学校生活を送るのか…………。

劇団きさらぎ行きを断った場合、学校生活をもっと青春溢れる楽しい場にする必要がある!!

俳優への道に匹敵するくらいの、明るい未来を作らなければならぬ。

どうしたら、明るい未来を築けるか?

未知の世界だが、恋人を作るってのはどうだろうか?

きつと、毎日がハッピーだ……。

しかし、彼女いない歴19年、告白回数ゼロのオレにとって、それはあまりにも過酷なロード。

……だが、そんな弱気では、明るい未来は築けない!!

じゃあ、お相手は？

いるじゃないか、身近に……。

カスミってヤツが!!

でも、正直言ってカスミの場合、付き合っても今までと変わらない気もしないでもない。

カスミに告白し、恋人として付き合ってしまった方がいいのか、それとも今までのようにただの幼馴染みとして付き合っていた方がいいのか……。

このままオレの告白もなく、時が流れた場合、きつとカスミは誰かと付き合うだろう。

そして、いつかは結婚をする。

オレはそれでいいのか？

今現在、オレはジブンに正直に生きようとするならば、『カスミが好き』という思いを打ち明けなきゃならないだろうか？

時間は待つてはくれない。

あつと言つ間にオレたちは年をとる。

ボヤボヤしているとカスミが誰かにとられてしまう。

オレはジブンに正直に生きると決めたんだ！

ただの男に成り下がるのは御免だ！

オレは漢じゃあ~~~~！！

オレはさんざん悩んだ挙句、ついに結論を出した。

カスミに告白して、OKだったら、劇団きさらぎ入りを断る！！

万が一、NOだったら、劇団きさらぎに入る！！

それがオレが出した結論だ！！

ちょっとズルイ気もするが、そんな事を言っただけでは、この世の中、  
渡り歩いてはいけない。

そして・・・！！

とうとうオレは今日、カスミに告白する事を決意した！！！！

『・・・ボクだったらジブんに正直に生きていきたいと思うよ。将来、後悔しない生き方をしたい・・・』

ケンイチが言っただセリフだ。

そんなケンイチの言葉がオレを後押ししたのも事実。

ジブンの胸の内を正直に話す。

『カスミ・・・、オレ、オマエが好きだ！！ オレと、付き合ってくれないか？』  
・・・と！！

・・・ま、アキラや座長のハルオには申し訳ないが、オレの劇団きさらぎ入りは難しい状況になってきた。

それは、カスミは99%オレの告白をOKすると思われるからだ。

なぜなら・・・

実は昨夜、オレの恋愛相談をアキラにしていたのだ。

「オレは劇団きさらぎに入る前に、どうしても男としてケジメをつけておきたいんだ!!」

オレはアキラにうそぶきながら語った。

「そうか、そういう理由ならオレが一肌脱ごう。オマエの事をカスミちゃんはどっと思ってるのか、みんなにこっそり聞いてきてやるぜ!!」

「頼む。でも、カスミ本人と、まいの耳には絶対に入らないように注意してくれよな・・・」

「ラジャー!!」

そう言うとアキラは、オレのクラスの女子を探しに向かった。

その間、オレはタケシとナオヤと栄ちゃんとフユヒコにも相談してみた。

もちろん1人ずつ個別に、カスミの名前は匿名で……。

まずはフユヒコ。

「うん。ボクだったら絶対告白しますね。だって、今という時は一生に一度しかないんですよ。この一瞬を大事に生きていかないと、きっと将来後悔すると思うんです。言わないで悔やむより、言っただけ悔やんだ方が素敵だと思いますか?」

悔やむって何だよ、悔やむって!!

ま、だいたいフユヒコの言いたい事は分かった。

後悔するなって事だよな。

このキーワード、最近よく耳にするよな……。

後悔、か……。

確かに、言わなかったら後悔するかもな……。

いや、絶対、後悔する。

そしてナオヤ。

「へー、光太って好きなヤツいたの？ 誰？ ホテルで知り合ったコ？ まさかクラスの子じゃないよね？ ま、どっちにしても、言った方がいいんじゃない？ 光太だったらスパッと簡単に言えそうじゃん。あんまり深く考えなくて、サラッとすっちなまいなよ。言わないで悩んでるより、行動した方が早いと思うけどね……」

全く頼りになるアドバイスだ。

その通りだと思う。

栄ちゃんにも聞いてみた。

「……光太、それってカスミちゃんの事だろ？」

「……どうして?!」

「分かるって。顔に書いてあるぜ。・・・そうか、光太はカスミちゃんが好きだったのか。オレは絶対告った方がいいと思うけどな。だってカスミちゃんだって光太の事好きだろ。誰が見てもそれは明らかなんだから。だったら早いほうがいいんじゃないかねえ〜か？ ボヤボヤしてつと誰かにとられるゾ！」

栄ちゃんは意外にもそんな事を言ってきた。

栄ちゃんはカスミが好きなんじゃないかって思った事もあったが、どうやらオレを応援してくれているようだ。

栄ちゃんの言う通り、早い方がいいよな。

誰かに先を越される前に……………。

そしてタケシ。

「カスミちゃんだろ？」

「どうして分かる?!」

「その話し聞いて、相手がカスミちゃんじゃないって思うヤツ、多分いねえ〜と思うけどな。オレは告白するってのは賛成だぜ。だって今でもオマエら付き合ってるようなモンだと思っぜ?! クラスのみんなの為に、オマエらいつまでもあやふやな関係が続けてないで、さっさと付き合っちゃえよ。そうしないと、勘違いしてカスミちゃんに告白しちまうヤツとか出てくるかもしれねえ〜し、カス



ミちゃんだっけいつまでもオマエを待っててくれないと思うぜ。早いトコ堂々と付き合っちなまえよ。クラスみんなの公認の仲にしちなまえ!!」

タケシの言葉にはドキツとした。

カスミちゃんだっけいつまでもオマエを待っててくれないと思うぜっていつタケシの言葉だ。

そうだよな・・・、カスミはオレを待っているのかもしれない。

オレが告白するのを・・・。

やがて約2時間後、アキラが帰ってきた。

待ちに待ったカスミの気持ち・・・。

アキラはまず、最近仲のいいメグミに聞いたらしい。

メグミはまいの次にカスミと仲がいいので一番信用できるコメントだ。

メグミが言うには、カスミは絶対オレの事が好きだろうって話した。

その後メグミ経由でココロとリョウコにも聞くと、やはり答えは同じだったらしい。

そしてリサとみどりも同じ意見。

カスミはオレの事が好き・・・・・・・・！！

色々考えているうちに、すっかり朝日が昇ってしまった。

思えばケンイチの存在なんかすっかり忘れていた。

せつかく最後の夜だったのに……。

でも、しょうがない。

オレの人生を左右する、大事な大事な時期だから……。

いよいよ決戦の時は来た！！

オレは今日、カスミに告白する！！

オレに待っているのは、薔薇色の人生だっ！！！！

絶対に大丈夫っ！！

オレはジブんに何度もそう言い聞かせた。

やがて待ち合わせの時間が来た。

ケンイチはみんなと別れの挨拶を交わし、荷物をまとめて薄っすら涙を浮かべながら部屋を出た。

ケンイチのヤツ、案外涙モロいんだなあ、なんて思っていると、部屋の奥で号泣している栄ちゃんがいた。

ど、どうしてそんなに泣くの？

え、栄ちゃん・・・！

一体、何を想像したらそんなに泣けるんだ？！

何と何を照らし合わせて泣いてるんだ？？

ケンイチも複雑な面持ちでみんなに手を振り、一ヶ月近くいたこの寮に別れを告げた。

オレたちも一週間後にはここもお別れだ・・・。。。

さて、それはさておき、オレには勝負の時が来た。

待ち合わせ場所には約束通り、カスミがいる。

目の前のカスミは今日も一段と輝いて見えた。

第15話 サトちゃんと・・・ ～4～ (後書き)

第15話 『サトちゃんと・・・』 おわり

オレの決戦の日は、衝撃的な展開で始まった。

珍しく髪を結い上げ、珍しくスカートなんぞ履き、今時のファッションで人目を引くカスミ。

オレは今日、このカスミに告白をする！！

そんな意気込みで待ち合わせ場所に向かったつもりだったが、カスミはオレの目を見ることはなかった。

しかも、オレをいっさい無視した。

ケンイチはそんなオレをチラチラ気にして歩いていたが、カスミに話し掛けられオレは独りぼっち。

2人の後ろを黙って歩くしかなかった。

いつもはただの長い連絡通路が、今日はメチャクチャ長く感じた。

従業員はレジャーランド無料開放という特別ルールがあり、施設内のゲームやアトラクションが無料だった。

外にも観覧車やバイキングなど、ちょっとした遊園地もあり、半日は暇なく遊べると思われた。

・・・が!!

カスミがオレを完全無視する為、全く楽しい時間とは言えない。

オレはどうするべきか考えてはみるが、カスミに連れられてケンイチがあつちやこつちに移動するので、今後の展開が全く読めない状態だった。

・・・ヤバイ。

このままだと、マジでヤバイ。

告白どころか完全にこのままの状態で一日が終わる・・・!

そう感じたオレは、スキを見て強行突破に出た!!

ケンイチがオレとカスミのジュースを買ってきている間に、オレは観覧車のチケットを2枚買った。

・・・そして！！

「カスミ、いい加減にしろっ！！」

そう言いながらオレはカスミの手を引いた。

「きゃっ、やめてよっ！！」

カスミがまるで汚い物を触るかのようにオレの手を払いのける。

オレはそれを無視し、カスミの手を再度引っぱってムリヤリ観覧車に連れ込んだ。

「ちょっと、何考えてるのよっ！！ ケンちゃん置いてくなんてバカじゃないの？ はぐれちゃうじゃない！！」

「それより、どうしてオレを無視するんだよっ！！」

「いつつも自分の事ばかり考えて！ 少しは人の気持ちも考えたらどうなの？！ 観覧車が下に戻るまでにケンちゃんいなくなっち



「やったらどつするのよー!!」

「そういう自分だって、ケンイチの事ばっか考えやがって!! オレの気持ちも考えるよっ!!」

「意味分かんない。今の状況、どう考えたってオカシイでしょよ。私たちは今日、ケンちゃんとお別れだからこうして一緒にいるんですよ?! どうしてこうなるのよっ!!」

「…………カスミ!! よく聞けっ!! オ、オレは、カ、カスミの事…………」

頭の中が真っ白だった。

いつから真っ白だったかは覚えていない。

談話室でカスミを見た時からだったかもしれない。

2日連続徹夜をし、オレの頭の中は妙なハイテンション状態だったのは覚えている。

そのハイテンションを保ったまま、今の今まできたワケだ。

いっぱいシュミレーションした。

いっぱいシュミレーションでは成功した。

・・・でも、今の状況、シュミレーションとは、全然、違ああ〜  
〜う！！

だが！！

ここまでできた以上、やるしかないっ！！

怖気付いてる場合じゃない。

漢を見せる、光太！！

オレはそう、自分に言い聞かせた。

震える足をおさえながら。

「・・・・・・・・・・・・・・・・オ、オマ、オマエの事・・・・・・・・す、好きな  
だよっ！！！！」

言った？

オレ、今、言った？？

言っちゃタ?!

カスミにとつとつ言っちゃタ?!

スキって言っちゃった?!

「・・・あっそ。それはどうも」

あっそ?

それだけ?

え???

何?

何があつたの?!

オレ、告白したよね?

告白、出来たよね・・・??

『・・・あつそ』って言った？

カスミの返答、早くねえ？！

「お、おい、聞いてんのかよ?! オレは今、告白したぞ!! へ、返事は来週の・・・劇団きさらぎの最終公演の日までに・・・」

「あゝ、ホラ、ケンちゃん館内に入っちゃったじゃない。大丈夫かなあゝ?!」

「カスミ! オレと付き合ってほしい!!」

ハッキリ言ったぞ!!

どうだ?!

これで、どうだっ!!

「ゴメン。ムリ!!」

は、早っ!!

即答かよ。

え？

今、カスミ、何って言ったの？！

オレと付き合っつもの、ムリって言った？！

ガーーーーーン

ガーーーーーン

ガーーーーーン

オレの頭の中で、何度も何度もカスミの「ゴメン。ムリ!!」が繰り返され、何度もオレの頭は打ち叩かれた。

しかも、カスミのオレを見た表情は衝撃的だった。

眉間にシワを寄せ、眉をハの字にし、とても困った表情で、イヤなモノを見るような目で……

『ゴメン。ムリ!!』

終わった。

オレ、散った……。

「……は、ははは。い、今のオレのセリフは忘れてくれ……  
みたいな。はははっ……」

「大丈夫。私、忘れるの早いから。それより早く終わらないかなあ  
」。まだ頂上までもう少しあるよ」

その後、オレは放心状態だった。

カスミはソワソワしながら終始窓の外を見ていた。

もちろんオレたちの会話は、なかった……。

観覧車から降りると、カスミは館内に走っていった。

オレもトボトボうしろを着いて行く。

ケンイチは館内のベンチでキョロキョロしてオレたちを座って待っていた。

「もう、心配したんだからねえ〜!!」

ケンイチは少しムツとしたが、カスミがゴメンと謝ったので、それ以上は何も聞かなかった。

それからオレたちは、普通の会話をし、何気にレジャーランドを楽しんだ。

カスミもオレに普通に話し掛けてきたりしたので、オレも普通に返したりした。

ケンイチはそんな、普通じゃないオレたちを見て淋しそうな表情を時折見せた。

やがて、ケンイチが出発しなければならない時間が訪れた。

館内を出て、大通りまで歩き、お別れのバス停に着く。

「ここでお別れだね。楽しい1ヶ月だったよ。じゃ、光太兄ちゃん、カスミおねえーさん、またね・・・」

ケンイチ…………

ゴメンよ、ケンイチ。

オマエはオレに会うため、わざわざ遠い所から、一ヶ月の夏休みを潰してまでこうして会いに来たんだっけな……。

オレ、オマエの事、全然考えてなかった。

オマエの気持ち……………。

オレ、ホント、バカだよな。

自分の事ばかりで……………。

ゴメンな、ケンイチ。

こんな別れ方、淋しすぎるよな……。

「…………ケンイチ。オレ、東条ハルオの所に弟子入りするわ。それで、世界を目指すよ。必ずビッグになってみせるぜ!！」

「……………うん。頑張ってね」



ケンイチは曇った顔でオレを見ていた。

カスミはちよつと離れた場所で、オレの方を見ないようにしながらこつちを見ている。

「…………おねえさん。カスミおねえさん」

ケンイチがカスミを呼んだ。

「……………」

カスミがオレの隣に立つと、オレたちの向かい側にいるケンイチが、両手を差し出した。

オレとカスミはケンイチの手を握る。

「また、逢えるよね？」

ケンイチが少し涙を浮かべる。

右手にカスミ、左手にオレの手を握り締め、バスの到着と同時にそ

の手を離した。

その瞬間、オレは心の中で何度も叫んだ。

『時よ、止まれ！ いや、戻ってくれ！ 何の汚れもない頃に……』と……。

「ケンちゃん、元気でね!!」

カスミは軽く手を振る。

「ケンイチ!! またなあ!!」

オレは大きく手を振った。

「仲良くね!!」

ケンイチはそう言い残すと、バスに乗り込んだ。

バスは寂しそうな煙を残し、三葉を去って行く。

．．．．．行ってしまった。

帰り道も、オレたちは一言も話さずこのまま寮に帰ると思っていた。

そしてこのまま時は流れ、淋しく三葉リゾートパークホテルを去るのかと思っていた。

．．．．．が!!

カスミの一言がオレの未来を白紙にさせた。

第16話 隣の303号室 〔2〕

「・・・光太、ちょっとだけ言わせてもらっていい？」

カスミの冷たい言葉が突き刺さる。

オレは「いや、勘弁してほしい」と口から出かけたが、カスミは待ってはくれなかった。

「アンタ、人づてに私の気持ちを聞いたりして、どういっつもり？  
！ 遠回しに人の気持ちを勘繰りぶって、失礼だと思わないの？  
そんなに人の気持ちが知りたかったら、直接聞きにきなさいよ！！」

・・・ぐうう！

誰だ？

カスミにチクったな？

女って口軽いモンな・・・。

「それに、学校辞めるって？」

・・・それも誰かに聞いて、知ってたワケね。

それで朝から怒ってたワケか・・・。

「両親には相談したの?!」

「い、いや・・・、まだ・・・。」

「光太のお母さんとお父さん、どういう気持ちで学校に入れてくれたと思ってるの？ちゃんと親の気持ち考えた事ある?!」

「あ、いや・・・まだ・・・。」

「いつも自分の事ばかり・・・。」

「・・・それは自覚してます・・・はい」

「今日だって、光太は自分の事ばかり考えてるから、ケンちゃんとの大切な時間を潰しちゃったじゃない!! ケンちゃんの気持ち、考えた事ある?!」

・・・いや、お言葉ですが、今日の事に限っては、オレだけのせいでもないような気がするんですけど。

だって、カスミが最初から怒ってたから・・・。

オレは心の中でそんな事を思っていたが、やはりとても口には出せる状況ではない。

「どうするワケ？ アキラ君の所に行くワケ?!」

ま、カスミにフラれた以上、オレの道は1つ・・・だよな。

「・・・まあ、そうなる・・・かも」

「学校辞めて?」

「・・・まあ、そうなるよね。きっと」

「ふっん。サイツテ〜!!」

カスミは物凄い不機嫌な顔になり、オレを見ないで遠くを睨んだ。

「カスミだって自分の事ばっ……」

オレがカスミの顔を見て逆ギレしかけた瞬間……

「自分の身勝手な行動が、どれだけ人に迷惑をかけてるか考えた事ある?! 少しは人の気持ちも考えなさいよっ!! アンタなんか……アンタなんか……大っ嫌い!!」

そんな強烈な言葉を吐きかけ、カスミは走って寮に帰って行った。

「……」

つ……ついに……この日がやってきてしまったああああ!!

『三葉リゾートパークホテル』

これから34日間、ここがオレたちの戦場と……なる!!

「……」

「先生帰るの?? 研修の間、監督としてここにいるんじゃないの  
おー?!」

クラス委員のカスミがみんなの心の内を代弁するかのように言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「光太、似合ってるよっ!! 制服う!!」

オレの隣に並んで立っているカスミが、ニヤニヤしながら話し掛け  
てきた。

いかにも『全っ然、似合ってないよ!! おかしくて、笑っちゃう  
!!』 だはははは!!』と、言うような顔をして……………。

くそ〜!! からかいやがっ〜!!

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」



「あの・・・カスミおねえさんですよ。お久しぶりです」

ケンイチは少し照れくさそうに笑みを溢す。

「うわ〜、大きくなったねえ〜!! 昔なんか、こ〜〜〜んな小っちゃかったのに、随分大人になっちゃって〜!! 光太の事も、もうすぐ追い越しちゃうじゃん!!」

カスミが大きなジェスチャー付きで、興奮気味に話してる。

うるせー、ケンイチの背が伸びようがオレの背がケンイチに追い越されようが、そんなの大きなお世話だつて!

・・・つたく、親戚のおばちゃんみたいなさ、言いやがつて!!

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「うん・・・・・・・・。誰かのイタズラなのかもしれないけど・・・。ちよつとね・・・・・・・・」

遠くを見つめる二重まぶたの瞳に、女子寮への入口の階段が映る。

「女子寮にも出るんですか?? 幽霊・・・」

昨夜、本人曰く、正真正銘の幽霊を見たばかりのケンイチが、青冷めた顔をさらに青くしながらカスミの返答を待った。

「・・・ううん。そんなんじゃないの。・・・そんなんじゃないと思っただけど・・・」

「・・・」

「私たち、昨夜寝てないからもう戻って寝るから！ 光太も休みだからってポケーっとしてないで、洗濯くらいしなさいよね！」

自分たちはこれから寝るくせに、オレには洗濯しろと捨てゼリフを残してカスミたちは席を立った。

何なんだよ、八つ当たりか？

「・・・」

「おお！ 心霊スポットか！！ おもしろ・・・」

「いやっ！！ 絶対にいちゃっ！！！！」

オレが面白そうだとノリかけたのに、カスミがオレの言葉に割り込んで猛反対した。

「肝試しなら、寮の部屋で十分にしてるから！ わざわざ心霊スポットになんて行きたくないよ！」

カスミが言う事はもっともだと思った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

カチャーン

ドアノブに鍵を差そうとした瞬間、カスミは小さく悲鳴をあげて鍵を落とした。

「どっした？」

カスミの顔をのぞき込むと、カスミは青ざめた顔をしている。

「あつ、ゴメン、な、何でもないの・・・」

カスミは引きつったような笑顔で首を振っているけど、何でもないワケねえくだろ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「それ本当?! や、やばくない?! 私、鳥肌たっちゃたヨ。見てよコレ……」

確かにカスミの腕には鳥肌が……。

それにしても白くて綺麗な手をしてるなあ、カスミもやっぱり女の子なんだな……って、何考えてんだよ、オレ!!

「ちよつと、カスミちゃんの手って、どうしてそんなに綺麗なのお……!!」

まいはオレと同じ事を考えていたようだ。

「だよなあ」

オレはついつい本音を口にしてしまった。

「やだ、光太君……」

まいがオレをエッチな男を見るような目で見ている。

「そっかなあ?!!」

カスミは不思議そうに自分の手を見た。

あれ?!

そこ、照れるトコじゃないの?!

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そうか。アイツ、オレの行く先を前もってクリアーするプロセスなんだな?! そうか、アイツに色々聞けばいいんだな」

「聞くって何を?!」

カスミが不思議そうな顔をしている。

「へ?! 何って、決まってるだろ。どんな仕事をするのか、とか・  
・・・・・・・・」

「え〜?! 信じらんない。光太が仕事内容を気にするなんて〜」

「どついう事だよ、カスミ!! オレだって次にどんな仕事をするのか気になる時だってあるって!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あのふたりってさ、両思いなわけ? お互い別の人が好きって落

ちはない？　なんか今夕ケシが栄ちゃんはカスミが好きなんじゃないかって言ってたけど・・・」

「はあ？　わたし？！　ナイナイ、それは絶対ない！！　栄ちゃんが好きなのはまいちゃんだよ、絶対！」

「でも栄ちゃんってやたらカスミちゃんのこと気にかけてないかなあ、光太？」

「オレに同意を求められてもな、まあ、でもそう言われてみれば・・・」

「まったく、ふたりともダメダメだな。照れ隠しに決まってんじやない！　あの超シャイな栄ちゃんがみんなの前で好きなコの名前を連発できるとでも？」

「・・・たしかに」

「・・・」

不安になっていると、息を切らした女性が後ろの入口から姿を見せた。

カスミだ！！

なんだよ、オマエも遅刻かよっ！！

「ゴメン、寝坊した」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

社員食堂を覗き込むと、ケンイチとカスミが談話室で誰かを待っているようなカンジでソワソワしていた。

「アレ？ カスミ？ オマエ、花火大会行かないの??」

「ケンちゃんと一緒に、アンタを待ってたのヨ（怒）!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ここで見るとてもいいかもね・・・」

花火の光で、明るく虹色に輝いたカスミが呟く。

茜色の頬。碧色の瞳。桃色の唇。紫色の耳。蒼色の髪。黄色の首。  
橙色の肩。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そうよね。何回か、花火大会も行ったよね・・・」

「カスミおねえさん、浴衣似合ってて、綺麗でしたよねえ〜」

「そお〜お？ 照れるワねえ〜」

オレはその時、「浴衣なんて着てなくても、今だって十分綺麗だぞ  
・・・って言いそうになったが、寸前で止めた。

昔はそれくらい簡単に言えたのに、今はとても言えない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「こういう時、何て声を掛ければいいんだろっ?？」

オレはとにかく、考えずに言葉を発した。

「・・・上手く言えね〜けど、元気だせよ。そのうち、また出てくるって!」

「えっ?」



カスミの眉毛が吊り上がり、眉間に強烈なシワができた。

アレ？ オレ、今、変なコト言っただけ???

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「妬いてるの？」

カスミがニヤけ顔でオレを覗き込む。

「・・・何、言ってんだよ！！ アキラは男だぜ！！ アイツだつて彼女くらいいるだろ。あいつモテるし」

「でもホラ、光太とアキラ君って超仲良しじゃん。いつも一緒にいるし。アタシはつきり2人は付き合ってるのかと思ってたヨ・・・」

「馬鹿言っんじゃねえよ！！・・・アホか・・・?!」

「・・・良かった。」

「・・・へ？ 何が??」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あのナツオってヤツ、このままじゃ、まいちゃんを・・・・・・・・」

「分かった、カスミ。皆まで言うな。オレたちは仲間だ。それに、まいは栄ちゃんと・・・・・・・・だろ?!」

「・・・・・・・・うん!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

オレの隣で黙り込むカスミ。。。

こんな時、どんな言葉を掛ければいいんだ?

・・・神様?

もし、いるなら教えて欲しい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

オレはそんなカスミとまいを見て、何もしてやれない自分に対して、  
少しずつ腹が立ってきた。

・・・オレは一体、何なんだ？ ただの傍観者か？

目の前で困っているカスミやまいを、ただ黙って遠くから見ている  
だけで、少しも助けてやれないのか？

思えば、まいを助けようって言い出したのはオレじゃねえのか？！  
全然関係ない、あのアキラだって頑張ってるっていうのに。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「光太・・・・・・・・」

カスミの救いを求めるような小さな声がオレの耳に入った。

そのまま、その一声は、心臓を貫き脳天を通り越した。

そして、オレの魂をメラメラと燃え上がらせる。

・・・・・・・・カスミ！！ 今、助けてやつから・・・・・・・・！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そんなトコ、行くのやめなさいよ。何がオモシロイの？ 分かんない・・・・・・・・」

昨夜の事をカスミに話したら、即、怒られた。

「いい？ アキラ君もタケシ君も、ナオヤ君も、光太が行かなきゃついて来ないと思うの。クラス委員長は肩書きは私だけど、みんな光太を頼りにしてるトコロってあると思うんだ。私なんか以上に・・。だから、光太・・、もっとしっかりしなきゃダメだと思うよ！..!」

カスミに説教されてしまった・・。

もっとしっかりしなさいって、まるでお母さんみたいなヤツだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・カスミ！！ よく聞けっ！！ オ、オレは、カ、カスミの事・・・・・・・・、オマ、オマエの事・・・・す、好きなんだよっ！ ..!」

「・・・あつそ。それはどうも」

「お、おい、聞いてんのかよ?! オレは今、告白したぞ!! へ、返事は来週の・・・劇団きさらぎの最終公演の日までに・・・」

「あゝ、ホラ、ケンちゃん館内に入っちゃったじゃない。大丈夫かなあゝ?!」

「カスミ! オレと付き合ってほしい!!」

「ゴメン。ムリ!!」

は、早っ!! 即答かよ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「また、逢えるよね?」

ケンイチが少し涙を浮かべる。

右手にカスミ、左手にオレの手を握り締め、バスの到着と同時にその手を離した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「自分の身勝手な行動が、どれだけ人に迷惑をかけてるか考えた事ある?! 少しは人の気持ちも考えなさいよ!! アンタなんか・  
・アンタなんか・  
・  
・大っ嫌い!!」

オレの頭は真っ白だ。

真っ白けっけ、すっけっけ……。

全てが白紙だ……。

何もかも……。

何もかも……。

第16話 隣の303号室 くっく

ドンチャン ドンチャン

「歌え！ 騒げ！ ぎゃはははははは！！」

隣の303号室。

ここは元々ケンイチの部屋だった。

ケンイチは引越し当日302号室、オレたちの部屋に越してきた為、ずっと使われていなかった。

そんなケンイチも、もういない。

どんな因果か分らんが、オレは今、そんな303号室で酔っ払っている。

もう随分飲んだ。

どんだけ飲んだか覚えていない。

ありったけ買っておいたビールがもうないから、おそらく5人で500mlの缶ビールを3ダースは飲んだと思われる。

タケシもナオヤモアキラもへ口へ口になっている。

栄ちゃんはヨロヨロになりながら別館の大浴場に行ったつきり帰ってこない。

おぼろげながら覚えているのは、オレがタケシだけに例の話をした事だ。

タケシが仕事から帰って来た時には、すでにオレは酔っ払っていた。

「どろした光太。オマエが今の時間にそんなに酔っ払ってるのって珍しくねえ〜?」

「ぎゃははははっ。フラれちゃったのよん、ラランラン」

「マジかよ……」

タケシはホントいいヤツだ。

オレの話しを真剣に聞いてくれた。

笑いもせず、バカにもせず……。

ただ一言「今日はとことん付き合っぜ。とにかく飲んで嫌な事は忘れちまえよ!」と……。



やがてアキラと栄ちゃん、ナオヤも加わって大宴会が始まった。

しかし、いつものようにヤスヒロが迷惑そうに背を向けていたので、オレたちは隣の303号室に移動してきたってワケだ。

前にコンビニで買い込んでいたビールとおつまみ、そしてみんなのバカ話も加わって、303号室は大いに盛り上がった。

カスミの話しはタケシだけにたつぷり聞いてもらっていたので、どんだけ酔っ払ってもみんなには話さなかった。

情けない失恋話で酔いを醒ましたくなかったのかもしれない。

「よっ、光太、オマエ来るんだろ？　ウチに〜。いいか〜？　旅芸人ってのはなあ〜、色んな旅館やホテルで、い〜女抱き放題なんだぞあ〜〜」。ククククク・・・」

「ウソつけタコスケ！　オマエ見てりゃワカルだろあ〜があ〜！！　どこに女っ気あるんだってんだバカヤロツ！！」

「あっはっはっは。光太、上手い、今のヒートだたけしの物真似！　コラ、フンコロ、バカヤロツ！！」

「いやいや、今の絶対にナオヤの方が上手いから・・・」

「タケシもやってみるよ!!」

「やだよ、恥ずかしい。・・・バカヤロ、フンコロ、バカヤロツ!  
」!

「あはははははは・・・」

「よっ、盛り上がってんなあ、ホレ、飲み物追加っ!!」

「栄ちゃんどこ行ってたんだよ、バカヤロツ!!」

「ううゝわっ! それウオツカじゃねえの? 45度おゝ??  
火がつくぞ火が!!」

「どこでパクってきたの? 栄ちゃん・・・」

「どこって、風呂の帰りにレストランの厨房からガメてきたに決ま  
ってんじゃない!!」

「マジで? スゲエゝぜ栄ちゃん!! 飲もうぜ飲もうぜ!!」

「おい、何かで割れよ光太・・・」

「ぎゃははははは！ いいんだよ、ストレートで飲ませろよ・・・」

「うわっ、バカ！！ それ45度だぞ。胃が焼けるぞぉ〜?! 大丈夫か?」

「ゲゲゲ・・・光太のヤツ、コップの全部、マジで一気に飲みやがった。大丈夫か?？」

「ぎゃはははははは！ オレ様は無敵だぁぁ〜〜〜！ ゲロゲロゲロ〜〜〜！！」

「ホラ見るバカタレ!!！」

「ぎゃはははははは！ メンゴ、メンゴ・・・」

「ちよつと3歩してくらるっ〜」

「ダメだって光太。いくならオレも行くって!」

「みんな明日仕事だから、そろそろ寝るぜ。あとは頼んだぞ、アキラ!!！」

「ああ、任せな。おい、光太、ホントに大丈夫かあ？」

「今、何時？」

「夜中の、2時・・・さんじゅう・・・8分だ!!」

「ぎゃはははは！ 38分?! みつばだな!!」

「オマエ明日早番だろ？ あと4時間しかねえぞ？ 明日出れんの??？」

「出れるも何も、オレがあ休んだらオマエ、三葉はシメエよ。それにオマエ、オレが寝坊しようモンならリョウチヨウ様がオマエ、起こしにくんだぜ？」

「ああ、だな。オイ、どこまで行くんだよ・・・。外はダメだつて。今の時間、寮長に怒られるって!!」

「こつそり行けばダイジョウブじゃねえか？ 栄ちゃん毎晩、別館行くぜ?」

「オマエうるっせえから絶対寮長起き出すから!!」

「わくた、わくた。分かりましたよ。ここ寝ればいいんしよ、寝れば・・・」

「そうそう、大人しくそうしなさい・・・」

どうやらそのまま、オレとアキラは303号室で眠ってしまったようだ。

天井が回っている。

眠っている。

オレは完全に眠っている。

目を閉じているのに、目が回っている。

・・・気持ち悪い。

むむ？

誰か来たぞ。

誰だ？

おい、オマエ、な、何をする気だ？

おい、やめろって！！

大の字で寝ているオレの真上でニヤついた男が、オレに猿ぐつわを付け、両手と両足を縛り出した。

そ、そんな事しなくたって、オレは動けねえ〜って言うのに！！

オレは身動きが出来ず、ただただウジ虫のようにクネクネとその場で身をよじるしかなかった。

オレを動けなくさせた男は、信じられないくらい大きなハンマーを振り子のように振りかざした。

ガツッキーン

ゴキッ

むぎゃああああ！！

悲鳴を上げるが猿ぐつわをされているので叫び声は殺された。

だずげでぐれえ~~~~~!!

だれがあああ~~~~~!!

ヒュ~~~~ン

ゴキッ

くるぶしが粉々に砕け散った。

ヒュ~~~~ン

バキッ

膝の皿が皮の中で吹き飛んだ。

ヒュ~~~~ン………

ボキッ

足が関節を無視してくの字にオレ曲がる。

ヒュ~~~~~ン……………

男は何度も何度もハンマーを振りかざし、オレの足の骨を砕いた。

オレの息の根が止まるまで……………。



オレは激痛と恐怖でショック死をした。

男はオレが死んだのを確認すると、猿ぐつわを取り、両手両足の口  
ープも解いた。

それらを袋にしまう。

そんな無残なオレの死体を、男はニヤつきながら自分の持ってきた  
大きなござ袋に入れた。

オレを折りたたむように器用にござ袋に入れると、大きなトランク  
にオレの入ったござ袋と、猿ぐつわなどが入れられた袋を詰め込む。  
何度も押ししてはフタを閉じ、やっとの思いでオレをトランクへ閉じ  
込めた。

男はトランク、凶器のハンマーを持つと、トランクは自分の部屋に  
置き、ハンマーを持ってトイレに向かった。

ハンマーの鉄の部分と棒の部分を器用に外すと、鉄の部分をトイレ  
の窓から細い路地裏の地面に投げ捨てた。

その鉄の部分は、前もって掘っておいたと思われる穴にスッポリと入った。

棒の部分は清掃用具入れに投げ入れた。

ニヤついた男は自分の部屋に戻ると、サングラスをかけ、帽子を深く被り、変装をしてトランクを持つと、非常用階段を下りて外に出た。

先ほど落とした鉄の部分がある、細い路地裏辺りに来ると、男は土をかけて穴を埋めた。

そのまま男は何食わぬ顔で本館へ向かう。

客に成りすました男は、ロビーの受付を通らず、本館裏口の非常口から中に入った。

そのまま廊下を歩き、客用エレベーターで4階に向かう。

4階に着くと、ポケットからキーを取り出し、男は客室のドアを開けた。

部屋に入った男は、トランクからオレの入ったござ袋を取り出すと、

袋からオレを放り出す。

男はトランクにござ袋を入れると、それを持って出て行き、そのまま部屋には戻らなかった。

男は誰にも気付かれないまま従業員用エレベーターでゴミ捨て場に着くと、トランクを廃棄場へと投げ捨てた。

変装用の帽子とサングラスを、自分の従業員ロッカーのリュックに隠すと、ロッカーのハンガーに掛けてあった黒服に着替えだした。

そのまま男は何食わぬ顔で仕事を始める。

ポケットのキーを何気にマスターキーと表示のある金庫へ閉まって……。

10分ほど仕事をすると、男は言った。

「お先に失礼するよ……」

「夜勤、お疲れ様でした……」

それからしばらくして、客室の掃除婦がオレの死体を発見する。

駆けつけた警察官に、寮内で事情を徴収された際、「おかしい。ボ

クは彼と、仕事明けに会話をしている。死体が発見されたのは何時ごろですか？」と、男は尋ねた。

「午前10時43分・・・」

「そうですか。ボクは彼と話しをしたのは、その時間の5分前ですよ。これは間違いありません。ボクは彼とこのホテルの話しをしてたんで……。その時、時計を見て笑ったんですよ。今、みつばだねって・・・」

「そうですか。あなたにはアリバイがありますので、これで・・・」

「はい。ホントに残念でなりません・・・」

オレはそこで目を覚ました。

ここは？

いつもの部屋じゃ、ないな・・・。

アタマが割れるように痛い。

そうか、昨夜・・・っていうか、数時間前まで飲んでたんだっけ・・・

。。。

い、今のリアルな夢は何だったんだ？

夢？

夢だよな？！

それ以外考えられない。。。

それにしてもリアルで、細かい所までしっかりと覚えている、不思議な夢だった。

今までこんなに現実と夢が分からなくなる夢なんて見た事がない。。。

全く、不思議な夢だ。

そして、あまりにも恐ろしくて、不気味な悪夢だった。。。。。

あ、アキラが隣で寝ている。

こいつもここで寝たんだな？

ここは一体、どこだ?!

あれ?

あつ、そうか、隣の303号室だ。

ここで眠ったのか。

……それにしても薄気味悪い。

あの夢がもし本当だったら、オレはあの従業員が殺された現場で、同じ格好で眠ってたワケだ。

しかもあの事件って、ちょうど一年前くらいだって話しだよな……。

まさか彼の命日に、ここで彼に夢を見せられた……なんてオチじゃないよな。

「犯人は夢で見せたよな。頼む、犯人を捕まえてくれ。そうすればオレは浮かばれるんだ」みたいな?

全く、ふざけんな、だよ……。

・・・その時！！

バタ バタ バタ バタ

廊下を誰かが走ってくる音が聞こえる。

音は真つ直ぐ向こうの階段の方からこの部屋のドアの前で止まった。

オレは直感で分かった。

寮長だ！！

寮長の関本さんが起こしに来たんだ。

遅刻かよ、オレ・・・。

「光太君、大至急、出勤してくれ！！」って言われるんだろっなあ  
）・・・。

ガチャッ

ホラ、来た!!

「だずげで~~~~!!」

何と、ドアを開けて入ってきたのは、足がグニャグニャに変形した女性だった……!!



第16話 隣の303号室 く4く (後書き)

第16話 『隣の303号室』 おわり

## 第17話 屋上への誘い ㄱ1ㄱ

男子寮の部屋の窓からは、向かい側の女子寮が見える。

時折、女子寮の屋上から誰かが飛び降りるのを目撃するが、下に誰かが落ちた形跡はないし、もちろん誰も飛び降りなんてしていない。

見間違い説、幽霊説など様々だが、女子寮の屋上から飛び降り自殺した女性は何名かいるのは事実である。

「三葉の自殺の名所」と呼ばれる女子寮の屋上は、今は立ち入り禁止区域とされているが、それでも自殺を図る者が後を絶たないという。

数年前、ある従業員女性が、やはり屋上から飛び降り自殺を図っている。

高所からの飛び降りにもかかわらず、足から地面に落体するという、極めて奇妙な落ち方をした。

足を複雑骨折後、意識不明の重態に陥ったが、何とか一命をとりとめた。

その女性が入院先の病室で、同僚にこう告げたという……。

「私、自殺なんかしてない！体が、足が勝手に動いて気がつくとも屋上にいた！何かに腕を引っばられて、背中を押されて落とされたの！！」

その女性はその晩、再度意識を失い、そのまま目を覚ますことはなかった。

専門家の話によると、高所からの飛び降りにもかかわらず、足から地面に落体するというのは、よっぽど生存意識による着地への執念がない限り、理解し難い状況だという……。

それからの中に、「三葉の自殺の名所」と呼ばれた女子寮の屋上は、「三葉の心霊スポット」と呼ばれるようになったという……。

私はその噂を耳にしたのは、本館の実習初日だった。

本館の仕事を指導してくれる事になった、先輩の榎木さんは、背が高く素敵な女性なのだが、笑うと抜ける前歯が目立ってしまったので、いつも前歯を隠しながら笑う人だった。

「私は4階に住むようになって5年になるんだけど、屋上から人が飛び降りる気配を何度も体験しているわ。そろそろここを辞めようかなって思ってるんだ……」

「確か、そういう話して、別館の客室でもありましたよね？」

「このホテルは古いし、大きいでしょ。その手の話しはキリがないくらいあるのよね。ウソかホントか分からないけど。でも、信じて。私の話は本当なんだから・・・」

「もちろん信じますよ。私たちもたくさん怪奇現象を体験してきましたから決して否定できません！」

「言わないでね。私、自分の体験を人に語るのはいいんだけど、人の話を聞くのってダメな人なの・・・」

「はあ・・・」

私はそんな榎木さんに、マンツーマンで仕事を教わった。

半日ほどで本館の簡単な仕事を学び終え、やっとまいちゃんと合流ができた。

本館はチップの額も相当額で、何より高級感溢れるホテルなので、雰囲気静かで大人っぽい。

落ち着いてる場所が好きなら私にはとてもよくマッチした。

「カスミちゃん、今日は何して遊ぶ？」

帰り際にまいちゃんが聞いてきた。

「そうねえ、まいちゃんは何して遊びたい？」

「カスミちゃんズル〜イ。私の質問に質問で返してきたあ〜」

「何も考えてないでしょ、結局。いつも人に任せてばっかで、ズルイのはまいちゃんの方じゃん！」

「ねえ、じゃあさ、先輩の部屋に呼ばれてるんだけどあ〜、一緒に行かない？」

「えっ？ それが目的？ だったら最初から言ってよ。別に予定ないから行ってもいいけど、先輩って誰？」

「馬場さん・・・」

「あ〜、あの元レディースって言う・・・」

「うん。いい？」

「あ、あ、うん。別にいいけど・・・」

まいちゃんにハメられた。

元レディースの馬場さんは、アゴが突き出ているのが特徴の、強面の女性だ。

私に仕事を教えてくれた榎木さんと同期で、榎木さんと同じ部屋に住んでいるらしい。

「405号室。ここが馬場さんと榎木さんの部屋ね・・・」

「おじやましまあゝす・・・」

部屋の中にはジェニーズのポスターや切抜きが沢山貼ってあって、元レディースにしてはお茶目な景観だった。

一応、それらしき物、特攻服やバイクの雑誌などはそこら辺に散らばってはいる。

「ビールか？ カクテルがいいか？」

「はい？ あ、ウーロン茶持ってきましたので・・・」

「タバコは？」

「あ、吸わないです・・・」

「何だ、オマエら、シケてんなあ」

馬場さんは金髪の長い髪を後ろで結うと、タバコをくわえてしかめっ面をした。

「もうすぐ榎木が帰ってくるから。それまでくつろいでな。私は風呂に入ってくるからさ。アンタらは入ったのか？」

「はい。私とまいちゃんは先ほど入ってきました・・・」

「そうか。じゃあ、留守番してろよなっ！」

「は、はい・・・」

バタン

馬場さんは部屋を出て行った。

「まいちゃん。私、帰っていい？」

「ちょっとカスミちゃん、冗談は顔だけにしてよねえっ!!」

「だつてえ〜、ここの雰囲気私に合わないんだもお〜ん……」

「それは私も同じだし……」

その時、ベランダに人影が見えた。

「あれ？ ベランダに誰がいるよ?!」

「ちょっと、カスミちゃん、変な事言わないでよ!」

「ホントなんだつて。あれ？ 確かに人がいたんだけど。こっちを見てたよ。部屋の中をジッと見た。髪の毛の長い女の人……」

「ここの寮に、ベランダなんてないんだからねっ!」

まいちゃんが少し怒った表情で言った。

確かに……

この寮にはベランダはない。

しかも、ここは4階。

……っ!!



私は窓から下を覗いてみたが、やはり人がいれるような場所はない。

じゃあ、さっき私が見たのは・・・?!

気のせい？

「ねえ、カスミちゃん、コレ見て。馬場さんと榎木さんじゃない？」

「ホントだ。あの2人が若い頃の写真だね・・・」

サイドボードに飾られた写真には、特攻服を着てバイクに跨る2人の姿があった。

その他、サングラスにカラスマスクをした榎木さんや、男性と仲良く映る馬場さんの写真なんかもあった。

「ねえ、カスミちゃん。コレ、この部屋だよね？ 何で男が女子寮にいるの？」

「まいちゃん、そこは私にふらないでちょうだい・・・」

その時、視界に入った1枚の写真に、私はゴクリと唾を呑んだ。

「この人・・・。さっき、ここで見た人・・・。」

バタン

榎木さんが帰ってきた。

「よっ、お疲れ！」

「お、お疲れ様です。馬場さんはお風呂に行つてて、もうすぐ帰ってくるかと。私たちは馬場さんにごとで留守番してるように言われたので……」

「いいよいよカスミちゃん。その辺に座つてラクにしてて……」

「はい。あ、あのぉ、コレつて、お友達ですか……？」

「あぁ、はいはい。その人、ほら、午前中話してたじゃん。私の親友の小林よ。死んじゃったけどね……」

「……死んじゃった？」

「は、ははは……」

「カスミちゃん……」

まいちゃんが青い顔をして私を見ている。

「……ま、そんな事もありますよ」

私は小声でまいちゃんに言った。

「私も風呂に入ってくるからさ、冷蔵庫から勝手に飲み物出して飲んでいくから……」

バタン

榎木さんは部屋を出て行った。

「じゃ、まいちゃん、私はこれで……」

「ちょっとカスミちゃん、ズル〜イ！ 帰る時は一緒だからねっ  
！！」

「だって私、ここに用事ないもの……」

「私だって同じじゃん！！」

「だって、私、そこで……」

私は泣きそうになりながら窓の外を指差した。

「カスミちゃん、アンタの気持ちはよぉく分る。だから、もうちょっと辛抱して！」

「まいちゃん分かってない……」

バタン

「待ったか？ ホレ、今日は焼肉だ！！」

風呂から上がった馬場さんは、どこからかホットプレートや肉類、野菜類を持ってきた。

やがて榎木さんも風呂から上がって、4人で焼肉パーティーが始まった。

「男は？ 好きなコいるのかい?!」

ビールを旨そうに飲みながら、榎木さんが言った。

「私はいませんが、カスミちゃんなら……」

「ちよつとおく、それ、逆でしょ?! 私はいませんが、まいちやんならいます!」

「誰だよ、言ってみろよ!」

半生の豚肉を口から出しながら、馬場さんが聞いてきた。

「カスミちゃんは光太君を・・・」

「ちよつと待つてよ。どうして私があんなヤツを好きにならなきやならないのよつ! この人は栄作君が好きみたいです! かなり!」

「カスミちゃん、ヒッドゥイ!!」

「オマエら内輪揉めは止めるつて。分かった分かった、カスミは光太、まいは栄作が好きなワケね。はいはい・・・」

榎木さんが素つ氣無く言つた。

「私は別に・・・」

「カスミちゃん、素直じゃないわねえ。この期に及んでまだ言い訳するワケ? いい加減認めたら?! 聞いてください。カスミちゃんと光太君は、あやふやな関係をずっと続けているんです。周り

はとつくにお互いが付き合ってるって認めてるのに、本人達が、特にカスミちゃんが意地を張って認めないんです！」

「まいちゃん、言い過ぎ……」

「そうか、カスミは照れ屋なんだな？」

「そうなんです……って、違いますっ！ 光太とはただの幼馴染みで恋愛とはまた別で……」

馬場さんの問いに、私はどう答えていいのか分からない。

「幼馴染み？ カスミはそう思っても、向こうはそう思っていないかもよ？」

馬場さんはなおも、その、どうでもいい話題を引っぱる。

「そんな事ないです……！」

「何キツパリ断言してんのよカスミちゃん。光太君の気持ちなんて分からないじゃない。もしかしたらカスミの事、本気で想っているかもよ……」

まいちゃんまでいい加減にしてよ。

「カスミはまだ子供なのよ。そのうち気付く時が来るんじゃない？人はチャンス逃してから、あの時が実はチャンスだったんだって気が付く愚かな生き物だから。何ならアタシが獲っちゃおう？光太の事！」

「どうぞ、ご勝手に！！」

私は榎木さんにピシヤリと言った。

「カスミ、アンタ光太とやったの？」

榎木さんがまたもや絡んできた。

「いゝえ、やってません！ やらせません！ 有り得ませんから！！」

「へゝえ。身体にも触らせなくせに、随分と身勝手なヤツだなあゝ。男を手の平で転がして、惚れさせたら勝手に好きにならないでよってか？ 光太が気の毒だよな。男盛りのノリノリの時に、目の前の女がコレじゃゝな……」

「……………」

「あつ、ゴメンゴメン、言い過ぎた？ 酔っ払いのたわ言だから気

にすんなよ!!」

「はい……」

それからみんな、ピタリと私と光太の話題はしなくなり、逆にまいちちゃんと栄ちゃんの話で盛り上がった。

どうでもいいよ、光太の事なんか……。

ホントに。

ただ、どうしても榎木さんの言葉が気になった。

『カスミはまだ子供なのよ』

子供じゃないもん!!

『何ならアタシが獲っちゃおう? 光太の事!』

勝手にすれば!!



・・・何て言ったけど、それが現実になったら、私はどんな気持ちになるんだろう。

実は私、どこかで光太に甘えてる所があるのかな？

安心しちゃってる所があるのかな？

どうせ光太は私の事しか見てないから大丈夫・・・なんて・・・。

『身体にも触らせなくせに、随分と身勝手なヤツだなあ』

・・・だって、別に付き合っていないし、お互いの気持ちなんて分かんないし。

第17話 屋上への誘い ㄱ2ㄱ

「あれ？ 今日って榎木さんの姿が見えませんが・・・」

「ああ、榎木なら今日は休みだぞ。体調不良だってよ！」

「昨日、あれから飲んだんですか？」

「いや、アイツは缶ビール1本だけだから、別に二日酔いじゃないと思うけどな・・・」

馬場さんはそう言い残して、自分のポジションに戻っていった。

「どうしたの？ カスミちゃん。神妙な面持ちですね・・・」

「榎木さん体調不良だって・・・」

「ふん。あつ、そういえば、ここに来てからメグミがスナップ写真撮ってたの覚えてる？」

「うん。まいちゃんの寝顔とか、私も撮ったりしたっけ・・・」

「カスミちゃん、いつの間に行く?!」

「ウソ、ウソ。みんなでホテルの前で撮ったり、寮での生活をちよこちよこメグミが撮ってたヤツでしょ? それがどうかしたの?」

「現像したんだって!」

「へえ、この辺に現像出来る所あるんだ。知らなかった・・・」

「違う違う。メグミが羽本さんに頼んで、現像してきてもらったんだって。ホラ、別館の羽本さん、休日は実家に帰ってるから、ついでに町で現像してきてくれたんだって!」

「ふう〜ん。で、面白い顔してた? まいちゃん!」

「だから、そうじゃないの! 実は、一枚も出来上がらなかったんだって・・・」

「へえ〜。出し忘れたとか?」

「違くて、現像は出したのに、一枚もくれなかったんだって! 写真屋が!」

「それは、ポツタクリってヤツ?」

「カスミちゃん、あのね、笑い話じゃないの。一枚も、ちゃんと現像出来なかつたんだって!!」

「意味分かんない・・・」

「もういいよ!!」

「ゴメン、ちゃんと説明して。何々？一枚も写真が出来上がらなかつたって？それはどういう事？」

「つまり、どの写真も撮影ミスだつて。パズルがバラバラに散らばつたみたいになってたり、真っ白だったり、何も映つてなかつたり・・・」

「何枚出したの？」

「フィルム2本だから、全部で48枚？」

「だつて、それつて有り得くない？だつて、メグミ1人で撮つたんだつたら、写真の撮り方がヘタだつたんだなあゝつてだけで済むけど、アレはみんな撮つた写真だよ。そんな撮影ミスが48枚分全部つて・・・」

「だから問題なのよ。大問題なの。みんな言ってるわ。これはこのホテルの祟りのせいだつて!!」

崇り？

大袈裟じゃない？！

「ま、普通じゃないよね。現像ミスじゃなくて、撮影ミスってのが引っ掛かる……」

「でつしょ？ ねえ、光太君たちに聞いてみてよ。確か、男子も写真撮ってたよね？ ナオヤ君がバカチヨン持ってたでしょ？」

「まいちゃん、バカチヨンって何？」

「あ、バカッ、チヨンってなるじゃん、音。ホラ、即席カメラの事よ！」

「即席って言葉もどうかと思うけど、何となく分かった。アレの事ね。千円くらいのカメラでしょ？」

「そうそう、バカチヨン！！」

「……後で聞いてみるよ」

「頼むね！！」

私は休憩時間、光太を捕まえて聞いてみた。

「あのね、光太。ナオヤ君カメラ持ってたじゃない。アレって現像したとか分かる？」

「はいはい、ナオヤ持ってましたね、カメラ！　確かあゝ、最初の頃、アイツ、タケシと町で現像してたぜ！」

「・・・で、写真は？」

「ナオヤのプライベートの方は見せてくんなかったから分かんねえけど、ここで撮った写真は全滅だったよ。アイツ写真の撮り方がヘタクソだったから、全部に指が入ってた！」

「へゝ、そんな出来損ないのモノ、写真屋が渡したんだ・・・」

「場所にもよるみたいだぜ。ダメな写真を廃棄して、お金を返してくれる店と、ダメな写真も現像して、ちゃんと渡してくれる店。オレは金を返してもらいたい派だけどな。で、それがどうした？」

「ううん、それだけ！」

「それだけ？」

「・・・あつ、光太。しつこいようだけど、絶対、変な場所に行っちゃダメだからねっ!!」

「分かってるよ!!」

そうか・・・。

ナオヤ君の方も全滅か・・・。

偶然にしては、おかしくない？

「カスミちゃん、何か聞けた？」

「ううん。別に・・・」

「な〜んだ。ねっ、今日は何あそするう〜?」

「・・・何でもいいけど」

まいちゃんには男子の写真の件は黙っていた。

もちろん光太にも女子の写真の件は話さなかったもので、これ以上話しが膨れ上がる事はないだろう。

怪談話が広がる事で、別に私たちは困らないが、これからここで働

いていかなければならない人たちにとっては聞きたくない事もある。私は榎木さんが、「言わないでね。私、自分の体験を人に語るのはいいんだけど、人の話を聞くのってダメな人なの……」って言ったのを聞いて、それを痛感した。

私が榎木さんの立場だったら、やっぱり同じ事を言うかもしれない。

その晩、私がベッドに横になり、ウトウトしかけた時にソレは現れた。

やだっ、何？ この気配……！

足元に異様な気配を感じる。

みんな今日は早めに寝静まった。

時計の針は1時を回り、ドアもしっかり閉めて寝た……。

……はずなのに……！

半開きになったドアの向こうに、青白い何かが見える。



小さな女の子？

私は一瞬、そう思った。

人の頭部が、私の寝ている2段ベッドの上段からは、ドアの下の辺りに少しだけ見えた。

上半身を起こそうと、身体を動かそうとするが・・・

・・・動かない！！

金縛り？！

ゆ、夢？！

私は一瞬そう思ったが、眼球はしっかり動かせたので、夢ではない事は分かった。

足元から少しだけうかがえる、その小さな女の子のような頭部が、ゆっくりと上にあがってきた。

しゃがんでいたの？！

・・・っ!!

何と、私の視界に浮かび上がってきたのは、青白い顔をした女性だった。

髪の毛長いその女性は、恨めしそうに私を見ている。

この人、どこかで・・・？

・・・きゃっ!!

声にならない悲鳴をあげた。

私は、体も動かないし声も出せなくなっている。

こんな時に、どうして?!

足元のドアの向こうから私たちの部屋にゆっくりと入ってくるのは、榎木さんの亡くなった友人だ。

昨夜、榎木さんの部屋の窓で見た顔と、あの写真の顔、そして今、私の視界にいる女の顔がピタリと一致した。

ヒョコッ

次の瞬間、女性の顔は下に移動し、私の視界から消えた。

・・・どういふ事？

また、しゃがんだの？！

ヒョコッ

次の瞬間、またしても青白く、恨めしそうな顔が姿を現した。

ヒョコッ

その女性がゆっくりと近づく度、私の視界に出たり入ったりしている。

その間必死に体をよじろうとするが、わたしの手足は微動だにしてくれなかった。

女性が近づいてくる……。

まいちゃん、みどり、リサ、起きてっ！

誰か、部屋に入ってくるよっ！

た、助けてっ！！

……きゅっ！！

とうとう女は私のすぐ隣にまで来た。

私の真下のリサは気付いてるの？

それとも眠っているの？

女は梯子にゆっくりと手をかけ、ベッドに上がって「んん」としていき  
る。

……神様、助けてっ！

い、イヤッ！！

カクン

カクン

・・・が、何かに引っ掛かっているのか上手く上がってこれないよ  
うだ。

やがて女は梯子を上るのを諦めたらしく、ドアへと向かっていった。

トヨコ

トヨコッ

相変わらず一歩、歩くたび、立ったりしゃがんだりを繰り返しているように見える。

やがて女はドアの辺りまで辿り着くと、振り返ってもう一度私の顔を見た。

そしてそのままどこかに去っていった。

・・・その時、私は見てしまった！！

女性の足が、グニャグニャに変形していたのを・・・

第17話 屋上への誘い くら

「今晚、榎木さんの部屋にお見舞いに行こうと思うんだ・・・」

「そういえば今日で4日目だね、榎木さんが休んでるの。原因不明の高熱だっけ？」

「うん。馬場さんが言うには、毎年この季節になると榎木さんが熱を出して仕事を休むって・・・」

「へー、恒例行事なんだ。だったら別にお見舞い行かなくてもよくない？・・・って言うか、私、もうあそこ行きたくないんだけど。何かカスミちゃん幽霊見たりするし、何かあの部屋怖いから・・・」

そうか。

まいちゃんもやっぱり怖いのか・・・。

でも・・・。

「うん。私、一人で行きたいから、いいよ、付き合わなくて・・・」

「ホント？ 大丈夫？？」

「うん、平気。一応、今晚行かつて事はまいちゃんに言っところか  
なつて……」

「何か意味深？ ホントに大丈夫？！ 最近、何か私に隠し事して  
ない？ 何かあつた？！ 光太君にも冷たいみたいだし……」

「ゴメン、ホントに何でもないから。何かあつたら、すぐ相談する  
し……」

「……なら、いいけど」

まいちゃんに言えるワケないじゃない。

光太の事や、この前部屋で見た幽霊の話なんて……。

せつかく今日は、ドラスターズのサトちゃんたちが来てるって言っ  
のに、榎木さん仕事を休むなんて、よっぽどなんだな……。

私は仕事が終わると、さつそく4階の榎木さんの部屋を訪ねた。

ちょっとだけ、どうしても気になる事があつたから……。



「榎木さん、その後、大丈夫ですか？」

「カスミちゃん、アリガトね。わざわざ来てくれたんだ・・・」

「はい。あっ、コレ、つまらないモノですけど、レジヤールランドの売店で買ってきました!」

「わあ〜綺麗なユリの花!! アリガトね。この花を見ると、思い出すなあ・・・」

「何をです？」

「亡くなったユリの事・・・」

えっ?!

ヨリにも寄って、ユリ？

「もうすぐ命日なんだ。ま、明日なんだけどね・・・。なぜか分からないんだけど、命日が過ぎると私の熱も冷めるんだ。だから、今だけの辛抱・・・」

「毎年なんですか？」

「そう。5年前、あのコが死んだの。突然だったから、私もショックだね。その時のショックが抜けきれてないんじゃない？だから毎年こうして同じ時期になると、熱を出したりするのかな・・・」

「どうして亡くなったんですか？」

私は、そのユリって女性が、どうしても死んだとは思えなかった。

この部屋で見たのはともかく、私の部屋に現れたあの女性は、どうしても生々しく見えて、まるでホントはどこかで生存しているんじゃないかとさえ思えたのだ。

それを確かめに、私は今日、ここに来た。

そんな私の心を読んだかの如く、榎木さんはユリという女性について語り始めた。

「小林ユリ・・・。彼女は私と馬場と3人で元レディースだったんだけど、そんな外れた道を洗い流して、ここに来たの。この部屋で時を過ごし、やがて結婚して離れ離れになるんだなって思ってた。でも、突然の自殺だったの・・・」

「もしかして、初日に私に話してくれた、飛び降り事件の女性って・・・」

「そう、ユリの事よ。この上の屋上から飛び降りて、意識不明の重

態、両足を複雑骨折したわ。でも、何とか一命をとりとめた。病室で目を覚ました時、ユリは私にこう言ったの……。私、自殺なんかしてない！体が、足が勝手に動いて気がつくとも屋上にいた！何かに腕を引っぱられて、背中を押されて落とされたの……と……」

確か……

専門家の話によると、高所からの飛び降りにもかかわらず、足から地面に落体するというのは、よっぽど生存意識による着地への執念がない限り、理解し難い状況だって……

「ユリはその晩、再度意識を失い、そのまま目を覚ますことはなかったわ……。親友よ、私の。ずっと同じ部屋で生活してたのよ。あのコの悩みや心情くらい、私が把握してなかったとでも?! あのコは自殺なんかじゃないって、私は胸を張って言える……」

やっぱり亡くなったのね。

でも、自殺じゃないって事は、亡くなる前に本人が言った通り、何かに引き寄せられて屋上から突き落とされたって事よね。

だとすると、一体、何に引き寄せられたの?!

「このホテルには、不可解な事件が多すぎるのよ。怪談話、幽霊話、事件、事故、災難、殺人、自殺……………」

三葉リゾートパークホテル、確かに奇妙な事が多すぎる。

クラスのみんなも、ここに来て初めて幽霊を見た、なんて言ってるし。

現に私も……………」

絶対、認めたくなかったけど、あまりにも多すぎて……………」

「ユリが不可解な死に方をして、周りが幽霊の仕業や祟りのせいにする中、私はこの三葉を色々調べたわ。このホテルが出来る前、ここには何があったのか、そして、このホテルの歴史上、どんな隠された闇があったのか……………」

「どんな……………」

「分かったのは、ここが建てられる前、ここは墓地だったって事。身元が不明の墓地が立ち並ぶ荒地を、三葉の業者が更地にしてホテルを建てたの。それが原因だとは言わないわ。それから間もなく、三葉は3年たらずで一度経営不振で潰れてるの……………」

三葉が一度、潰れてる？

何ですって?!

「それからすぐ、今のカンパニーが借金ごと買収したわ。そのカンパニーの社長が、三葉賢司。経済界の一角を牛耳るこの男は、最初の創始者、三葉輝昭の義母兄弟の、兄。」

そういえば、今日、光太がオーナーを見たと言ってたけど・・・。  
満更ウソでもないみたいね・・・。

「三葉輝昭は、社会の流れに反して生きてきた男。会社の経営より人をとった。人を人材、つまり材料とは考えず、人財、会社の財産だと考えた。そんな経営が仇になったんだと、三葉賢司は何かで言ってたけど、私は日本経済そのものに不釣合いだっただけだと思っただわ。時代に合わなかっただけ・・・。」

時代・・・

「やがて三葉輝昭は経済界から姿を消し、三葉賢司がつつて変わってここを建て直した。リゾートパークホテルを設立し、空前絶後の大テーマパーク並のホテルを完成させた・・・。」

確かに、このスケールのホテルは類を見ないような気もする……。

「そんな中、施設の運営と成長だけに目を向けた会社は、そこで働く従業員達を、機械のように育て、配置していった。本当は、まるで家畜や奴隷のような扱いなのに、それを感じさせないように人間の心理的部分もしっかり研究され、従業員は管理されていったわ……」

何てこと?!

三葉はそこまで会社の運営に力を入れていたの?!

「でも、そんな作り物の環境も長くは続かない。従業員たちは、箱庭の中の己の飼いならされた感情に気付き始め、次第に心が荒んでいったわ。やがて問題や事件を起こす者が続出した。それは必然よね。でも、ホテル側は、そんな問題や事件があっても明るみにしたくない。何とかそれを隠そうとしてきた。そんな歴史が繰り返され、隔離された従業員たちと、隔離しているホテル側には壁ができ、やがて従業員は、会社への意見が何一つ通らない状態にまで陥った……」

「いくら従業員側とホテル側に壁があると言っても、社長はいるわけですよ? 意見が一つも通らないっていうのはおかしくないで

すか？」

「残念ながら、三葉賢司は動かされてるだけなの。創始者、三葉輝昭に変わってホテルを建て直したのは紛れもない事実だけど、実際の運営、従業員の管理はさらに別の組織が携わっているのよ。ようするに、三葉という会社は、さらに上の組織の単なる傘下。その組織が一体何なのか、三葉賢司が口を割らない以上、誰も分からないわ。私もそこまで情報を掴むのが精一杯・・・」

誰の意見も通らない理由がそんな所にあっただなんて・・・

それが今に至るワケ？

普通、会社っていうのは、働く人と共に繁栄を分かち合っていくものじゃないの？

それがここは、大きな組織が利益を求めるが故、従業員を家畜のように飼いならし、例えば自殺、事故などがあっても、それらの事実を隠ぺい・・・

従業員は不満や不安を訴える場所もなく、環境がイヤなら自分から去っていくしかない。

そんな経営が成長を生むの？！

どうして衰退しないの？

私には、今の経済が理解できない。

これじゃあまるで、正義が減び、悪が栄える・・・そんな世の中じゃない！

金、金、金・・・

そんなにお金が大事？

じゃあ・・・

人の心はどうなるの？！

「榎木さんは、どうしてそんな裏事情まで知ってるのにもかかわらず、ここにいらっしゃるんですか？」

私は無意識で、失礼な事を聞いてしまった。

「それは簡単な答えよ。こごと一緒に心中するため・・・」

「・・・？！」



「冗談よっ。私ももう時期、辞めるよ。結局、三葉の歴史を調べれば調べるだけ、空しくなるから。背景を知れば知るほどね・・・」

そんな榎木さんからは、哀愁が漂っていた。

「ほら、何かの事件を調べてもね、結局、バックにあるのはいつも三葉なの。幽霊が出ました。誰の？ この人の。じゃあ、何で出たの？ 殺されたの。誰に？ この人に。じゃあ、どうしてこの人は殺人をしたの？ 腹いせ。何の腹いせ？ 会社の・・・みたいだね？ 空しいでしょ？」

「・・・まあ、はい。」

ユリという榎木さんの親友の女性が、なぜ自殺をしたのか、それがホントに自殺だったのか・・・など、全てが謎のまま、私は榎木さんの部屋を後にした。

結局のところ、ユリという女性が死んでしまっている以上、犯人が出てこない限り、空想論理でしかなく、私も正直答えは出ない。

榎木さんも私と同じで、結局のところ諦めざるをえないのが実情なのだろう。

犯人が幽霊にしろ、ホテルにしろ、その上の謎の組織にしろ、それ

はずなわち目に見えない敵であり、見えない敵に向かっていくら攻撃したところで、弾が切れて空しさと疲れが残るだけなのだ。

ユリという女性が屋上から飛び降りたという事実しかない以上、それは自殺と片付けざるをえない。

残念だけど、そうするしかない。

そして、榎木さんが毎年この季節に原因不明の熱を出すのは、偶然。

私が榎木さんの部屋で見たユリという女性の姿は、幻覚。

私が部屋で見た、ユリという女性の姿は、夢。

残念だけど、そう片付けるしかない。

それがこの世の常識だから……

第17話 屋上への誘い 4

ハッキリ言って、今日は最低な1日だった。

最っ悪！！

光太のバカさ加減にも愛想が尽きたし、自分にも腹が立つ。

ハッキリ言って、もうイヤ！！

死んでしまいたい。

738

「どうしたの？ 怖〜い顔して。光太君と何かあった？！」

「・・・別に」

「ふ〜ん。ま、いつでも相談に乗るから、何でも話してねっ・・・」

「・・・ありがと、まいちゃん」

私は部屋に帰ってくるなり、ずっとベッドに横になって毛布を被っ

ていた。

夜中、歯を磨くのを忘れてたのを思い出し、洗面所へ向かった。

ドンチャン ドンチャン・・・

洗面所の窓からは、右手下に寮の浴場と社員食堂、向かい側に男子寮が見える。

夜中だつていうのに、1つだけ電気のついている部屋がある。

案の定、光太の部屋だ。

毎度の事だが、今日はひと際うるさい気がする。

あのバカ、近隣の迷惑も考えろつてんだ・・・・・・・・！！

寝よ、寝よ・・・。

就寝につくと、私はすんなり深い眠りについた。

．．．．．やがて。

アレ？

朝だ。

今日は早番だからそろそろ起きなきゃ．．．？

アレ？

体が勝手に．．．．．!!

私の体は私の意思とは関係なく動き出している。

ちょっと、パジャマのままなんですけど．．．?!

私はベッドを下りると、そのままドアを開け、廊下に出た。

まいちゃんもみどりもリサもまだ寝ていた。

確かまいちゃんも早番だったから、まだ出勤時間ではないのかな？

朝日も昇ったばかりみたいだから、4時くらい？

私の足は、そのまま勝手に廊下を歩き出す。

まるで夢遊病にでもなった気分だ。

ドラえもんが未来の世界に帰っちゃう日に、空き地でのび太が出会ったジャイアンみたい？

難しい喩えだったかな？

・・・そんな事より、私、大丈夫？！

そのまま私の足は、身勝手に階段を上り始めた。

一体、どこに向かってるって言うの？

ちよっと、ヤダ〜！

・・・3階を通り過ぎ、4階を通り過ぎる。

屋上?!

やがて階段を上り終わると、固く閉ざされたドアがあった。

南京錠でガツチリ閉められ、私の力では到底開けられない。

・・・すると。

私の足は勝手に階段を下り始め、今度は4階の廊下を歩き出した。

ちょっと!!!

勘弁してっ!!!

・・・401、402、403号室。

一体、どこまで歩かされるの?!

誰か、助けてっ!!!

しかし、どんなに叫ぼうとしても声は出ない。

・・・404、405号室。

榎木さん、馬場さん、助けてっ！！

声にならない悲鳴をあげたが、私は真っ直ぐ前だけを見て歩き、やがて非常階段のドアの前に立った。

お願い、開かないでっ！！

カチャン

キイイイ・・・

私は必死に心の中でお願ひするが、非常階段のドアは無情にも簡単に開いてしまった。



冷たい風が頬にあたる。

ドアの向こうは、高山からの景色が一望できる絶景だった。

遠くに見える町が、今の私に空しく映る。

・・・もしや?!

私の中の不安が大きく膨れ上がり、破裂しそうなほど心臓を痛めつけた。

ドキ　ドキ　ドキ　ドキ

高鳴る心臓とは裏腹に、私の足はカッンカッンとゆっくりと階段を上に向かって歩き始める。

とうとう屋上に辿り着いた。

見晴らしのいい景色が左側に広がり、向かい側には男子寮が悠然とたち誇る。

・・・なぜ？

私の吐く息が白い。

こんな真夏の朝に、息が白いつて有り得るの？！

そんな疑問はすぐに吹き飛んだ。

私の腕が、何者かにギュッと掴まれたのだ。

目に見えない、誰かがいる？！

その手に引っぱられ、私の体はグングン前に進む。

男子寮がよく見えてくるにしたがって、私は恐怖で胸が裂けそうになった。

逃げたい、逃げ出したいとかのレベルではない。

自分の意思が全くコントロールできない状態で、ただただ成り行きに身を任せるしかない。

勝手に進む足と、何かに引っぱられる感触。

ただならぬ心配。

私は、ここから、落とされるの?!

屋上から、落ちなくてはならないの?!

ど、どうして私なのよっ!!

た、助けてえ~~~~!!

私はとうとう、屋上の隅っこまで連れてこられた。

今はもう、引っぱられる感触も、私を掴む手の感触もない。

・・・しかし、相変わらず、全く体が言う事をきかない。

真下の地面が遠くに見える。

男子寮と女子寮の間はちょっとした空き地になっているが、手入れはされていないので、ちよつとした林になっている。

もし、私がこのまま、まっ逆さまに落ちたとしたら?・・・と思われる場所には、何もなく、ただ硬そうな土があるだけだ。

この高さから落ちた場合、100%生存は難しいと言える。

万が一生き残れたとしても、複雑骨折どころで済まないのは明白な事実だ。

ヒュ~~~~ッ

風が吹くたび、私の体は左右に揺れた。

足はすぐむどころか、硬直していて動かない。

・・・が、一歩だけ右足が前に動いた。

いやっ!!

死にたくないっ!!

死にたくないよお~~~~っ!!!!

ゾク

ゾク　ゾク　ゾクッ

私の全身に鳥肌が立つ。

背中は今まで感じたこともないくらい寒気を感じた。

後ろに、私のすぐ後ろに・・・

誰か、いるっ！！

いやああああああああ！！！！

男子寮の部屋の窓からは、向かい側の女子寮が見える。

時折、女子寮の屋上から誰かが飛び降りるのを目撃するが、下に誰かが落ちた形跡はないし、もちろん誰も飛び降りなんてしていない。

見間違い説、幽霊説など様々だが、女子寮の屋上から飛び降り自殺した女性が何名かいるのは事実である。

「三葉の自殺の名所」と呼ばれる女子寮の屋上は、今は立ち入り禁止区域とされているが、それでも自殺を図る者が後を絶たないという。

数年前、ある従業員女性が、やはり屋上から飛び降り自殺を図っている。

高所からの飛び降りにもかかわらず、足から地面に落体するという極めて奇妙な落ち方をした。

足を複雑骨折後、意識不明の重態に陥ったが、何とか一命をとりとめた。

その女性が入院先の病室で、同僚にこう告げたという……。

「私、自殺なんかしてない！ 体が、足が勝手に動いて気がつくところ屋上にいた！ 何かに腕を引っぱられて、背中を押されて落とされたのー！」

その女性はその晩、再度意識を失い、そのまま目を覚ますことはなかった。

専門家の話によると、高所からの飛び降りにもかかわらず、足から地面に落体するというのは、よっぽど生存意識による着地への執念がない限り、理解し難い状況だという……。

それからのに、「三葉の自殺の名所」と呼ばれた女子寮の屋上は、

「三葉の心霊スポット」と呼ばれるようになったという……。

誰っ？！

私の後ろにいるのは、誰なの？！

お願いっ！

私の背中を押さないでっ！

私を殺さないでっ！！

私、まだ死にたくないっ！！！！

……その時！！

目の前の男子寮の窓の1つに、光が見えた。





第17話 屋上への誘い 4 (後書き)

第17話 『屋上への誘い』 おわり

第18話 三葉のみなさんサヨウナラ 〳〵

何やってんだ?!

あのバカ!!

オレは信じられないくらい衝撃的な悪夢で目を覚ました。

変な女が助けを求めてくる夢。

そんな夢で飛び起きると、オレはふと、窓の外に目をやったんだ。

そしたら、カスミのヤツが女子寮の屋上で……………!!

早まるなっ!

何、自殺なんて考えてんだよっ!!

オレは飛び起きると、大の字で寝ているアキラを飛び越えて廊下に出た。

ふと、寮長の顔が頭に浮かぶ。

今、オレが社員食堂を駆け抜けて女子寮に忍び込めば、寮長が追いかけてきて大問題になる。

オレが女子寮に忍び込んだってだけの話しなら、そんなに尾を引かないだろうが、カスミが屋上にいたとなると話しは別だ。

あそこは立ち入り禁止で、しかも自殺の名所。

運良く今は早朝。

まだ、誰もカスミの行動に気付いていない。

このまま誰にも見つからないで女子寮の屋上に辿り着く方法……

……非常階段っ！！

オレは夢で見た男が、非常階段を使って下におりていたのを思い出した。

廊下を左方面に駆け抜けると、案の定、非常階段の扉が正面にあった。

開けっ！！

開けよっ！！

願いは通じた。

カチャン

キイイイイ

非常階段のドアは簡単に開く。

オレは物凄い勢いで階段を駆け下りた。

カンカンカンカンカンカンカン

階段を下り終えると、そこは伸び放題の草木が行く手を遮っている。どうにか草木を掻き分けながら、中庭を走っていると、悠然とそびえる女子寮が見えた。

オレは屋上を見上げる。

カスミが真正面を向いて屋上のギリギリの所で立ち尽くしていた。

ちつきしょ~~~~~!!!

間に合えっ!!!

さらに草木を掻き分け、女子寮の非常階段を探した。

造りは男子寮と一緒だろ?!

必ずあるはずだ!!

オレは自分にそう言い聞かせながら、男子寮の真向かいの位置を指して草木を掻き分けた。

腕や足を擦りむき、切り傷から血が出ているようだが、そんなのに構っている場合じゃない。

草木を掻き分け、やっとの思いで中庭を走り抜けると、そこには案の定、女子寮の非常階段があった。

よしっ！！

オレは急いで女子寮の非常階段を駆け上がった。

カンカンカンカンカンカン

急げっ！

急げっ！！

屋上が近づくにつれ、嫌な胸騒ぎがしてならない。

もしかしたら、オレがこうして走っている間にも、カスミが飛び降りてしまっているのではないか？！

・・・そんな嫌な予感がする。

あのカスミが自殺なんて、考えられない！！

・・・だが、ここでは、この三葉リゾートパークホテルでは、それも有り得るんだ！！

カスミが居た場所は、三葉の自殺の名所！！

自らそこへ行ったのではなく、何かに引き寄せられたのでは?!

一連の三葉での怪談話、オレがついさっきまで見ていた悪夢、それらを統合すると、そう思えてならなかった。

カンカンカンカンカンカン    カアアアアン

非常階段を上り終え、屋上の入口まで辿り着いた。

ドツカア~~~~ン

屋上へのドアを蹴り開けると、屋上の隅っこで立ち尽くしているカスミが目飛び込んだ。

遠い。

くっそお~~~~、間に合えっ!!

オレは屋上を走った。

小さく見える山並みの向こうから吹きさらす風が頬に当たる。

カスミくくくく！

どうして、そんな所にいるんだよっ！！

どうしてオマエが死ぬ必要があるんだよっ！！

頼むっ！

オレなんか一生無視してもいっから、生きてくれっ！！！！

カスミの体が、何かに押されたようにグラツと前のめりに一瞬揺れると、そのままカスミの体は落下の体勢になった。

カスミの長い髪がうしろになびく。

・・・万事休すかつ？！

カスミくくくく！！

死ぬなああああああああ！！！！



オレは全速力で走った。

……その時！！

ガッ

やぶれかぶれでオレが伸ばした右腕が、カスミの右腕を掴んだ。

マジ？！

危機一髪っ？！

オレは無我夢中で閉じていた目を開け、ちゃんとカスミが目の前にいるのを確認した。

いる。

カスミの背中がちゃんと目の前にある。

よ、良かったあ~~~~~！

ま、間に合ったあ~~~~~！！

カスミの両足は、屋上の隅、ギリギリの所で踏みとどまっていた。もう一足遅かったら、カスミの両足は屋上から離れていたと思われる。

オレは大きな溜め息を吐き、呼吸を整えてから、ゆっくりとカスミの言葉を待とうとした。

・・・瞬間!!

「ハナシテツ！ イマスグ、ソノテヲ、ハナシテツ!!」

カスミがオレに背中を向けながら、不気味な声をあげた。

「カスミ？ カスミなのか?! おい？」

「ハナセツ!!」

この声・・・!

カスミの声じゃない！

目の前にいるのは間違いなくカスミだが、聞き覚えのない声だ！！

「離すもんかつ！！ この手を離したら落ちるだろ？！ 落ちたら死ぬぞ！！ 絶対に離さない」

オレは目の前のカスミのようでカスミじゃないようなヤツに向かって叫んだ。

「オネガイ、ココラトビオリルノハ、アキラメル。ダカラ、ソノテヲ、ハナシテ・・・」

「嘘つくなっ！ オレは離さないぞ！！」

誰だ、オマエ？！

オマエ、カスミじゃねえ？

オレの予感は的中だな・・・。

カスミは何かにとり憑かれている。

「ワカッタ。ジャア、オハナシシヨウ。ダカラ、ソノマエニ、ソノテヲハナシテホシイナ・・・」

嘘だ。

オレは掴んだこの手を離してはならない。

この手を離してしまつたら、最期だ!!

「・・・ソウ。ワカッタワ。ベツニ、コノテヲハナシテモ、サイゴジャンイノニ、オカシナヒトネ」

・・・な、なんだ、この不気味なカンジは!!

「ブキミ？ ソンナコト、イワナイデ・・・。カナシクナルワ・・・」

オレは喋ってないぞ?!

コイツ、心を読むのか??!

「ヒトノココロヲ、ヨミトルノガ、ニガテ？　ダヨネ、コウタ」

「だ、黙れ！」

「ソシテ、コウタノタメニ、ワタシ、シヨウジキニ、ハナスネ・・・」

何を言ってるんだ、コイツは？！

正直に話すって、何を・・・

「・・・ゴメンネ、コウタ。ワタシ、スナオジャナカッタ・・・」

はあ？

何のことだ？

コイツは何を言ってるんだ？！

「イマナラ、イエル。ワタシ、アタナノコトガ……」

「う、うるさい、黙れっ!!」

嘘つくなよ、テメエ!

カスミはそんな軽くねえ〜んだよ!!

「コウタ、アナタノコト、ホントハ、ズットマエカラ……」

「……だから黙れって言ってるお〜がつ!!」

カスミのプライド、これ以上、傷つけたら許さねえ〜!

許さねえ〜ぞ、コノヤロオ!!

「……」

カスミのようで、カスミじゃないヤツは、オレの強く握る手とオレの気迫に押されたのか、その場で黙り込んだ。

「オマエ、誰だ？」



「ワタシ？ コウタ、ワタシガワカラナイノ？ ホラ、オモイダシテ。ハジメテ、アナタノイエデ、オリヨウリヲシタノハ、シヨウガクサンネンセイ。ワタシガ、アナタト、ケツコンヲケツイシタトキダワ！ チュウガクセイニナツテカラハ、オタガイ、イシキシチャツテ、アンマリ、ハナサナクナツタネ……」

「オマエ、誰なんだよ……」

「ダカラ、ワタシノコト、オシエテアゲルネ？ ハジメテ、セイリガキタノハ……」

「てめえ、いい加減にしるって！！ これ以上、カスミをなめんなよっ！！！！ カスミっ！！ 負けるなっ、こんなヤツに負けんやつ！！ 頼むから、負けんやつ！！！！」

……その時！！

オレの握るカスミの腕が、少しだけ動いたような気がした。

もう少しだ。

頑張れ、カスミ！！



「シヨウジキニ、ハナスカラ。コウタ、アナタノコトガ・・・」

「・・・何だよ、言ってみるよ?」

「ウン。コウタ、イママデズツト、ダメツテテゴメンネ。ワタシ、アナタノコトガ、スキヨ・・・」

「・・・そうか。・・・で?」

「オネガイ、ソノテヲハナシテ。キスガシタイノ・・・」

「・・・そうか。じゃあ、離すぞ!」

「ウン!」

「・・・つて、んなワケあるかボケエ!!! カスミは死んでもオレを好きだなんて言わねえ!つて!!!」

オレは力強くカスミの腕を引き寄せ、カスミを抱きしめた。

「ハ、ハナセ・・・!!」

「言ったる? 離すもんか。カスミ、ありがとな!! オマエの気持ち、しかと受け取ったぜ!! じゃあ、公約通り、唇を・・・」

「  
オレはカスミの柔らかかそうな唇に、自分の唇を近づけた。

「離せつて！ バカッ！！」

物凄い力で弾かれるオレ。

カスミ？！

本物のカスミかつ？？！

カスミはその場にペシャンと座り込み、放心状態でオレを見ている。

離れたっ！！

カスミから何かが離れたっ！！

カスミから離れたと思われる何かは、そのまま上空に向かって飛んでいくような気がした。

逃げるのか？！

「オイ、てめえ！　今回は引き分けといこうじゃねえ〜かつ〜！！  
オレは松田光太、19才、逃げも隠れもしねえ！！　いつでも勝負  
してやつから、いつでもコイヤあ〜！！　やる時あ、オレとタイマ  
ンだコラア！　オレ以外のヤツに手え出すんじゃねえ〜ぞ。オレが  
一番強え〜んだから、強え〜ヤツとだけやれや、コラア！！　分か  
つたかア〜〜！！！！」

オレはそんな事を大空に向かって叫んでいた。

しばらくすると、温かな風が流れてきて、屋上の空気が変わったの  
が感じられた。

「光太あ〜〜！！」

「カスミ〜〜！！」

正気を取り戻したカスミが、オレの胸に飛び込んできた。

「怖かった。怖かったよ〜。体が勝手に動いてね、勝手に屋上に  
連れてこられたの。そんでね、あそこに立たせられて・・・」

「もう大丈夫だ!!」

「信じてくれるの？」

「当たり前だろ!!」

カスミは安心したのか、オレの胸で大粒の涙をたくさん溢した。

「・・・ひっく、ひっく。光太、ありがとう。私を助けてくれて、ありがとう!!」

「当然の事をしたまでだよ・・・」

「でも、どうして私が屋上にいるって気付いたの?!」

「夢で、足がグニャグニャの女が教えてくれたんだ。目が覚めて、ふと窓の外を見たら、屋上で立ち尽くすカスミがいたってワケだ!」

「・・・ユリさん？ そうだね、きっとユリさんが助けてくれたんだわ!!」

「ユウリい〜?」

「……ん〜ん、何でもないの。……光太、この事は……」  
「カスミ、皆まで言うな。分かってるって、オレたちだけの秘密だよ、一生……。約束する！」

カスミは黙って頷いた。

「光太……。どうして、さっきの私が、本物の私じゃないって分かったの？」

「本物のカスミは絶対、自殺なんかしない。絶対、オレを好きだなんて言わない。絶対、キスなんかしない。絶対、抱き……。あわ……。ない?？」

「きゃっ、離してっ!!！」

ドン

いきなり突き放されるオレ。

「……。ほ、本物のカスミか?!」

「私よっ!!！ これ以上疑われるのはゴメンだわ。それにこんな所

には、もう居たくない!!」

「・・・そうだな。そろそろみんな起きだす時間だ。非常階段を、そ〜と下りて、廊下に出ちゃえばこっちのモンだろ？ 誰かに見られたら、早起きしたから散歩してたってでも言えば・・・」

「うん。光太も気を付けてね。女子寮に居たってバレたら大変だから・・・」

「大丈夫！ オレの心配はすんなって!!」

「うん!!」

こうしてカスミは非常階段を下りて、無事、自分の部屋へと帰っていった。

オレも無事、誰にも見つからず男子寮へ戻り、自分の階まで辿り着いた。

部屋に着いた頃、ちょうど早番のヤツらが起き出してきたので、何事もなかったかのように着替えて出勤した。

一連の騒動のお陰ですっかり酔いが醒めていたオレを見て、みんなが心底驚いていたのが印象的だった・・・。



第18話 三葉のみなさんサヨウナラ く〜

早いモンで、あれからあつと言つ間に5日間が過ぎ、いよいよ最終日。

思えば、色々あつたが、今思えば全てがいい思い出だ。

今日は早番で明日は帰宅の日だ。

本館のラストの仕事が終わったら、これからみんなで東条一家の最後の公演を観に行く予定だ。

ロビーには、すっかり見慣れたサトちゃんが、トンペーと野々やしとソファーに座って帰りの車を待ってる所だ。

サトちゃんとトンペーと野々やすしの脇には、大事そうなゴルフバッグが満足気に置かれているので、避暑地でのゴルフ三昧、さぞご満悦の様子とつかがえる。

野々やすしの子供がロビーではしゃいでいる。

野々やすしは家族連れだったので、別館に宿泊していたが、帰りはみんな一緒らしい。



「いよいよ今日で終わりね。どうだった？ この1ヶ月とちょっと、楽しかった？！」

いつものようにカスミが、笑顔でオレに話し掛けて来た。

「そうだな。ま、過去を振り返る余裕はないってのが正直なところかな……」

オレは何をカッコつけているのか、思ってもいないセリフを吐いている。

「そう。意味深なセリフね。ま、頑張ってるネ。陰ながら応援するワ！」

そんなカスミも意味深なセリフを残して、榎木さんの元へ去っていった。

榎木さんは体調が回復したらしく、あの事件の次の日には復帰した。

仕事の合間、中庭に、榎木さんと馬場さんと、カスミとまいがユリの花を沢山植えていたようなので、もしかしたら来年辺りは、中庭も花々に彩られるかもしれない。

それに触発されてか、寮長の関本さんが中庭の手入れを始めたので、

中抜けの時間や暇な時間を利用して、オレとタケシが邪魔をしに行ったりした。

その度、何かと理由をつけられて手伝わされるのだが、こんな施設の冷房ガンガンの中にいるより、いい汗がかけられるのが気持ちよかった。

先日、303号室で見た夢を、オレはカスミだけに話した。

カスミは遠回しに榎木さんや馬場さんに探りを入れ、例の303号室の事件の真相に迫った。

そこで分かった事実・・・

303号室で亡くなった従業員男性は、やはり本館で遺体が見つかったという。

足がグニャグニャに変形していて・・・

そこまではオレもナオヤに聞いて知っていた話だったが、実はその後にも奇怪な事件があった。

遺体が発見された夜、女子寮の屋上から飛び降り自殺があったとい  
う……………。

飛び降りたのは、何と従業員男性。

目撃者はいなかった。

1人を除いて……………

その遺体は、密かにホテル側が密葬したという……………。

ホテルの従業員には、その男性は急遽、辞職したとだけ報告された  
そうだ。

従業員にはその旨隠されたが、榎木さんだけは唯一の目撃者で、全  
ての事実を知っていたという。

カスミは明日でここを去るから、という理由で、こっそりその秘密  
を教えてくれたというワケだ。

同部屋の馬場さんも知らない、秘密……………

榎木さん曰く、303号室の事件は殺人。

犯人は本館のフロント従業員。

しかし、その犯人は自殺。

警察も知らない・・・

従業員も知らない・・・

そして、榎木さんはこう言っただけ。

『303号室の事件の犯人は、アイツにとり憑かれて男を殺したとしか思えない。ユリにとり憑いて、ユリを殺したアイツに。そして男は、アイツに殺された。毎年、必ず同じ時期に誰かが死んでいる。三葉はその事実を世間やマスコミから避けるため、いつも隠ぺいしているが、私の目は欺けない・・・』

・・・と。

オレの夢と、全てが一致する。

そして、榎木さんが言っていた『アイツ』とは、おそらく屋上でカスミを殺そうとしたアイツの事だろう・・・。

オレはそんな三葉に、たった一人で立ち向かい、見えない敵と戦い続ける榎木さんを不憫に思った。

とてもカッコイイとは言えないし、ましてや尊敬も出来ない。

敵があまりにも強大に見え、あまりにも恐ろしく、とても助太刀で

きそうにない自分に腹も立ったが、どうしようもないのは隠しようがない。

オレとカスミは、その驚愕な事実を知り、自分たちがとんでもなく恐ろしい体験をしたという事と、自分たちには何も出来ない歯痒さを、さらに思い知らされたのだった……。

やがてサトちゃんたちも三葉を後にし、オレたちの本館の実習も無事、終了した。

チップはオレとカスミ、栄ちゃんとまい、合計でかなりの額になったが、それはみんなで中庭の花代として寄付したので、それはそれで気持ち良かった。

栄ちゃんは「なんちゃって慈善事業」とか「どうせやつつけ仕事だったから」なんてカッコいい事言っつて、チップを全額寄付してたけど、まいの前でいいカッコしてるのは見え見えだった。

思えば学校に入学して、約3ヶ月でここに連れてこられたんだ。

それなのに、今はみんな、まるで長年連れ添った家族のように仲良しになった。

これからの学校生活、ホント楽しみだ……。

……って、オレ、劇団きさらぎに入る気さらさらないみたいだ。

ぶっちゃけ、カスミが心配だし。

まさかアイツが憑依体質だとは思わなかったから……。

いや、アレは特別だったのかもしれない。

今まで生きてきて、金縛りも初めてだったって言ってたし、よっぽど強力な霊にやられたのかもしれない。

どっちにしろ、オレはアイツを守らなきゃいけない、いや、守りたいって思った。

……例え煙たがられても、遠くからでもいいから、守ってあげたい。

でも、あんまりそれを表向きにすると、単なるストーカーに成り下がるので、オレはその事は誰にも話さず、その上、ある公約事も自分の中で決めた。

オレ以外でカスミを守ってあげられるヤツが出来るまで、オレがア

イツを守るって……。

そんなこんなでオレたちは寮に戻ると、私服に着替えてレストランへ向かった。

もう、あの堅苦しい制服を着ることもない……。

レストランに着くと、ちょうど公演が始まる所だった。

みんなもそれぞれ実習を終了し、クラスの12名、全員が集まった。

つるぴかはげまる係長、腰の低い松方さんの粋な計らいで、オレたちは2階の特別席を確保してもらった。

しかも夕食のお膳弁当付きである。

久方ぶりの社食以外の夕飯に、オレたちは舌鼓をした。

会場が暗くなり、さっそくハルオの落語が始まった。

そしてフユヒコの緊張気味の演技、ナツオの勇ましい演技、アキラの感動的な演技に見惚れながら、ラストのフィナーレまで目に焼き

付けた。

終始、オレは号泣状態である。

栄ちゃんもタケシも、そんなオレを見て少し引き気味だったが、周りの輩に気を配っている余裕などなかった。

これが最後だと思つと、とめどなく涙が溢れて零れ落ちた。

公演が終了し、オレたちはそれぞれ寮に戻つた。

時計の針は、ちょうど22時をさしていたが、今ではそんなのお構いなしになっていた。

入寮当初は、曰く付きの22時を避けていたが、だんだん忘れていたり面倒くさくなったりで、結局アレ以来何もなかったので、いつの間にか気にしなくなつていたので。

タケシとナオヤと3人で風呂に入ると、すでに入浴中のフユヒコとアキラがいた。

そういえば、ケンイチが顔を真っ白に塗つたフユヒコを見て、お化けと勘違いして大騒ぎになった時があつたっけなあゝなんて思いながら、オレは最後の湯船に浸かつた。



「光太、どうだった？ 今日のおレ・・・」

「最高だったよ。何度も泣いた。オレをこんなに感動させる事が出来るんだ、きっとその力は世界でも通用するさ・・・」

「ありがと、な。これから、大いに自信に繋がるよ、その一言が・・・」

アキラはオレの隣で、湯船に浸かりながら天井を見上げた。

「泣いてるのか？ アキラ・・・」

「バカ言え。ただの汗だよ。誰がテメエみてえくなオタンコナスと別れるくらいで泣くかってんだ!!」

「・・・だよな。・・・で、いつ、発つんだ？」

「風呂から上がったらだよ・・・」

アキラはそう言って、何度もお湯で顔を洗った。

「そうか、今晚出るのか。大変だな、旅芸人は・・・」

「まあ〜な。明日からは地方の温泉旅館巡りだ。こつ見えてもな、オレたちを待つててくれる爺、婆がたくさんいるんだ。そいつらの為にも、のんびりはしてらんねえ〜」

「分かつてるつて。オマエらの舞台だったら、そりゃ〜、全国にたくさんのファンがいるだろうよ・・・」

「爺婆だけどな・・・」

「はっはっは、それでも立派なファンなんだろ？ お客様は神様つてかあ〜」

「はっはっは！ その通り！！」

ガララララ

・・・その時、着替えが終わつて荷物を持ったフユヒコが扉を開けた。

「アキラさん、バスが来ましたよ！ 一応、アキラさんの荷物は持つてきましたんで、風呂から上がったら、真つ直ぐ外に出て下さいねっ！！」

そう言うと、フユヒコはオレに軽く会釈をして去っていった。

「・・・じゃ、そういうワケだから、オレ、行くわ。またな・・・」

アキラはそう言うと、湯船から上がった。

「バスつて、専用バスかあ。てつきり電車とかだと思ってたけど。ナツオはバスを追いかけていくカタチ？」

「まゝな・・・」

「どんなバス？ まさかみんなの顔が描いてあるとか・・・」

「図星だ。座長と、ナツオさんのイラストがバスの横に、がっつと描いてあるぜ!!」

「へ、アキラの顔は？」

「バカ、一番デケエよ。真ん中にデーンとだ!!」

「す、凄えなあ！ オレ、今から見に行くよ!!」

「いゝよ、来んなよ。ここでいいって!!」

「わ、分かったよ。・・・じゃ〜な、頑張れよ、アキラ!!」

「オウ!!」

オレとアキラは着替えを終え、脱衣所を出た。

そして、玄関までオレはアキラを見送った。

「なあ〜、アキラ。どうして聞かないんだ？ どうしてオレを、あんなに誘ってたのに、今日は一言もオレを誘わないんだ?!」

オレは今までずっと黙っていた事を、背中を向けたままのアキラに聞いた。

オレの、劇団きさらぎへのスカウトの話・・・。

はっきり言って、最後に出したオレの結論はNOだった。

それを一言もまだ、誰にも言っていない・・・。

「・・・んな事オメ〜に聞けるかよっ!!」

「どうしてだよっ！ 水臭いじゃねえ〜かよ！ オレを誘ったのは偽りだったのかよっ！！ 座長だつて……」

「……るせえ！ 座長にはオレから昨夜、話してあるよ！！ 光太は来ねえ〜つて！！」

「……なに？！ オレは一言も、まだ……」

「オレがオマエの気持ちを分からないとでも思ってたのか？！」

アキラは肩を少しだけ震わせた。

「……」

「……じゃ〜なっ！！」

「……最後まで聞かないのかよ、オレの気持ち……」

「……聞きたくねえ〜よ！ だから聞かねえ〜んだよっ！  
オレは舞台の上以外で泣きたくねえ〜〜んだよっ！！」

アキラはそう言い残すと、玄関から去っていった。

オレはしばらく立ち尽くしていたが、溢れる涙を右手で押さえながら、玄関を出た。

「……アキラッ!!」

すでにアキラたちを乗せたバスは出発している後だった。

オレは出来る限りの全速力でバスを追った。

大通り手前で、やっとバスに追いついた。

バスの左側には、『劇団きさらぎ』と大きく文字が描かれている。

大通りまで来ると、すぐにバスは右折した。

「ありがとう~~~~!!」

オレは大声で叫んだ。

それは、心の奥底から湧き出てくる、アキラたち劇団きさらぎへの感謝の気持ちだった。

去っていくバスの横には、大きな座長ハルオのイラストが描かれている。

その脇に、ナツオの顔が小さく描いてあった。

アキラの顔はどこにも見当たらなかったが、オレの心の中はアキラで溢れていた。

第18話 三葉のみなさんサヨウナラ くっく

最後の寮生活、オレたちは今晚、寝ないで語り合おうと決めた。

前に栄ちゃんがパクってきた酒はもう誰かが飲んでなかったの、オレたちは談話室でジュースを買って小宴会と称して部屋で細々と語り合った。

それぞれの三葉での思い出や笑い話、バカ話、そして怪談話。

やがて酒も入ってないのでみんな盛り下がり、タケシを筆頭に次から次へとベッドへと入っていった。

オレは1人で、最後まで興奮気味に語っていたが、最後まで付き合いってくれたナオヤもあくびの回数を増やし、目を擦りながら、とうとうベッドへと行ってしまった。

眠気が全くないので、オレは1人、社員食堂の談話室へと向かった。

夜中の3時……。

こんな時間に誰もいないと分かっているのに……。



・・・すると。

談話室に1人だけ、人影があった。

カスミだ!!

「カスミ？ どうしてオマエ、こんなトコロに?!」

「光太？ もう、ビックリさせないでよ!!」

「ごめん。オレはただ、眠れないからここに来ただけで・・・。あ、迷惑だったら帰るから。・・・じゃ」

「せつかくだから、ちよつとだけ付き合いなさいよ。私も眠れなかったからここに来ただけ!」

カスミは自動販売機でブラックコーヒーを2缶買った。

「・・・カスミが飲むの？ ふたつも」

「あげるのに買ったのよ。なによ、私のオゴリじゃ飲めないって言うの?」

「・・・いや、オレ、ブラック苦手だから！」

「何、お子様気取ってんのよ。缶コーヒ―は砂糖がたっくさん入ってて、体に悪いんだからね。将来糖尿病になりたくなかったら、今からでも遅くないからブラック覚えておきなさい！」

「は〜い・・・」

カコツ

ゴクゴクゴク

「まずい!!--」

「光太〜、味わって飲むからよ。自然に飲みなよ、自然に！」

「自然に飲むからまずいんじゃないの？」

「もう。カレーライスは甘口？ 辛口？」

「・・・中辛！」

「じゃ、今度甘口作ってあげるから。カレーは甘口でしょ〜よ!!--」

辛口とか口にする人の気持ちがかんない。体に悪いし、あんなの辛いだけで味なんて分かんないじゃん！」

「はあ……」

「あゝ、今、私のこと身勝手なヤツって思ったでしょ？！」

「いや、思ってたねえ〜し……」

「私だってね、色々考えてんのよ。カレーひとつにしても、辛口を食べ続けてたら胃だって悪くするし、こつも……お尻のあ……とにかく、体に悪いでしょ？！」

「何、顔赤らめてんだよ！ 肛門がヒリヒリしてしまいいには痔になるって言いたいんだろ？」

「ハッキリ言わないでよ、はしたないわねえ〜!!」

「はしたない？ そんな綺麗な言葉使わないで、下品とか言えよ。遠回しじゃなくていいから！」

「光太?! 私たちはね、ホテルの専門学校に通ってるのよ。今はいいけどね、将来、そんなんじゃない社会に出てから苦労するわよ!! 今から上品に……」

「カスミ、もういいよ……。いい加減、オマエも素直になれよ！」

「……えっ?!」

カスミは急に黙り込んでしまった。

「オマエがムリしてここに来てんの、オレ、知ってるから。オレなんて、オマエと比べりゃ不順な動機だぜ。ただ単に面白そうってだけで、この専門学校選んだからな。カスミ、オマエの母さん、教師だったよな。父さんは調理師で、一流ホテルのシェフ……」

「だから何よ……」

「親に言われたんだろ？ ホテルの専門学校に行けって……」

「……どうして知ってんのよ!」

「誰だつて分かるって! 中学を首席で卒業して、高校時代は東大を目指してたオマエが、どうしてオレみたいなボンクラでも入れる専門学校なんかに入學してきたのか、考えてみりゃ、それしか思い浮かばないモンな!」

「ボンクラ?! アンタ、それ、みんなに失礼よ!! 取り消しな

さいよ。一応試験だつてあつたじゃない?! アンタだつて、それに受かつて入学できたのよ?! 入りたくても入れなかつた人の事も考えなさいよ!!!」

「・・・分かつたよ。ボンクラつてのは取り消すよ。ま、オレだけボンクラつて意味だつたんだけどな。・・・で、オマエは自分で選んだ道じゃなくて、それで楽しいか?」

「何よ、上から目線ね。アンタの言いたい事はだいたい分かるわ。決められたレールを走つてないで、自分の足で荒野を走れつて言いたいんでしょ?! アンタね、そこが子供の幼稚な考えなのよ。分かる? 道を外れたら、そりゃ、沢山の発見があるでしょよ。波乱万丈の人生を味わえて、経験と感動をたくさん手に出来ると思うわ。でも、私から言わせりゃ、それが、何?・・・って思うんだけど。そんな苦勞をしなくてもね、今はしっかりしたレールがあるの。それが私たちがこれから飛び込む社会つてヤツなのよ!!!」

「・・・そうか? ホントにそう思つのか?!」

「私はね! ただ、それをアンタに強制するつもりはないけど、参考までにね。レールを外れてごらんなさい? 食べ物が見つからなくて、野たれ死にする事もあるのよ?!」

「そうなつたらそれまでつて事だ。そうならないように、齒を食ひしばつて生きるんだ。人に頼らず、自分の手で、自分の足で食糧を探し、野たれ死にしないように自分で生計を組み立てていくんだ。決められたレールだつたら行き先はみんな同じ。速いか遅いかだけでも、レールなんかに乗らなければ、行き先は無限なんだ。世界は

広いんだ。宇宙だってある！」

「何バカげた事言ってるのよ。いい？ 私たちの父親、母親たちが、戦後一生懸命働いて、素晴らしい社会を築き上げたのよ。そこにレールを敷いてくれたの。勉強して、いい学校に入りさえすれば、いい会社に入れて、いい人生を送れるって……」

「……そんな楽な世の中、いつまで続くんだろうな？」

「いつまでも続くわよ。いい学校出て、いい会社に勤めれば、いい給料がたくさん貰えて、いい生活が出来るの。いい家に住んで、いい旦那さんに巡り合えて……」

「本気で言ってるの？」

「……いや、だんだん私の言いたい事から逸れてきたカンジ」

「オレは、こんな満ち足りた世の中、そんな長くは続かないと思うぜ。日本だけだろ？ こんな豊かな国は。ま、アメリカは論外だけど……。世界中には食べ物が無い国、水が飲めない国、たくさんあるんだ。そんな大きな地球のほんの小さな島国で、今だけ豊かに暮らせてるだけなんじゃないのかな？ 日本って……」

「どっつしてそう思うのよ……」

「・・・だって、日本は地球の資源を使いまくって成長してるだろ？ 地球の大事な木を削り、水や食糧、油や電気を使い放題使ってる。どっかでシワよせがくるよ、絶対。他の国から恨まれてるだろうしな！」

「・・・じゃあどうしろって言うのよ」

「今からでも遅くないから、サバイバルに適した人格を形成してだな・・・」

「もういいわ。アンタの論理は面白いけど、私とはホント、正反対！ ワイルドな人ね・・・っても言えるけど、私はあえて、野蛮と呼ぶわ」

798

「カスミは勉強さえすれば、いい学校を出ていい会社に入れるって言ったけど、どうして東大を諦めたんだ？」

「ホテルの専門学校が良かったからよ・・・」

「それは何で？」

「だって、ホテルに入るには、ホテルの専門学校出るのが手っ取り早いでしょーよー！」

「東大出たってホテルに就職出来るだろ。もしかしたら、うちの専門学校出るよりもっといい一流ホテルに入れたかもしれない・・・」

「・・・何が言いたいのよ!」

「正直に言えよ。親が決めたんだろ?」

「それはさっき正直にそうだって言ったじゃない!」

「親がオマエを手元から離したくなかったんだろ? 遠くの東大に行ったら、親元を離れなきゃならねえもん・・・」

「・・・」

「ムリすんなよ、もう。自由に生きていけよ。オマエだってもうすぐ成人なんだぞ。このままだったら一生、親の箱庭の中だ。それじゃ〜三葉と一緒にだろ?! オレ、知ってるんだぞ。オマエの家、門限が厳しいから夜遊びが出来なかったり、親が厳しいから髪の毛染められなかったり、友達を選んで付き合っていたり、制約が多すぎるって事。だから、ここのホテルで、親から離れてのびのび楽しそうにしてるオマエを見て、オレ・・・」

「・・・じゃあ私にどうしろって言うのよ!! 学校辞めて自分の



好きな事しろっての?! カゴの中の鳥が、急に入口開けられたってね、外の空気は体に合わないわよ!! 人にはそれぞれ生き方ってのがあって、私は自分の生き方に満足してる!! 人に何と云われようと、アンタに何と云われようと、私は私のレールに沿って生きるから!!」

「そうか。応援するぜ、心からな。でも、ここで自由にのびのびと笑ってた時を忘れるなよ! オレは、それが本当のカスミだと思っから。怒ったり、泣いたり笑ったり、自由に生きてる今のお前が本当のカスミだと思うから。ここを出て、明日からまた両親の元に戻っても、ここでの時みたいなお顔をを見せてくれよな! . . . じゃな!!」

「. . . . .」

少々. . . いや、だいぶ言い過ぎたかな??

ついついムキになって本音を語ってしまった. . . .

. . . でも、いまさら反省しても、もう遅いな。

それに、オレはカスミに気を使う必要も、ホントはないんだよな。

いずれカスミはオレ以外の誰かと付き合うんだし、オレはカスミに気に入られようと努力する必要もない。

カスミに嫌われても、気にする必要は全くないんだ。

オレは缶コーヒーの空き缶を捨てると、カスミに挨拶をして立ち去ろうとした。

その時！！

「榎木さんの事なんだけど……」

カスミが言い辛そうに口を開いた。

そうか……

本館での仕事じゃ、ロクにその話しは出来なかったからな……

「何か言ってたのか？ 榎木さん……」

「……ん〜ん。別に……ただ、榎木さんの言葉で気になる事

があつて」

「気になる事って？」

「ホラ、榎木さんが言つてた『アイツ』の正体。私、思うんだけど、毎年同じ時期に人が亡くなるって言つてたでしょ？ 今の季節よね？ 三葉の歴史を調べて、過去にこの時期に何かないか調べてみようと思うの。ユリさんの命日に、私の屋上でのがあつたでしょ？ それに、303号室の殺人事件もユリさんの命日の日なのよ。……って事は、その日付だけをさかのばれば、もしかしたら『アイツ』に辿り着くかもって思つたの。ホラ、榎木さんは三葉の上の組織ばつかり紐解こうとしてるから、私が……」

「もうやめようぜ、カスミ……」

「えっ?!」

「榎木さんには榎木さんの人生があり、カスミにはカスミの人生があると思うんだ。余計な首を突っ込んで、また命を狙われたら、今度は誰かに助けてもらえるとは限らないんだぞ！」

「……それはそうだけど」

「榎木さんが言つてる、三葉の上の組織だつて、三葉に対して指示は出すけど、結局その指示に従つてるのは三葉だろ？ 自殺した人を密葬しろって指導はしても、自殺をさせろって指導はしてないと

思うし。黒幕を捜しても、結局見つからないんだよ。もしかしたら黒幕なんていないのかもしれない。それに気付いたから、榎木さんだってここをそろそろ辞めるかもって言ってたんだと思うぜ」

「でも、私になぜ『アイツ』が憑依したのか気になるのよ・・・」

「理由なんてないんだよ。『アイツ』の標的は誰でもよかつたんだよ。たまたまカスミが狙われただけだと思うんだ。それに、オレが思うに『アイツ』意外にも、それ相当のヤツがここにはウジャウジャいると思うぜ。『アイツ』なんかより強力なヤツがウジャウジャ・・・」

「やめてっ!!」

「怖いんだったら、もう首を突っ込むなって。触らぬ神に祟りなしって言うだろ。『アイツ』の件はもう、終わったんだ。また来年誰かが狙われるかどうかは分からないけど、ここにいないオレたちには、もう関係ない話なんだ。榎木さんの部屋でユリって女の幽霊を見たろ？ その時、おそらく『アイツ』に目をつけられたんだと思う。でも、もう『アイツ』を追い払ったんだから、カスミがさらに『アイツ』を刺激しない限り、オレは大丈夫だと思うんだ。榎木さんがなぜ『アイツ』に襲われないか知ってるか？」

「・・・ユリさんが守ってるから？」

「そうだと思う。カスミを助けたのはオレだけど、助けるように指示してくれたのはユリって女だ。だから、榎木さんは守られてるん

だし、あの人は精神的にも強い人だから心配はいらないと思うんだ。それに、今までずっと誰にも言わずに隠してた秘密をカスミに打ち明けたって事は、自分なりに色々な整理が出来て、ここを去ろうとする現われでもあると思うんだ。自分の秘密を誰かに打ち明けることにより、自分を第三者の目で見つめる事が出来るってヤツだよ。それを考えると、オレは榎木さんはここを辞めようって決心するのは時間の問題だと思うけどな・・・」

「…………分かったわ。榎木さんを助けるつもりが、迷惑を掛けるだけの行為になるかもしれないしね」

「そういう事だ・・・」

「ねえ、光太。話しは変わるけど、どうして劇団きさらぎ行きを断ったワケ？」

「…………随分、話しが急回転したなあ～～！！ さすがB型！！」

「血液型の話しは関係ないでしょ?! どうしてアキラ君の誘いを断ったのよ!!」

「だって、冷静に考えたら、オレ、自分が旅芸人になるの興味ないし…………。俳優になりたかったら、とっくに行動してると思うし…………」

「ふ~~~~ん」

「な、何だよ！何か言いたい事があるんなら、ハッキリ言えよ！」

「別にい~~~~」

「.....じゃあ、そろそろ帰るぞ！」

オレはソファーから立ち上がった。

「光太っ！！」

「何だよ.....」

「最後に1つだけ私の質問に答えなさいよ！参考にするから！！」

「ああ。何だよ？」

「素直になれって言ったでしょ？！具体的にどうすればいいのか教えなさいよ！！」

「……そのまんまだよ。自然体でいろって事だ。レールからはみ出さないように生きるのも正論だと思う。ぶっちゃけ、世の中、レールから簡単にはみ出せるモンでもねえしな。カッコつけて言うワケじゃねえけど、オレだって日本の法律っていう、制約の中で生きてるみたいなモンだし。日本で生きてる以上、どっかしらで箱庭に閉じ込められると思うよ。仕事だったり、社会のルールだったり。けどな、そんな箱庭の中だからこそ、強い気持ちってのが大事なんじゃねえの？ 自分に負けない、強い気持ち。自分に正直に、素直に生きるって事だよ！ 例え親に言われようが、決められようが、自分が違うって思ったら、それに逆らってみるのも素直に生きてる証拠だろ？」

「親に逆らえって事？」

「それが間違ってるって思うんなら……」

「私は、ホテルの学校に入って、最初は自分の気持ちに素直に従ってないって思ってた。でも、今はそれで良かったと思ってる。もし、入学前に親の意見に反対したら、こうしてここにも来れなかったと思うし……光太にも……」

「勘違いすんなよ？ オレはカスミの親が間違ってるって一言も言っていないからな！ 親の言ってる事が間違ってるって思うのは、カスミの変な被害妄想だよ。悪いのは、カスミを縛り付ける親か？ 違うよな？！ 悪いのは、縛り付けられる自分だよな。逃げようともせず、文句も言わず、黙って縛り付けられてる自分だよな。逃げ

るのは決して負けじゃないと思うんだ。イヤなら逃げてもいいんだよ。世の中の箱庭にいるヤツらは、ムリしていつまでも、頑張つて生きようとするから、死にたくなるんだよ。苦しかったら逃げればいいんだよ……」

「世の中の箱庭にいるヤツらって言ったけど、それは三葉も当てはまるワケ？」

「そう。仕事が辛かったり、イヤだったら辞めればいいだけの話じゃない……」

「でも、そう簡単に辞められないのよ……」

「そんなクダラナイこだわり持つてるから自殺者が絶えないんだよ！ 死を選ぶくらいなら、どうしてプライド捨てられないのかって……」

「でも、今の世の中は終身雇用だし、一度転職するとイチから……」

「命より将来の安定が大事?! オレはこの世に絶対なんてないと思うけどね。将来の保証をしてくれる会社があるって?」 冗談もほどほどにしろって言いたいよ」

「でも、公務員は……」



「カスミ・・・、マジで言ってるの？」

「・・・だんだん私の言いたい事から逸れてきたカンジ。私も、先の事なんて考えないで、今を大切にさえ生きていれば、絶対、自分を見失う事はないんじゃないかって思う」

「そう、大事な今は今だ。今の自分の気持ちが一番なんじゃないの？ この一瞬一瞬を素直に生きてくつてのが大事なんじゃないの？ だからオレは過去は振り向かないぜ！ 先の事をクヨクヨ考えて、悲観的にもならない！ 今だけを大切に、素直に生きてるから！..」

「ふ~~~~ん。何となく、分かったわ。アンタの考えと、生き方・・・」

「カスミの親が厳しいのは、それだけカスミの将来を考えてくれるって証拠だし、愛情たっぷりだと思っよ。過保護すぎるとは思っけどな。でも、それに対して自分の意見を言わなきゃ、いつまでもたっても親は子離れできないと思っぜ。エラそんな事言って申し訳ないけど、カスミが両親に対しての優しさなのか分からないけど、親の指示に従ってばかりじゃ、両親もカスミの気持ち分からないからそれでいいと思っちゃうんだよ。時には素直に自分の意見を言うべきじゃないのかな？ そうすれば一時的に衝突があるにせよ、それだけカスミに愛情を持つてる親なんだ、きつと理解してくれるよ。いけないのは自分の素直な気持ちを押し殺して黙っている

事………」

「……分かった」

「……そう？　じゃっ、またな！」

ふう〜〜。

これ以上カスミと話してたら、体がもたん！！

いつカスミがキレるかと思うと、ヒヤヒヤするぜ………。

「光太あ〜〜！！！」

「な、何だよ、説教なら今日はもういいだろ？　明日ゆっくり聞くから……」

「頑張ってみる！！！」

「え？　何を……?!」

「自分に素直に生きれるように・・・!!」

「応援するぜ!!」

オレは談話室を後にした。

第18話 三葉のみなさんサヨウナラ 4

支配人の萩谷さんの長あ~~~~い別れの挨拶が済むと、オレたちはやっと別館の研修室から解放された。

「やあ、みんなあ〜、元気にしてたかあ〜い？」

研修室の外、廊下のソファーに腰掛けていた担任が、真つ黒く日焼けをした肌をYシャツから出して、ニツカリと白い歯を見せた。

「ぶ〜 ぶ〜」とみんなの批判を浴び、担任は苦笑いしながらホテルを追いやられた。

せつかく来てもらった担任には気の毒だが、オマエと話しをしてるほどオレたちは暇じゃないってのが正直な気持ちだ。

「え〜、最後に〜、みなさんのホテルでの実習の感想をお聞かせ願いたい！」

ハゲたおっさん、もとい、萩谷さんが、別館の事務所のはじっこにオレたちを一列に並ばせ、職員たちの前でワケの分からない事を語っている。

「・・・正直に自分の気持ちを語っていいんすか？」

オレはみんなを代表して、萩谷さんに質問した。

「もちろんだとも。批判でもいいぞ、みんなの正直な気持ちを語ってくれ。誰からいく？」

「じゃ、オレからいくか・・・」

タケシだ。

さすが、タケシ、肝が据わってるね。

タケシと見たゾンビ犬、タケシたちと行った廃墟、今ではいい思い出だ。

ある意味オマエと一緒にだったから、何とかいい思い出に出来たってモンだ。

もしもオマエがネガティブなヤツだったら、多分トラウマになっていたゾ。

そんなくらい強烈な体験だったモンなあ・・・。

「オレは、正直言つて、ここはクソだと思ひました・・・」

おいおいタケシ・・・

いくら何でも、そりゃ〜言い過ぎだろ?!

ホラ、職員たちがみんな目を丸くしてるし。

「・・・でも、世の中みんなクソだと思つてるんで、ここが例外つてワケじゃないっス。ただ、寮での生活で、オレは色んな体験をし、人間的にもちよつとは成長できたと思つてるっス。だから、こういう学びの機会?・・・ってモンを提供してくれたアンタらには、素直に感謝してるっスよ。以上!」

パチパチパチパチ

初っ端から大喝采じゃねえ〜かつ!!

最初はこれから先、どうなるのか心配だったけど、ラストはカッコよく決めたな〜。

さっすがタケシだ。

「・・・じゃあ次、オレ言っとくわ！」

栄ちゃんだ。

栄ちゃん、色々あつたよね。

一生幽霊とは縁がなさそうな栄ちゃんが、青い顔して登場した時にはホント、ビビツたよ。

「オレは、田舎で育つて、こんなデカイ、ホテルつての生まれて初めてだったから、正直毎日が楽しかったです。こんな楽しい体験、2度と出来ないと思うし・・・。以上！」

栄ちゃん、早っ！

ま、栄ちゃんらしいけど・・・。

でも、楽しい体験、2度と出来ないなんて、そんな寂しい事言うなよ、栄ちゃん。

これから人生長いんだし、もっと楽しい体験いっぱい出来るって！！

「オレは・・・」

ナオヤ、いきなりナオヤだ。

ナオヤ、はじめてオマエが持ってきた、あの怪談話は強烈だったぜ。  
303号室の怪談話。

アレには夢でまでうなされたしな。

ま、お陰でケンイチがオレらの部屋に来れたんだし、あの怪談話にも少しは感謝しないとな。

「旅芸人の東条ファミリーとのふれ合いが楽しい思い出でした。あと、ホテルでの実習では、学校のテキストでは学べない技術を学べたと思います。これからも、みなさん頑張ってください！」

ナオヤ、何マトモな感想述べてんだよ。

普通過ぎるだろ、それ。

ま、東条ファミリーとのふれ合い、確かに楽しかったよな。

オレもいい思い出になったよ……。

「……御託を並べるつもりはないので簡潔に言います。オレは正直毎日早く終われ早く終われって思っていました。今は最高な気分です。以上！」



出たっ、ヤスヒロだ。

全く存在感がなかったなあ、コイツ。

ま、ヤスヒロらしいコメントだったな。

今、最高の気分ってのはオレも領けるぜ、うん……。

「私は、正直言って、ここのホテル、怖いと思いました……」  
みどりは三葉への批判を含め、正直に怖かったという思いを口にしていた。

アレだもんな。

毎日出現する洋ダンスの髪の毛や、CDプレイヤーの声。

しまいにや憑依されたって話だし。

気の毒だったな、みどり……。

「私も、みどりと同意見で……」

リサもみどりと似たようなコメントを残した。

不思議な少女だよな、リサって。

リサって双子説があるんだが……………。

どうでもいいけど……………。

「私はみんなとの寮生活で、貴重な経験を……………」

ココロは平凡なコメントを述べた。

ココロ、オマエはナツオと×××ってホントか?!

貴重な体験っていうか、苦い経験だったんじゃない? ……?

ま、それは本人が判断する事で、事情を知らないオレがとやかく言う筋合いはないけど……………。

「ホテルでの実習が、将来お嫁さんになった時に……………」

リヨウコは元気良く語った。

リヨウコ・・・。

何か、噂によると毎日炊事してたって話しじゃん。

きっと将来、いいお嫁さんになれるよ。

頑張れ！！

「私は、ここで好きな人ができました・・・。」

メグミだ。

何っ?!

メグミがいきなり問題発言だ!

こんな人前で・・・!!

「今から告白しようと思います・・・。」

ええっ?!

や、やめろって!!

オ、オレかな?!

だったら、こ、困るなあ〜ははは・・・。

・・・ホラ、みんな引いてるゾー！

栄ちゃんなんか顔を赤らめてドッキドキしてるじゃねえ〜かつ！

ナオヤとか、ほら、ヤスヒロまでキョロキョロしてるし。

「・・・それは、みんなです！ここでの色んな体験が、強い仲間、友情という絆を作ってくれました。今はみんなが家族のようにさえカンジます！ありがとうございますっ！！」

いるんだよな、そういうオチを考えてて、そうやってみんなをビビらすヤツ。

ほら、メグミの勝ち誇った顔ったらない。

みんな「やられたあ〜」って顔してるし・・・。

オレも1本とられたしな。

でも、メグミの言った事は、オレの感想と一緒にだな。

オレもみんなが家族のような気がするよ・・・。

「メグミに先に言われちゃいましたが、私も友情を凄く感じました。友達って大事だなんてつくづく思います。辛い時、苦しい時、必ずあると思います。でも、どんな時だって、私は愛する家族と友達を信じて、強く生きていこうと思いました・・・」

まいが珍しく熱く語った。

まい・・・。

ナツオとの事件の時は、ホントどうなるかとヒヤヒヤしたぜ。

一歩ミスったら、全てが崩れるような出来事だったモンな。

友情、愛情、オレたちが積み上げてきたモノ全てが一瞬で崩れるかもしれないって・・・。

でも、みんなの一致団結したパワーが、あの境地を救ったんだと思うよ。

まい、これからもカスミをヨロシクな。

・・・なんて口に出そうモンならカスミに海王星まで吹っ飛ばされそうだぜ。

「光太、私がやるから、先、頼むね・・・」

カスミだ。

「オツケー。オレは、正直言つて、このホテルは幽霊屋敷だと思います。でも、働いてる人はみんな真剣だし、きつとオーナーだつて、そうなんだと思います。みんな生きる為に必死なんですよね。だから、良いも悪いもないと思います。たとえ幽霊が出たつて、それが何だよつてカンジでいいと思います。怖がるんじゃなく、怯えるんじゃなく、堂々と共存してればいいんです。オレ、幽霊なんかより、もっと怖いのは人間の腐つた心だと思つんで……。三葉、最高でした。幽霊もお化けも思い出も、全～～部含めて、三葉のみなさんサヨウナラ！！」

パチ パチ パチパチパチパチパチパチ

ウケた？！

何かタケシ以上の拍手喝采だぞ？

テキストに思いつきを語つただけなんだけど、ウケたみたい……。良かった。

しっかし、やっぱり大勢の前で自分の気持ちを語るのつて、やっぱり緊張するなあ。

次はカスミ、決めてくれよ……って、オイ、鼻の下にいっぱい汗かいてるぞお……！

大丈夫かあ……？

「私たち、ホテル科の12名は、今日まで34日間、三葉リゾートパークホテル様にお世話になり、大変感謝いたしております。実習では、従業員一同、職員の皆様方の支えの下、別館、料飲、本館と学ばせていただき、誠にありがとうございました。この貴重なホテルでの実習経験を存分に生かし、私たちは将来を担う社会の一員として、恥ずかしくない生き方をしていこうと思います。こんな素敵な体験の場を提供してくださった三葉リゾートパークホテル様、本当にありがとうございました。そして、クラスのみんな、本当にありがとうございます……。」

パチパチパチパチパチ

カスミ、色んな意味で、やっぱりオマエは凄いよ。

こちらこそ、ありがとうございます。

「え、それでは……。」

萩谷さんが何か最後に言っていた。

とうとう三葉リゾートパークホテルとも、本当に最後のお別れの時  
がきた。

オレたちは三葉全体に手を振りながら、バス停まで歩いた。

サヨウナラ、三葉、ありがとう、三葉・・・・・・・・！！



第18話 三葉のみなさんサヨウナラ 〵4〵 (後書き)

最後まで読んでくれて・・・

『三葉(38) + 1 = ?』

by 光太

三葉リゾートパークホテル  
終

## 素直な気持ち

オレたちは、帰りの電車の中、みんな爆睡した。

みんなよっぽど疲れてたんだろう。

ま、オレもその中の1人なんだが……。

19時30分。

オレたちの故郷の駅に着くと、みんなそこで解散した。

残念ながら、一週間後にはまた学校が始まるから、別にクラスのみ  
んなと今別れるのは寂しくもなんともない。

むしろ解放感がある。

一週間の夏休み、何して過ごそうかな？

「光太！ 家まで送りなさいよっ！ アンタの家の通り道でしょ、  
アタシん家！！」

「え〜〜、何でだよ〜〜！ 子供じゃねえ〜んだし、駅から一人で帰れるだろお〜?!」

オレ、カスミを守るって、自分の中でだけ宣言してたけど、撤回しようかな・・・。

なんか、面倒くさい。

これが恋人とかだったら全然話しは別なんだろうけどな・・・。

「いいから付き合いなさいよっ！ どうせバスだって一緒でしょ？！」

「・・・まあ、それはそうだけどさ、何だよ急に。今までだったらオレが家まで送るよって言っても断ってたじゃんかよ。近所の目がど〜のこ〜のって!!」

「・・・素直になれって言ったのアンタでしょ?!」

「はい〜はいっ。じゃ、バスを待つまでその辺のデパートでも行くかっ?!」

「うん!!」

なぜかカスミは、いつもよりだいぶオレとの距離を縮めている気がするのは気のせいだろうか……？

以前まで、絶対デパートなんか一緒に歩いてくれなかったカスミが、今は手が届く位置にいる。

……と、いうか、近すぎない？！

「ねえ、見てみて、この服！ 似合う？！」

「きゃ〜、ここ行ってみたあ〜い！！ 45万かあ〜！！ 働き出してからだねえ〜！」

「ねっ、今度、この映画一緒に観に行かない？」

「このライブ行ってみたいなあ〜！！ 私、ライブって観た事ないの。クラシックのコンサートならあるんだけどネ！ 今度、一緒に行こっ〜！」

はあ？

どうしたんだカスミのヤツ……まるで別人みたいだ。

まさか、憑依？

……な、ワケないよな。

今度、今度つて、これじゃあまるで恋人同士みたいじゃねえか。

どうしてオレは、こんな間抜けなピエロを演じてるんだ？！

将来は誰かの嫁さんになる人だぞ。

いつまでもこんな関係続けてちゃ、ダメだよな・・・。

やっぱり、公約撤回だ！！

『オレ以外でカスミを守ってあげられるヤツが出来るまで、オレがアイツを守る』なんてクサイ公約決めてたけど、今、撤回！！

そうと決まれば、早めに、どこかでケジメをつけないと。

・・・でも、今日だけ付き合っただけか。

今日だけ・・・。

21時10分

バスに乗ってオレたちは、生まれ育った町へ帰ってきた。

そして、カスミの家に着く。

「ありがとね、光太！」

「うん、ありがと！！・・・あのさ、カスミ・・・」

「え？ 何？ どうした？！」

「あつ、何でもないや。今度な・・・」

何か、もう今日みたいにデパートとか歩きたくない・・・なんて、今、言うのは全くもってオカシイよな。

何かこの間、カスミにフラれた時の腹いせみたいでカッコ悪いし・・・。

素直に別れよう。

「カスミ、色々アリガトな！！・・・じゃつ、また、学校で！！！」

「え〜〜？ 明後日とか逢えないの？！ せつかく夏休みが残ってるんだから、どっか遊び行こうよ〜！！」

「・・・カスミ、オレたちは恋人同士でも、何でもないんだぞ〜！！」

「光太？ まさかアンタ、先週の事、引きずってたワケ？！」

「はい？」

「あの時、私に告白したでしょ？ その時の事よ〜！！」

「え？」

「タイミングってのがあってしょう〜？！ アンタの告白のタイミング、本っ当にサイテーだったヨ〜！！ 笑っちゃうくらい〜！！」

「はあ・・・」

「私は素直になれるように頑張るから、アンタは人の気持ちと空気を读めるように頑張つてネ!!」  
「.....じゃ、またね.....」

チュツ

は、はっあっ!!!!

オレの頬つぺたに、カ、カスミの柔らかい、く、く、唇があああ  
~~~~~!!!

「明日の晩、電話するからネ!!!!」

ガチャン



『ただいまあ~~~~!!』

カスミは自分の家に帰っていった。

コレってもしかして？

もしかして？

もしかしてってヤツ???

「ひゃっほおお~~~~~!!」

オレは帰り道、大きくジャンプした。

星空にも届きそうな勢いだ。

今のオレは、最強だあ~~~~~！

恐いモノなど何もねえ~~~~~！

もし、あるとしたら、それは……

おのれの道に逆らうこと……のみ……！

青春時代、到来っ。

『素直な気持ち』おわり

素直な気持ち（後書き）

最後まで読んでくれて・・・

『三葉（38）+1』？』

by 光太&カスミ

三葉リゾートパークホテル  
終

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6717i/>

---

三葉リゾートパークホテル

2010年10月9日15時47分発行